

目 次

氏名に「★」が付された教員は、「実務経験のある教員」です。実務経験内容、担当科目名および単位数等について、本学ホームページの下記 URL に詳細を掲載しています。

http://jonan.jp/soho/about/about_04.html

児 童 保 育 学 科 1 年 次

教育学概論	1
情報処理演習Ⅰ	1
情報処理演習Ⅱ	2
日本国憲法	2
英語	3
体育（講義）	3
体育（実技）	4
社会福祉	4
子ども家庭福祉	5
保育原理	5
保育者論	6
保育の心理学	6
幼児と健康	7
幼児と環境	7
幼児と表現	8
環境領域指導法Ⅰ	8
環境領域指導法Ⅱ	9
社会的養護Ⅰ	9
音楽（器楽）	10
基礎造形	10
保育実践学習Ⅰ	11
保育実践学習Ⅱ	11
教職論	12
健康教育	12
体育科指導法	13
国語	13
算数	14
特別支援教育総合演習	14
総合基礎演習Ⅰ	15

児 童 保 育 学 科 2 年 次

人間論	16
フランス語	16
韓国語	17
子育て支援	17
子どもの保健	18
子どもの食と栄養	18
保育の計画と評価	19
幼児と人間関係	19
幼児と言葉	20
健康領域指導法Ⅰ	20
人間関係領域指導法Ⅰ	21
言葉領域指導法Ⅰ	21
表現領域指導法Ⅰ	22
表現領域指導法Ⅱ	22
乳児保育Ⅰ	23
乳児保育Ⅱ	23
社会的養護Ⅱ	24
子ども家庭支援の心理学	24
保育実習Ⅰ	25
保育実習指導Ⅰ	25
保育実践学習Ⅲ	26
保育実践学習Ⅳ	26
音楽演習Ⅰ	27
国語科指導法	27
算数科指導法	28
理科	28

理科指導法	29
社会	29
社会科指導法	30
生活	30
特別支援教育総論	31
総合基礎演習Ⅱ	31

児 童 保 育 学 科 3 年 次

倫理学	32
保育の心理学Ⅱ	32
子どもの保健Ⅱ	33
健康領域指導法Ⅱ	33
人間関係領域指導法Ⅱ	34
言葉領域指導法Ⅱ	34
障害児保育	35
保育実習Ⅱ	35
保育実習指導Ⅱ	36
保育実習Ⅲ	36
保育実習指導Ⅲ	37
音楽科指導法	37
教育相談	38
教育方法・技術論	38
幼児理解	39
教育心理学	39
教育課程論	40
教育制度	40
音楽演習Ⅱ	41
図画工作科指導法	41
家庭	42
家庭科指導法	42
生活科指導法	43
特別活動指導法	43
生徒指導	44
進路指導論	44
小学校英語	45
英語指導法	45
介護等体験	46
卒業論文Ⅰ	46
教育実習（幼）	47
教育実習（小）	47
知的障害者の心理・生理・病理	48
肢体不自由者の心理・生理・病理	48
病弱者の心理・生理・病理	49
知的障害教育論Ⅰ	49
肢体不自由教育論Ⅰ	50
病弱教育論	50
視覚障害者の心理・生理・病理	51
聴覚障害者の心理・生理・病理	51
視覚障害教育論	52
聴覚障害教育論	52

児 童 保 育 学 科 4 年 次

社会学	53
生活環境論	53
総合保育論	54
家庭支援論	54
保育内容総論Ⅰ	55

保育内容総論Ⅱ	55
在宅保育	56
道徳教育の理論と実践	56
保育指導法Ⅰ	57
保育指導法Ⅱ	57
教職実践演習（幼・小）	58
知的障害教育論Ⅱ	58
肢体不自由教育論Ⅱ	59
重複障害者等の心理・生理・病理	59
重複障害等教育論	60
教育実習（特支）	60
卒業論文Ⅱ	61
教育実習（幼）	61
教育実習（小）	62

乳児保育学科 1年次

教育学概論	63
情報処理演習Ⅰ	63
情報処理演習Ⅱ	64
日本国憲法	64
英語	65
体育（講義）	65
体育（実技）	66
社会福祉	66
子ども家庭福祉	67
保育原理	67
保育者論	68
保育の心理学	68
幼児と健康	69
幼児と環境	69
幼児と表現	70
環境領域指導法Ⅰ	70
環境領域指導法Ⅱ	71
社会的養護Ⅰ	71
保育実践学習Ⅰ	72
保育実践学習Ⅱ	72
教職論	73
国語	73
算数	74
音楽（器楽）	74
基礎造形	75
健康教育	75
総合基礎演習Ⅰ	76
乳児保育研究法Ⅰ	76
赤ちゃんの生活と保育	77
赤ちゃんの生活とデザイン	77

大学院 博士前期課程 1年次

教育学特論	78
保育学特論	78
幼児教育学特論	79
発達心理学特論	79
小児医学特論Ⅰ	80
子ども心身医療特論Ⅰ	80
保育研究調査法Ⅰ	81
保育研究調査法Ⅱ	81
国語科教育特論	82
社会科教育特論	82
音楽科教育特論	83
教育方法学特殊講義Ⅰ	83
こども学特殊講義	84
教育内容研究	84
教育実践研究Ⅰ	85
教育実践研究Ⅱ	85
子どもと表現研究	86
生涯教育学研究	86
教育心理学特論	87

教育心理学特殊講義	87
臨床発達心理学	88
小児医学特論Ⅱ	88
研究指導	89

大学院 博士前期課程 2年次

国語科教育特論	90
社会科教育特論	90
音楽科教育特論	91
教育方法特論	91
教育方法学特殊講義Ⅰ	92
こども学特殊講義	92
幼児教育思想史研究	93
保育内容研究	93
保育実践研究Ⅰ	94
保育実践研究Ⅱ	94
教育心理学特殊講義	95
幼児心理学特論	95
子どもと健康特殊講義	96
子ども心身医療特論Ⅱ	96
臨床心理学研究Ⅰ	97
臨床心理学研究Ⅱ	97
研究指導	98

大学院 博士後期課程 1年次

教育学特講	99
幼児教育学特講	99
保育学特講	100
小児医学特講	100
子ども心身医療特講	101
発達心理学特講	101
教育学演習	102
幼児教育学演習	102
保育実践研究演習	103
保育内容研究演習	103
子ども心身医療演習	104
発達心理学演習Ⅰ（発達支援）	104
発達心理学演習Ⅱ（発達臨床）	105
臨床心理学演習	105
研究指導	106

大学院 博士後期課程 2年次

教育学演習	107
幼児教育学演習	107
保育実践研究演習	108
保育内容研究演習	108
子ども心身医療演習	109
発達心理学演習Ⅰ（発達支援）	109
発達心理学演習Ⅱ（発達臨床）	110
臨床心理学演習	110
研究指導	111

大学院 博士後期課程 3年次

教育学演習	112
幼児教育学演習	112
保育実践研究演習	113
保育内容研究演習	113
子ども心身医療演習	114
発達心理学演習Ⅰ（発達支援）	114
発達心理学演習Ⅱ（発達臨床）	115
臨床心理学演習	115
研究指導	116

児童保育学科 1 年次

教育学概論

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 井岡 瑞日

《授業の概要》

現代教育を理解するためには、教育の意味について絶えず根底から問い直そうとする思考力や教育の思想及び歴史についての豊かな教養が必要である。本講義では、教育を支える基本的理念や思想、教育という営みの歴史的展開などについて幅広く検討していく。具体的には、西洋近代における代表的な教育思想・実践の歩み、西洋・東洋における学校教育や家庭教育の歴史とその背景にある子ども観の変遷について学ぶ。このことを通して、現代の教育問題を考えるための深い洞察力を培うことを目指す。

《学生の到達目標》

教育の基本的概念は何か、また、教育の理念にはどのようなものがあり、教育の歴史や思想において、それらがどのように現れてきたかについて学ぶとともに、これまでの教育及び学校の営みがどのように捉えられ、変遷してきたのかを理解する。①教育の基本的概念について理解する。②教育の思想や歴史についての基礎的な知識を身につける。③教育の今日的課題について学問的視野から考察する力を養う。

《授業計画》

1. 授業の概要と進め方について
2. 教育の基本的概念①—教育の意義と目的
3. 教育の基本的概念②—乳幼児期の教育の特性
4. 子どもと教育の思想・歴史①—「子ども」とは何か、子ども観の変遷
5. 子どもと教育の思想・歴史②—幼児教育思想の系譜
6. 子どもと教育の思想・歴史③—子ども家庭福祉の関連
7. 学校教育の思想・歴史①—「学校」とは何か
8. 学校教育の思想・歴史②—公教育の成立と展開
9. 学校教育の実践①—教育実践の基礎理論（内容・方法・計画と評価）
10. 学校教育の実践②—教育実践の多様な取り組み
11. 子育てと家庭教育の歴史—近代家族の子育て
12. 子育てと家庭教育の歴史—母性愛規範の形成
13. 現代教育の課題を考える①—ジェンダーと教育
14. 現代教育の課題を考える②—いじめ問題
15. 現代教育の課題を考える③—子どもの貧困と教育格差

《成績評価の方法・基準》

課題及びグループディスカッションの内容（50%） レポート（50%）

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・文部科学省「小学校学習指導要領解説」・文部科学省「幼稚園教育要領解説」・内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼児保育推進計画」・文部科学省「幼稚園教育要領解説」・厚生労働省「保育所保育指針解説」

《事前・事後学習》

事前学習：日頃から新聞やテレビで報道される教育に関するニュースに関心を持っておくこと
事後学習：毎授業の内容をよく復習し、知識の定着に努めること。授業内で適宜読書案内を行うので、レポート課題の取り組みの中で積極的に読み、教育に対する理解を深めること。

情報処理演習 I

1 年次（半期）
1 単位（演習）
担当 ★藤田 朋己

《授業の概要》

保育・教育現場においては、ICT 機器活用が不可欠となっている。また、仕事や授業を進める上で、効率よく時間を使い、効果的な利活用を実現するスキルも求められている。本授業では、筆記用具と同じく ICT 機器を扱うスキルと効率的に業務をおこなうスキルの向上を目指す。ICT 機器はあくまで道具であり、表現をするための手段ではない。表現においては、個の感性やものごとの捉え方が問われるとともに、第三者に対して伝えたい内容が、正確かつわかりやすく表現できるかが重要である。個の感性を磨くとともに、多方向からものごとを見る広い視野の育成もおこなう。そのため、他者と成果物を相互評価する場面を設け交流を図る。

《学生の到達目標》

ICT 機器を的確に操作するスキルを身につけるとともに、ICT 機器を効率よく、正確に操作できるスキルの獲得を目標とする。また、何かしら作成物を作成する際には、それを手にする第三者の視点に立ち、デザイン・構成等を考えなければならぬ。自身の感性を磨き、広い視野でものごとを多方向から見ようとする姿勢を身につけることも目標とする。実施にあたっては、学生同士で成果物を評価し合う場面を設ける。他者の成果物から学びを得るとともに、他者に感想を伝え、アドバイス等をおこなうことで、評価者としての視点を育むことも目標とする。

《授業計画》

1. 授業計画の理解・自己紹介カード作成用写真の撮影
2. 自己紹介カード作成演習
3. 学内コンピュータ環境および利用方法についての理解
4. 印刷素材提供サイトの活用（カレンダー作成）
5. Word の基本操作・既存ファイルの利用・折り紙サイトの活用
6. 段組み・段落線線を用いた作成演習・手遊びサイトの活用
7. 歌詞カード作成演習 1（冊子印刷・作成を中心に）
8. 歌詞カード作成演習 2（冊子印刷・印刷を中心に）
9. 絵文字・イラスト提供サイトの活用
10. 現場で作成する文書についての理解
11. おたより作成演習 1（作成を中心に）
12. おたより作成演習 2（印刷を中心に）
13. らくがきをしてみると・・・（シチュエーション発表演習 1、発表の準備）
14. らくがきをしてみると・・・（シチュエーション発表演習 2、発表）
15. らくがきをしてみると・・・（シチュエーション発表演習 3、相互評価）

《成績評価の方法・基準》

本授業は演習授業である。授業における説明を聞いた上で課題に取り組み、その課題を提出することが重要である。提出された課題については、修正点等のコメントをつけた上で返却する。指摘された点に注意して、以後の課題に反映して欲しい。評価方法としては、演習への取り組みや授業に臨む姿勢に対する評価（40%）・課題評価（60%）とする。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

伝えたいことをわかりやすく、正確に伝えるためのスキルを身につけるためには、普段の生活の中で意識を持って、目にするものに接して欲しい。また、常に自身の感性を磨き、ものごとに対する視野を広げる努力も重要である。事前学習として、これらのことを意識することを願う。提出課題については、評価とコメントをつけて返却する。事後学習として、指摘された内容を理解し、今後の演習に活かす努力を願う。

情報処理演習Ⅱ

1 年次（半期）
1 単位（演習）
担当 ★藤田 朋己

《授業の概要》

保育・教育現場においては、ICT 機器活用が不可欠となっている。本授業では、筆記用具と同じく ICT 機器を活用するスキルと効率的に業務をおこなうスキルの向上を目指す。その中でも特に情報発信スキルの向上をはかる。保育・教育現場においては、ただ単に情報を読み取り、情報を発信すればよいという場面はない。そこには必ず思考・判断・表現が必要となる。したがって、思考力・判断力・表現力の育成をおこなう。ただし、これらの力は、すぐに身につくものではない。日常生活の中で常に意識することが重要であり、その積み重ねの中で養われるものである。本授業では、さまざまなテーマをもとに、そのきっかけを作り出す。

《学生の到達目標》

ICT 機器を効率よく、正確に操作できるスキルを身につけるとともに、情報を効果的に発信するスキルの獲得を目標とする。また、何かしら作成物を作成する際には、それを手にする第三者の視点に立ち、デザイン・構成等を考えなければならない。自身の感性を磨き、広い視野でものを多方向から見ようとする姿勢を身につけることも目標とする。実施にあたっては、学生同士で成果物を評価し合う場面を設ける。他者の成果物から学びを得るとともに、他者に感想を伝え、アドバイス等をおこなうことで、評価者としての視点を育むことも目標とする。

《授業計画》

1. 電子メールのルール理解と課題作成演習
2. POP 作成演習
3. 進級カード作成演習
4. 1 日のスケジュール作成演習
5. おやすみだより作成演習
6. Excel の基本操作
7. およつの月間スケジュール作成演習
8. 計算式の入力方法・グラフの作成方法理解
9. 成績表の作成演習
10. 総合演習 1（作成の準備）
11. 総合演習 2（作成）
12. CM 作成演習 1（作成の準備）
13. CM 作成演習 2（作成）
14. CM 作成演習 3（自己評価と修正）
15. 制作課題（CM）鑑賞と相互評価

《成績評価の方法・基準》

本授業は演習授業である。授業における説明を聞いた上で課題に取り組み、その課題を提出することが重要である。提出された課題については、修正点等のコメントをつけた上で返却する。指摘された点に注意して、以後の課題に反映して欲しい。評価方法としては、演習への取り組みや授業に臨む姿勢に対する評価（40%）・課題評価（60%）とする。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

伝えたいことをわかりやすく、正確に伝えるためのスキルを身につけるためには、普段の生活の中で意識を持って、目にするものに接して欲しい。また、常に自身の感性を磨き、ものごとに対する視野を広げる努力も重要である。事前学習として、これらのことを意識することを願う。提出課題については、評価とコメントをつけて返却する。事後学習として、指摘された内容を理解し、今後の演習に活かす努力を願う。

日本国憲法

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 石川 愛世

《授業の概要》

本講義は、国民の基本的人権と国家の統治機能の二体系で構成される日本国憲法の基本的知識を習得することを目的とする。憲法の意味、成立、基本原理から順を追って解説を行う。講義の際にはできるだけ具体的な事例、判例に言及しつつ理解を深める。

《学生の到達目標》

憲法の基本的知識を学び、基本的人権の内容及び国家の統治機能を理解する。日常生活と憲法との関わりを意識できるようにする。

《授業計画》

1. ガイダンス（授業の進行方法、日本の法と憲法の関係を解説する）
2. 憲法の意味・成立・歴史について学ぶ
3. 憲法の基本原則について学ぶ
4. 包括的基本権・平等権について学ぶ
5. 精神的自由権①-内心の自由について学ぶ
6. 精神的自由権②-表現の自由について学ぶ
7. 経済的自由権について学ぶ
8. 人身の自由について学ぶ
9. 国籍請求権・参政権について学ぶ
10. 社会権について学ぶ
11. 国会・内閣について学ぶ
12. 裁判所について学ぶ
13. 財政・地方自治について学ぶ
14. 改正・最高法規について学ぶ
15. 総括（まとめ）

《成績評価の方法・基準》

授業への取り組みや提出物（小テスト・課題等）（40%）、学期末のテスト（60%）を総合して評価する。

《授業で使用する教科書》

・中村睦男 編著「はじめての憲法学（第3版）」三省堂・その他必要に応じて、授業で適宜資料等を配布・指示する。

《参考書》

・必要に応じて、授業で適宜資料等を配布・指示する。

《事前・事後学習》

常日頃から、日常生活における出来事やどのように憲法と関わるか問題意識をもち、ニュース・新聞等を見ることが望ましい。事前学習として、次回講義のテキスト該当範囲を読むことを求める。授業の進行具合等により、授業計画に変更の可能性があるので、該当範囲は各回終了毎に指示する。

1141A
英語

1 年次（通年）
2 単位（演習）
担当 中西 千佳子

《授業の概要》

インターネットの普及や様々な分野のグローバル化がすすむ現代社会においては、世界共通語としての「英語」の運用能力がますます要求されている。この授業では、日常生活を題材にしたテキストを使用し、コミュニケーションに必要な文法力を養成し、語彙力を強化する。

《学生の到達目標》

聞く、読む、話す、書く、といった4技能を鍛えるための様々な演習を行い、総合的な英語力向上を目指す。

《授業計画》

1. オリエンテーション
2. 英語の基本構造
3. 一般動詞（1）現在形の肯定文・否定文・疑問文
4. WH-疑問文の作り方
5. 一般動詞（2）過去形の肯定文・否定文・疑問文
6. be 動詞（1）現在形の肯定文・否定文・疑問文
7. 復習①（2～6回の内容を中心に）
8. 形容詞（感情や状態を表す）
9. be 動詞（2）WH-疑問文、命令文
10. 人称代名詞
11. 場所を示す表現
12. 時を示す表現
13. 未来形
14. 復習②（8～13回の内容を中心に）
15. 前期のまとめ
16. 進行形
17. 方向・動作を示す前置詞
18. 助動詞
19. 依頼・申し出・許可の表現
20. 疑問詞を使った疑問文
21. 数字の表現
22. 基本動詞（get, have, come, bring など）
23. 病気に関する表現
24. 基本動詞と前置詞（慣用表現）
25. 形容詞と前置詞（慣用表現）
26. 伝えたい内容を整理する
27. 文をつなぐ
28. 入国審査で問われる質問および返答
29. 復習③（16から28回の内容を中心に）
30. 総括

《成績評価の方法・基準》

授業への取り組みを重視し、発表や課題提出も勘案して、総合的に評価する。学期試験（50%）、小テスト（40%）、授業への取り組み（10%）

《授業で使用する教科書》

・森田和子・北本洋子・高橋順子「発信型 シンプル・イングリッシュ」三修社

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

指定された宿題はもちろんのこと、次の授業範囲で使用されている未知の単語や熟語の意味を調べておくなど、復習および予習を必ず行うこと。

1151A
体育（講義）

1 年次（半期）
1 単位（講義）
担当 高橋 篤志、仲山 正志

《授業の概要》

機械化が進んだ現代社会では、運動不足から体力が低下し、生活習慣病にかかる人が増加している。現代社会で、健康に過ごしていくためには、日々、どのような生活を心掛けるべきか、ということに焦点を当て、予防医学的な立場から、生活習慣病にならないために日常的に運動を継続することの重要性について講義し、また、普段の生活の中に簡単に運動を取り入れられる方法について紹介する。

《学生の到達目標》

現在われわれが直面している問題の中で、「健康に関する問題」について考えていくことにより、健康に対する総合的な視野を養い、課題解決に向けて考えていく能力を高める。

《授業計画》

1. オリエンテーション
2. 体力とは（行動体力と防衛体力）
3. 健康とは（公衆衛生・予防医学）
4. 栄養と健康（生活習慣病）
5. 休養と健康（急性スポーツ障害）
6. 運動と健康（肥満とメタボリックシンドローム）
7. 現代社会と運動不足病（肥満、高血圧、高血糖、高脂血症）
8. 生活習慣病とは（生活習慣病と運動疫学）
9. ストレスと生活習慣病（心の健康に関する考え方）
10. 生活習慣病の予防（生活習慣病に対する運動量）
11. 運動の効果（運動基準・運動指針）
12. 運動処方（体力測定の実用性）
13. 生活習慣病を有する人の運動処方（生活習慣病予防プログラム）
14. 運動とこころの健康（メンタルヘルスに及ぼす要因）
15. 総括（健康づくり施策）

《成績評価の方法・基準》

レポートや提出物（40%）、授業への取り組み（60%）として評価を行う。『授業で使用する教科書・参考書』について記載してください。

《授業で使用する教科書》

・大阪体育大学トレーニング教室「体カトレーニングの理論と実際」大修館書店

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

トレーニングや身体運動について自分自身の疑問を明確化し、その疑問に対する答えを自分自身で見つける能力を文献研究やデータ収集などを通して明確にしていこう。

体育（実技）

1 年次（半期）
1 単位（実技）
担当 清田 岳臣、仲山 正志

《授業の概要》

近年、学生の体力の低下や運動不足の問題、ストレスがひきおこす問題等、学生生活を支える最も基本的で必要な健康に対してマイナスに働きかける要因が増大している。学生は健康管理能力を高め、健康に対する意義を理解する必要がある。体育実技では、定期的に体力診断、運動能力などの測定を行い、自己の行動的な体力や生活体力について認識し、体力向上のための運動処方学び、自己管理能力を高めることを目的とする内容としたい。

《学生の到達目標》

体育実技では、受動的な「授業」ではなく、学生自らの能動的な学習活動の場としたい。

《授業計画》

1. オリエンテーション
2. 調整力としての能力を知る（調整力を高めるトレーニング）
3. 無酸素/パワー能力を知る（動的レジスタンストレーニング）
4. 有酸素/パワー能力を知る（全身運動によるエアロビクトレーニング）
5. 肥満度を知る（メタボリックシンドロームの評価）
6. 動的ストレッチング（動的ストレッチングの実際）
7. 静的ストレッチング（静的ストレッチングの実際）
8. 動的筋力トレーニング（動的レジスタンストレーニングの処方）
9. 静的筋力トレーニング（アイソメトリックトレーニングの処方）
10. マット運動（前転、後転、側転）
11. とび箱（開脚とび、閉脚とび）
12. 鉄棒（支持回転系）
13. ボール遊び（ビーチボール、インディアカ）
14. ボールゲーム（ドッジボール、ポートボール）
15. 総括（生涯スポーツ）

《成績評価の方法・基準》

レポートや提出物（40%）、授業への取り組み（60%）として評価を行う。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

スポーツ科学の基礎について学び、それがスポーツ現場へどのように応用出来るかを、ディスカッションやプレゼンテーション、その実践などを通して理解を深めていく。

社会福祉

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 ★藪 一裕

《授業の概要》

現代社会における社会福祉の意義と歴史の変遷、及び社会福祉における子ども家庭支援の視点について理解する。また、社会福祉の制度や実施体系について学ぶとともに、社会福祉における相談援助や利用者の保護にかかわる仕組み、社会福祉の動向と課題について理解する。

《学生の到達目標》

①現代社会における社会福祉の意義と歴史の変遷、及び社会福祉における子ども家庭支援の視点について理解する。②社会福祉の制度や実施体系について理解する。③社会福祉における相談援助について理解する。④社会福祉における利用者の保護にかかわる仕組みについて理解する。⑤社会福祉の動向と課題について理解する。

《授業計画》

1. ガイダンス、社会福祉の理念と概要
2. 社会福祉の歴史の変遷
3. 子ども家庭支援と社会福祉
4. 社会福祉の制度と法体系、社会福祉行政と実施機関
5. 社会福祉、社会福祉施設の専門職
6. 社会保障及び関連制度の概要
7. 社会福祉における相談援助（1）相談援助の理論、相談援助の意義と機能
8. 社会福祉における相談援助（2）相談援助の対象と過程
9. 社会福祉における相談援助（3）相談援助の方法と技術
10. 社会福祉における相談援助（4）相談援助の実際
11. 社会福祉における利用者の保護にかかわる仕組み—情報提供、第三者評価、権利助産など
12. 社会福祉の動向と課題（1）少子高齢化社会における子育て支援
13. 社会福祉の動向と課題（2）共生社会の実現と障がい者施策
14. 社会福祉の動向と課題（3）在宅福祉・地域福祉の推進、諸外国の動向
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

レポート試験 50%、授業内課題（小テストの実施、リアクションペーパーなど）30%、授業への取り組み（受講態度、積極的な授業への参加、予習・復習、発表など）20%として評価を行う。レポートは、授業内容の理解度や、受講生自身が問題意識をもち考えを示すものを評価する。

《授業で使用する教科書》

・直島正樹・原田旬哉「図解で学ぶ保育 社会福祉」萌文書林

《参考書》

・「保育所保育指針」

《事前・事後学習》

①毎回の授業で示すテーマについて、新聞記事、参考文献やWeb 検索などを参照して理解を深めること。②次回授業への予習として、テキストの該当箇所を読み、自分自身の経験や知識を深めること。

子ども家庭福祉

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 立花 直樹

《授業の概要》

現代社会における子ども家庭福祉の意義と歴史の変遷について学ぶとともに、子ども家庭福祉と保育との関連性及び児童の人権について理解する。また、講義や演習（セルフワーク、グループワーク、ディスカッション等）を通じて、児童福祉の制度や実施体系、現状や課題を学び、子ども家庭福祉の動向と課題について理解を深める。

《学生の到達目標》

1. 現代社会における子ども家庭福祉の意義と歴史の変遷について理解する。2. 子ども家庭福祉及び児童の人権を理解し、保育者としての具体的な支援に結びつける。3. 子ども家庭福祉の制度や実施体系等について知識を習得し、理解を深める。4. 子ども家庭福祉における相談援助や利用者の保護に関わる仕組みを調べ、理解する。5. 子ども家庭福祉の動向と課題について理解・考察し、説明できる。

《授業計画》

1. オリエンテーション、子ども家庭福祉の理念と概念
2. 子ども家庭福祉の歴史の変遷
3. 現代社会と子ども家庭福祉
4. 児童の人権と子ども家庭福祉
5. 子ども家庭福祉の制度と法体系
6. 子ども家庭福祉の行政と実施機関
7. 児童福祉施設と専門職の役割
8. 児童福祉施設（アドミニストレーション、コンフリクト）
9. 次世代育成支援（少子化と子育て支援事業）
10. 家庭養育と社会的養育①：貧困家庭と外国籍の児童・家庭への対応
11. 家庭養育と社会的養育②：児童虐待とドメスティック・バイオレンスへの対応
12. 家庭養育と社会的養育③：非行問題、不登校（園）への対応
13. 家庭養育と社会的養育④：障害ある児童への対応
14. 児童の人権と生命倫理
15. 総括（児童家庭福祉の課題と展望）

《成績評価の方法・基準》

次の事項を総合的に評価する 1. 各種演習シートの提出 等：50% 2. 小テスト（3回実施予定）：50% 3. 加点：提出物の内容（記入量・整理力・丁寧さ）、授業運営の協力 など 4. 減点：忘れ物 居眠り、おしゃべり、授業と関係のない作業・携帯操作、記入漏れ など *グループ演習時の居眠りや無発言・非協力的態度については厳しく減点する

《授業で使用する教科書》

・立花直樹・波田竺英治 編「児童家庭福祉論【第2版】」ミネルヴァ書房

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前学習：①宿題として演習シートに意見を記入してくる 事後学習：②小テストに向けた学習（教科書、資料、シートの復習）

保育原理

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 井岡 瑞日、高根 栄美

《授業の概要》

この授業では、保育にかかわる基礎的な知識や理論を学ぶとともに、「望ましい保育のあり方とは何か」を考えたり、自らの保育実践を省察するための枠組みや手がかりを習得したりする。具体的には、まず「保育」を知るために保育の意味や保育を取り巻く歴史的・社会的背景を理解する。次いで「保育の基本」として、発達理論や保育の内容・方法・形態・評価の仕方等について学習する。その上で、子育て支援や保幼小連携、課題を抱えた家庭への支援の仕方について理解を深める。

《学生の到達目標》

保育の意義及び目的について理解するとともに、保育に関する法令及び制度や保育所保育指針における保育の基本について学んでいく。また、保育の思想と歴史の変遷について学びつつ、これを踏まえて保育の現状と課題について考察する。①保育についての基礎的知識・理論を習得すること。②保育に関する知識や理論を、自らの保育経験に引きつけて捉え直す視点や態度を形成すること。

《授業計画》

1. 授業の概要と進め方について
2. 保育とは—子どもや保育を取り巻く現状と課題
3. 子どもの発達と子ども理解
4. 保育の思想
5. 保育の歴史
6. 保育の場—保育制度と子育て支援計画
7. 保育の目標と内容①—教育要領、教育・保育要領
8. 保育の目標と内容②—保育指針
9. 保育の方法①—環境による教育
10. 保育の方法②—乳児期から幼児期へ
11. 保育の計画と評価
12. 保育者の役割と専門性
13. 子どもの安全と虐待、障がいへの対応
14. 子育て支援と家庭との連携
15. 諸外国の保育

《成績評価の方法・基準》

ミニレポート等の提出課題 60%、授業内でのコメントシート 40%によって総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

・厚生労働省「保育所保育指針解説」・文部科学省「幼稚園教育要領解説」・内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前学習：事前にプリント等を配布した場合は、それを熟読し、疑問点等を明らかにした上で授業に臨むこと。また、日頃から新聞やテレビで報じられる保育に関するニュースに関心をもっておくこと。事後学習：毎授業の内容をよく理解し、知識の定着に努めること。

保育者論

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 ★東城 大輔

《授業の概要》

この授業では「保育者とは何か」についていろいろな側面から理解を深める。また保育者の専門性について考察することや、具体的な仕事の内容、社会における役割、倫理、制度などについて学習する。さらに地域社会や専門機関との連携・協働、保育者の資質向上とキャリア形成などの視点から総合的に理解を深める。

《学生の到達目標》

現在の保育所や幼稚園の実情、変遷などを概観しながら、保育者としての役割を理解できるようになる。また、生涯にわたる人格形成の基礎となる人との関係を作る大切な時期である乳幼児期の保育・教育課程の役割を学び、保育者としての在り方について考える力を身につける。

《授業計画》

1. オリエンテーション（授業説明および意見交換会にて保育観について考える機会をもつ）
2. 幼稚園、保育所、認定こども園についてのそれぞれの特徴（役割等）
3. 幼稚園、保育所、認定こども園についてのそれぞれの特徴（制度的位置づけ・保育展開）
4. 保育士・幼稚園教諭について（倫理・資格・要件）
5. 子ども理解や重要性和養護及び教育の一体的展開について
6. 具体的な保育実践（知識・技術及び判断、省察の重要性）について
7. 保育士および幼稚園教諭の1日の働き方と業務
8. 保育者にとって大切な保育観（養護及び教育の一体的展開と保育の質の向上）
9. 保育の実践（絵本や紙芝居の読み聞かせを通じた計画・省察・評価について）
10. 保育者の連携・協働（各機関や専門機関間、地域との連携・協働のあり方）
11. 家庭との連携と保護者に対する支援
12. 保育者にとっての専門性（保育士や幼稚園教諭における資質・能力）について
13. 保育者の資質向上とキャリア形成（1） 組織的取り組みや専門性向上の意義
14. 保育者の資質向上とキャリア形成（2） 組織とリーダーシップ
15. 授業の振り返り、総括

《成績評価の方法・基準》

レポート課題（60%）、毎時間ごとの小レポート（20%）、授業内での発表（20%）

《授業で使用する教科書》

・名須川知子・大方美香監修 山下文一編著「MINERVA はじめて学ぶ保育「保育者論」」ミネルヴァ書房

《参考書》

・文部科学省「幼稚園教育要領解説」フレーベル館・厚生労働省「保育所保育指針解説」フレーベル館・内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」フレーベル館

《事前・事後学習》

事前学習：授業内で示した実践における保育者の視点を参考に、日頃から“保育者”を意識して過ごすこと。事後学習：保育者にとって何か大切な、保育者はどうあるべきか、学習内容を振り返り学びを深めること。

保育の心理学

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 要 正子

《授業の概要》

生涯発達心理学の観点から、乳幼児期からの心身の発達について学び、こどもへの理解を深める。保育・教育現場で必要とされる基礎的知識の習得、発達課題、乳幼児期の初期経験の重要性などについて、適宜グループワークを交えながら学んでいく。

《学生の到達目標》

こどもの発達にかかわる心理学的知識を中心として、こどもの学びの過程や特性についての基礎知識を習得し、保育における人との相互的関わりや体験、環境の意義を習得する。

《授業計画》

1. 保育の心理学で学ぶことを理解する（オリエンテーション）
2. 発達とは（人間の発達を学ぶことの重要性を理解する）
3. 発達の理論を学ぶ（1）
4. 発達の理論を学ぶ（2）
5. こどもの発達過程（1）身体的機能と運動機能の発達
6. こどもの発達過程（2）認知の発達
7. こどもの発達過程（3）言語の発達
8. こどもの発達過程（4）社会情動的発達
9. 乳幼児期の学びに関わる理論
10. 乳幼児期の学びの過程と特性
11. 乳幼児期の学びを支える保育
12. コミュニケーションの力を育む（乳幼児期の親子の関わり的重要性について学ぶ）
13. コミュニケーションの力を育む（遊びと概念獲得について学ぶ）
14. 子育て支援の必要性和重要性について学ぶ
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

筆記試験（60%）と授業への取り組み（40%）によって評価する。なお、授業への取り組みには、グループワークの成果等提出物も含む。

《授業で使用する教科書》

・長谷川真理「発達心理学―心の謎を探る旅―」北樹出版

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前学習：インターンシップ実習棟で、こどもに興味をもち、周囲の大人の関わり方にも関心を寄せて観察する。事後学習：授業と観察したことや体験したことを連動させ、学びを深める。

幼児と健康

1 年次（半期）

2 単位（講義）

担当 高橋 篤志、仲山 正志

《授業の概要》

健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活を作り出す力を養う領域「健康」の指導の基盤となる知識、技能を身につける。具体的には、以下の4点について理解し、指導方法との関連性について理解する：（1）乳幼児期の健康課題、（2）乳幼児期の心身の発達、（3）環境からの影響（生活習慣と安全管理等）、（4）運動発達の理解。

《学生の到達目標》

本講義では、健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活を作り出す力を養う領域「健康」の指導の基盤となる知識、技能について理解することを目的とする。主に生理学的、バイオメカニクス的、神経科学的な観点から以下の4点について解説する：（1）乳幼児期の健康課題、（2）乳幼児期の心身の発達、（3）環境からの影響（生活習慣と安全管理等）、（4）運動発達の理解。また、これらの点と子どもの健康指導法との関連性について解説する。

《授業計画》

1. ヒトの能力の相互作用（年齢・環境・課題）
2. 乳幼児期の健康課題
3. 乳幼児期の発育発達①（筋骨格系の発達）
4. 乳幼児期の発育発達②（反射系の発達）
5. 乳幼児期の発育発達③（随意運動の発達）
6. 乳幼児期の発育発達④（呼吸循環器系の発達）
7. 乳幼児期の発育発達⑤（精神機能の発達）
8. 乳幼児期における環境①（生活習慣）
9. 乳幼児期における環境②（遊び環境）
10. 乳幼児期における環境③（安全管理）
11. 運動発達①（粗大運動）
12. 運動発達②（微細運動）
13. 遊びと運動発達
14. 子どもの発達理論
15. 運動遊び指導の要点

《成績評価の方法・基準》

レポートによる評価（40%）、定期試験（60%）とする。

《授業で使用する教科書》

・「幼稚園教育要領」・「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」・「保育所保育指針」

《参考書》

・高石 昌弘「からだの発達」大修館書店

《事前・事後学習》

本講義の内容を深く理解するために上記の書籍を読むことをすすめる。毎時間配布するプリントの議題について各自調べた事柄を解答する。

幼児と環境

1 年次（半期）

2 単位（講義）

担当 瀧川 光治、大嶋 健吾

《授業の概要》

本授業では、領域「環境」の指導の前提に関する「幼児を取り巻く環境」「幼児と環境とのかわり」についての専門的事項についての感性・知識・理解・技能について学ぶ。具体的には環境領域指導法Ⅰ・Ⅱにおいては、領域「環境」の指導のための指導方法・保育の展開等について学ぶが、この「幼児と環境」においては、その指導や保育の展開を支える「そもそも環境とは何か」「環境に関わる中で子どもはどのように発達していくのか」等についての理解を深めるとともに、飼育・栽培の知識・技能等についても学ぶ。

《学生の到達目標》

1. 幼児を取り巻く環境と、幼児の発達についての意義を理解する2. 幼児の思考・科学的概念の発達を理解する3. 幼児期の標識・文字等、情報・施設とのかかわりの発達を理解する

《授業計画》

1. 環境とは何か？—広い意味での“環境”を考える
2. 幼児の生活と身の回りの“環境”—子どもの生活圏としての環境を考える
3. 園生活と“環境”—園の中の環境（保育環境）を考える
4. 子どもにとっての自然環境とはどのようなものがあるか？
5. 子どもにとっての社会や文化に関する環境（情報・施設・地域文化等）とはどのようなものがあるか？
6. 子どもの発達と環境—主体的・能動的に環境に働きかけるとは？
7. 子どもの興味・関心・好奇心・探究心の発達
8. 子どもの認知・理解、問題解決的・創造的思考力の発達
9. 子どもと生き物・動植物のかかわり①（成長・命の尊さについての感性を育てる）
10. 子どもと生き物・動植物のかかわり②（飼育栽培の基本的事項）
11. 子どもともののかかわり（物の性質の理解、誤り・錯誤・工夫の視点）
12. 子どもと数量・図形、標識、文字とのかかわり
13. 子どもと様々な自然・自然現象とのかかわり
14. 現在社会とESDの視点から幼児期の環境を考える
15. 授業内容を振り返り、他の領域と関連づけながら保育の構想を考える

《成績評価の方法・基準》

①毎回の授業の最後に提出する小レポート40% ②中間課題30% ③振り返りのまとめ30%

《授業で使用する教科書》

・文部科学省「幼稚園教育要領解説」フレーベル館・厚生労働省「保育所保育指針解説」フレーベル館

《参考書》

・内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」フレーベル館

《事前・事後学習》

事前学習としては、毎回、授業前にテキストを読み、学習内容を把握する。事後学習としては、学んだことから視野を広げたり、深めたりするために振り返り内容について指示をする。

幼児と表現

1 年次（半期）

2 単位（講義）

担当 手良村 昭子， 有福 淑子

《授業の概要》

幼児の未分化で素朴な表現を理解するとともに、様々な表現媒体に関する基礎的な知識・技能及び幼児の表現を引き出すための考え方と保育に展開する発想・構想力を身につける。

《学生の到達目標》

・幼児の未分化で素朴な表現の姿やその発達、特徴を理解する。・音楽、造形、身体、劇などの様々な表現媒体に関する基礎的な知識・技能を身につけ、幼児の表現を引き出すための考え方と保育に展開する発想・構想力を身につける。・幼児の表現を支えるための自己の感性を豊かにする。

《授業計画》

1. 領域「表現」の位置づけと幼児の未分化で素朴な表現の受容
2. 「形、色、材料を介した造形表現活動①（発見）」「子供の造形への発達の側面からのア
3. 「形、色、材料を介した造形表現活動②（発想）」「子供の造形への特徴的側面からのア
4. 「形、色、材料を介した造形表現活動③（構想）」「子供の造形への美的側面からのア
5. 「形、色、材料を介した造形表現活動④（表現・鑑賞）」「子供の造形への心理的な側面
6. 「形、色、材料からの劇的・身体表現活動①（発想・構想）」「子供の世界観と表現①（大
7. 「形、色、材料からの劇的・身体表現活動②（表現・鑑賞）」「子供の世界観と表現②（
8. 「表現と『造形、音楽、身体、劇』」表現と『健康、人間関係、環境、言葉』
9. 「環境との対話①」「乳児を取り巻く環境と表現活動」
10. 「環境との対話②」「幼児を取り巻く環境と表現活動」
11. 「自然環境との対話」「乳幼児の自然物を通じた表現遊び」
12. 「音遊び・音楽遊び」「身近な楽器に親しみ音遊びを楽しむ」
13. 「音遊び・音楽遊び」「身近な楽器を使いグループで音楽表現を楽しむ」
14. 「児童文化との対話」「絵本や紙芝居、人形劇などを通じた表現活動を考える」
15. 「表現領域指導における ICT の活用」「表現指導の実際」

《成績評価の方法・基準》

評価・評定については、下記2項目を基に総合的に行う。○表現・鑑賞活動（50%）○レポート（50%）

《授業で使用する教科書》

・石上浩美「『保育と表現』」峯崎野書院

《参考書》

・「『幼稚園教育要領』解説」フレーベル館・「保育所保育指針解説」フレーベル館

《事前・事後学習》

事前学習課題の調べ学習および教科書を読んでおくこと。事後学習課題レポートのまとめなど

環境領域指導法Ⅰ

1 年次（半期）

1 単位（演習）

担当 古茂田 貴子

《授業の概要》

子どもは生まれてから自分自身を取り巻く環境の中で、経験を重ねながら心身を発達させていきます。その環境について、具体的な内容や、環境とどのように関わっているのかということ学び、その学びを通して保育の中でどのような環境を整えていけばよいのかについて、法令や実際の保育活動を学ぶことを通して考えます。

《学生の到達目標》

まず、幼稚園教育において育みたい資質・能力を理解し、幼稚園教育要領に示された「環境」領域のねらい及び内容について背景となる専門領域と関連させて理解を深めるとともに、幼児の発達に即して、主体的・対話的で深い学びが実現する過程を踏まえて具体的な指導場面を想定して保育を構想する方法を身に付ける。次に、子どもにとっての重要な学びの場である「遊び」と「生活」についてその大切さと環境の必要性を学ぶ。最後に、保育者として保育現場でどのような工夫が必要かという視点を意識づける。

《授業計画》

1. イントロダクション
2. 幼児教育における環境について
3. 幼稚園教育要領の根拠となる憲法・法律について
4. 幼稚園教育要領 領域分野について（目標・ねらい）
5. 幼稚園教育要領 領域分野について（内容・内容の取扱い）
6. 子どもの学びとしての「遊び」（情報機器とその活用を含む）
7. 子どもを取り巻く遊び環境の変化（情報機器とその活用を含む）
8. 自発的な活動としての遊び（情報機器とその活用を含む）
9. 遊びにおけるリスクとハザードについて（情報機器とその活用を含む）
10. 群れ遊びの大切さについて
11. 子どもの学びとしての「生活」
12. 教材研究1 季節の移り変わり保育
13. 教材研究2 日本や地域の伝統文化を取り入れた保育
14. 教材研究3 植物・動物と関わる保育
15. 食の環境 まとめ

《成績評価の方法・基準》

定期試験（60%）、授業の中で適宜提出する小レポート（40%）

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・「認定こども園教育・保育要領 幼稚園教育要領 保育所保育指針」・仙田満「子どもとあそび」岩波書店

《事前・事後学習》

講義の学びを通して、保育にふさわしい環境作りについて様々な興味や関心を高めて頂きたいと思います。そのために、前回までの講義内容を必ず復習して講義に臨むようにしてください。

環境領域指導法Ⅱ

1 年次（半期）

1 単位（演習）

担当 瀧川 光治、手良村 昭子

《授業の概要》

前期に学んだ「環境領域指導法Ⅰ」を踏まえて、さらに領域「環境」の理解を実践的に深めていく。領域「環境」は「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」ための領域であり、好奇心・探究心の育成が重要である。そのため、子どもの発達に応じて、そのためのねらい・内容の理解を深めるとともに、指導・援助、教材研究の方法を実践的に学ぶ。

《学生の到達目標》

1. 領域「環境」のねらい・内容、10の姿、資質・能力のつながりを理解する 2. 幼児の発達や学びの過程を理解し、資質・能力および10の姿を育むための保育内容や指導・援助を理解する 3. 幼児の発達や学びの過程を理解し、具体的な指導場面を想定した教材研究や環境構成を構想する方法を身につける。

《授業計画》

1. 領域「環境」のねらい・内容・内容の取扱いと資質・能力の育成
2. 子どもの発達の視点を踏まえた領域「環境」と10の姿のつながり
3. 思考力の芽生えを育む保育と教材研究（1）→実践事例から
4. 思考力の芽生えを育む保育と教材研究（2）→保育者の援助やかかわり
5. 思考力の芽生えを育む保育と教材研究（3）→静観機器・教材の工夫と活用
6. 思考力の芽生えを育む保育と教材研究（4）→指導計画の立案と模擬保育
7. 保育環境の様々な工夫（1）→領域「環境」のねらい・内容との関連
8. 自然とのかかわり・生命尊重を育む保育と教材研究（1）→実践事例から
9. 自然とのかかわり・生命尊重を育む保育と教材研究（2）→保育者の援助やかかわり
10. 自然とのかかわり・生命尊重を育む保育と教材研究（3）→静観機器・教材の工夫と活用
11. 自然とのかかわり・生命尊重を育む保育と教材研究（4）→指導計画の立案と模擬保育
12. 数量・図形、標識や文字などへの関心・感覚の育む保育環境（1）→実践事例から
13. 数量・図形、標識や文字などへの関心・感覚の育む保育環境（2）→教材の工夫
14. 保育環境の様々な工夫（2）→幼児期と小学校教育の連続性
15. 授業内容を振り返り、他の領域と関連づけながら保育の構想を考える

《成績評価の方法・基準》

① 毎回の授業の最後に提出する小レポート 40% ② 中間課題 30% ③ 振り返りのまとめ 30%

《授業で使用する教科書》

・文部科学省「幼稚園教育要領解説」フレーベル館・厚生労働省「保育所保育指針解説」フレーベル館

《参考書》

・内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」フレーベル館

《事前・事後学習》

事前学習としては、毎回、授業前にテキストを読み、学習内容を把握する。事後学習としては、学んだことから視野を広げたり、深めたりするために振り返り内容について指示をする。

社会的養護Ⅰ

1 年次（半期）

2 単位（講義）

担当 ★藪 一裕

《授業の概要》

現代社会の児童養護における社会的養護の果たす役割や必要性と、社会的養護の理念と概念及び歴史の変遷を学び、児童の権利擁護について周知する。社会的養護の各制度や実施体系を学び、その中で、児童にとって生活の場となる入所型施設の養護のあり方について、その基本的原理と施設養護の実践を学び、また必要とされるソーシャルワークの内容を理解する。家庭養護（里親・ファミリーホーム）や、養子（特別養子・普通養子）縁組制度について理解し、施設養護、家庭の養護との違いを知る。施設の運営管理や施設内虐待の防止及び学校、地域等との連携など施設養護の現状と課題について知る。

《学生の到達目標》

①現代社会における社会的養護の意義と歴史の変遷について理解する。②子どもの人権擁護を踏まえた社会的養護（社会的養育含む）の基本について理解する。③社会的養護の制度や実施体系等について理解する。④社会的養護の対象や形態、関係する専門職等について理解する。⑤社会的養護の現状と課題について理解する。

《授業計画》

1. ガイダンス、社会的養護の理念と概念
2. 社会的養護の歴史の変遷
3. 社会的養護の基本（1）子どもの人権擁護と社会的養護の基本原則
4. 社会的養護の基本（2）社会的養護における保育士等の倫理と責務
5. 社会的養護の制度と法体系
6. 社会的養護の仕組みと実施体系
7. 社会的養護の対象
8. 家庭養護と施設養護の共通点と違い
9. 家庭養護と施設養護における子どもの立場・視点
10. 社会的養護にかかわる専門職
11. 社会的養護に関する社会的状況
12. 社会的養護を必要とする子どもの権利擁護（被措置児童虐待防止）
13. 社会的養護と地域福祉のネットワーク
14. 児童福祉施設の運営管理
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

レポート試験 40%、授業内課題（小テスト、リアクションペーパー、授業内レポート等）40%、授業への取り組み（受講態度、グループワーク等への積極的な参加、発表等）20%として評価を行う。レポートは、授業内容の理解度や、テーマについて受講生自身が問題意識をもち考えを示すものを評価する。

《授業で使用する教科書》

・原田旬哉・杉山宗尚「図解で学ぶ保育 社会的養護Ⅰ」萌文書林

《参考書》

・「保育所保育指針」

《事前・事後学習》

①授業で示すテーマについて、新聞、雑誌、文献を参照したり、Web 検索などを行い理解を深めること。②次回授業への予習として、テキストの該当箇所を読みように指示をする。自分自身の知識を深めることにより、学修の効果を高めることができるので、必ず実施すること。

音楽（器楽）

1 年次（通年）

2 単位（演習）

担当 深田 直子, 大槻 和世, 川村 尚子, 炭谷 恭子, 竹田 景子, 本村 陽子, 山口 雅敏, 山本 恭仁子

《授業の概要》

各自の能力に応じて、個人指導を行う。幼稚園・保育園や小学校の現場において生活や諸行事に対応でき、また社会において音楽と豊かに関わることができるようなピアノ演奏技術の習得を目指す。

《学生の到達目標》

基礎技術を身につけることを重点に置き、音楽を形づくっている要素及びそれらに関わる音符、休符、記号や用語を理解し、演奏する曲に合った豊かな音楽的表現ができることをねらいとする。

《授業計画》

1. 全体及び個人別オリエンテーション
2. 楽譜の読み方及び個人レッスン①
3. 楽譜の読み方及び個人レッスン②
4. 楽譜の読み方及び個人レッスン③
5. 楽譜の読み方及び個人レッスン④
6. 楽譜の読み方及び個人レッスン⑤
7. 練習曲・リズム曲の個人レッスン①
8. 練習曲・リズム曲の個人レッスン②
9. 練習曲・リズム曲の個人レッスン③
10. 練習曲・リズム曲の個人レッスン④
11. 読奏曲の指導①
12. 読奏曲の指導②
13. 読奏曲の指導③
14. 読奏曲の指導④
15. 総括（前期到達度試験）
16. 弾き歌い曲・練習曲の個人レッスン①
17. 弾き歌い曲・練習曲の個人レッスン②
18. 弾き歌い曲（発表）
19. リズム曲・弾き歌い曲・練習曲の個人レッスン①
20. リズム曲・弾き歌い曲・練習曲の個人レッスン②
21. リズム曲・弾き歌い曲・練習曲の個人レッスン③
22. リズム曲・弾き歌い曲・練習曲の個人レッスン④
23. リズム曲・弾き歌い曲・練習曲の個人レッスン⑤
24. リズム曲・弾き歌い曲・練習曲の個人レッスン⑥
25. リズム曲・弾き歌い曲・練習曲の個人レッスン⑦
26. 読奏曲の指導①
27. 読奏曲の指導②
28. 読奏曲の指導③
29. 読奏曲の指導④
30. 総括（後期到達度試験）

《成績評価の方法・基準》

定期試験（80%）授業への取り組み（20%）

《授業で使用する教科書》

・小林 美実「こどものうた100」チャイルド本社・茂田 すずむ「保育のためのマーチ・スキップ・ギャロップ・ワルツ・リズム曲集」全音楽譜出版社・バイエル・フルゲミュラー・ソナチネ他 能力に応じて選択

《参考書》

・授業中に適宜資料を配布する

《事前・事後学習》

毎週、授業までの十分な練習が必要である。

基礎造形

1 年次（半期）

1 単位（演習）

担当 ★松岡 宏明

《授業の概要》

領域「表現」の中の「造形表現」及び「図画工作科」の指導実践に必要である造形的な思考力・判断力・表現力を高め、背景にある知識や技能を身につけるとともに、自己の中に美術（造形、図画工作）を愛好する心情を養う。

《学生の到達目標》

造形活動（「造形遊び」と「造形表現」〈絵や立体、工作〉及びそれらと一体的に並行する「鑑賞活動」）について実際に取り組むことを通して（様々な材料や用具、技法を使って、創造的に発想したり、構想を練ったり、表現・鑑賞したり）、指導実践に必要な造形的思考力、知識・技能を身に付ける。また、グループにおける表現・鑑賞活動を通して、造形表現・図画工作科指導において必要な、他者の表現を受容、共感し、それに対する豊かな反応力を身につけるとともに、美術することの喜びを味わい合う。

《授業計画》

1. 造形的思考力及び知識・技能
2. 造形的思考力・知識・技能の習得と指導（材料からの造形遊びと立体）〈粘土〉
3. 造形的思考力・知識・技能の習得と評価（材料からの造形遊びと立体）〈粘土〉
4. 造形的思考力・知識・技能の習得と指導（材料からの造形遊びと立体）〈木〉
5. 造形的思考力・知識・技能の習得と評価（材料からの造形遊びと立体）〈木〉
6. 造形的思考力・知識・技能の習得と指導（材料からの造形遊びと工作）〈紙〉
7. 造形的思考力・知識・技能の習得と評価（材料からの造形遊びと工作）〈紙〉
8. 造形的思考力・知識・技能の習得と指導・評価（行為からの造形遊びと絵）〈バス等〉
9. 造形的思考力・知識・技能の習得と指導（行為からの造形遊びと絵）〈絵の具等〉
10. 造形的思考力・知識・技能の習得と評価（行為からの造形遊びと絵）〈絵の具等〉
11. 造形的思考力・知識・技能の習得の指導・評価（行為からの造形遊びと絵）〈ローラー〉
12. 造形的思考力・知識・技能の習得と指導（行為からの造形遊びと絵）〈版画〉
13. 造形的思考力・知識・技能の習得と評価（行為からの造形遊びと絵）〈版画〉
14. 造形的思考力・知識・技能の習得と指導（鑑賞）
15. 造形的思考力・知識・技能の習得と評価（鑑賞）

《成績評価の方法・基準》

評価・評定については、次の4項目を基に総合的に行う。受講ノート（30%）、制作、発表、鑑賞（30%）、レポート（20%）、授業ノート（20%）

《授業で使用する教科書》

・松岡宏明「子供の世界 子供の造形」三元社

《参考書》

・厚生労働省「保育所保育指針」フレール館・文部科学省「幼稚園教育要領」フレール館・内閣府「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」フレール館・文部科学省「小学校学習指導要領解説 図画工作編」日本文教出版

《事前・事後学習》

事前学習として、教科書の指定ページを読み込むこと。事後学習として、授業ノートの整理を毎回行うこと。また、指定回以降にはレポートの構想を練り、執筆すること。レポートは、返却された後、修正を行い、今後の学びに生かすこと。授業内に作品が仕上がらなかった場合は、次回までに完成させること。

保育実践学習Ⅰ

1 年次（半期）

1 単位（演習）

担当 ★東城 大輔, ★高田 昭夫, 小西 由紀子,
中根 佳江, 福井 歩, 有福 淑子, 小西 眞弓,
樋谷 眞, 深田 直子, 末次 有加, 樋口 幸,
宮前 佳子

《授業の概要》

保育実践学習Ⅰは、保育所や幼稚園、こども園、小学校等でのインターンシップ現場における実習体験を基盤とする。実習を通して、現場における様々な課題を理解し、保育・教育の職務についての基礎的な理解を深めることを目指す。また、保育実践学習Ⅱへのつながりを意識し、実践を通して学ぶということを認識しながら、実習日誌を書くことによりその体験をより確かなものにする力を養う。この授業は、アクティブラーニング（実習、フィールドワーク）を含めて実施する。

《学生の到達目標》

インターンシップ実習における体験を通して、保育士やこども園・幼稚園・小学校教諭の職務への理解を深める。また子どもと関わる職としての保育・教育者をしっかり観察し、自身の将来と照らし合わせる。また、保育・教育現場の諸課題について体感し、考える機会とする。

《授業計画》

1. インターンシップ実習に関する心得について
2. インターンシップ実習に関する諸手続き
3. 保育所・幼稚園・こども園についての基礎的知識
4. 小学校についての基礎的知識
5. 子ども理解について
6. 発達障害の子どもへの対応について
7. 実習日誌の書き方について
8. 現場における対応事例について
9. インターンシップ現場における実践、および観察や記録を基にした交流（1）
10. インターンシップ現場における実践、および観察や記録を基にした交流（2）
11. アクティブラーニング（フィールドワーク）にて視察・調査し、成果報告書を作成する
12. アクティブラーニング（フィールドワーク）にて視察・調査し、成果報告書を作成する
13. アクティブラーニング（フィールドワーク）にて視察・調査し、成果報告書を作成する
14. アクティブラーニング（フィールドワーク）にて視察・調査し、成果報告書を作成する
15. 自己の課題の明確化および目標設定

《成績評価の方法・基準》

「インターンシップ実習」参加および事前・事後授業への参加（60%）「インターンシップ実習」日誌の提出および内容（40%）

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前学習：インターンシップ実習先での当日の課題や実践への心構えを形成して行くこと。事後学習：当日のインターンシップ実習における自己の反省点などを実習日誌に書き記し、次のインターンシップへの目標を設定すること。

保育実践学習Ⅱ

1 年次（半期）

1 単位（演習）

担当 ★東城 大輔, ★高田 昭夫, 小西 由紀子,
中根 佳江, 福井 歩, 有福 淑子, 小西 眞弓,
樋谷 眞, 深田 直子, 末次 有加, 樋口 幸,
宮前 佳子

《授業の概要》

保育実践学習Ⅱは、保育所や幼稚園、こども園、小学校等でのインターンシップ現場における実習体験を基盤とする。実習を通して、現場における様々な課題を理解し、保育・教育の職務についての基礎的な理解を深めることを目指す。また、保育実践学習Ⅰでの学びの経験を活かし、引き続き、実践を通して学ぶということを常に認識しながら、実習日誌を書くことによりその体験をより確かなものにする力を養う。この授業は、アクティブラーニング（実習、フィールドワーク）を含めて実施する。

《学生の到達目標》

インターンシップ実習における体験を通して、保育士やこども園・幼稚園・小学校教諭の職務への理解を深める。また子どもと関わる職としての保育・教育者をしっかり観察し、自身の将来と照らし合わせる。また、保育・教育現場の諸課題について体感し、考える機会とする。

《授業計画》

1. 前期の振り返りと自己分析
2. インターンシップ実習に向けた目標設定
3. インターンシップ現場における実践、および観察や記録を基にした交流（1）
4. インターンシップ現場における実践、および観察や記録を基にした交流（2）
5. インターンシップ現場における実践、および観察や記録を基にした交流（3）
6. インターンシップ現場における実践、および観察や記録を基にした交流（4）
7. インターンシップ現場における実践、および観察や記録を基にした交流（5）
8. インターンシップ現場における実践、および観察や記録を基にした交流（6）
9. インターンシップ現場における実践、および観察や記録を基にした交流（7）
10. インターンシップ現場における実践、および観察や記録を基にした交流（8）
11. アクティブラーニング（フィールドワーク）にて視察・調査し、成果報告書を作成する
12. アクティブラーニング（フィールドワーク）にて視察・調査し、成果報告書を作成する
13. アクティブラーニング（フィールドワーク）にて視察・調査し、成果報告書を作成する
14. アクティブラーニング（フィールドワーク）にて視察・調査し、成果報告書を作成する
15. 実習の振り返りと自己の課題の明確化

《成績評価の方法・基準》

「インターンシップ実習」参加および事前・事後授業への参加（60%）「インターンシップ実習」日誌の提出および内容（40%）

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前学習：インターンシップ実習先での当日の課題や実践への心構えを形成して行くこと。事後学習：当日のインターンシップ実習における自己の反省点などを実習日誌に書き記し、次のインターンシップへの目標を設定すること。

教職論

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 佐伯 知子

《授業の概要》

インターンシップ現地における教育者の姿や教育関連のニュースなどにふれる中で、現代社会における教職の意義や教員の役割や職務内容等について理解することを目的とする。

《学生の到達目標》

教職の意義、教員の役割・資質能力・職務内容等について理解し、教職への意欲を高め、さらに適性を判断し、進路選択に資する教職の在り方を理解する。

《授業計画》

1. 教職の意義（1）公教育の原理
2. 教職の意義（2）教職の職業的特徴
3. 教員の役割（1）教育の動向
4. 教員の役割（2）今日の教員に求められる役割
5. 教職の意義と役割に関するインターンシップ現地における視察・調査
6. 教職の意義と役割に関する、視察・調査成果報告書の作成
7. 教員の役割（3）教員の資質能力
8. 教員の職務内容（1）幼児・児童への指導
9. 教員の職務内容（2）指導以外の職務
10. 教員の職務内容（3）教員研修
11. 教員の職務内容に関するインターンシップ現地における視察・調査
12. 教員の職務内容に関する、視察・調査成果報告書の作成
13. 教員の職務内容（4）服務・身分上の義務
14. テーム学校への対応
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

授業に取り組む姿勢（50%）、報告書およびレポート等の提出物（50%）。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

・日ごろから新聞を読むなどして時事問題に関心を向け、自分の考えを明確にする努力をすること。

健康教育

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 高橋 篤志， 平野 俊一郎

《授業の概要》

生活習慣病の罹患（りかん）率は、身体組成と密接な関係にある。アンバランスな栄養摂取と運動不足が重なることで肥満傾向を加速化させ、このことが生活習慣病としての要因を作り出すことになる。授業では、健康の科学的基礎についての知識を深め、生活習慣病の予防対策としての観点から身体運動の重要性について説いていく。

《学生の到達目標》

生活習慣病の悪化とメタボリックシンドロームとの関係、加齢に伴う骨粗鬆症予防の運動療法に関する基礎的知識などの理論を学習し、その他様々な症例における問題点を考え、解決する力を身につけること。

《授業計画》

1. オリエンテーション・授業の進め方等
2. 健康の意義について
3. 現代社会と健康
4. 健康の基礎としての体力
5. 運動不足の害
6. 運動の効果
7. 運動処方の意義と実際
8. 運動処方とその流れ
9. 運動処方の内容
10. 運動処方の原則
11. メディカルチェック（実践）
12. 体力診断（実践）
13. 運動処方・プログラムの立て方（発表）
14. 生涯教育の課題（発表）
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

レポートや提出物（60%）、授業への取り組み（40%）として評価を行う。

《授業で使用する教科書》

・「小学校学習指導要領（解説）」・「幼稚園教育要領（解説）」・「保育所保育指針」

《参考書》

・「体力を考える ―その定義・測定と応用―」杏林書院・「運動適応の科学 ―トレーニングの科学的アプローチ―」杏林書院

《事前・事後学習》

現代、スポーツは健康科学に関して様々な情報が氾濫している。本授業では学生一人ひとりがそれらの氾濫する情報を自分自身で評価検討し、その中から信頼できる情報を入手選択して、自分自身の知識の一つとして現場に応用できるようにする。

体育科指導法

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 ★俵谷 好一

《授業の概要》

学習指導要領改訂の背景および改訂された学習指導要領のポイントについて講義し、小学校体育科の目標・内容の系統性や発展性についての理解を図る。また、学習指導内容論や方法論（教材づくり・ICT の活用・学習指導過程・学習指導形態等）を講義を通して学び、体育授業への取り上げ方を身に付ける。さらに、個別運動領域の中から、学習指導案を作成し、教材内容、教材づくり指導計画、学習評価のあり方を実践的に学ぶ。

《学生の到達目標》

小学校体育科の目標および内容を理解するとともに、体育授業の内容論や方法論（教材づくり・ICT の活用・学習指導過程・学習指導形態等）についての基本的な考え方を学び、児童の学習の実際や様々な学習指導方法に基づいた授業づくりと学習評価ができる実践的な学びを深める。

《授業計画》

1. 学習指導要領改訂の背景
2. 学習指導要領に示されている体育科の目標とその内容Ⅰ
3. 学習指導要領に示されている体育科の目標とその内容Ⅱ
4. 体育科の学習指導方法論
5. 教材・教具の開発、ICT 等の活用Ⅰ
6. 教材・教具の開発、ICT 等の活用Ⅱ
7. 授業映像の視聴Ⅰ
8. 授業映像の視聴Ⅱ
9. 体育科学学習指導案Ⅰ（低学年）
10. 体育科学学習指導案Ⅱ（中学年）
11. 体育科学学習指導案Ⅲ（高学年）
12. 授業発表Ⅰ
13. 授業発表Ⅱ（振り返り）
14. 授業発表Ⅲ（授業改善）
15. 小・中・高等学校の連携と小学校の役割およびまとめ

《成績評価の方法・基準》

毎回の授業の最後に提出する授業のノート（60％） 講義まとめの総括レポート

《授業で使用する教科書》

・「小学校学習指導要領体育編（平成 29 年告示）」東洋館出版社

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前学習は、小学校学習指導要領体育編（平成 29 年告示）の改訂の経緯および体育科改訂の趣旨、体育科改訂の要点を読んでおくこと。事後学習は、各学年の体育科の内容をふまえ、例示の教材を使って学習指導案の作成に取り組むこと。

国語

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 ★田窪 豊

《授業の概要》

小学校における国語科の教材分析や授業実践に必要な「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」に関する言語運用力及び言語感覚を身に付け、また、教材分析や授業実践に必要な「言葉の特徴や使い方」「情報の扱い方」「我が国の言語文化」に関する背景的な知識や技能を、授業場面を意識しながら身に付けることが重要である。「言葉の特徴や使い方」とは文法、語彙、表記、音読等で、「情報の扱い方」とは情報と情報の関係、情報の整理等で、「我が国の言語文化」とは、伝統的な言語文化、読書、書写等である。

《学生の到達目標》

・教材分析や授業実践に必要な「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」に関する言語運用力及び言語感覚を身に付けている。・教材分析や授業実践に必要な、言葉の働き、文法、語彙、表記、音読等に関する知識及び技能を身に付けている。・教材分析や授業実践に必要な、情報と情報の関係、情報の整理などに関する知識及び技能を身に付けている。・教材分析や授業実践に必要な、伝統的な言語文化、読書、書写等に関する知識及び技能を身に付けている。

《授業計画》

1. 「全国学力・学習状況調査」からみる知識
2. 「全国学力・学習状況調査」からみる技能・言語運用力
3. 教材分析や授業実践に必要な音読に関する知識
4. 教材分析や授業実践に必要な音読に関する技能
5. 教材分析や授業実践に必要な書写に関する知識
6. 教材分析や授業実践に必要な書写に関する技能
7. 教材分析や授業実践に必要な「書くこと」に関する知識
8. 教材分析や授業実践に必要な「書くこと」に関する技能
9. 教材分析や授業実践に必要な「読むこと」に関する知識
10. 教材分析や授業実践に必要な「読むこと」に関する技能
11. 教材分析や授業実践に必要な「話す・聞く」に関する知識
12. 教材分析や授業実践に必要な「話す・聞く」に関する技能
13. 教材分析や授業実践に必要な読書に関する知識や技能
14. 教材分析や授業実践に必要な言語文化に関する知識
15. 教材分析や授業実践に必要な言語文化に関する技能

《成績評価の方法・基準》

筆記試験（50％）、授業への取り組み・レポート・ビブリオバトル等（50％）

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・文部科学省「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 国語編」東洋館出版社

《事前・事後学習》

事前学習では、ビブリオバトルの本の選び、発表内容を考える。また、日常的に様々な文種に触れ、読んだり、聴いたりしたことをもとに人と交流する。事後学習では、読書の幅を広げたり、学んだことを自らの表現に活かしたりする。

算数

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 赤井 利行

《授業の概要》

小学校における算数科の授業を担当するために必要な（数と計算、図形、測定、変化と関係、データの活用）の実践的な数理運用力を、授業場面を意識しながら身に付ける。また、幼稚園、小学校、中学校の関連性を踏まえながら、小学校における算数科の授業を担当するために必要な背景的な知識を身に付けている。

《学生の到達目標》

数とその表現や計算の意味と方法、図形の性質や図形の計量、量に着目して物事の特徴を的確に表現する、伴って変化する二つの数量の関係、目的に応じて統計的な問題解決するなどの力を身に付ける。また、小学校における算数科の学習内容に関わる数学に関する基本的な知識を身に付けている。

《授業計画》

1. オリエンテーション
2. 数と計算に関する基本的な数理運用力の基礎
3. 数と計算に関する基本的な数理運用力低学年
4. 数と計算に関する基本的な数理運用力中学年
5. 数と計算に関する基本的な数理運用力高学年
6. 図形に関する基本的な数理運用力下学年
7. 図形に関する基本的な数理運用力上学年
8. 変化と対応に関する基本的な数理運用力下学年
9. 変化と対応に関する基本的な数理運用力上学年
10. データの活用に関する基本的な数理運用力下学年
11. データの活用に関する基本的な数理運用力上学年
12. 現実の世界の数学的探究
13. 数学の世界の数学的探究
14. 問題発見・解決・発展の過程としての数学
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

最終課題（60%）、2 回の研究レポート（40%）

《授業で使用する教科書》

・文科省「学習指導要領解説算数編（最新版）」・赤井利行編「『新・わかる算数科指導法』」明治図書

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前学習は、授業で学習する場面に対応する教科書を読んでおき、授業に向かう。事後学習は、取り上げられたテーマについて、教科書に示されている課題を図書館で調べる。

特別支援教育総合演習

1 年次（半期）
1 単位（演習）
担当 ★高田 昭夫

《授業の概要》

特別支援教育の理念と教育制度、障がいのある子どもの発達の基本原則、発達過程、教育課程、指導の原理と方法、早期発見の取り組み等について、自我発達の観点を踏まえ概説する。

《学生の到達目標》

障がいのある幼児の保育や児童・生徒の教育に関わる人材として必要となる基礎的・基本的な知識・理解を身につけ、特別支援教育に意欲的に取り組もうとする態度を養う。

《授業計画》

1. 障害の概念と特別支援教育の対象となる子ども
2. 特別支援教育制度の変遷
3. 特別支援教育の理念と現状
4. 人間の尊厳性と特別支援教育
5. 子どもの発達の見え方
6. 発達障害を起こす要因、及び発達障害のある子どもの対応
7. 障害の早期発見・早期対応の取り組み
8. 障がいのある子どもの発達の基本原則
9. 子どもの発達過程
10. 子どもの自我発達
11. 障害の受容の問題
12. 特別支援教育における教育課程の特徴
13. ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり
14. 特別支援教育における合理的配慮
15. 総括・まとめ

《成績評価の方法・基準》

課題への取り組み・討議への参加状況 40%、レポート提出 60%によって総合的に判断する。

《授業で使用する教科書》

・国立特別支援教育研究所「特別支援教育の基礎・基本」ジヤース教育者

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

アクティブラーニングを多く取り入れた講義形態による学び合いで実施する。より学びを深めるために事前準備、授業時の他者との交流、授業後の振り返り、自己評価が重要である。

総合基礎演習Ⅰ

1 年次（通年）

2 単位（演習）

担当 ★東城 大輔, ★高田 昭夫, 深田 直子,
末次 有加

《授業の概要》

初年次教育という位置づけで、スタディスキルやアカデミックスキルの獲得を意識した展開を行う。また、保育士養成および教員養成として1700時間プログラムを実施している本学の学びの体制の全体像を把握することや、コミュニケーション能力を培う協働的な学びや思考方法を、遊びの実践を通して学ぶことを中心として行う。また、読書に対する興味関心が広がるよう、特に「読む」活動を意識し、継続的な読書活動を展開する。

《学生の到達目標》

大学で学ぶということについての基礎的な学習から、基本的な学習姿勢や態度を培い、保育士や幼稚園教諭、小学校教諭の職務について必要となる知識や技能を包括的に獲得する。遊びの実践を通して、社会人基礎力や協働性などを身につける。また、読書活動を通して、多方面から物事を考える視点や力を養う。

《授業計画》

1. 大学での「学び」について
2. 大学生活、倫理観について
3. 実習の意義（保育士・教員養成校として）
4. 文献検索の方法や図書館の活用・利用方法（1）
5. 文献検索の方法や図書館の活用・利用方法（2）
6. 文献検索の方法や図書館の活用・利用方法（3）
7. 小論文およびレポート作成の方法（1）
8. 小論文およびレポート作成の方法（2）
9. 小論文およびレポート作成の方法（3）
10. 読書活動に関わる取組み（1）
11. 読書活動に関わる取組み（2）
12. 読書活動に関わる取組み（3）
13. 情報処理や通信における基礎技術
14. 音楽鑑賞を通じた感情や情緒の育み
15. 防犯教育に関する基礎知識
16. 遊びの提供と保育実践の計画（1）
17. 遊びの提供と保育実践の計画（2）
18. 遊びの提供と保育実践の計画（3）
19. 遊びの提供と保育実践の観察（1）
20. 遊びの提供と保育実践の観察（2）
21. 遊びの提供と保育実践の観察（3）
22. 遊びの提供と保育実践の振り返り（1）
23. 遊びの提供と保育実践の振り返り（2）
24. 遊びの提供と保育実践の振り返り（3）
25. 遊びの提供と保育実践の評価（1）
26. 遊びの提供と保育実践の評価（2）
27. 遊びの提供と保育実践の評価（3）
28. 読書活動に関わる取組みの成果報告
29. 読書活動に関わる取組みの発表会
30. 全体総括

《成績評価の方法・基準》

遊びの実践にかかわる取組み（40%）、遊びの実践にかかわるレポート（20%）、文献検索の方法にかかわるレポートなど授業で課された提出物（40%）

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前学習：前時の学修の振り返りや、予習を行うこと。事後学習：授業で示された課題に向き合うことや、問題・レポートについて積極的に取り組むこと。

児童保育学科 2 年次

人間論

2 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 石丸 るみ

《授業の概要》

保育はそもそも、相対的なものであり、絶対的な答えは無いものである。教育や福祉の分野で、先人が苦労した人生をかけた姿や、残した言葉に少しでも手がかりを見つけない。本講義では、教育や福祉に携わってきた人の人生の一部を知ることを通して学ぶ。私たち全ての人も、その保育・教育するということでは、こどもへの捉え方、人への考え方を踏まえて、その場所でも、また、個別的な何かをつくりだしているともいえる。全く同じであることはありえない。講師の事例と共に、こどもも自分も幸せにつながる人間像を考える一助とする。皆さんの人生経験も含めての意見、積極的、主体的な授業参加を期待しています。

《学生の到達目標》

歴史上のまたは、現在の、福祉的、教育的な仕事に人生をかけた人物の生き方を知ることを通して、保育者として働くことへの期待、面白さ、魅力に気づくことを到達目標とする。

《授業計画》

1. オリエンテーション
2. 人格を育む「教育」生きることを支える「福祉」
3. 教育・福祉に人生をかけた人～マザーテレサ、ナイチンゲール
4. こどもと生きる「児童相談所が動くとき」事例を通して
5. 教育・福祉に人生をかけた人～フレール
6. こどもと生きる「こどもが成長すること。変わること」事例を通して
7. 教育・福祉に人生をかけた人～倉橋惣三
8. こどもと生きる「Aはお姉ちゃん！抱っこなんかしないんだよ！」事例を通して
9. 教育・福祉に人生をかけた人～平井信義
10. こどもと生きる「先生、動かしにくい？って聞いてない」事例を通して
11. 現在・これからの教育にかけた人～大場幸夫、無藤隆
12. グループワーク「こどもと生きる人間」①
13. グループワーク「こどもと生きる人間」②
14. グループワーク③発表
15. まとめ～幸せになるために

《成績評価の方法・基準》

授業内に課すワークシートやグループワーク内のミニレポートなど、40点。最終レポート60点

《授業で使用する教科書》

・授業時、適宜プリントを配布する

《参考書》

・「授業時、適宜紹介する」

《事前・事後学習》

授業内で示す事前学習課題に取り組むこと。授業内で配布したプリントは授業後に再度確認し振り返る。授業を通して、さまざまな人の人間性を考え、自己の人生観や保育観へと考えを広げられたら嬉しい。

フランス語

2 年次（通年）
2 単位（演習）
担当 永井 道子、杉本 里栄

《授業の概要》

EU の中核をなすフランスの言語を学び、言葉を通じてフランス文化、日常生活、社会事情を考察することにより異文化への理解を深める。フランスという国の多様な顔を知り、視野を広げ、旅行する際にも手助けとなるよう、基礎日常会話の習得を目指す。

《学生の到達目標》

学生が語彙や知識を豊かにし、発音強化により日常のコミュニケーション力をつけることを目指す。まためでは、各自が興味を持って選択したテーマを絞り考察したことをプレゼンテーションする。

《授業計画》

1. ヨーロッパの中のフランス共和国
2. フランス語とは
3. 基礎発音
4. 挨拶・自己紹介
5. 数字・男性名詞・女性名詞
6. カフェでの注文
7. 美術館巡り
8. フランス人の日常生活
9. マルシェでの買い物
10. 時刻の表現
11. 季節・天候の表現
12. フランスの世界遺産
13. バリ散策・旅行会話Ⅰ
14. 地方への旅・旅行会話Ⅱ
15. 総括
16. 前期の復習
17. 日常会話・基本表現
18. シャンソンを歌おう
19. モード・映画
20. 食文化・ワインとチーズ
21. 食文化・フランス料理
22. 食文化・フランス菓子
23. フランスの現代社会
24. ホームステイの会話表現Ⅰ
25. ホームステイの会話表現Ⅱ
26. 伝統行事Ⅰ
27. 伝統行事Ⅱ
28. ホームパーティーを楽しむ
29. 総復習
30. 総括

《成績評価の方法・基準》

学期末試験・レポート・課題 50%授業への取り組み 50%

《授業で使用する教科書》

・「キーフレーズで学ぶフランス語」三修社

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前学習：普段からフランスに関する事に興味を持っておく。事後学習：授業で習った表現を繰り返し覚えるようにする。

韓国語

2 年次（通年）
2 単位（演習）
担当 韓 寧爛

《授業の概要》

今日、日本と韓国との交流は、政治・経済だけでなく、多方面にわたって多様化している。また、交流の多様化に伴って、様々な方面から韓国語学習に対するニーズが高まっている。本講義では、多様化した韓国語のニーズにこたえるべく、しっかりとした韓国語基礎の習得を目指す。単語の習得、文の組み立て能力に重点を置いて講義を進めていく。さらに挨拶表現の異同等を通して、隣国のコミュニケーションスタイル、発想方法等にも触れ、異言語を学ぶ楽しさを味わってほしいと願っている。

《学生の到達目標》

(1) 簡単な文の「読み・書き」が出来る。(2) ハングル能力検定試験5級の習得を目指す。(3) 初級（5級）レベルの限られた単語を使い簡単なコミュニケーションが出来るようになる。

《授業計画》

1. 韓国語とはどういう言語か。一音節の構造を中心にー
2. 韓国語の母音習得
3. 子音習得ー平音を中心にー
4. 子音習得ー激音・濃音を中心にー
5. 音節末の子音（バッチム）の習得
6. 発音の規則の習得
7. 文字と発音編のまとめ
8. 第一課ー임니다と입니다①ー
9. 「トイレはどこですか」文の会話と練習問題④と⑤
10. 第二課ー이/가 아/습니다と이/가 아니라①ー
11. 「高校生ではなく中学生です」文と問題③と⑤ー
12. 第三課ー漢数詞と「I・고 있습니다」①ー
13. 「携帯番号」文の会話と練習問題④と⑥ー
14. 第四課ー합니다体と存在詞①ー
15. 「O学年です」「Oウオンです」文と問題③と⑤ー
16. 韓国文化①ーハングルの日について
17. 第五課ー生年月日の言い方の習得①ー
18. 「1994年生まれです」文と練習問題③と⑤ー
19. 第六課ー固有数詞と否定文の習得①ー
20. 「18歳です」「サッカーが好きです」文と問題③ー
21. 第七課ー時間の言い方と「I・을까요」①ー
22. 「9時に授業があります」文と練習③と⑤ー
23. 第八課ー用言の短い否定形と「I・있습니다」①ー
24. 「今週から来週まで学校に行きません」文と問題③ー
25. 漢数詞、固有数詞、用言の否定形のまとめ
26. 第九課ー尊敬丁寧形「I・십니다」①ー
27. 「ビビンバが好きですか」文と問題④と⑥ー
28. 第十課ー「해요体」の終結語尾「III・어요」①ー
29. 「日曜日に何してますか」文の会話と問題③と⑤ー
30. 尊敬丁寧形と「해요体」の終結語尾のおさらい

《成績評価の方法・基準》

以下の項目により判断します。(1)小テスト (50%) (2)課題 (20%) (3)授業への取り組み (30%)

《授業で使用する教科書》

・金京子・喜多恵美子「パランセ韓国語初級」朝日出版社

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

外国語習得という側面からすると、日頃韓国語と接しているということが望ましい。楽しい学習の観点から考えても、少なくともその日の学習項目や単語を自分のものにするという学習後の作業は求められる。

子育て支援

2 年次（半期）
1 単位（演習）
担当 丸目 満弓

《授業の概要》

ソーシャルワークの基礎を学びつつ、保育の専門性を背景とし、保護者に対する子育て支援の理論・意義・機能について理解する。それらをふまえた上で、保育士の行う子育て支援について、さまざまな場面や対象に即した行動見本の提示、相談助言、情報の提供など、保育相談支援の内容、方法、技術を中心に実践事例等を通して具体的に理解する。さらに事例分析を通して子育て支援に関する相談援助や個別支援計画についての理解を深める。

《学生の到達目標》

1. 保育士の行う保育の専門性を背景とした保護者に対する相談、助言、情報提供、行動見本の提示等の支援（保育相談支援）を行う際の基本的視点や姿勢を身につける
2. 保育相談支援を行う際に必要となる方法を身につける
3. 保育相談支援の具体的な支援がイメージできる
4. 保育士の専門性を活かした相談支援のあり方を考えることができる

《授業計画》

1. オリエンテーション 一人ひとりの保育とともに行う保護者の支援とはー
2. 日常的・継続的な関わりを通じた保護者との相互理解と信頼関係の形成
3. 保護者や家庭の抱える支援のニーズへの気づきと多面的な理解
4. 子どもや保護者が多様な他者と関わる機会や場の提供
5. 子ども及び保護者の状況・状態の把握
6. 支援の計画と環境の構成
7. 支援の実践・記録・評価・カンファレンス
8. 職員間の連携・協働および社会資源の活用と自治体・関係機関や専門職との連携・協働
9. 保育所等における支援
10. 地域の子育て家庭に対する支援
11. 障害のある子ども及びその家庭に対する支援
12. 特別な配慮を要する子ども及びその家庭に対する支援
13. 子ども虐待の予防と対応・要保護児童等の家庭に対する支援
14. 多様な支援ニーズを抱える子育て家庭の理解
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

試験(60%)と小レポートなど授業への取り組み(40%)を総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

・立花直樹・安田誠人・波田竺英治編著「保育者の協働性を高める「子ども家庭支援」「子育て支援」」晃洋書房

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

予習：次の授業に向けたキーワードやテーマを伝えるので、事前に調べたり考えをまとめておくこと 復習：毎回授業の最後に提示されるテーマについて、次の授業までにまとめてくる。

子どもの保健

2 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 阿川 勇太

《授業の概要》

子どもの健全な育成には、単に子どもの身体と心の発達のみならず、子どもを取り巻く環境を理解することも求められる。本講義では、これらの理解のために、身体の構造および諸機能の発達について学習する。そのうえで、子どもの心身の健康状態とその把握や対応についての知識を身に付ける。

《学生の到達目標》

1. 子どもの心身の健康増進を図る保健活動の意義を理解する。2. 子どもの身体的な発育・発達と保健について理解する。3. 子どもの心身の健康状態とその把握の方法について理解する。4. 子どもの疾病とその予防法及び他職種間の連携・協働の下での適切な対応について理解する。

《授業計画》

- ガイダンスー子どもの心身の健康と保健の意義
- 生命の保持と情緒の安定に係る保健活動の意義と目的
- 健康の概念と健康指標
- 現代社会における子どもの健康に関する現状と課題
- 地域における保健活動と子ども虐待防止
- 調査発表（グループワーク）
- 子どもの身体発育及び運動機能の発達と保健
- 子どもの生理機能の発達と保健
- 子どもの心身の健康状態とその把握（1）健康状態の観察
- 子どもの心身の健康状態とその把握（2）心身の不調等の早期発見
- 子どもの心身の健康状態とその把握（3）発育・発達の把握と健康診断
- 子どもの心身の健康状態とその把握（4）保護者との情報共有
- 子どもの疾病の予防及び適切な対応（1）主な疾病の特徴
- 子どもの疾病の予防及び適切な対応（2）子どもの疾病の予防と適切な対応
- 調査発表（グループワーク）、総括

《成績評価の方法・基準》

課題及びグループディスカッションの内容 50% レポート 50%

《授業で使用する教科書》

・「幼稚園教育要領」・「保育所保育指針」・「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

授業内容に関するキーワードについて授業開始時に小テストを行うので、事前事後学習を行うようにしてください。

子どもの食と栄養

2 年次（通年）
2 単位（演習）
担当 大杉 加菜子

《授業の概要》

近年、子どもを取り巻く食環境は大きく変化し、肥満や偏食など食生活に関する問題も多い。子どもが健やかに育つために正しい生活習慣と成長過程合った栄養について理解し、関連する基礎知識、食育の意義、食を通して発達支援を学ぶ。さらに、家庭や児童福祉施設の食生活の現状と課題、特別な配慮を要する子どもの食と栄養についても学ぶ。

《学生の到達目標》

子どもの発達と食生活の特徴、栄養と代謝、食品、食の安全性についての基礎を理解する。保育現場で子どもの健康と食生活を支援し、食育を通して子どもに食の意義を伝えられる知識を身に付け、授業を通して保育者としての自身の食生活習慣を見つめ、より良い食生活へのレベルアップを図る。

《授業計画》

- 子どもの健康と食生活の意義
 - 子どもの発達・発育と食生活
 - 子どもの発達・発育と食生活
 - 栄養に関する基礎知識
 - 栄養に関する基礎知識
 - 栄養に関する基礎知識
 - 献立作成・調理の基本
 - 献立作成・調理の基本
 - 食品の安全性
 - 食品の安全性
 - 食品の安全性
 - 演習課題
 - 幼児期の食生活
 - 幼児期の食生活
 - 前期まとめ
 - 乳児期の食生活
 - 乳児期の食生活
 - 乳児期の食生活
 - 乳児期の食生活
 - 演習課題
 - 幼児期の食生活
 - 幼児期の食生活
 - 幼児期の食生活
 - 演習課題
 - 子どもの発育・発達と食生活（学童期・思春期）
 - 家庭や児童福祉施設における食事と栄養
 - 食物アレルギーのある子どもへの対応
 - 食育の基本と内容
 - 演習課題
 - まとめ
- 身体発育と栄養
 - 食べる機能と栄養
 - 栄養の働きと重要性 1
 - 栄養の働きと重要性 2
 - 食事摂取基準の意義と活用
 - 食品の基礎知識 1
 - 食品の基礎知識 2
 - 食中毒
 - 食品添加物
 - 食品表示
 - 妊婦経過と栄養と食生活
 - 妊娠のトラブルと母乳分泌
 - 乳児期の心身の特徴と食生活
 - 乳汁栄養と調乳
 - 離乳の意義
 - 栄養の問題点と健康への対応
 - 幼児期の心身の特徴と食生活
 - 幼児期の食生活の特徴と食生活
 - 幼児期の間食の意義について考える

《成績評価の方法・基準》

筆記試験 60% 提出課題 40%

《授業で使用する教科書》

・堤ちはる。土井正子「子育て・子育てを支援する子どもの食と栄養」萌文書林

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前：テキストをよく読み、積極的に学習し、問題点などをまとめておこう。事後：学習した内容をもとに、日常の食生活を見直し、消費者として食に対する意識を高め、子どもたちにどう伝えるのか工夫しよう。

保育の計画と評価

2 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 青木 一永

《授業の概要》

保育における計画の意義と必要性を理解し、保育カリキュラムの構造や保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領を理解する。また、保育の計画の編成、子ども理解の方法等について、具体的資料や事例等を通して理解する。

《学生の到達目標》

この講義では、子どもに即した保育の計画を立案するため、下記の3点について理解し、スキルを身につけることを目的とする。①保育の計画の意義や作成方法についての基礎理解②子ども理解や発達過程を踏まえた保育の計画作成の実践的理解③計画・実践・評価・改善の過程の全体構造の理解と見直し

《授業計画》

1. オリエンテーション 保育の計画と評価の全体像
2. 保育所保育指針等の理解とカリキュラムの意義①
3. 保育所保育指針等の理解とカリキュラムの意義② アクティブラーニングを通して
4. 保育理念・方針・全体的な計画等の作成① アクティブラーニングを通して
5. 保育理念・方針・全体的な計画等の作成② アクティブラーニングを通して
6. 保育の実践に基づく保育の計画の総合的な理解
7. 保育の計画づくりのポイントと実践①
8. 保育の計画づくりのポイントと実践② アクティブラーニングを通して
9. 保育の計画づくりにつながる子ども理解 アクティブラーニングを通して
10. 保育現場における指導計画の実践
11. 保育実習に向けた指導計画の作成①
12. 保育実習に向けた指導計画の作成② アクティブラーニングを通して
13. さまざまな指導計画やの種類と実際（保育所児童保育要録含む）
14. 保育の評価とカリキュラムマネジメント
15. 振り返りとまとめ

《成績評価の方法・基準》

授業毎のリアクションペーパーでの学びの参加状況（30%）、授業を通じて作成する指導計画（30%）、課題レポートにおける理解度（40%）を総合して評価する。

《授業で使用する教科書》

・厚生労働省「保育所保育指針（平成29年告示）」・無藤隆・大豆生田啓友「子どもの姿ベースの新しい指導計画の考え方 新要領・指針対応」フレーベル館

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

授業前、1時間程度前回の授業内での復習と授業で提示した箇所の予習。毎授業後、1時間程度学習内容や資料を見直しをしてまとめておくこと。また、指定のあった際に、指導計画を作成すること。

幼児と人間関係

2 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 末次 有加、三輪 よし子

《授業の概要》

幼児の人間関係の育ちに影響を与えている社会的要因について理解し、幼児教育・保育において保障すべき教育内容に関する知識を身に付ける。特に領域「人間関係」の指導の基盤となる基礎理論として、関係発達論的視点について学び、他者との関係や集団との関係の中で幼児期の人と関わる力が育つことを理解する。

《学生の到達目標》

①幼児を取り巻く人間関係をめぐる現代的課題を理解する。②幼児期の人間関係の発達について理解する。③保育現場における関係発達論的視点について理解する。

《授業計画》

1. 現代社会と幼児の人間関係
2. 人とのかかわりを培う保育の基本
3. 自立心を育む援助
4. 自他の気持ちに気づく援助のあり方
5. 自分の気持ちを自己調整する力を育む援助のあり方
6. きまりをめぐる様々な幼児の葛藤と援助
7. ルールのある遊びと援助
8. 個と集団の育ちを考える
9. 協同的な遊びの中で育ち合う長期的な保育の展開を考える
10. 保護者との関係づくりと地域連携 ① 課題を抱えた子どもとその保護者の理解と援助
11. 保護者との関係づくりと地域連携 ② 課題を抱えた保護者とその子どもの理解と援助
12. 保育者同士の人間関係
13. 多様な人間関係づくりと地域ネットワーク ① 幼保の交流活動を考える
14. 多様な人間関係づくりと地域ネットワーク ② 小学校以降の生活や学習で生かされる力
15. 領域「人間関係」をめぐる現代的課題とまとめ

《成績評価の方法・基準》

各種課題・レポート（80%）、最終レポート（20%）＝100%

《授業で使用する教科書》

・「保育所保育指針（解説）」・「幼稚園教育要領（解説）」・「幼保連携型認定こども園教育・保育要領（解説）」

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前学習：「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」をよく読んでおくこと。事後学習：毎週のインターンシップ等において、子どもの年齢・発達段階、家庭環境、生活経験などと人とのかかわり方の違いや特徴についてよく観察すること。集団保育の方法についてもよく観察し、不明点があれば、現場の保育者に質問していただくこと。

幼児と言葉

2 年次（半期）
2 単位（講義）

担当 小椋 たみ子， 古茂田 貴子

《授業の概要》

領域「言葉」の指導の基礎となる、幼児が豊かな言葉や表現を身につけ、想像する楽しさを広げるために必要な基礎知識を身につける。言語の発達過程、発達のメカニズム、言葉に対する感覚、感性などについての基礎知識を理解した上で、幼児の言葉を育て、言葉に対する感覚を豊かにする教材や実践に関する知識を身につける。

《学生の到達目標》

1. 人間にとっての話し言葉や書き言葉などの意義と機能について、説明できる。2. 言葉の機能、言葉の発達過程、言葉の獲得の基盤、人的環境、物的環境の重要性について理解し、説明できる。3. 言葉の楽しさや美しさに気づき、言葉を豊かにする実践を理解し、幼児の発達の姿と合わせて説明できる。4. 言葉を育て、想像する楽しさを広げる児童文化財の意義を理解し、基礎的な知識を身に付ける。5. 現代社会と言葉をめぐる問題の理解を深める。

《授業計画》

1. 領域「言葉」と保育のなかでの言葉の育ち
2. 人間にとって「言葉」とは何かー人間にとっての言葉の意義と機能
3. 子どもは言葉をどのように獲得するのか？ 言葉の獲得における生得性と環境の役割
4. 子どもは言葉をどのように獲得するのか？ 言葉の獲得の基盤となる能力と保育
5. 子どもは話し言葉をどのように獲得するのか？ 語彙、文法の発達と保育
6. 子どもは話し言葉をどのように獲得するのか？ 会話の発達と保育
7. 子どもは書き言葉をどのように習得するのか？ 書き言葉の意義、習得と保育
8. 言葉に対する感覚、感性とは何か？ どのように発達するのか？
9. 言葉に対する感覚、感性を豊かにする実践とは？ー言葉遊びと保育への取り入れ方
10. 言葉に対する感覚、感性を豊かにする実践ー子どもと楽しむ「言葉遊び」を考えよう
11. 言葉を育て、想像する楽しさを広げる「児童文化財」とは何か？ー子どもにとっての「児
12. 言葉を育て、想像する楽しさを広げる「児童文化財」の実践ー種類や歴史、保育への取り
13. 言葉を育て、想像する楽しさを広げる児童文化財を用いた実践ー絵本、物語、紙芝居
14. 現代社会とことばをめぐる問題ーメディアとことば、国際化とことばー
15. 子どもと保護者への言葉かけとかわりー保育者の資質向上

《成績評価の方法・基準》

定期試験を行う。学生に対する評価：レポート 50%、試験 50%

《授業で使用する教科書》

・「幼稚園教育要領」・「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」・「保育所保育指針」（最新版）・秋田喜代美・中坪史典・砂上史子「保育内容 領域「言葉」ー言葉の育ちと広がり求めてー」みらい

《参考書》

・松本敦・古茂田貴子・増田寿子「ことばと保育」久美出版・小椋たみ子・遠藤利彦・乙部貴幸「言葉・非認知的な心・学ぶ力」中央法規・小椋たみ子・小山正・水野久美「乳幼児期のことばの発達とその遅れー発達・保育を学ぶ人のための基礎知識」ミネルヴァ書房

《事前・事後学習》

テキスト、参考図書を事前、事後に読み、理解を深めてください。子どもと関わりをもち、講義で学んだことを実際に深めてください。

健康領域指導法Ⅰ

2 年次（半期）
1 単位（演習）

担当 高橋 篤志， 平野 俊一郎， 浅野 孝平

《授業の概要》

本演習では、健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活を作り出す力を養う領域「健康」の指導方法について、グループワークおよび模擬保育等を通じて身に付けることを目的とする。以下の2点について理解し、身に付けることを目指す：（1）幼稚園教育要領に示された幼稚園教育の基本を踏まえ、領域「健康」のねらいおよび内容を解説する、（2）幼児の発達や学びの過程を理解し、領域「健康」に関わる具体的な指導場面を想定した保育を構想する方法を模擬授業等を通じて身に付けさせる。

《学生の到達目標》

健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活を作り出す力を養う領域「健康」の指導方法について身に付ける。以下の2点について理解し、身に付けることを目標とする：（1）幼稚園教育要領に示された幼稚園教育の基本を踏まえ、領域「健康」のねらいおよび内容を理解する、（2）幼児の発達や学びの過程を理解し、領域「健康」に関わる具体的な指導場面を想定した保育を構想する方法を身に付ける。

《授業計画》

1. 健康観と保育における健康①（グループワーク）
2. 健康観と保育における健康②（発表および相互評価）
3. 乳幼児の生活習慣の問題点（食事）①（グループワーク・課題設定）
4. 乳幼児の生活習慣の問題点（食事）②（模擬保育および相互評価）
5. 乳幼児の生活習慣の問題点（睡眠）①（グループワーク・課題設定）
6. 乳幼児の生活習慣の問題点（睡眠）②（模擬保育および相互評価）
7. 乳幼児の生活習慣の問題点（運動）①（グループワーク・課題設定）
8. 乳幼児の生活習慣の問題点（運動）②（模擬保育および相互評価）
9. 乳幼児への安全指導①（グループワーク・課題設定）
10. 乳幼児への安全指導②（模擬保育および相互評価）
11. 運動遊び指導の要点
12. 運動遊びの指導（実践：個人遊び・グループワーク）
13. 運動遊びの指導（実践：集団遊び・グループワーク）
14. 運動遊びの指導（評価法・グループワーク）
15. 運動遊びの指導（模擬保育および相互評価）

《成績評価の方法・基準》

授業への取り組み状況（20%）、グループワーク、模擬保育後のレポートによる評価（40%）、最終レポート（40%）とする。

《授業で使用する教科書》

・「小学校学習指導要領（解説）」・「幼稚園教育要領（解説）」・「保育所保育指針」

《参考書》

・参考資料は適宜配布する。

《事前・事後学習》

本講義の内容を深く理解するために上記の書籍を読むことをすすめる。毎時間配布するプリントの議題について各自調べた事柄を解答する。

人間関係領域指導法Ⅰ

2 年次（半期）

1 単位（演習）

担当 末次 有加, 三輪 よし子

《授業の概要》

現代社会の様々な状況を踏まえ、領域「人間関係」において子どもたちにどのような力や視点を身に付けさせることが望ましいのかを具体的な事例の検討や映像の視聴を通して考える。そしてまた、幼児の発達にふさわしい「主体的・対話的で深い学び」を実現する保育を具体的に構想し、実践する方法を身につける。

《学生の到達目標》

①領域「人間関係」の「ねらい」及び「内容」並びに全体構造について理解する。②領域「人間関係」の「ねらい」及び「内容」を踏まえて、自立心を育て、人と関わる力を養うために必要な、幼児が経験し身に付けていくべき内容と指導上の留意点、評価の考え方を理解する。③具体的な保育を想定した指導案を作成する。④模擬保育やロールプレイとその振り返りを通して、保育を改善する視点を身につける。

《授業計画》

1. 現代社会と幼児を取り巻く人間関係
2. 領域「人間関係」の全体像の把握
3. 保育者と子どものかかわり (1) 子どもとの信頼関係を築く
4. 保育者と子どものかかわり (2) 自己主張を見守る
5. 遊びの中の人のかかわり (1) 個々の子どもへのかかわりと集団保育の展開
6. 遊びの中の人のかかわり (2) 幼児同士のいざこざへの援助
7. 遊びの中の人のかかわり (3) きまりをめぐる幼児の葛藤と援助
8. 遊びの中の人のかかわり (4) 集団で活動する楽しさを味わう：ICT を活用した実践
9. (グループワークと発表) 1歳未満児の遊びと保育者のかかわり
10. (グループワークと発表) 1歳以上～3歳未満児の遊びと保育者のかかわり
11. (グループワークと発表) 3歳以上児の遊びと人間関係
12. (グループワークと発表) 異年齢保育における遊びと人間関係
13. (グループワークと発表) 多文化保育における遊びと人間関係
14. (グループワークと発表) 特別なニーズのある子どもを中心に据えた遊びと人間関係
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

各種課題・レポート (80%) + 最終レポート (20%) = 100%

《授業で使用する教科書》

・「保育所保育指針（解説）」・「幼稚園教育要領（解説）」・「幼保連携型認定こども園教育・保育要領（解説）」

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前学習：「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」をよく読んでおくこと。事後学習：毎週のインターンシップ等において、子どもの年齢・発達段階、家庭環境、生活経験などと人のかかわり方の違いや特徴についてよく観察すること。集団保育の方法についてもよく観察し、不明点があれば、現場の保育者に質問してみる。

言葉領域指導法Ⅰ

2 年次（半期）

1 単位（演習）

担当 古茂田 貴子

《授業の概要》

ことばは最も優れたコミュニケーションの道具の一つである。この講義では、ことばの大切さやことばの発達過程を学び、子どもたちが豊かな言葉を獲得するために保育者としてどのような援助や環境構成が必要かについて考える。

《学生の到達目標》

幼稚園教育において育みたい資質・能力を理解し、幼稚園教育要領に示された「言葉」領域のねらい及び内容について背景となる専門領域と関連させて理解を深めるとともに、幼児の発達に即して、主体的・対話的で深い学びが実現する過程を踏まえて具体的な指導場面を想定して保育を構想する方法を身に付ける。子どものことばの発達過程を学び、ことばの面白さや大切さ、コミュニケーションの道具としての重要性に気づくことを通して、子どものことばの発達をうながす環境構成や保育活動について考える力を養う。

《授業計画》

1. イントロダクション
2. 幼稚園教育要領 領域言葉について
3. 幼稚園教育要領 領域言葉（目標・ねらい）
4. 幼稚園教育要領 領域言葉（内容・内容の取扱い）
5. ことばの発達（0歳）
6. ことばの発達（1～2歳）
7. ことばの発達（3～4歳）
8. ことばの発達（5～6歳）
9. 幼児語・幼児音、文化としてのことば
10. 一次的ことば・二次的ことば
11. 文字教育及びその教材について・言語相対性理論
12. 聞くということについて
13. ことばの力について
14. 児童文化財と教材としての活用について（情報機器とその活用を含む）
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

定期試験（60%）、授業の中で適宜提出する小レポート（40%）

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」「保育所保育指針」、古茂田貴子「ことばと保育」久美株式会社

《事前・事後学習》

講義の学びを通して、ことばの豊かな発達を支える保育環境作りについて様々な興味や関心を高めて頂きたいと思います。そのために、前回の復習を必ず行った上で講義に臨むようにしてください。

表現領域指導法Ⅰ

2 年次（半期）
1 単位（演習）
担当 手良村 昭子

《授業の概要》

乳幼児の発達の特徴を理解し、子どもにとって表現とは何か、保育の中でどのような意味を持つのか、表現力を育てるとはどういうことなのかを基本に置き、実際の現場で行われている活動内容を実践しながら考察していく。それぞれのテーマで実践した内容は、ドキュメンテーションの形式でレポートとしてまとめていく。また、このドキュメンテーションを振り返ることによって自己課題を見つけ実践力を身に付ける。

《学生の到達目標》

・乳幼児の表現について総合的な理解を深める。・乳幼児の発達過程を理解し指導計画を組み立てる力を身につける。・実践に必要な基礎知識と技術および指導方法を身につける。

《授業計画》

1. 領域「表現」のねらい及び内容の理解・乳幼児の生活をイメージしながら遊びを通して、
2. 幼児の表現の発達を理解・描画活動を通して幼児の発達過程を学ぶ。
3. 素材との対話1…素材の特性を生かして表現することを楽しむ。また、その指導方法につ
4. 素材との対話2…素材の特性を生かして表現することを楽しむ。また、その指導方法につ
5. 自然物との対話…自然物に対する理解を深め、その素材を通した表現遊びや表現方法も
6. 教材研究・視覚的教材の研究
7. 総合的な表現活動・指導案の作成
8. 総合的な表現活動①…音を聞いて、言葉を書いて表現する。
9. 総合的な表現活動②…言葉のイメージをもとに音を使い、造形遊びへとつなげていく。
10. 総合的な表現活動③…身近な楽器を使って総合的な表現遊びへとつなげていく。
11. 総合的な表現活動④…児童文化を題材として総合的な表現活動に取り組む。
12. 研究発表…グループワークで制作したものを発表し、お互いの表現について学びあう。
13. 活動の振り返りと指導方法の見直し
14. 現場での表現活動の事例研究（表現活動における情報機器及び活用方法についても触れる）
15. 総括・保育の場における表現活動について考える。

《成績評価の方法・基準》

全授業を通して学びの過程のドキュメンテーションを作成する。評価は全学びをまとめたドキュメンテーション（50%）、授業の最後に提出する小レポート（10%）、作品や発表内容（40%）

《授業で使用する教科書》

・『「保育と表現」 嵯峨野書院・花寛寛「新造形表現（実技編）」 三晃書房・「幼稚園教育要領解説」 フレーベル館

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前学習教科書を読んでおいてください。事後学習課題ごとにレポートをまとめておいてください。

表現領域指導法Ⅱ

2 年次（半期）
1 単位（演習）
担当 手良村 昭子、有福 淑子

《授業の概要》

幼児の表現活動について保育者としての視点を持ちながら実践に取り組んでいく。インターンシップなどの経験を活かしながら、演習課題に取り組む中で、現場での表現の指導方法についても理解を深めていく。また、遊びを通して行われていく側面を理解し、領域表現と他の領域の関わりにも気づき、学びを深めながら幼児期の表現活動を支援するための知識や技能、表現力を総合的に身に付ける。

《学生の到達目標》

・保育内容「表現」について、乳幼児の発達過程を踏まえながら活動の内容や目的を理解する。・乳幼児の表現活動について、基礎的な実技を繰り返すことで実践力を身に付ける。・保育現場で行われている実践事例に取り組み、グループワークや模擬授業などで発表する中で自己の表現力や保育技術を身に付ける。

《授業計画》

1. 幼児教育の基本及び領域「表現」について…乳幼児の遊びと関連付けながら理解していく
2. 見立て遊びと表現…見立て遊びの意味を理解しながら実際に表現遊びを体験する中で理解
3. ごっこ遊びと表現活動①…身体を使って表現する。
4. ごっこ遊びと表現活動②…身体を使つての総合的な表現活動
5. ごっこ遊びと表現活動③…身体表現と造形表現
6. 発表と振り返り
7. ごっこ遊びと造形活動①…身近な素材を使って表現する。
8. ごっこ遊びと造形活動②…様々な道具を使って表現する。
9. ごっこ遊びと造形活動③…園行事とのつながりを考える。
10. 作品の展示と鑑賞
11. 領域「環境」と表現活動①…自然環境を利用した表現活動
12. 模擬保育の計画・指導案の作成および準備
13. 模擬保育の準備・模擬保育に必要な環境の準備
14. 模擬保育の実践および振り返り
15. 全体の総括および振り返りとこれからの展望…小学校の様々な教科との学びの連続性

《成績評価の方法・基準》

全授業を通して学びの過程のドキュメンテーションを作成する。評価は全学びをまとめたドキュメンテーション（50%）、作品や発表内容（50%）

《授業で使用する教科書》

・石上浩美『「保育と表現」 嵯峨野書院・花寛寛「新造形表現（実技編）」 三晃書房・「幼稚園教育要領解説」 フレーベル館

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前学習教科書を読んでおくこと。事後学習実践内容をレポートにまとめてみる。

乳児保育Ⅰ

2 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 金重 利典

《授業の概要》

この授業において、「乳児保育」とは3歳未満児を対象とした保育を指す。平成30年より適用された保育所保育指針において、「乳児保育」と「1歳以上3歳未満児の保育」に相当する部分についてを対象とする。保育にかかわる発達研究の知見を概観し、それらの視点を織り込みながら、保育の実践をどのように進めていくかについて、理解を深め実践できる力を身に着けることを目指す。本授業は講義形式であるが、各回にグループディスカッションやロールプレイ、事例検討などのワークを行い授業を進める。

《学生の到達目標》

（1）乳児保育の意義・役割や、歴史的背景についての知識を深める。（2）3歳未満児の発達を踏まえた保育の在り方についての視点を得る。（3）子どもに対する保育や保護者支援といった、人と関わる職業に必要な基本的な考え方を理解する。

《授業計画》

1. ガイダンス
2. 乳児保育の意義・目的と歴史的変遷
3. 乳児保育のねらい：養護と教育
4. 乳児保育の役割と機能
5. 保育と子育て支援をめぐる社会的状況と課題
6. 保育所以外の保育に関わる乳児保育（乳児院・家庭的保育など）
7. 保育の計画・記録・評価
8. 発達を踏まえた保育（1）：身体発達とそれを支える環境
9. 発達を踏まえた保育（2）：認知発達とそれを支える環境
10. 発達を踏まえた保育（3）：言語発達とそれを支える環境
11. 発達を踏まえた保育（4）：社会性の発達とそれを支える環境
12. 年齢別こみる保育（1）：0～1歳までの保育実践
13. 年齢別こみる保育（2）：1～3歳までの保育実践
14. 年齢別こみる保育（3）：3歳以上に移行する際の保育実践
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

積極的な授業参加（50%）＋小テスト（50%）で評価する

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

（1）1回生時に学習した発達に関する知識を振り返り、保育とどのように結び付けられるか考える（2）授業後に学習内容を振り返り、キーワードを復習する（3）3歳未満児に触れる機会を積極的に持ち、その場で授業で得た知識を持ちながら触れ合う

乳児保育Ⅱ

2 年次（半期）
1 単位（演習）
担当 高根 栄美

《授業の概要》

「乳児保育」とは、3歳未満児を念頭においた保育を示す。3歳未満児の発育・発達のプロセスや特性を踏まえた援助や関わりの方針について理解し、養護及び教育の一体性を踏まえ、3歳未満児の子どもの生活や遊びと保育の方法及び環境、配慮の実践について具体的に学ぶ。また、乳児保育における計画の作成について理解する。乳児保育Ⅰで学んだことを、さらに具体的に実践的に学ぶために演習形式で授業を実施する。とくに、援助や配慮といった子どもへのかかわりの面、乳児期の遊びや体験を通して学ぶことの意味、発達を保障するための保育の計画などの実践をグループワークやアクティブラーニングで学ぶ。

《学生の到達目標》

1. 3歳未満児の発育・発達のプロセスや特性を踏まえた援助や関わりの方針について理解する。2. 養護及び教育の一体性を踏まえ、3歳未満児の子どもの生活や遊びと保育の方法及び環境について、具体的に理解する。3. 乳児保育における配慮の実践について、具体的に理解する。4. 上記1～3を踏まえ、乳児保育における計画の作成について、具体的に理解する。

《授業計画》

1. 乳児保育の基本（1）子どもと保育士等との関係の重要性
2. 乳児保育の基本（2）個々の子どもに応じた援助や受容的・応答的な関わり
3. 乳児保育の基本（3）子どもの主体性の尊重と自己の育ち
4. 乳児保育の基本（4）子どもの体験と学びの芽生え
5. 乳児保育における子どもの発育・発達を踏まえた生活と遊びの実践
6. 子どもの1日の生活の流れと保育の環境
7. 子どもの生活や遊びを支える環境の構成
8. 3歳未満児の発育・発達を踏まえた生活と援助の実践
9. 3歳未満児の発育・発達を踏まえた遊びと援助の実践
10. 子ども同士の間わりとその援助の実践
11. 乳児保育における配慮（1）子どもの心身の健康・安全と情緒の安定を図るための
12. 乳児保育における配慮（2）集団での生活における配慮、環境の変化や移行に対する
13. 乳児保育における計画の実践（1）長期的な指導計画と短期的な指導計画
14. 乳児保育における計画の実践（2）個別的な指導計画と集団の指導計画
15. 総括 子ども主体である融合の保育

《成績評価の方法・基準》

指定の課題やグループワークによる評価（50%）、最終レポート（50%）とする。

《授業で使用する教科書》

・厚生労働省「保育所保育指針解説 平成30年3月」フレーベル館・内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説 平成30年3月」フレーベル館・茶々保育園グループあすみ福祉会 編「見る・考える・創り出す乳児保育1・2―養成校と保育室をつなぐ理論と実践」萌文書林

《参考書》

・汐見稔幸/著、編著 井桁容子/著「0・1・2歳児からのていねいな保育（第3巻）ていねいな保育実践のために―保育の実践」フレーベル館・玉置 哲淳/野本 春美/人権と仲間関係研究会 監修「乳幼児からの人権保育入門―ヒトを育てる保育実践を求めて」人権と仲間関係研究会

《事前・事後学習》

乳児保育に必要な知識や技術として、教材研究・作成、保育の計画・評価という流れを経験することで、実践的に理解する内容の科目である。よって、授業時間以外の学習（事前・事後学習）は、教材選定や実際の製作、練習、発表の準備などに時間を要する。個別の課題の詳細は授業内で示す。

社会的養護Ⅱ

2 年次（半期）
1 単位（演習）
担当 中條 薫

《授業の概要》

現代社会においては家族・親族関係の変化、都市化や核家族化、少子化が定着する中で、家族の養育力が低下している。その結果、子どもをとりまく環境が著しく悪化し、虐待等のさまざまな問題が起これば社会的養護を必要とする児童が増加している。本講義では児童福祉施設で生活している要保護児童の現状からその背景を理解するとともに、保育士の役割と使命、養育の内容について具体的な事例を通して考察し、児童の権利擁護・専門的支援に必要な知識や技術の習得につなげる。

《学生の到達目標》

社会的養護を必要とする子どもの理解。社会的養護施設の理解。事例を通して子どものさまざまな表出を理解する。家庭や保護者に代わって子どもの養育を実践する保育士に必要な知識や技術を習得する。

《授業計画》

1. 現代社会における子どもの状況
2. 社会的養護の必要性
3. 児童福祉施設の業務内容
4. 施設を利用する（措置される）にあたっての手続き
5. 施設で出会う子どもの心の傷
6. 社会的養護における施設養育の理念と役割
7. 施設生活の実例
8. 生活における支援Ⅰ（アドミッションケア）
9. 生活における支援Ⅱ（子どもの成育歴と支援）
10. 生活における支援Ⅲ（ケースの理解とアセスメント）
11. 生活における支援Ⅳ（基本的生活習慣）
12. 生活における支援Ⅴ（施設における人格形成）
13. 生活における支援Ⅵ（家族支援）
14. 生活における支援Ⅶ（ケアを支える取り組み）
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

授業への積極的な取り組み（出席状況、発言・発表、授業態度）等総合的に評価して行う。授業態度（20%）、演習課題への取り組み（20%）、授業総括（60%）

《授業で使用する教科書》

指定なし・適宜資料を配布する。

《参考書》

・「児童福祉施設援助指針」大阪府社会福祉協議会児童施設部会

《事前・事後学習》

子どもの養育・教育に携わるためには、まず自分自身の生活の質を高めていかねばなりません。子ども達が憧れる保育士・教師になれるよう、今から日々の生活を見つめ直していきましょう。地域でどのような子育てが行われているか、子どもに関するさまざまなニュース等に関心を持ちましょう。

子ども家庭支援の心理学

2 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 要 正子

《授業の概要》

この授業は、発達心理学や臨床心理学の基礎的な知見を踏まえて家族・家庭についての学びを深めるものである。また、親子関係や家族関係等について発達の視点から理解し、子どもとその家族を包括的に捉える視点を習得する。現代社会における保育者の役割は多様化し、家庭支援をめぐっても高度な専門性が求められている。そのため、この授業ではグループワークを通して人の生涯発達、家族・家庭の理解、子育て家庭の理解などを深める。

《学生の到達目標》

1. 生涯発達に関する心理学の基礎的な知識を習得し、初期経験の重要性、発達課題等について理解する。2. 家族・家庭の意義や機能を理解するとともに、親子関係や家族関係等について発達の視点から理解し、子どもとその家族を包括的に捉える視点を習得する。3. 子育て家庭をめぐって現代の社会的状況と課題について理解する。4. 子どもの精神保健とその課題について理解する。5. 乳幼児期から青年期に至るまでの各時期における運動・言語・認知・社会性の発達について、その特徴を理解し、説明することができる。

《授業計画》

1. オリエンテーション
2. 生涯発達（1）乳幼児期から学童期前期にかけての発達
3. 生涯発達（2）学童期後期から青年期にかけての発達
4. 生涯発達（3）成人期・老年期における発達
5. 家族・家庭の理解（1）家族・家庭の意義と機能
6. 家族・家庭の理解（2）親子関係・家族関係の理解
7. 家族・家庭の理解（3）子育ての経験と親としての育ち
8. 子育て家庭に関する現状と課題（1）子育てを取り巻く社会的状況
9. 子育て家庭に関する現状と課題（2）ライフコースと仕事・子育て
10. 子育て家庭に関する現状と課題（3）多様な家庭とその理解
11. 子育て家庭に関する現状と課題（4）特別な配慮を要する家庭
12. 子どもの精神保健とその課題（1）子どもの生活・生育環境とその影響
13. 子どもの精神保健とその課題（2）子どもの心の健康に関わる問題
14. 保育者として子どもと家庭を支援することの意義
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

授業への取り組み（50%）、グループワークの成果、レポート等提出物（50%）によって評価する。

《授業で使用する教科書》

・適宜資料を配布する。

《参考書》

・「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」「保育所保育指針」

《事前・事後学習》

事前学習：保育や教育を中心とした社会の動きなど時事問題に関心をもつこと。事後学習：授業での学びと実践との繋がりを意識し、自らが果たす役割について考えること。

保育実習Ⅰ

2 年次（通年）

4 単位（実習）

担当 末次 有加, 井岡 瑞日, 大嶋 健吾,
★藪 一裕, ★大方 美香, 春高 裕美

《授業の概要》

保育士資格必修科目。2 か所での学外実習を行う。前期に児童福祉施設等（保育所以外）における実習を 10 日から 12 日間実施する。後期に保育所実習を 10 日から 12 日間実施する。実習施設は原則として大学が各施設と調整のうえ配当する。

《学生の到達目標》

1. 保育所、児童福祉施設等の役割と機能を具体的に理解する。2. 観察や子どもとの関わりを通して子どもへの理解を深める。3. 既習の教科目の内容を踏まえ、子どもの保育及び保護者への支援について総合的に理解する。4. 保育の計画・観察・記録及び自己評価等について具体的に理解する。5. 保育士の業務内容や職業倫理について具体的に理解する。

《授業計画》

1. 児童福祉施設等（保育所以外）における実習の内容
2. 施設の役割と機能（1）施設における子どもの生活と一日の流れ
3. 施設の役割と機能（2）施設の役割と機能
4. 子どもの理解（1）子どもの観察とその記録
5. 子どもの理解（2）個々の状態に応じた援助や関わり
6. 施設における子どもの生活と環境（1）計画に基づく活動や援助
7. 施設における子どもの生活と環境（2）子どもの心身の状態に応じた生活と対応
8. 施設における子どもの生活と環境（3）子どもの活動と環境
9. 施設における子どもの生活と環境（4）健康管理、安全対策の理解
10. 計画と記録（1）支援計画の理解と活用
11. 計画と記録（2）記録に基づく省察・自己評価
12. 専門職としての保育士の役割と倫理（1）保育士の業務内容
13. 専門職としての保育士の役割と倫理（2）職員間の役割分担や連携
14. 専門職としての保育士の役割と倫理（3）保育士の役割と職業倫理
15. 専門職としての保育士の役割と倫理（4）保育士のキャリアアップ
16. 保育所実習の内容
17. 保育所の役割と機能（1）保育所における子どもの生活と保育士の援助や関わり
18. 保育所の役割と機能（2）保育所保育指針に基づく保育の展開
19. 子どもの理解（1）子どもの観察とその記録による理解
20. 子どもの理解（2）子どもの発達過程の理解
21. 子どもの理解（3）子どもへの援助や関わり
22. 保育内容・保育環境（1）保育の計画に基づく保育内容
23. 保育内容・保育環境（2）子どもの発達過程に応じた保育内容
24. 保育内容・保育環境（3）子どもの生活や遊びと保育環境
25. 保育内容・保育環境（4）子どもの健康と安全
26. 保育の計画・観察・記録（1）全体的な計画と指導計画及び評価の理解
27. 保育の計画・観察・記録（2）記録に基づく省察・自己評価
28. 専門職としての保育士の役割と職業倫理（1）保育士の業務内容
29. 専門職としての保育士の役割と職業倫理（2）職員間の役割分担や連携・協働
30. 専門職としての保育士の役割と職業倫理（3）保育士の役割と職業倫理

《成績評価の方法・基準》

児童福祉施設等（保育所以外）における実習の評価 50%、および保育所実習の評価 50%による総合評価。各実習の評価は、実習施設による実習評価 60%、諸提出物（日誌等）20%、実習評価面談 20%とする。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前学習：インターンシップ実習の経験からの自己課題を明確にする。事後学習：実習自己評価を行い、保育実習Ⅱにつなげる自己課題を明確にする。実習中では、学科専任教員による訪問指導を受け、実習内容や実習課題の達成状況を報告する。

保育実習指導Ⅰ

2 年次（通年）

2 単位（演習）

担当 末次 有加, 樋口 幸, 井岡 瑞日,
小西 由紀子, 今津 香, ★藪 一裕, 春高 裕美

《授業の概要》

保育実習Ⅰの事前事後指導である。前期は、施設実習＜児童福祉施設等（保育所以外）における実習＞について、後期は主に、保育所実習（または幼保連携型認定こども園での実習）についての指導を行う。保育実習Ⅰと強く連動しており、事前準備は実習の成果、あるいは事前指導の到達状況に影響することを自覚して履修することが望ましい。

《学生の到達目標》

1. 保育実習の意義・目的を理解する。2. 実習の内容を理解し、自らの実習の課題を明確にする。3. 実習施設における子どもの人権と最善の利益の考慮、プライバシーの保護と守秘義務等について理解する。4. 実習の計画・実践・観察・記録・評価の方法や内容について具体的に理解する。5. 実習の事後指導を通して、実習の総括と自己評価を行い、今後の学習に向けた課題や目標を明確にする。

《授業計画》

1. 前期授業ガイダンスー児童福祉施設等（保育所以外）における実習の事前・事後指導
2. 施設実習における提出資料の作成
3. 施設実習の目的と概要
4. 実習の内容と課題の明確化（1）ゲスト講師による講話 児童養護施設
5. 実習の内容と課題の明確化（2）ゲスト講師による講話 乳児院等
6. 実習の内容と課題の明確化（3）実習先について調べよう
7. 実習の内容と課題の明確化（4）実習課題を立てよう
8. 実習に際しての留意事項（1）子どもの人権と最善の利益の考慮
9. 実習に際しての留意事項（2）プライバシーの保護と守秘義務（倫理綱領）
10. 実習に際しての留意事項（3）実習生としての心構え、事前オリエンテーション
11. 実習の計画と記録（1）実習における計画と実践
12. 実習の計画と記録（2）実習における観察、記録及び評価
13. 事後指導における実習の総括と課題の明確化（1）実習の総括と自己評価（評価面談）
14. 事後指導における実習の総括と課題の明確化（2）実習の総括と実習報告（報告会）
15. 事後指導における実習の総括と課題の明確化（3）課題の明確化（レポート作成）
16. 後期授業ガイダンスー保育所実習の事前・事後指導
17. 保育所実習における提出資料の作成
18. 保育所実習の目的と概要
19. 実習の内容と課題の明確化（1）ゲスト講師による講話 保育園
20. 実習の内容と課題の明確化（2）ゲスト講師による講話 幼保連携型認定こども園
21. 実習の内容と課題の明確化（3）実習先について調べよう
22. 実習の内容と課題の明確化（4）実習課題を立てよう
23. 実習に際しての留意事項（1）子どもの人権と最善の利益の考慮
24. 実習に際しての留意事項（2）プライバシーの保護と守秘義務（倫理綱領）
25. 実習に際しての留意事項（3）実習生としての心構え、事前オリエンテーション
26. 実習の計画と記録（1）実習における観察、記録及び評価
27. 実習の計画と記録（2）実習における計画と実践（教材研究と模擬保育）
28. 実習の計画と記録（3）実習指導案の作成（展開と評価のポイント）
29. 事後指導における実習の総括と課題の明確化（1）実習の総括と自己評価（評価面談）
30. 事後指導における実習の総括と課題の明確化（2）課題の明確化（レポート作成）

《成績評価の方法・基準》

前期評価 50%、および後期評価 50%の総合評価とする。原則として全ての回の出席を求める。学期毎の評価は、授業課題（60%）、および指定課題等の提出・達成状況（40%）により評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・大阪府社会福祉協議会児童施設部会「新版・児童福祉施設援助指針」・社会福祉法人全国社会福祉協議会 全国乳児福祉協議会「改訂新版 乳児院養育指針」・厚生労働省「保育所保育指針保育所保育指針情報 平成 30 年 3 月」フレーベル館・内閣府/文部科学省/厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領情報 平成 30 年 3 月」フレーベル館

《事前・事後学習》

[学生の到達目標]を参照。各実習ごとに実習施設での事前オリエンテーションを受ける（本授業時間外、日程等は別途指定）。

保育実践学習Ⅲ

2 年次（半期）

1 単位（演習）

担当 ★俵谷 好一， 要 正子， 井岡 瑞日，
小西 由紀子， 今津 香， ★藪 一裕，
中根 佳江， 福井 歩， 樋谷 眞，
杉本 孝美， 有福 淑子， 樋口 幸， 宮前 佳子

《授業の概要》

保育実践学習Ⅲは、保育所や幼稚園、こども園、小学校等でのインターンシップ現場における実習体験を基盤とする。実習を通して、現場における様々な課題を理解し、保育・教育の職務についての基礎的な理解を深めることを目指す。また昨年度の保育実践学習Ⅰ・Ⅱをふまえ、実習日誌等の記録や自ら問題意識をもつことの重要性を認識し、実践を通して学ぶ力を養う。なお、この授業はアクティブラーニング（実習、フィールドワーク）を含めて実施する。

《学生の到達目標》

インターンシップ実習における体験を通して、保育士やこども園、幼稚園、小学校教諭の職務への理解を深める。また保育・教育現場の諸課題について体感し考えることにより、こどもと関わる職の重要性や必要性を認識するとともに、保育・教育者としての基盤を構築する。

《授業計画》

1. 2年次におけるインターンシップ実習に関する心得について
2. インターンシップ実習に関する諸手続き
3. 保育所・幼稚園・こども園についての基礎知識
4. 小学校についての基礎知識
5. こども理解
6. 現場における対応事例①
7. 現場における対応事例②
8. インターンシップ現場におけるの実践、観察、記録（1）
9. インターンシップ現場におけるの実践、観察、記録（2）
10. アクティブラーニング（フィールドワーク）にて視察・調査し、成果報告書を作成する
11. アクティブラーニング（フィールドワーク）にて視察・調査し、成果報告書を作成する
12. アクティブラーニング（フィールドワーク）にて視察・調査し、成果報告書を作成する
13. アクティブラーニング（フィールドワーク）にて視察・調査し、成果報告書を作成する
14. 自己の課題の明確化および目標設定
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

「インターンシップ実習」参加および事前・事後授業への参加（60%）「インターンシップ実習」日誌の提出および内容（40%）

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

「インターンシップ実習」参加および事前・事後授業への参加（60%）「インターンシップ実習」日誌の提出および内容（40%）

保育実践学習Ⅳ

2 年次（半期）

1 単位（演習）

担当 ★俵谷 好一， 要 正子， 井岡 瑞日，
小西 由紀子， 今津 香， ★藪 一裕，
中根 佳江， 福井 歩， 樋谷 眞，
杉本 孝美， 有福 淑子， 樋口 幸， 宮前 佳子

《授業の概要》

保育実践学習Ⅳは、保育所や幼稚園、こども園、小学校等でのインターンシップ現場における実習体験を基盤とする。実習を通して、現場における様々な課題を理解し、保育・教育の職務についての基礎的な理解を深めることを目指す。また保育実践学習Ⅲでの学びの経験を活かし、引き続き実践を通して学ぶということを常に意識しながら、実習日誌の記録等を通じてその体験をより確かなものにする力を養う。なお、この授業はアクティブラーニング（実習、フィールドワーク）を含めて実施する。

《学生の到達目標》

インターンシップ実習における体験を通して、保育士やこども園、幼稚園、小学校教諭の職務への理解を深める。また保育・教育現場の諸課題について体感し考えることにより、こどもと関わる職の重要性や必要性を認識するとともに、保育・教育者としての基盤を構築する。

《授業計画》

1. 前期の振り返りと自己分析
2. インターンシップ実習に向けての目標設定
3. インターンシップ実習におけるの実践、観察、記録（1）
4. インターンシップ実習におけるの実践、観察、記録（2）
5. インターンシップ実習におけるの実践、観察、記録（3）
6. インターンシップ実習におけるの実践、観察、記録（4）
7. インターンシップ実習におけるの実践、観察、記録（5）
8. インターンシップ実習におけるの実践、観察、記録（6）
9. インターンシップ実習におけるの実践、観察、記録（7）
10. インターンシップ実習におけるの実践、観察、記録（8）
11. アクティブラーニング（フィールドワーク）にて視察・調査し、成果報告書を作成する
12. アクティブラーニング（フィールドワーク）にて視察・調査し、成果報告書を作成する
13. アクティブラーニング（フィールドワーク）にて視察・調査し、成果報告書を作成する
14. アクティブラーニング（フィールドワーク）にて視察・調査し、成果報告書を作成する
15. 実習の振り返りと自己の課題の明確化

《成績評価の方法・基準》

「インターンシップ実習」参加および事前・事後授業への参加（60%）「インターンシップ実習」日誌の提出および内容（40%）

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前学習：インターンシップ実習先での当日の課題や実践への心構えを形成していくこと。事後学習：当日のインターンシップ実習における自己の反省点などを実習日誌に書き記し、次回のインターンシップへの目標を設定すること。

音楽演習 I

2 年次（半期）
1 単位（演習）

担当 炭谷 恭子, 川村 尚子, 鈴木 和代,
竹田 景子, 早川 藍香, 本村 陽子,
山本 恭仁子

《授業の概要》

各自の能力に応じて、個人指導で行う。演奏技術の向上に加えて、子どもを自然な音楽活動に導くための簡単な即興や、必要に応じた移調や編曲についても学習する。

《学生の到達目標》

ピアノ演奏の技術を習得し、保育・教育者としての表現力・音楽性を養うことを目的とする。コードによる弾き歌いや簡易伴奏で演奏するなど、自ら応用できる能力を養うことを目指す。

《授業計画》

1. 全体及び個人別オリエンテーション
2. 練習曲・リズム曲の個人レッスン（楽譜の読み方復習）
3. 練習曲・リズム曲の個人レッスン（読譜）
4. 練習曲・リズム曲の個人レッスン（基礎）
5. 練習曲・リズム曲の個人レッスン（応用）
6. 練習曲・リズム曲の個人レッスン（仕上げ・完成）
7. 練習曲・リズム曲・弾き歌い曲の個人レッスン（読譜）
8. 練習曲・リズム曲・弾き歌い曲の個人レッスン（基礎課題）
9. 練習曲・リズム曲・弾き歌い曲の個人レッスン（応用課題）
10. 練習曲・リズム曲・弾き歌い曲の個人レッスン（仕上げ・完成）
11. 読奏曲の指導（読譜）
12. 読奏曲の指導（基礎）
13. 読奏曲の指導（応用）
14. 読奏曲の指導（仕上げ・完成）
15. 総括（発表）

《成績評価の方法・基準》

定期試験（80%）授業への取り組み（20%）

《授業で使用する教科書》

・小林 美実「幼児教育法シリーズ 音楽リズム/幼児のうた楽譜集」東京書籍・茂田すすむ「保育のためのマーチ・スキップ・ギャロップ・ワルツ・リズム曲集」全音楽譜出版社・教則本（ブルグミュラー・ソナチネ他）能力に応じて選択

《参考書》

・授業中に適宜資料を配布する

《事前・事後学習》

毎週、授業までの十分な練習が必要である。

国語科指導法

2 年次（半期）
2 単位（講義）

担当 ★田窪 豊

《授業の概要》

小学校学習指導要領に示された小学校国語科の教育目標や指導内容を理解し、また、小学校国語科における児童の学習の実態や特徴について理解するとともに学習評価の在り方について理解する。さらに、授業実践に必要な基本的な指導技術を身に付けたり、基本的な指導方法を理解しながら授業づくりの方法を身に付けたりすることが重要である。

《学生の到達目標》

・小学校国語科の意義、学習指導要領の目標・内容・全体構造・育もうとする資質・能力・指導内容等を理解している。・児童の学習の実態や特徴、評価の在り方、児童理解に基づく適切な対応の仕方等について理解している。・授業実践において、ICTを適切に活用しながら、言語活用や手立ての運用、学習集団の組織化、学習活動の構成ができる。・各分野・領域（知識・技能、理解力・判断力・表現力等）の教材研究ができ、学習指導案を作成し模擬授業の実施を通して授業改善の視点を身に付けている。

《授業計画》

1. 小学校国語科教育についての基本的な知識・理解1「学習指導要領」
2. 小学校国語科教育についての基本的な知識・理解2「国語科教材・教科書」
3. 「知識及び技能」に関する基本的な知識・理解1「言葉の特徴や使い方」
4. 「知識及び技能」に関する基本的な知識・理解2「情報の扱い方」
5. 「知識及び技能」に関する基本的な知識・理解3「我が国の言語文化」（書写を含む）
6. 「思考力・判断力・表現力等」に関する基本的な知識・理解1「話すこと・聞くこと」
7. 「思考力・判断力・表現力等」に関する基本的な知識・理解2「書くこと」
8. 「思考力・判断力・表現力等」に関する基本的な知識・理解3「読むこと」説明的文章
9. 「思考力・判断力・表現力等」に関する基本的な知識・理解4「読むこと」文学的文章
10. 授業実践1 国語科授業づくりのための指導技術（ICTの活用）に関する知識・理解
11. 授業実践2 授業づくり 単元構想
12. 授業実践3 授業づくり 一時間の授業
13. 模擬授業1 「話すこと・聞くこと」の授業
14. 模擬授業2 「書くこと」の授業
15. 模擬授業3 「読むこと」の授業

《成績評価の方法・基準》

筆記試験（50%）、授業への取り組み、学習指導案及び模擬授業、小レポート等（50%）

《授業で使用する教科書》

・文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説」東洋館出版社

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

「話すこと」「聞くこと」「書くこと」「読むこと」など学んだことを日常生活に活かすようにする。指導案づくりや模擬授業をとおして、「教育実習」へつなげるようにする。

算数科指導法

2 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 赤井 利行

《授業の概要》

学習指導要領に示された小学校算数科の教育目標や指導内容を理解する。また、小学校算数科における児童の学習の実態や特徴について理解するとともに、学習評価のあり方について理解する。そして、小学校算数科の実践に必要な基本的な指導技術を身に付ける。さらに、小学校算数科における基本的な指導方法を理解し、授業づくりの方法を身に付ける。

《学生の到達目標》

小学校算数科の意義と教材観の変遷を理解している。また、小学校算数科における児童の学習の実態や特徴について理解している。そして、小学校算数科の学習の特徴に応じた適切な学習活動を構成することができる。そして、小学校算数科の目的に応じた教材研究ができる。

《授業計画》

1. オリエンテーション、小学校算数科の意義、小学校算数科観の変遷
2. 学習指導要領における小学校算数科の目標、内容、全体構造
3. 小学校算数科と中学校数学科との連携
4. 授業ビデオを基に小学校算数科における数学的活動
5. 授業ビデオを基に児童の実態への対応
6. 小学校算数科における学習評価と個への対応
7. 小学校算数科における ICT の活用
8. 小学校算数科における数学的表現
9. 学習活動の構成と学習集団の組織化
10. 教材研究
11. 学習指導案の作成
12. 数と計算の模擬授業
13. 図形の模擬授業
14. 算数科経営案の作成
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

作成した学習指導案 (50%) 毎回のコメント (40%) 授業への取り組み (10%)

《授業で使用する教科書》

・文科省「小学校学習指導要領解説算数編」、赤井利行編「表現力を育成する新算数教科教材開発第2学年」明治図書

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前学習は模擬授業を観察する単元の学習指導要領の解説編を読み、児童用教科書ではどのように展開されているか調べておく。事後学習では、模擬授業によって児童にどのような反応がありどのように理解したかを見直してみる。

理科

2 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 浅野 孝平， 藤本 勇二， 瀧川 光治

《授業の概要》

小学校・理科は、「自然に親しみ、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなどを通して、自然の事物・現象についての問題を科学的に解決するために必要な資質・能力を育成する」ことを目標に、学習内容として「物質とエネルギー」と「生命と地球」の2つの分野で成り立っている。その分野についての基礎・基本となる知識・概念・法則性を、中学・高校での学習内容と関連付けて、グループワーク等を通してアクティブラーニング形式で学ぶ。さらに、科学的思考、環境教育・ESDについても視野を広げて学ぶ。

《学生の到達目標》

1. 小学校「理科」の授業展開を行うための教師として必要となる基礎・基本的な科学概念・知識・法則性について学ぶ。2. 「科学的な思考法」「科学的に考えるとはどういうことか」について自分なりの考えを持てるようにする。3. 「持続可能な社会」を構築することが求められている現在、実践的な環境教育について学ぶ。

《授業計画》

1. 科学的な考えと方法 (1) 一仮説・検証、実証等の科学の方法
2. 科学的な考えと方法 (2) 一小学生の科学的な見方・考え方や理科教育
3. 物質とエネルギー① 化学分野—小学校の理科における学習範囲
4. 物質とエネルギー② 化学分野—中高の理科における学習範囲
5. 物質とエネルギー③ 化学分野—社会とのつながり
6. 物質とエネルギー④ 物理分野—小学校の理科における学習範囲
7. 物質とエネルギー⑤ 物理分野—中高の理科における学習範囲
8. 物質とエネルギー⑥ 物理分野—社会とのつながり
9. 生命と地球① 生物分野—小学校の理科における学習範囲
10. 生命と地球② 生物分野—中高の理科における学習範囲
11. 生命と地球③ 生物分野—社会とのつながり
12. 生命と地球④ 地学分野—小学校の理科における学習範囲
13. 生命と地球⑤ 地学分野—中高の理科における学習範囲
14. 環境教育・ESDの視点と理科教育
15. 授業内容を振り返り、小学校・理科の学習内容の全体の構造化を考える

《成績評価の方法・基準》

①毎回の授業の最後に提出する小レポート (20%) ②15回目の振り返りレポート (30%) ③定期試験 (50%)

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前学習としては、毎回、授業前に配布資料を読み、学習内容を把握する。事後学習としては、学んだことから視野を広げたり、深めたりするために振り返り内容について指示をする。

理科指導法

2 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 栗根 美津子

《授業の概要》

小学校理科は「自然に親しみ、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなどを通して、自然の事物・現象についての問題を科学的に解決するために必要な資質・能力」の育成を目標としている。学習内容は「物質・エネルギー」と「生命・地球」の2つの分野で成り立っている。これを踏まえ理科指導法では、理科の見方・考え方を学ぶとともに、小学校理科の教育内容や方法、さらに「持続可能な社会」を構築するための実践的な環境教育について学ぶ。

《学生の到達目標》

1) 学習指導要領に示された小学校理科の目標や内容等の全体構造を理解する。2) 小学校理科の授業において、基礎的な学習指導の理論を踏まえて子どもの知的好奇心や探究心を引き出せる教材や指導方法について説明できる。3) 小学校理科の学習指導案立案とその実践を通して、改善点を見出すことができる。4) 理科教材研究を通して、自分の自然観や教材観を豊かにする。

《授業計画》

1. 「理科」とはどういう教科か？
2. 理科の見方・考え方と方法（1）一理科教育の「目標」
3. 理科の見方・考え方と方法（2）一学年ごとの「目標」との関連
4. 物質・エネルギー分野の授業作りと教科書研究（1）一学年ごとの内容の理解
5. 物質・エネルギー分野の授業作りと教科書研究（2）一指導方法・実験方法の理解
6. 物質・エネルギー分野の学習指導案作り一指導方法の構想と教材の工夫
7. 物質・エネルギー分野の学習指導案作りと模擬授業のリハーサル
8. 「物質とエネルギー分野」の模擬授業の実施と振り返り
9. 「持続可能な社会」を構築するための環境教育
10. 生命・地球分野の授業作りと教科書研究（1）一学年ごとの内容の理解
11. 生命・地球分野の授業作りと教科書研究（2）一指導方法・実験方法の理解
12. 生命・地球分野の教材研究（1）一視覚教材の活用
13. 生命・地球分野の教材研究（2）一手作り教材の作成
14. 「生命・地球分野」の教材の発表と振り返り
15. 授業内容を振り返り、理科の科目特性に応じた授業の構想を考える

《成績評価の方法・基準》

① 授業内ワークシートおよび最終振り返りワークシート 30% ② 指導案作成と模擬授業 30% ③ フォトブックおよび自作教材等の提出物 30% ④ テスト 10% 以上を総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

・文部科学省「[小学校学習指導要領解説 理科編]（最新版）」

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

プリント等を配付しての授業となる。ワークシート等を記入するとともに、事前事後に「小学校学習指導要領解説 理科編」を読む習慣をつけること。また、高等学校までの理科の知識が基礎となるので、適宜、教科書等を復習しておくことが望ましい。

社会

2 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 樋谷 眞

《授業の概要》

日本の歴史・地理・文化に関して授業を行う。子どもたちの社会認識を育てるために社会科・生活科・地域体験学習などにおいては様々な活動が行われているが、他の地域との比較は少なく、画一的な学習に終わっている。地域の独自性（特色）は他地域との歴史・伝統文化を比較することで、より鮮明になり、子どもの興味関心を高めることができる。本講座においては、西日本を中心とした地域の歴史・政治・経済・地理・民俗・地域伝統行事を活用した保育所幼稚園小学校行事の実践を学び、子どもに楽しく学ばせる工夫を考える。郷土学習として受講学生の出身地である都道府県・全国市町村レポートを作成する。授業で使用する資料はすべて配布する。

《学生の到達目標》

学習指導要領に謳われた「伝統や文化に関する教育の充実」に必要な、郷土と歴史に対する理解と愛情を育てるための実践例を知る。各地の歴史・地理・公民を知ることで自分（学生）が子どもたちに伝えたいものを考える。郷土に残る歴史遺産（遺跡・神社仏閣など）や偉人について説明できる程度の知識を持つ。教育活動に役立てるために郷土の特色を知り、地域の歴史・伝統行事を活用した学校行事を知る。教育者に必要な一般教養としての歴史・地理・公民を学ぶ。教員採用試験や公務員試験の過去問を解く。

《授業計画》

1. 大阪と他府県の民間習俗（伝統文化）・方言を比較し、違いを楽しむ。
2. 我が国の年中行事と学校・園行事の関わりを知り、我が国の伝統や文化について知る。
3. 「社会」に対する共通認識と小学校学習指導要領社会科の目標と指導内容を知る。
4. (歴史) 旧石器時代・縄文時代・弥生時代の生活様式を比較する。
5. (歴史) 邪馬台国やヤマト王権から、国の成立を考える。畿内の古墳を知る。
6. (歴史) 飛鳥時代から平安時代へ続く律令国家の成立を知る。各地の重要文化財を知る。
7. (歴史) 平安時代の死生観を知り、自分の意識と比較し、今に続いていることを知る。
8. (地理) 市町村教育委員会作成の『社会科指導本』から地域社会の特色を読み取る。
9. (地理) 地域レポートの作成についての説明、地域の特色として大切にしているものを知る。
10. (地理) 卒業後、自分が住むであろう居住地を考え、その都道府県レポート作成①する。
11. (地理) 卒業後、自分が住むであろう居住地を考え、その市町村レポート作成②する。
12. (地理) 作成したレポートの発表
13. (地理) 作成したレポートの発表、または「大阪府検定ゲーム」
14. (公民) 我が国の領土と国際社会における日本の活動を知る。
15. (指導例) 興味関心を高めるための実践例を知る。

《成績評価の方法・基準》

授業への取り組み（30%）提出物（30%）期末試験（40%）授業への取り組みでは、授業内において実施する全8回のミニテスト（日本の都道府県名と位置、山地山脈・平野・河川など小学校5年生の学習内容）の結果と郷土学習についての質疑に関する発表回数などを考慮する。提出物では、都道府県レポート提出15%・市町村レポート提出15%。期末テストは授業内で配布された資料、授業メモなどの持ち込み可で実施。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

新聞・テレビのニュース等からの情報を大切に、社会の様々な生活に関心を持つように心がける。ネット情報やテレビの情報番組においては真偽が定かでないものあり、情報感覚を高めるようにしておくこと。

社会科指導法

2 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 今西 幸蔵、大畑 健実

《授業の概要》

社会科指導法の側面から、社会科授業づくりについて、学生の一人ひとりが描く学習活動の展開・実現に迫る授業とする。学習指導要領の社会科では、「学習や生活の基盤となる知識の学習」「我が国の伝統や文化についての学習」「よりよい社会形成への参画にかかわる学習」等の充実が求められている。こうした学習の充実を実現できる授業づくりの基礎的知識・技能を身につける。学習指導要領及び解説編、学習指導案づくりや模擬授業を行うこと等を通して、教材開発や指導技術の定着を図ることを目的とする。

《学生の到達目標》

社会科授業の課題は、何よりも子どもが社会科を好きになり、社会科の学習が楽しい、授業が待ち遠しいと感じる授業を創りだし、公民的資質の育成を図ることにある。このような授業づくりの力量を少しでも身につけるために、学習指導要領及び解説編、教科書等の読み込みを手がかりにし、子どもの思考の流れに沿った教材開発、指導方法、指導技術等を追求させ、実際に学習指導案を作成し、模擬授業等を相互に展開することによって、社会科指導力の向上を目標とする。

《授業計画》

1. オリエンテーション 学習指導要領における社会科の目標と学習内容
2. 社会科の指導法と授業づくりの基本的事項の理解
3. 第3学年の学習内容と展開① 地域の生活及び自治体の概要
4. 第3学年の学習内容と展開② 物品の流通と商店の工夫（A.L）
5. 第4学年の学習内容と展開① 安全なくらしを守る 水と生活
6. 第4学年の学習内容と展開② 特色ある地域と伝統文化 食のまち大阪（A.L）
7. 第5学年の学習内容と展開① 産業学習 天然ブリと養殖ブリ
8. 第5学年の学習内容と展開② 環境学習 環境の変化と自然災害（A.L）
9. 第6学年の学習内容と展開① 歴史学習 聖徳太子と国づくり
10. 第6学年の学習内容と展開② 国際理解学習 ESD やSDGs の意味（A.L）
11. 学習指導案作成と模擬授業① 板書技術とノート指導
12. 学習指導案作成と模擬授業② 質問の構成と ICT の活用（情報処理）
13. 学習指導案作成と模擬授業③ 学習者への対応と話し合いの方法
14. 学習指導案作成と模擬授業④ 表現方法と評価（情報リテラシー）
15. 模擬授業の総括と社会科の授業づくり

《成績評価の方法・基準》

以下の各項目を評価し、最終的には全体を総合的に判断して評価する。（1）授業中に課題として示す学習指導案の作成に関する評価（30%）、（2）授業中の発表及び課題として作成するレポートに関する評価（50%）、（3）最後の授業時に提出する課題レポート（20%）

《授業で使用する教科書》

・文部科学省『「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編」』井田仁康・唐木清志『「初等社会科教育」』ミネルヴァ書房

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

シラバスで示した内容に沿って授業を進行する。学習指導要領・解説編をよく読んでくこと。授業毎に次時の学習の予告をするので、キーワードについては必ず予習して欲しい。学習指導案の作成や模擬授業の実施等の演習的な内容については、授業内で完結しないので、授業外での事前準備と事後まとめが不可欠である。振り返りシートを作成するので、各自で学習成果を確認して欲しい。

生活

2 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 香田 健治

《授業の概要》

生活科は、具体的な体験や活動を通して「自立への基礎」を養う教科として、平成元年に新設された。その誕生の背景、経緯などから、生活科の趣旨について、これまでの学習指導要領解説等により概説する。平成29年改訂学習指導要領での生活科における改善の基本方針や教科目標、学年目標、内容および教材について、小学校学習指導要領解説 生活編やテキストによる講義、フィールドワーク、グループワークなどを通して理解する。生活科におけるカリキュラム・マネジメントについて、事例をもとに理解する。

《学生の到達目標》

生活科の意義と特質、教科目標、学年目標、内容等を理解する。生活科の内容の指導上の留意点を理解し、教材研究の方法を身に付ける。生活科の核としたカリキュラム・マネジメントに関する認識を深める。

《授業計画》

1. オリエンテーション、授業と生活科教育の概説
2. 生活科の教科目標、学年目標、内容
3. 内容(1)「学校と生活」について考える①
4. 内容(1)「学校と生活」について考える②
5. 内容(3)「地域と生活」について考える①（町探検）
6. 内容(3)「地域と生活」について考える②（地域マップの作成）
7. 内容(3)「地域と生活」について考える③（見つけた地域のよさ）
8. 内容(6)「自然やものを使った遊び」について考える①（おもちゃづくり体験）
9. 内容(6)「自然やものを使った遊び」について考える②（グループワーク）
10. 内容(6)「自然やものを使った遊び」について考える③（発表）
11. 内容(7)「動植物の飼育・栽培」について考える①
12. 内容(7)「動植物の飼育・栽培」について考える②
13. 内容(9)「自分の成長」について考える①（成長記録の作成）
14. 内容(9)「自分の成長」について考える②（グループワーク）
15. 生活科におけるカリキュラム・マネジメント

《成績評価の方法・基準》

レポート（60%）、授業中の意見発表や取組・リフレクションペーパー等（40%）を総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

・文部科学省『「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 生活編」』東洋館出版社・「わくわく せいかつ 上」啓林館・「いきいき せいかつ下」啓林館

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

予告された教科書の部分を事前に学修すること、学習後は資料等を再度読み、復習すること。生活科の各内容について整理しておくこと。

特別支援教育総論

2 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 末次 有加

《授業の概要》

保育現場や学校現場では、特別なニーズを有する幼児児童生徒への適切な支援や配慮が欠かせないものとなっている。この授業では、特別支援教育の基本的な考え方を理解するとともに、障害種別の特性や支援方法について基礎的な知識・スキルの習得をめざす。また、映像・テキスト資料等を通じて、障害のある人々が、健常者中心の社会の中でどのような生活を経験しているのかを知るとともに、自らの「障害」観を問い直すきっかけになればと思う。

《学生の到達目標》

① 特別な支援を必要とする幼児児童生徒の障害の特性および心身の発達を理解する。② 特別な支援を必要とする幼児児童生徒に対する教育課程や支援方法を理解する。③ 障害はないが、特別な教育的ニーズのある幼児児童生徒の学習上または生活上の困難とその対応について理解する。

《授業計画》

1. 日本における障害児教育の歴史①戦前期
2. 日本における障害児教育の歴史②戦後～1970 年代
3. 日本における障害児教育の歴史③1980 年代～2000 年代
4. 特別支援教育の現状と課題—インクルーシブ教育の実現に向けて
5. 障害の理解と支援—発達障害①自閉スペクトラム障害
6. 障害の理解と支援—発達障害②LD・ADHD
7. 障害の理解と支援—知的障害、「ちょっと気になる子」
8. 障害の理解と支援—視覚障害
9. 障害の理解と支援—聴覚障害、言語障害
10. 障害の理解と支援—肢体不自由
11. 障害の理解と支援—病弱、情緒障害
12. 障害の理解と支援—重度・重複障害
13. 教室における個別ニーズのある子どもへの対応①合理的配慮概念
14. 教室における個別ニーズのある子どもへの対応②外国ルーツの子どもと課題
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

ミニレポート（40%）＋試験（60%）＝100%

《授業で使用する教科書》

・文部科学省「特別支援学校—幼稚園教育要領／小学部・中学部学習指導要領／高等部（最新版）」

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前学習：次の授業で扱う事柄を確認し、テキストの該当箇所を読み、演習課題に取り組んでおくこと。事後学習：講義で紹介された概念や事例などをインターンシップや実習先、自身の日常生活の中で確認・実践して次の講義に臨んでほしい。

総合基礎演習Ⅱ

2 年次（通年）
2 単位（演習）
担当 要 正子，★藪 一裕，井岡 瑞日，杉本 孝美

《授業の概要》

大学生の学びやキャリア形成の基礎となる力を培うことを意識した展開を行う。1 年次の「読む」活動を継続し、さらに「書く」活動に発展させ、大学生としての学習・研究活動につなげる。自ら課題を発見し、自分の意見をまとめ、他者の意見と比較することや伝えることを意識し、「個人研究」に取り組む。

《学生の到達目標》

総合基礎演習Ⅰでの学習をふまえ、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭すなわち社会人に求められるコミュニケーション能力をはじめとする基礎力を獲得する。また「個人研究」の発表を通して、大学生の学習・研究活動の視点を身につける。

《授業計画》

1. 前期授業展開についての説明（オリエンテーション）
2. 大学生としての学びと研究活動
3. 大学生としてのキャリア形成
4. 全体交流会
5. 課題を見つける（1）
6. 課題を見つける（2）
7. 自分の意見を整理し伝える（1）
8. 自分の意見を整理し伝える（2）
9. 自分の意見と他者の意見を比較する（1）
10. 自分の意見と他者の意見を比較する（2）
11. 保育・教育に関する課題について各分野の視点から考える（1）
12. 保育・教育に関する課題について各分野の視点から考える（2）
13. 保育・教育に関する課題について各分野の視点から考える（3）
14. 保育・教育に関する課題について各分野の視点から考える（4）
15. 前期総括
16. 後期授業展開についての説明（オリエンテーション）
17. 全体交流会 特別発表会
18. 個人研究（1）
19. 個人研究（2）
20. 個人研究（3）
21. 個人研究（4）
22. 全体交流会
23. 個人研究（5）
24. 個人研究（6）
25. 個人研究（7）
26. 個人研究（8）発表①
27. 個人研究（9）発表②
28. 個人研究（10）発表③
29. 全体交流会
30. 全体総括

《成績評価の方法・基準》

授業への取り組み（30%）、個人研究（40%）、レポート等提出物（30%）によって評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前学習：前時の学習のふりかえりや予習を行う。前年度以上に読書に取り組む。事後学習：授業で示された課題に向き合う。問題、レポートについて積極的に取り組む。

児童保育学科 3 年次

倫理学

3 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 樋口 善郎

《授業の概要》

めまぐるしく変貌しつつある現代社会に対応するために倫理学も近年大きく変わりつつある。従来の倫理学に加えて応用倫理学という新分野が登場してきた。しかし、従来の倫理学も軽視されてはならないだろう。この授業では、従来の倫理学の重要な部分と現代の新しい倫理学の内容とを学生諸君に紹介する。学生諸君が、主体的かつ自律的にこの社会を生き抜くためには、こうした倫理的知識・知見を身につけることが不可欠であろう。グループワークを取り入れながら授業は行っていく。

《学生の到達目標》

学生は現代社会において将来、さまざまな場面に遭遇し、そこで倫理的態度決定を迫られることになるであろう。本講義の到達目標は、学生がそうした場面において、人間として、あるいは保育士・教員として、成熟した倫理的判断を下せるような思想的な知識を身につけることにある。授業の中では、倫理的判断が試されるような問題（ジレンマ問題）を取り上げる。それを通して、いろいろな倫理思想を実際にツールとして生かせるような技能（スキル）を身につけよう。

《授業計画》

1. 導入：倫理とは何かについて学ぶ
2. 宗教の倫理：キリスト教の倫理や黄金律について学ぶ
3. 徳の倫理1：ソクラテスについて学ぶ
4. 徳の倫理2：アリストテレスについて学ぶ
5. 徳の倫理3：徳の倫理の特徴について学ぶ
6. 義務論：カントの義務論について学ぶ
7. 禁欲主義と快楽主義：ストア派他について学ぶ
8. 功利主義：功利主義の問題点について学ぶ
9. 相対主義：ニーチェ他について学ぶ
10. 現代の倫理学1：他者危害の原則について学ぶ
11. 現代の倫理学2：医療の倫理について学ぶ
12. 現代の倫理学3：人の始期に関する倫理について学ぶ
13. 現代の倫理学4：人の終期に関する倫理について学ぶ
14. 現代の倫理学5：環境の倫理について学ぶ
15. 現代の倫理学6：正義論について学ぶ

《成績評価の方法・基準》

毎回の授業における受講カードの提出10%。授業内で実施する小テスト（4回目・8回目・12回目の授業後半に実施予定）30%。学期末試験60%。これらを加算して評価とする。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前：授業内で必要に応じて資料を配付する。その資料の「家庭学習」に挙げられている課題に取り組んでおく。事後：小テスト及び学期末試験に向けて授業内で学んだことをしっかり復習しておく。また、学んだ倫理思想を受講カードや実際の場面で生かす試みをして、実際にツールとして生かせるように習熟しよう。

保育の心理学Ⅱ

3 年次（半期）
1 単位（演習）
担当 要 正子

《授業の概要》

こどもの発達に関する知識を深め、実践的理解へと発展していくことをめざす。保育・教育現場での事例を通して、こどもの行動やその行動の背景となる内面及び環境との関連を考え、現状に応じてこどもを理解する視点を養う。これまでの学びや体験をふまえ、学生が主体となって授業を展開し、適宜グループワークを行いながら相互に知識・経験を共有する。

《学生の到達目標》

こどもの心身の発達と保育実践について理解を深める。また①こども理解、②保護者理解、③保護者支援、④保育者（教育者）育成などの観点から自ら課題意識をもち、こどもの発達援助を考えることができるようになる。

《授業計画》

1. オリエンテーション
2. こどもの発達援助に関する課題を理解する
3. 課題提供①（こども理解の観点から課題を見出し、検討する）
4. 課題提供②（保護者理解の観点から課題を見出し、検討する）
5. 課題提供③（保護者支援の観点から課題を見出し、検討する）
6. 課題提供④（保育者・教育者育成の観点から課題を見出し、検討する）
7. 課題提供⑤（観点①～⑤より課題を見出し、検討する）
8. 中間総括
9. 保育者・教育者としての姿勢とスキルの重要性について学ぶ
10. 課題提供⑥（観点①～⑤より課題を見出し、検討する）
11. 課題提供⑦（観点①～⑤より課題を見出し、検討する）
12. 課題提供⑧（観点①～⑤より課題を見出し、検討する）
13. 課題提供⑨（観点①～⑤より課題を見出し、検討する）
14. 課題提供⑩（観点①～⑤より課題を見出し、検討する）
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

授業への取り組み（50%）、提出物（30%）、総括レポート（20%）によって評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・「幼稚園教育要領」・「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」・「保育所保育指針」

《事前・事後学習》

事前学習：実習やボランティアで経験することもや保育者・教育者および保護者との関わりを日常的に意識する。事後学習：事前学習で得たものと授業での学びを関連づけ、自分なりの活かし方考える。

子どもの保健Ⅱ

3 年次（半期）

1 単位（演習）

担当 後藤 淑子， 春高 裕美

《授業の概要》

子どもの健全な育成には、単に子どもの身体と心の発達のみならず、子どもを取り巻く環境を理解することも求められる。保育を担うものは、子どもの発達発達、健康状態をよく把握し、健全な生活が援助できる知識や技術が必要である。そして、保育の専門家のみならず、子育て支援の役割を担うため、家族を含めたこの支援には幅広い知識も必要となる。これらについて演習を通じて学習する。本授業はアクティブラーニング型の授業内容を含む。

《学生の到達目標》

「子どもの保健」を基本理論として、子どもの発達発達を把握したうえで、日常生活の援助、事故や病気への対応、環境づくりについて理解し、保育の場において実践できることを目指す。

《授業計画》

1. 保健活動の計画と評価
2. 身体計測の原理と評価
3. 子どもの身体計測① 実習
4. 子どもの身体計測② 実習
5. 運動機能の発達とその評価
6. 精神機能の発達とその評価
7. 生理機能の測定と評価① 実習
8. 生理機能の測定と評価② 実習
9. 子どもの健康と生活援助 実習（沐浴・更衣）
10. 子どもの健康と生活援助 実習（調乳）
11. 保育施設的环境整備
12. 子どもの病気と予防接種①（グループワーク）
13. 子どもの病気と予防接種②（発表）
14. 子どもの事故と救急法①（幼児安全法）
15. 子どもの事故と救急法②（救命処置）

《成績評価の方法・基準》

演習レポート60%、グループワーク 30%、授業への取り組み 10%で評価する

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

子どもの保健Ⅰの知識を基礎として演習を実施しますので、関連する授業内容を予習しておいてください。演習レポートは授業ごとに課されます。

健康領域指導法Ⅱ

3 年次（半期）

1 単位（演習）

担当 高橋 篤志， 清田 岳臣

《授業の概要》

本演習では、健康領域指導法Ⅰで学習した内容を基礎として、指導場面を想定した演習を行う。特に、運動遊び指導能力の向上に力点を置き、運動指導の要点を踏まえた指導ができるようになることを目指す。新聞記事や研究書籍等から、現在の乳幼児における健康課題を知り、その問題について調査・検討し、課題解決のための方法について考察できるようにすることを旨とする。

《学生の到達目標》

健康領域指導法Ⅱの授業では、健康領域指導法Ⅰで学習した内容を基礎として、指導場面を想定した演習を行い、より実践的な指導技能を身に付ける。また、現在の乳幼児における健康課題について検討し、考察できるようにする。

《授業計画》

1. 運動遊びの実践（基本運動・グループワーク・相互評価）
2. 運動遊びの実践（ボール運動・グループワーク・相互評価）
3. 運動遊びの実践（なわ遊び・グループワーク・相互評価）
4. 運動遊びの実践（マット運動・グループワーク・相互評価）
5. 運動遊びの実践（鉄棒・グループワーク・相互評価）
6. 運動遊びの実践（跳び箱運動・グループワーク・相互評価）
7. 運動遊びの実践（平均台、フープ・グループワーク・相互評価）
8. 運動遊びの実践（サーキット・グループワーク・相互評価）
9. 運動遊びの実践（実技の総合評価）
10. 運動遊びの指導法の考案①（絵コンテ作成・グループワーク）
11. 運動遊びの指導法の考案②（動画撮影・グループワーク）
12. 運動遊びの指導法の考案③（発表・相互評価）
13. 現在の乳幼児における健康課題①（課題設定：グループワーク）
14. 現在の乳幼児における健康課題②（調査検討・グループワーク）
15. 運動遊びの指導法の考案③（発表・相互評価）

《成績評価の方法・基準》

グループワークによる評価(50%)、最終レポート(50%)とする。

《授業で使用する教科書》

・「幼稚園教育要領」・「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」・「保育所保育指針」

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

本講義の内容を深く理解するために上記の書籍を読むことをすすめる。毎時間配布するプリントの議題について各自調べた事柄を解答する。

人間関係領域指導法Ⅱ

3 年次（半期）

1 単位（演習）

担当 末次 有加, 三輪 よし子

《授業の概要》

現代社会の様々な状況を踏まえ、領域「人間関係」において子どもたちにどのような力や視点を身に付けさせることが望ましいのかを具体的な事例の検討や映像視聴を通して考える。そしてまた、幼児の発達にふさわしい「主体的・対話的で深い学び」を実現する保育を具体的に構想し、実践する方法を身に付ける。

《学生の到達目標》

①領域「人間関係」の「ねらい」及び「内容」について理解する。②領域「人間関係」の「ねらい」及び「内容」を踏まえて、自立心を育て、人と関わる力を養うために必要な、幼児が経験し身に付けていく内容と指導上の留意点、評価の考え方を理解する。③具体的な保育を想定した指導案を作成する。④模擬保育やロールプレイとその振り返りを通して、保育を改善する視点を身に付ける。

《授業計画》

1. 乳幼児期の育ちと領域「人間関係」
2. 幼児教育の効果と社会情動的スキルの指導の検討
3. 自己調整力を育む保育実践 (1) 挑戦・試行する姿
4. 自己調整力を育む保育実践 (2) 自発性・主体性・能動性の育成
5. 自己調整力を育む保育実践 (3) 葛藤・共有・挑戦・目的・粘り強さ
6. 育ち合う人間関係 (1) 子ども同士の関係
7. 育ち合う人間関係 (2) 子どもと保育者の関係
8. 育ち合う人間関係 (3) 保育者と保護者の関係
9. 小学校との連携・接続 (1) 幼小の交流活動
10. 小学校との連携・接続 (2) 生活科における共同的な学習活動
11. 地域における子育て支援の取り組み (1) 多文化共生保育・教育
12. 地域における子育て支援の取り組み (2) 地域の人とのかかわり
13. 幼児教育の現代課題 (1) 少子化、核家族、待機児童、多様な保育ニーズ
14. 幼児教育の現代課題 (2) 社会情動的スキルの重要性、格差、求められる保育者の専門
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

各種課題・レポート (80%) + 最終レポート (20%) = 100%

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・「保育所保育指針（解説）」・「幼稚園教育要領（解説）」・「幼保連携型認定こども園教育・保育要領（解説）」

《事前・事後学習》

事前学習：「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」をよく読んでおくこと。事後学習：毎週のインターンシップ等において、子どもの年齢・発達段階、家庭環境、生活経験などと人とのかかわり方の違いや特徴についてよく観察すること。集団保育の方法についてもよく観察し、不明点があれば、現場の保育者に質問していただくこと。

言葉領域指導法Ⅱ

3 年次（半期）

1 単位（演習）

担当 古茂田 貴子, 杉本 孝美

《授業の概要》

「言葉領域指導法Ⅰ」で得た知識を基礎として、保育現場を想定しながら、子ども達のことばを豊かにし、感性を磨いていく具体的な保育について学ぶ。

《学生の到達目標》

子ども達のことばが豊かになる環境として、保育者がどのようなことばかけを行うのが有効なのかを考える習慣をつくる。次に、児童文化財として絵本やお話や紙芝居、わらべうた遊びについて幅広い知識をつけ、保育素材を選択する力を養い、実際の保育に活用していく力を身につける。

《授業計画》

1. イントロダクション
2. 子どもが話すことについて
3. 子どもに話すことを促す保育者の役割（ことばかけを中心に）
4. 保育者の声・言葉遣いについて
5. 絵本について（役割・読み方）
6. 絵本について（事物絵本・生活絵本）
7. 絵本について（科学絵本・物語絵本）
8. 絵本を介した言葉領域指導の指導案作成と模擬保育
9. 物語・昔話へのアプローチとしてのお話・昔話について
10. お話の方法（選び方・覚え方・話し方）
11. お話をつくってみる
12. わらべうた遊びの重要性
13. わらべうた遊びの実践
14. お話やわらべうた遊びを介した言葉領域指導の指導案作成と模擬保育
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

授業内での課題や授業での発表 (60%)、レポートや自作教材等提出物 (40%)

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・瀧澤「保育と絵本」エイデル研究所・松岡享子「サンタクロースの部屋」こくま社・協明子「読む力は生きる力」岩波書店

《事前・事後学習》

子ども達のことばを豊かにするための保育教材について意識を深め、体験を積んで頂きたいと思います。そのために、授業内での実習体験や発表に真摯に取り組んで頂きたいと思います。また、レポートや自作教材等の課題に対しても意欲的に取り組んでください。

障害児保育

3 年次（通年）

2 単位（演習）

担当 ★高田 昭夫、 後藤 浩子、 樋口 幸

《授業の概要》

障害児保育とは何か、そのかわり方と内容について考察し、指導の方法について考える。障害児保育は、家庭や保育所・幼稚園など、関係諸機関の連携のもとに、子ども一人一人を理解する姿勢を大切に、保育を展開させることが大切である。本授業では、様々な障害について学ぶことによって、障害児保育を行う基礎を培っていく。

《学生の到達目標》

乳幼児期に起こりうる障害や問題について一つ一つ学ぶ。障害や症状の理解を深める。その上で、子ども一人一人に合った接し方を学ぶ。また、症状ごとに対応の仕方をしっかり学ぶ。そして、障害児保育の中で、障害がある子どもだけでなく、障害がない子どもについても配慮することを学ぶ。さらに、家庭や関係機関との連携などについても理解する。

《授業計画》

1. オリエンテーション（障害児保育とは）
2. 障害の捉え方
3. 発達について
4. 障害児保育の目指すもの
5. 障害児保育の現状（新聞やニュースの記事を発表）
6. 様々な障害の理解と援助 1
7. 様々な障害の理解と援助 2
8. 様々な障害の理解と援助 3
9. 様々な障害の理解と援助 4
10. 障害についてのまとめ（中間テスト）
11. 問題行動の理解のしかた 1
12. 問題行動の理解のしかた 2
13. 問題行動の理解のしかた 3
14. 問題行動の理解のしかた 4
15. 問題行動についてのまとめ（総括）
16. 障害児保育の実際 1
17. 障害児保育の実際 2
18. 一日の保育の流れ
19. 個別の支援計画の意義、作成について
20. 観察記録の取り方
21. 発達検査と実際の保育の留意点
22. 保護者との連携、支援について
23. 職員間の連携について
24. 専門機関との連携、連絡調整について
25. 遊びについて
26. ことばについて
27. 障害児保育を行う上で大切なこと 1
28. 障害児保育を行う上で大切なこと 2
29. 障害児保育を行う上で大切なこと 3
30. 総括

《成績評価の方法・基準》

課題への取り組み（30%）授業内レポート（30%）小テスト（40%）などを総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

・「障がひ児の理解と支援」 嵯峨野書院

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

新聞やニュースなどの障害についての記事を常にチェックしておくこと。また、インターンシップや実習で出会った子どもたちの記録を見直し、振り返ること。障害児保育に関する本を読むこと。

保育実習Ⅱ

3 年次（半期）

2 単位（実習）

担当 末次 有加、 井岡 瑞日、 大嶋 健吾

《授業の概要》

保育士資格必修科目。保育所実習を 10 日から 12 日間実施する。実習施設は原則として大学が各施設と調整のうえ配当する。

《学生の到達目標》

1. 保育所の役割や機能について、具体的な実践を通して理解を深める。2. 子どもの観察や関わり方の視点を明確にすることを通して、保育の理解を深める。3. 既習の教科目や保育実習Ⅰの経験を踏まえ、子どもの保育及び子育て支援について総合的に理解する。4. 保育の計画・実践・観察・記録及び自己評価等について、実際に取り組み、理解を深める。5. 保育士の業務内容や職業倫理について、具体的な実践に結びつけて理解する。6. 実習における自己の課題を明確化する。

《授業計画》

1. 保育所の役割や機能の具体的展開（1）養護と教育が一体となって行われる保育
2. 保育所の役割や機能の具体的展開（2）保育所の社会的役割と責任
3. 観察に基づく保育の理解（1）子どもの心身の状態や活動の観察
4. 観察に基づく保育の理解（2）保育士等の援助や関わり
5. 観察に基づく保育の理解（3）保育所の生活の流れや展開の把握
6. 環境を通して行う保育、生活や遊びを通して総合的に行う保育
7. 入所している子どもの保護者に対する子育て支援及び地域の保護者等に対する子育て支援
8. 関係機関や地域社会との連携・協働
9. 指導計画の作成・実践・観察・記録・評価
10. 全体的な計画に基づく指導計画の作成・実践・省察・評価と保育の過程の理解
11. 作成した指導計画に基づく保育の実践と評価
12. 作成した指導計画に基づく保育の実践と評価（指導実習）
13. 保育士の業務と職業倫理（1）多様な保育の展開と保育士の業務
14. 保育士の業務と職業倫理（2）多様な保育の展開と保育士の職業倫理
15. 自己の課題の明確化

《成績評価の方法・基準》

実習施設による実習評価 60%、諸提出物（日誌等）20%、実習評価面談 20%とする。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前学習：インターンシップ実習、保育実習Ⅰの経験からの自己課題を明確にする。事後学習：実習自己評価を行い、保育実習Ⅱあるいは教育実習に向けた自己課題を明確にする。実習中には、学科専任教員による訪問指導を受け、実習内容や実習課題の達成状況を報告する。

保育実習指導Ⅱ

3 年次（半期）
1 単位（演習）

担当 末次 有加, 樋口 幸, 井岡 瑞日,
小西 由紀子, 今津 香

《授業の概要》

保育実習Ⅱの事前事後指導である。保育所実習（または幼保連携型認定こども園での実習）についての指導を行う。保育実習Ⅱとつよく連動しており、事前指導の到達状況つまり事前準備は実習の成果に影響することを心得て履修することが望ましい。

《学生の到達目標》

1. 保育実習の意義と目的を理解し、保育について総合的に理解する。2. 実習や既習の教科目の内容やその関連性を踏まえ、保育の実践力を習得する。3. 保育の観察、記録及び自己評価等を踏まえた保育の改善について、実践や事例を通して理解する。4. 保育士の専門性と職業倫理について理解する。5. 実習の事後指導を通して、実習の総括と自己評価を行い、保育に対する課題や認識を明確にする。

《授業計画》

1. 授業ガイダンス、実習にかかわる提出資料の作成
2. 保育実習Ⅰ（保育所実習）の事後指導（1）実習の総括と自己評価（評価面談）
3. 保育実習Ⅰ（保育所実習）の事後指導（2）実習の総括と実習報告（グループ討議）
4. 保育実習による総合的な学び（1）子どもの最善の利益を考慮した保育の具体的な理解
5. 保育実習による総合的な学び（2）子どもの保育と保護者支援
6. 保育の実践力の育成（1）子ども（利用者）の状況に応じた適切な関わり
7. 保育の実践力の育成（2）保育の知識・技術を活かした保育実践
8. 計画と観察、記録、自己評価（1）保育の全体計画に基づく具体的な計画と実践
9. 計画と観察、記録、自己評価（2）保育の観察、記録、自己評価に基づく保育の改善
10. 実習内容と実習計画（1）指導実習に向けて（教材研究、遊びと活動）
11. 実習内容と実習計画（2）指導実習に向けて（指導案の作成）
12. 実習内容と実習計画（3）指導実習に向けて（模擬保育）
13. 保育士の専門性と職業倫理
14. 事後指導における実習の総括と評価（1）実習の総括と自己評価（評価面談）
15. 事後指導における実習の総括と評価（2）課題の明確化（レポート作成）

《成績評価の方法・基準》

授業課題（60%）、および指定課題等の提出・達成状況（40%）により評価する。課題内容の詳細は授業時に提示する。原則として全ての回の出席を求める。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

〔学生の到達目標〕を参照。実習園での事前オリエンテーションを受ける（本授業時間外、日程等は別途指定）。

保育実習Ⅲ

3 年次（半期）
2 単位（実習）

担当 ★藪 一裕, 中條 薫

《授業の概要》

保育士資格・選択科目である。児童福祉施設等（保育所以外）における実習を10日から12日間実施する。実習施設は原則として、本人の希望を考慮したうえで、大学が各施設と調整して配当する。保育実習Ⅰ、保育実習Ⅱの内容を深め、より専門的な支援と援助の実践を学ぶこと、施設保育士についての理解を深めることが目的である。実習時期を心得て履修すること。

《学生の到達目標》

1. 既習の教科目や保育実習の経験を踏まえ、児童福祉施設等（保育所以外）の役割や機能について実践を通して、理解する。2. 家庭と地域の生活実態にふれて、子ども家庭福祉、社会的養護、障がい児支援に対する理解をもとに、保護者支援、家庭支援のための知識、技術、判断力を習得する。3. 保育士の業務内容や職業倫理について具体的な実践に結びつけて理解する。4. 入所児童（利用者）への自立支援の実際と、自立支援計画に触れ、理解する。5. 実習における自己の課題を理解する。

《授業計画》

1. 児童福祉施設等（保育所以外）の役割と機能（1）（実習施設の状況）
2. 児童福祉施設等（保育所以外）の役割と機能（2）（実習施設の事業）
3. 施設における支援の実際（1）受容する
4. 施設における支援の実際（2）共感する態度
5. 個人差や生活環境に伴う子ども（利用者）のニーズの把握と子ども理解（1）
6. 個人差や生活環境に伴う子ども（利用者）のニーズの把握と子ども理解（2）
7. 個別支援計画の作成と実践（1）
8. 個別支援計画の作成と実践（2）
9. 子ども（利用者）の家族への支援と対応
10. 各施設における多様な専門職との連携・協働
11. 地域社会との連携・協働
12. 実習中間報告
13. 保育士の多様な業務と職業倫理（1）施設保育士の役割
14. 保育士の多様な業務と職業倫理（2）業務理解と専門性
15. 保育士としての自己課題の明確化

《成績評価の方法・基準》

実習施設による実習評価 60%、諸提出物（日誌等）20%、実習評価面談 20%とする。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前：インターンシップ実習、保育実習Ⅰ、保育実習Ⅱなどの経験から導き出された自己課題を明確にする。事後：実習自己評価を行い、次の実習に向けて、または、保育士資格取得までの自己課題を明確にする。実習中には、学科専任教員による訪問指導を受け、実習内容や実習課題の達成状況を報告する。

保育実習指導Ⅲ

3 年次（半期）
1 単位（演習）
担当 ★藪 一裕， 中條 薫

《授業の概要》

保育実習Ⅲの事前事後指導であり、集中講義として開講する予定である。社会福祉施設での実習（保育所以外の社会福祉施設）についての指導を行う。保育実習Ⅲと連動していること、また、保育実習Ⅰにおける施設実習の内容を深め、より高度な支援や援助の実践を学ぶ実習のための授業内容となることを心得て、履修することが望ましい。

《学生の到達目標》

1. 保育実習の意義と目的を理解し、保育について総合的に理解する。2. 実習や既習の教科目の内容やその関連性を踏まえ、保育の実践力を習得する。3. 保育の観察、記録及び自己評価等を踏まえた保育の改善について、実践や事例を通して理解する。4. 保育士の専門性と職業倫理について理解する。5. 実習の事後指導を通して、実習の総括と自己評価を行い、保育に対する課題や認識を明確にする。

《授業計画》

1. 授業ガイダンス、実習に必要な提出資料の作成
2. 保育実習Ⅰ（社会福祉施設）の振り返り（1）自己評価（評価面談）
3. 保育実習Ⅰ（社会福祉施設）の振り返り（2）実習の総括と実習報告（グループ指導）
4. 保育実習による総合的な学び（1）子どもの最善の利益を考慮した保育の具体的な理解
5. 保育実習による総合的な学び（2）子ども（利用者）への支援と保護者支援
6. 保育の実践力の育成（1）子ども（利用者）の状況に応じた適切なかわり方
7. 保育の実践力の育成（2）保育の知識・技術を活かした保育実践
8. 計画と観察、記録、自己評価（1）保育の全体計画に基づく具体的な計画と実践
9. 計画と観察、記録、自己評価（2）保育の観察、記録、自己評価に基づく保育の改善
10. 実習内容と実習計画（1）自立支援の実践 ゲスト講師
11. 実習内容と実習計画（2）自立支援の実践 ゲスト講師
12. 保育士の専門性と職業倫理（1）
13. 保育士の専門性と職業倫理（2）
14. 事後指導における実習の総括と評価（1）実習の総括と自己評価（評価面談）
15. 事後指導における実習の総括と評価（2）自己課題の明確化（レポート作成）

《成績評価の方法・基準》

授業課題（60%）、および指定課題等の提出・達成状況（40%）により評価する。課題内容の詳細は授業時に提示する。授業日程は、履修者と調整のうえ決定する。原則として全ての回の出席を求める。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

学生の到達目標を参照。実習施設での事前オリエンテーションを受ける（本授業時間外、日程等は別途指定）。

音楽科指導法

3 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 中根 佳江， 峯 恭子

《授業の概要》

音楽科における教育目標、育成を目指す音楽的資質・能力を理解し、学習指導要領に示された音楽科の学習内容について理解を深める。そして、様々な学習指導理論を踏まえて、具体的な授業場面を想定した授業設計を行う方法を身に付ける。また、音楽科を担当する教員に必要な音楽的な基礎的知識や技能を習得し、児童に内在する音楽能力を引き出し育てるために必要な知識や技能等を身に付ける。

《学生の到達目標》

1) 学習指導要領における音楽科の目標及び主な内容並びに全体構造を理解している。2) 個別の学習内容について指導上の留意点を理解している。3) 音楽科の学習評価の考え方を理解している。4) 子どもの認識・思考、学力等の実態を視察に入れた授業設計の重要性を理解している。5) 具体的な授業を想定した授業設計と学習指導案を作成することができ、授業改善の視点を身に付けている。

《授業計画》

1. 音楽科の実態の把握と現在の課題の理解
2. 「小学校学習指導要領」の変遷と音楽科の今日的課題
3. 表現領域「歌謡」の指導方法の視点と指導上の留意点について
4. 表現領域「器楽」の指導方法の視点と指導上の留意点について
5. 表現領域「音楽づくり」の指導方法の視点と指導上の留意点について
6. 領域「鑑賞」の指導方法の視点と指導上の留意点について
7. 低学年から中学年における音楽的併存性の視点を踏まえた教材研究の方法
8. 高学年における音楽的併存性の視点を踏まえた教材研究の方法
9. 音楽科の授業設計と評価① 音楽科の学習評価の考え方について
10. 音楽科の授業設計と評価② 児童の認識・思考、学力等の実態を踏まえた授業設計と評価
11. 学習指導案の作成① 情報機器及び教材の効果的な活用と授業設計
12. 学習指導案の作成② 具体的な授業を想定した授業設計と学習指導案の作成
13. 模擬授業の実施とその振り返り① 作成した指導案を元にした模擬授業の実施
14. 模擬授業の実施とその振り返り② 実施した模擬授業の改善点等の検討
15. 本講義の全体を振り返り一音楽科の教育目標、育成を目指す音楽的資質・能力の整理

《成績評価の方法・基準》

指導案・模擬授業 40%、実技発表 30%、提出物など授業への取り組み 30%

《授業で使用する教科書》

・初等科音楽教育研究会 編「小学校教員養成課程用（最新）初等科音楽教育法」音楽之友社・文化科学省「小学校学習指導要領解説「音楽」平成 29 年 7 月」東洋館出版社

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

本科目ではソプラノリコーダーを使うので、各自用意して下さい。

教育相談

3 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 要 正子

《授業の概要》

近年、こどもを取り巻く状況は急激に変化しており、保育・教育現場における教育相談の重要性は高まっている。教育相談の基本的な考え方となるカウンセリングの理論や方法の概説を加えながら、保育・教育現場における教育相談の役割とその実際について概説し、グループワークを適宜実施しながら様々な問題に対する理解と対応を検討する。

《学生の到達目標》

教育相談は、幼児、児童及び生徒が自己理解を深めたり好ましい人間関係を築いたりしながら、集団の中で適応的に生活する力を育み、個性の伸長や人格の成長を支援する教育活動である。幼児、児童及び生徒の発達状況に即しつつ、個々の心理的特質や教育的課題を適切にとらえ、支援するために必要な基礎知識（カウンセリングの意義、理論や技法に関する基礎的知識を含む）を身につける。

《授業計画》

1. 教育相談とは（学校園における教育相談の概要を理解する）
2. 教育相談の基礎①（こどもを取り巻く現状と課題を理解する）
3. 教育相談の基礎②（学校カウンセリングの基礎理論を理解する）
4. こどもの不適応や問題行動の意味を理解する
5. こどもの SOS に気づく方法を学ぶ
6. こどもの見立ての重要性を理解する
7. 対人援助におけるコミュニケーション力の重要性を理解する
8. こどもの気になる行動への対応を理解する
9. 対人援助におけるコミュニケーション力の重要性を理解する
10. 保護者対応のポイントを理解する
11. チーム支援（学校園内外の支援体制）の実際を理解する
12. 関係機関との連携のポイントを学ぶ
13. 緊急時の心理的援助体制とその実際を学ぶ
14. 予防教育の重要性を理解する（集団に適應する力を育む）
15. まとめ・総括

《成績評価の方法・基準》

試験（70%）と授業への取り組み（30%）によって評価する。なお、授業への取り組みは、「レポート」などの提出物を含む。

《授業で使用する教科書》

・資料を適宜配布する。

《参考書》

・「生徒指導提要」

《事前・事後学習》

事前学習：インターンシップ等、実習での経験をふりかえり、今日の教育現場における課題に関心をもつこと。事後学習：教育相談の役割を認識し、自らが果たす役割について考えること。

教育方法・技術論

3 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 ★藤田 朋己

《授業の概要》

自ら学び考える子どもを育てるためには、子どもたちの資質や能力をどのように育成するかを、常に念頭に置き授業デザインをおこなわなければならない。授業をデザインする上で必要不可欠な「主体的・対話的で深い学び」につながる教育方法・教育技術・ICT 活用技術について学びを深める。他者との学びあいによる主体的で対話的な深い学びの中で、他者の異なる考えや価値観に触れ、自身の新たな気づきや価値観を創出し、学びを深め、学び続ける自己学習調整者を育成する。

《学生の到達目標》

未来を担う子どもたちに求められる資質や能力を育成するために必要な、教育方法・教育技術・ICT 活用技術・学びの質に関する基礎知識や技能を獲得する。到達目標は次のとおりである。(1) 他者との学びあいを通して学びを深める。(2) 教育方法・教育技術についての理解を深める中で、実践力の向上に繋げる。(3) 従来の教具とともに、有効な ICT 活用による授業をデザインする能力の向上をはかる。(4) 説明技術、発問技術の向上をはかる。(5) 思考スキルの向上をはかる。(6) 教育・学習評価に対する考えを深める。(7) 情報モラル指導を含む子どもたちの情報活用能力育成を、各教科指導の中で実施するための基礎的な知識・技術獲得をはかる。

《授業計画》

1. 授業計画ならびに授業の進め方についての説明
2. 教室での学び・ICT 活用教育とは
3. 今日の教育課題と学習指導要領
4. 先生に求められる「話す」「聴く」「伝える」「寄り添う」スキル
5. 主体的・対話的で深い学びとは
6. 教育における評価（ポートフォリオを含む）
7. 実物投影機を活用した教育
8. デジタル教材を活用した教育
9. タブレット端末を活用した教育
10. 情報活用能力を育てる
11. 情報モラル教育の重要性
12. 学習指導案作成ならびにその検討1
13. 学習指導案作成ならびにその検討2
14. 子どもたちの言語発達を支える
15. 自己学習調整者を育てる・自ら学び続ける先生を目指して

《成績評価の方法・基準》

LMS（manaba）を利用した事前回答をもとに、アクティブラーニング型授業を実施する。そのため、評価方法は次のとおりである。事前回答をはじめとする授業に向けての準備やグループワーク後の振り返り（55%）、授業時のグループワークへの参加姿勢や取り組み（25%）、演習課題評価（20%）で評価する。

《授業で使用する教科書》

・「幼稚園教育要領解説」・「小学校学習指導要領解説」・「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

授業日までにmanabaを利用して、与えたテーマに対する回答を課す。回答内容は、現場実習で得たこと、経験したことを元へ回答できるものである。今までの現場実践をしっかりと振り返って、回答をおこなって欲しい。授業時には、学びを深めるための資料等を配布する。授業時に活用する資料もあるが、多くは事後学習のためのものである。授業で得た学びを元へ資料を読み込み、自身の深い学びに繋げて欲しい。

幼児理解

3 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 清田 岳臣、高根 栄美

《授業の概要》

幼児理解は、幼稚園教育のあらゆる営みの基本となるものである。本講義では、幼児理解のための基礎となる心身の発達について学ぶとともに、幼児理解を深めるための基礎的な態度、方法を講義およびグループワークを通じて学習する。

《学生の到達目標》

幼稚園における幼児の生活や遊びの実態に即して、幼児の発達や学び及びその過程で生じるつまずき、その要因を把握するための原理や対応の方法を考えることができる。

《授業計画》

1. ヒトの進化の変遷と発育、成熟および発達
2. 形態の発達
3. 身体機能の発達
4. 運動の発達
5. 運動の学習
6. 感覚、知覚、認知の発達
7. 子どもと環境
8. 子どもと遊び（遊びの定義・集団での遊び）
9. 子どもと遊び（遊びの援助）
10. 子ども理解とカウンセリングマインド①（自己理解）
11. 子ども理解とカウンセリングマインド②（他者理解）
12. 子育ての支援と相談および保護者への対応
13. 子ども理解と記録（観察法など）
14. 子ども理解に基づく保育者の援助①遊び場面の事例から
15. 子ども理解に基づく保育者の援助②生活場面の事例から

《成績評価の方法・基準》

グループワークの成果 40%、まとめのレポート 60%

《授業で使用する教科書》

・「幼稚園教育要領」・「幼稚園教育要領」・「幼稚園教育要領」・「幼稚園教育要領」

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前学習として、前回の授業で指定された、授業内容のキーワードについて小テストを行います。事後学習として、授業内容を問うレポートを課します。

教育心理学

3 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 渡辺 俊太郎

《授業の概要》

保育・教育現場では、心理学的視点をもって子どもと関わるのが、的確な子ども理解や適切な指導・支援につながる。心理学的視点をもった保育者・教育者になるために求められる、子どもの心身の発達および学習の過程に関する基礎的な知識について、テキストや資料によって学ぶとともに、講義中のワークを通して体験的に理解を深める。

《学生の到達目標》

乳幼児期から青年期の各時期における心身の発達の過程および特徴に関する代表的理論を学び、発達概念および教育における発達理解の意義を理解する。学習に関する基礎的な知識として様々な学習の形態や概念およびその過程を説明する代表的理論、動機づけ・集団づくり・学習評価のあり方について学び、発達の特徴と関連づけた主体的な学習活動を支える指導の基礎となる考え方を理解する。

《授業計画》

1. 教育心理学の概要について理解する
2. 親子関係の重要性を学ぶ
3. 幼児期の認知発達理論について学ぶ
4. 思春期の子ども理解を深める
5. 道徳性の発達理論について学ぶ
6. 発達障害児の心理を考える
7. 発達障害児の事例から理解を深める
8. 発達障害児の支援について学ぶ
9. 学級経営に関する心理学理論を学ぶ
10. 学力と知能に関する知識を習得する
11. 知能の測定と結果の活用について学ぶ
12. 学習のメカニズムを理解する
13. 記憶のメカニズムを理解する
14. 動機づけのメカニズムを理解する
15. 教育評価の方法について学ぶ

《成績評価の方法・基準》

期末試験（60%）、毎回の授業の最後に提出する小レポート（40%）

《授業で使用する教科書》

・古川聡「教育心理学をさわる 10 のチカラ（改訂版）」福村出版

《参考書》

・諏訪利明・安倍陽子「ふしぎだね!?自閉症のおともだち」ミネルヴァ書房・安倍陽子・諏訪利明「ふしぎだね!?アスペルガー症候群（高機能自閉症）のおともだち」ミネルヴァ書房・高山恵子「ふしぎだね!?ADHD（注意欠陥多動性障害）のおともだち」ミネルヴァ書房・「幼稚園教育要領（最新版）」・「小学校教育指導要領（最新版）」

《事前・事後学習》

事前学習として、教科書の「キーワード」「キーパーソン」を中心に予習を行う。また、配布された課題ワークシートに取り組む。事後学習として、教科書のうち授業で触れられなかった部分を読み、理解を深める。また、教科書の「考えてみよう話し合ってみよう」の課題に取り組み、自分なりの考えを受講生同士で共有しあう。

教育課程論

3 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 ト田 真一郎

《授業の概要》

教育課程の意義や編成の方法を理解し、保育・教育現場における指導計画の実践に触れることを通じて、カリキュラムマネジメントのために必要な基礎的な能力を獲得する。また、ナショナルカリキュラムの変遷や各現場における計画の多様性の理解を通じて、教育方法の多様性や社会的背景の理解を深める。さらに、教育課程における現代的な課題である、幼小接続の在り方やカリキュラムマネジメントについても理解を深める。

《学生の到達目標》

本科目においては、就学前教育及び就学後教育における教育課程の役割を理解し、子どもの心身の発達に応じた学習指導が行えるように教育課程の意義や類型、それを編成するときの理論的背景について学ぶとともに、自ら編成する基礎的な力を身に付けることを目標とする。また、教科・領域・学年をまたいでカリキュラムを把握し、教育課程全体をマネジメントすることの意義を理解することを目標とする。

《授業計画》

1. 教育の計画についての基本を学ぶ
2. 要領・指針の改定と教育の計画の意義について
3. 就学前教育と就学後教育の連続性と相違点について～目標と内容の観点から～
4. 実践の背景にある子ども観や教育観の編成に与える影響について
5. カリキュラムの理論的立場について～児童中心主義と系統主義～
6. 学習指導要領・幼稚園教育要領の歴史的変遷について
7. 学習指導要領・幼稚園教育要領の歴史的変遷と現在の要領・指針について
8. カリキュラム・マネジメントの基本について
9. 子ども理解と目標のマネジメントについて①～実践意識から学ぶ～
10. 子ども理解と目標のマネジメントについて②～映像を通して考える～
11. 教育内容と方法のマネジメントについて①
12. 教育内容と方法のマネジメントについて②～教材研究を通して考える～
13. 教育評価とカリキュラムの改善について
14. アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムについて
15. 授業のまとめ

《成績評価の方法・基準》

毎回の小レポート 30% 授業内で指定する課題レポート (2 回) 70%。小レポートについては、次の授業時に評価を行ったうえで返却する。課題レポートについても、授業終了後に返却し、適宜、個別指導を行う。

《授業で使用する教科書》

・文部科学省「幼稚園教育要領」・文部科学省「小学校学習指導要領」

《参考書》

・厚生労働省「保育所保育指針」

《事前・事後学習》

事前学習としてインターンシップや実習での経験を授業に応じて整理すること。また、自身が経験してきた保育・幼児教育・学校教育での経験を整理しておくこと。事後学習として授業で学んだ内容を実習等での指導計画作成や実習先で使用している指導計画の理解につなげることに。

教育制度

3 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 佐伯 知子

《授業の概要》

日本の教育制度について、関係法規や行政、学校経営・運営等の幅広いテーマを取り上げ、様々な社会背景に照らし合わせながら考察することで、理解を深めることを目指す。

《学生の到達目標》

①教育制度の成り立ちや仕組みについて基礎的な知識を身につける。②教育制度への理解をふまえ、今日の教育が抱える諸問題やその解決の方途について、自分の考えを述べるができる。

《授業計画》

1. オリエンテーション
2. 教育に関する社会的事項 (1) 子どもの生活の変化
3. 教育に関する社会的事項 (2) 学校をめぐる状況の変化
4. 教育に関する社会的事項 (3) 教育政策の動向
5. 教育に関する制度的事項 (1) 教育関係法規①
6. 教育に関する制度的事項 (2) 教育関係法規②
7. 教育に関する制度的事項 (3) 教育関係法規③
8. 小話 小テスト
9. 教育に関する制度的事項 (4) 教育行政①
10. 教育に関する制度的事項 (5) 教育行政②
11. 諸外国の事例
12. 学校と地域との連携・連携の意義・具体的方法
13. 学校安全への対応 (1) 生活安全・交通安全
14. 学校安全への対応 (2) 災害安全
15. 総括 小テスト

《成績評価の方法・基準》

授業に取り組む姿勢 (50%)、レポート等の提出物 (30%)、小テスト (20%)。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

・事前学習：日頃から新聞やテレビのニュースで報じられる時事問題に関心をもち、教育制度についての知識を得よう努めること。・事後学習：授業内容をその都度復習すること。興味をもったテーマについては積極的に本を読んだり調べたりすることで、学びを深めること。

音楽演習Ⅱ

3 年次（半期）
1 単位（演習）
担当 深田 直子

《授業の概要》

幼稚園・保育園または小学校で歌われる曲や、リズム表現活動に使用する曲を数多く習得する。毎回一人ずつ演奏することで、正確なメロディー・リズム・ハーモニーで伴奏し、美しい声でよく聴こえるように弾き歌いすることを学習する。また、楽譜上に記載されているコードネームから、自分で伴奏付けができる技術を身につける。

《学生の到達目標》

保育・教育現場において、子どもたちと歌ったり、子どもたちが楽しく歌えるような伴奏ができることを目指す。

《授業計画》

1. オリエンテーション コードネームの説明
2. 園生活のうた
3. 春のうた
4. 春のうた
5. あそびのうた・リズム表現活動の曲（マーチ）
6. 夏のうた
7. 夏のうた
8. 秋のうた
9. 秋のうた
10. 行事のうた・リズム表現活動の曲（ラン）
11. いろいろなうた・リズム表現活動の曲（スキップ・ギャロップ）
12. 冬のうた
12. 冬のうた
14. 新しいうた・リズム表現活動の曲（ワルツ・いろいろな表現）
15. 振り返り・まとめ

《成績評価の方法・基準》

毎週授業時に、一人ずつの伴奏付けや弾き歌いを行い毎週評価するため、定期試験及び再試験は行わない。

《授業で使用する教科書》

・小林 美実「幼児教育法シリーズ 音楽リズム/幼児のうた楽譜集」東京書籍・茂田 すずむ「保育のためのマーチ・スキップ・ギャロップ・ワルツ・リズム曲集」全音楽譜出版社

《参考書》

・授業中に適宜資料を配布する

《事前・事後学習》

保育には弾き歌いが不可欠であるため、毎週授業までの十分な練習が必要である。

図画工作科指導法

3 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 ★松岡 宏明

《授業の概要》

小学校図画工作科の意義、教育目標と内容及び教科構造を理解し、本教科の特徴や児童の発達段階を踏まえた上で、実践に必要な基本的な知識と指導・評価技術、考え方を身につける。授業形態として、チームを編成し、共同の制作・鑑賞、ディスカッションを行うとともに、模擬授業では、チームによる「材料・用具」研究、ブースづくりから、ワールドカフェ方式での実践を展開する。

《学生の到達目標》

・学習指導要領に示された小学校図画工作科の意義、教育目標と内容及び教科構造を理解する。
・造形面における児童の発達段階を理解するとともに、児童理解に基づく学習指導のあり方を理解する。
・実践に必要な基本的な知識と指導・評価技術を身につける。

《授業計画》

1. 図画工作科の意義と教科性
2. 「私が受けた図画工作科の授業」、「安心と没頭を保障する図画工作の授業」
3. 図画工作科の位置づけと教科目標、育成を目指す資質・能力との関係
4. 図画工作科の内容構成①（領域「表現」〈造形遊び〉）
5. 図画工作科の内容構成②（領域「表現」〈絵や立体、工作〉）
6. 図画工作科の内容構成③（領域「鑑賞」）
7. 図画工作科の「共通事項」
8. 図画工作科の評価のあり方
9. 図画工作科教科書の分析
10. 図画工作科の教材研究の方法
11. 図画工作科の指導案作成の方法と留意点
12. 模擬授業①（領域「表現」〈造形遊び〉に関する授業）
13. 模擬授業②（領域「表現」〈絵や立体、工作〉に関する授業）
14. 模擬授業③（領域「鑑賞」に関する授業）
15. 図画工作科の課題と今後の「私」の展望

《成績評価の方法・基準》

評価・評定については、次の5項目を基に総合的に行う。受講ノート（20%）、制作・鑑賞（20%）、模擬授業（20%）、レポート（20%）、授業ノート（20%）

《授業で使用する教科書》

・大橋功、松岡宏明他編著「美術教育概論（新訂版）」日本文教出版・文部科学省「小学校学習指導要領解説 図画工作科編」日本文教出版

《参考書》

・松岡宏明「子供の世界 子供の造形」三元社

《事前・事後学習》

事前学習として、教科書の指定ページを読み込むこと。事後学習として、授業ノートの整理を毎回行うこと。模擬授業はチームにて実践するので、チームでのミーティングを行うこと。また、指定回数以降にはレポートの構想を練り、執筆すること。レポートは、返却された後、修正を行い、今後の学習に生かすこと。授業内に演習課題が仕上がらなかった場合は、次回までに完成させること。

家庭

3 年次（半期）

2 単位（講義）

担当 大野 節子, 横山 和子

《授業の概要》

1. 学習指導要領における家庭科の目標及び内容についての解説を通して、目標や内容区分の変遷や特徴を理解する。2. 内容を題材レベルで捉え、各内容の意義や特徴、それぞれの題材の目標を調べ、その題材の学習内容を理解する。3. 家庭科指導に関連して、他教科との関連や食育、持続可能な社会を目指す家庭科について理解を深める。

《学生の到達目標》

（1） 小学校学習指導要領に示された家庭科の目標や内容を理解する。1） 内容ごとに題材レベルで、目標や学習内容、留意点等を理解できる。2） 学習内容を主体的に体験することにより、指導についても考えることができる（2） 家庭科に関連する学習内容について、調べたり考察したりできる。1） 家庭科と他教科との連携や関連について理解し、家庭科の生かし方を考察できる2） 食育や持続可能な社会に向けた教育における家庭科の役割が分かる。

《授業計画》

1. オリエンテーション・家庭科の目標、内容
2. 内容「家族・家庭生活」の学習内容
3. 内容「衣食住の生活」の学習内容①
4. 内容「衣食住の生活」の学習内容②
5. 内容「消費生活・環境」の学習内容①
6. 内容「消費生活・環境」の学習内容②
7. 製作活動（小物作り）
8. 持続可能な社会と家庭科
9. 環境にやさしい生活
10. 家庭科と他教科との関連
11. 家庭科と防災・減災
12. 家庭科と日本の食文化
13. 食育について
14. 家庭科と食育
15. まとめ・これからの家庭科

《成績評価の方法・基準》

・試験 40%、提出物（レポート、ワークシート 等）40%、授業への積極的参加度 20%

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

課題について自分の考えをまとめておき、授業へ積極的に参加する。

家庭科指導法

3 年次（半期）

2 単位（講義）

担当 大野 節子, 横山 和子

《授業の概要》

1. 学習指導要領における家庭科の目標及び主な内容について、実践事例を通して理解する。2. グループワークを通して、目標達成のための指導方法について考える。3. 学習評価を含めて、教材研究を通して学習指導案を作成し、それを具現化した模擬授業を通して授業評価、授業改善を考える。

《学生の到達目標》

（1） 小学校学習指導要領に示された家庭科の目標や内容を理解する。1） 学習指導要領における家庭科の目標及び主な内容を理解している。2） 家庭科の学習評価の考え方を理解している。（2） 基礎的な学習指導理論を理解し、具体的な授業場面を想定した授業設計を行う方法を身に付ける。1） 家庭科の特性に応じた情報機器及び教材の効果的な活用方法を理解し、授業設計に活用できる2） 学習指導案を作成し、模擬授業の実施とその振り返りを通して、授業改善の視点が分かる。

《授業計画》

1. 小学校家庭科の目標と意義、内容
2. 学習指導要領の内容A「家族・家庭生活」の指導
3. 学習指導要領の内容B「衣食住の生活」の指導①
4. 学習指導要領の内容B「衣食住の生活」の指導②
5. 学習指導要領の内容C「消費生活・環境」の指導①
6. 学習指導要領の内容C「消費生活・環境」の指導②
7. 製作実習の指導（小物作り）
8. 授業作りと教材研究
9. 学習指導案の作成
10. 模擬授業の準備Ⅰ
11. 模擬授業の準備Ⅱ
12. 模擬授業及び協議会①
13. 模擬授業及び協議会②
14. 模擬授業及び協議会③
15. まとめと総括

《成績評価の方法・基準》

模擬授業・テスト 40%、レポートや提出物 40%、授業への積極的参加 20%

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・文部科学省「小学校学習指導要領解説家庭編（2020 年）」東洋館出版

《事前・事後学習》

・事前にテキストを読み、課題意識をもって授業に参加する。・主体的に取り組み、グループワークでは協力的に参加する。

生活科指導法

3 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 山下 豊， 香田 健治

《授業の概要》

学習指導要領に示される目標・内容・方法・評価など、生活科の基本的な考え方について、実践事例の分析を通して、理解する。生活科の意義と特質に基づく授業構想と単元指導計画、学習指導案の作成や学習指導の基礎的な考え方について理解を深める。模擬授業（ICT 活用を含む。）とグループワーク、ディスカッション、リフレクションなどを通して、生活科の授業改善の視点を身に付ける。

《学生の到達目標》

生活科の目標や学年目標・内容・方法・評価などを理解するとともに、全体構造を説明できる。実践事例の分析を通して、子供の実態を理解することの重要性を理解し、生活科の特性を生かした情報機器及び教材の効果的な活用の仕方を理解し、授業設計に応用できる。生活科の意義に基づく、単元指導計画及び学習指導案の構成を理解し、単元指導計画や学習指導案の作成方法を身に付けることができる。模擬授業の振り返りを通して、授業改善の視点を身に付けるとともに、考察することができる。

《授業計画》

1. オリエンテーション
2. 生活科創設の背景と経緯、現状と課題
3. 生活科の目標と内容の構造
4. 生活科の単元と授業づくりに関する指導上の留意点
5. 生活科の単元指導計画及び学習指導案の作成の留意点
6. 栽培を中心とした実践事例の分析
7. 地域環境を中心とした実践事例の分析
8. ものを使った遊びの実践事例の分析
9. 生活科の授業構想・指導案作成①
10. 生活科の授業構想・指導案作成②
11. 模擬授業の準備（組案の作成）
12. 模擬授業の準備（教材の作成）
13. 模擬授業①（発表と討論、振り返り）
14. 模擬授業②（発表と討論、振り返り）
15. 生活科における環境構成と学習評価

《成績評価の方法・基準》

模擬授業後のリフレクションシート（20%）、作成した年間指導計画及び指導計画（30%）、レポート（50%）を総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

・文部科学省「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総則編」東洋館出版社・文部科学省「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 生活編」東洋館出版社・生野・香田・高木・湯川編著「幼稚園・小学校教育の理論と方法」鼎書房

《参考書》

・「わくわく せいかつ 上」啓林館・「いきいき せいかつ下」啓林館

《事前・事後学習》

指定した教科書、参考書、資料等を通読しまとめること（1 時間）。配布した資料を参考にし、指導案等の作成をすること（1 時間）。授業後の振り返りをリフレクションシートに記述する（15 分）。

特別活動指導法

3 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 ★俵谷 好一， 仲山 正志

《授業の概要》

学校教育全体における特別活動の意義を理解し、「人間関係形成」・「社会参画」・「自己実現」の三つの視点や「チームとしての学校」の視点を持つとともに、学年の違いによる活動の変化、各教科等との往還的な関連、地域住民や他校の教職員と連携した組織的な対応等の特別活動の特質を踏まえた指導に必要な知識や素養を身に付ける。さらに、集団や人間関係に関する課題に対応できる実践力の基礎を身につける。

《学生の到達目標》

①学習指導要領を考察し、その特質と意義、目標、内容について理解することができる。②子どもを取り巻く課題について、事例を通して原因を考察することができる。③授業実践のための、指導目標、指導内容、評価について理解し、学習指導案を作成することができる。④模擬授業を通して、特別活動における実践力の基礎を培う。

《授業計画》

1. 特別活動を学ぶにあたって
2. 特別活動の意義と教育活動の中での特別活動の位置について
3. 学級活動について（話し合い活動・当番活動を中心に、その指導について）
4. 学級活動について（教科やその他の活動との関連について）
5. いじめ・不登校の問題（防止と対応、家庭、地域、関連機関との連携について）
6. キャリア教育と学級活動（指導の視点と事例、家庭、地域、関連機関との連携について）
7. 児童会活動について（組織や活動内容について）
8. 児童会活動について（学校における実際の取り組みとその指導について）
9. 学校行事について（目標・内容・年間計画の作成について）
10. 学校行事について（学校における実際の取り組みとその指導について）
11. クラブ活動について（目標・内容・年間計画の作成について）
12. クラブ活動について（学校における実際の取り組みとその指導について）
13. 特別活動の評価と学習指導要領
14. 特別活動の指導計画について
15. 授業の振り返り

《成績評価の方法・基準》

毎時間後に授業ノート提出する。期末にレポートの提出を求め総合的に評価する。評価の比率は授業ノート（40%）、期末レポート（60%）とする。

《授業で使用する教科書》

・「小学校学習指導要領特別活動編（平成 29 年告示）」東洋館出版社

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

これまで学んできた小学校特別活動を振り返ることから、子どもが楽しむ学校生活は何かと考えること。望ましい集団活動を通して、よりよい集団づくり・子ども達一人ひとりの居場所のある学級集団づくりとはも追究すること。

生徒指導

3 年次（半期）
1 単位（講義）
担当 福井 歩

《授業の概要》

現在、学校は多くの課題を抱えており、それらを解決するために生徒指導の充実が強く求められている。授業では、生徒指導の理論や内容について、理解するために必要な知識等と合わせて学ぶ。自分自身の経験（児童・生徒であった頃の経験、インターンシップ時の経験等）と結びつけて考え、理解することが大切なので、学んだことに関連する自分自身の経験を発表しあうグループワーク等を行う。また学校における問題・課題について知り、それらの解決していくための方策について自ら調べ考えることで、学びを深めて行く。

《学生の到達目標》

生徒指導の意義と原理について理解するとともに、実践的方法について学ぶ。生徒指導が、問題行動等に対する対応にとどまるものではなく、学校教育活動全体を通じて、全ての児童・生徒を援助・指導していくものであることを理解する。また、今日的な課題を把握し、生徒指導上、教員に求められる役割を理解するとともに、自ら考え、学びを深めて、今後も学び続けようとする姿勢にいたる。

《授業計画》

1. 生徒指導の意義と原理
2. 教育課程と生徒指導
3. 児童生徒の心理と児童生徒理解
4. 児童生徒理解の資料とその収集
5. 学校における生徒指導体制
6. 教育相談の進め方と連携
7. 生徒指導の進め方 児童生徒全体への指導
8. 生徒指導の進め方 個別の課題を抱える児童生徒への指導
9. 生徒指導に関する法制度等
10. 学校と家庭・地域・関係機関との連携
11. 「いじめ」問題①（いじめの理解）
12. 「いじめ」問題②（いじめを未然に防止するに）
13. 不登校問題
14. 「虐待」問題
15. はじめての生徒指導 学級担任になったら

《成績評価の方法・基準》

授業へのとりくみ・レポート（60%）・授業内容と関連した自分の経験をレポートにまとめる・授業内容と関連した自分の経験をグループで交流しあう。期末レポート（40%）・「はじめて担任したクラスの生徒指導をどのように進めるか」

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・「生徒指導提要」文部科学省

《事前・事後学習》

教育関連のニュースについて、内容をよく知り、教育課題に関する知識を豊かにしておく。文部科学省や各都道府県教育委員会、国立教育政策研究所のHPで「生徒指導」について調べておく。上記HP等を定期的にチェックし、特に興味関心のあること、重要であると考えたことについては、刊行物等を読むなどしてより深く知っておく。

進路指導論

3 年次（半期）
1 単位（講義）
担当 今西 幸蔵

《授業の概要》

キャリア教育や進路指導の意義や内容、基礎理論について、グループワーク等のアクティブラーニングをとおして理解する。また、キャリアについての諸要素やコンピテンス・レベルからの要請である社会人基礎等についての見識を深める。その際、ディスカッション等により他者の意見や考え方を学ぶように工夫する。さらに学校内外におけるキャリア教育や進路指導（外部機関と連携した課題解決型学習の導入）の在り方や進め方を理解し、具体的実践ができるような力量を身につける。特に自らの進路について説明できるプレゼンテーション能力（PP 等の ICT ソフトを活用）を養成することに留意する。

《学生の到達目標》

学生の到達レベルを以下の6点で示した。(1) キャリア教育や進路指導の意義や原理を理解する。(2) 学校の教育活動全体を通じたキャリア教育の視点と指導の在り方を習得する。(3) キャリア教育や進路指導に関係する学校内外の機関との連携の重要さと具体的な実践を理解し、自ら取り組むことができるようになる。(4) 進路に関わって、児童が抱える問題や課題を理解し、指導できるようになる。(5) 「社会人基礎力」や「就職基礎力」と呼ばれるグローバルな視点からのキャリアに関わる学力の内容を理解する。(6) キャリア・進路情報の提供や相談などの手法を知り、自らの進路について説明できるプレゼンテーション能力など、実際に活用できる力量を形成する。

《授業計画》

1. 生涯学習の視点からのキャリア教育の定義
2. キャリア教育の必要性と意義・内容の理解と関心の高揚
3. キャリア発達諸要素と職業観・勤労観の育成
4. キャリア教育推進のための学習環境の整備（A.L. 情報処理）
5. 学校内外におけるキャリア教育・進路指導支援
6. OECD によるコンピテンシーの提唱と社会人基礎力・就職基礎力
7. キャリア教育と進路指導の関係（A.L.）
8. 学校における進路指導の定義、必要性及び校内体制
9. 進路指導の基礎理論の知識・理解
10. 教育課程における進路指導の進め方
11. 進路指導の方法と技術の習得と実例に対する分析（情報処理）
12. 学級活動における進路指導とプレゼンテーション技法（A.L.）
13. キャリア・進路における児童の学習力の育成
14. キャリア・進路情報の収集・提供と進路相談の進め方（A.L.）
15. キャリア教育の動向と諸課題の解決に向けて

《成績評価の方法・基準》

以下に示すような内容の授業内課題と期末レポート、及び授業時のワークショップでの評価を含めて総合的に判断する。授業内課題（1）キャリア教育の意義、内容と原理について、授業内課題（2）保護者や関係機関との連携の意義と方法について、授業内課題（3）進路指導の意義、内容と原理について、授業内課題（4）学校における進路指導をどう組織するのか、期末レポート：進路に関する相談事例（以上各20%）

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・文部科学省「『小学校キャリア教育の手引き』」教育出版

《事前・事後学習》

シラバスで示した内容に沿って授業が進行する。授業毎に次時の学習内容を予告するので必ずキーワードについては予習して欲しい。また、思考力、判断力、表現力の育成に関わる学習や、探究を伴う学習については、振り返りシートを作成するので、各自で学習成果を確認して欲しい。当然のことであるが、単元毎に復習をすることを求める。

小学校英語

3 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 竹田 里香， 高橋 美由紀

《授業の概要》

英語指導に必要な第二言語習得理論、英語学の基礎を学ぶとともに、絵本やチャンツ・ナーサリーライムなどの歌を含む教材に触れ、異文化理解教育や QIL を学ぶ。また、評価を見据えた指導案を立て、模擬授業をグループで行い、フィードバックを通して自己省察し、小学校外国語活動・外国語科の授業で必要な事を学ぶ。

《学生の到達目標》

小学校における外国語活動・外国語の授業実践に必要な背景的な知識を身につける。小・中学校の連携も踏まえながら、小学校外国語活動・外国語科の授業を担当するために必要な知識、技能を身につける。以下が到達目標である。①小学校外国語教育の歴史を知り、外国語教育の意義を考える②外国語教授法について知る③絵本・チャンツ・ナーサリーライムなどについて学ぶ④異文化理解と QIL（教科横断型学習）について学ぶ⑤教材・教具について学ぶ⑥評価について理解し、指導案作成ができる⑦模擬授業を通して学びを自分のものにする

《授業計画》

1. 本授業のガイダンス、小学校外国語教育の歴史、小学校外国語活動・外国語科のめざすも
2. 第二言語習得理論、発達心理学
3. 外国語教授法① 教材研究 Hi, Friends! 1,2
4. 外国語教授法② 教材研究 Hi, Friends! 1,2
5. ティームティ칭の意義・クラスルームイングリッシュの役割
6. 絵本指導
7. 英語の歌、チャンツ、ナーサリーライム、マザーグース
8. 教材・教具
9. 評価
10. 指導案の作成方法と授業観察の観点
11. 異文化理解教育と QIL
12. 模擬授業と振り返り①
13. 模擬授業と振り返り②
14. 模擬授業と振り返り③
15. 模擬授業と振り返り④

《成績評価の方法・基準》

毎時ミニッツペーパー（授業参加度）20%、模擬授業（グループ）30%、指導案20%、小テスト15%、レポート15%

《授業で使用する教科書》

・樋口忠彦・加賀田哲也・泉恵美子・衣笠知子「新編小学校英語教育法入門」研究社（ISBN978-4-327-4109808）・文部科学省「Hi, Friends ! 1, 2」

《参考書》

・金森滋編著「小学校英語科教育法」成美堂・文部科学省「小学校学習指導要領解説 外国語編 外国語活動編」その他、授業内で適宜資料を配布する。

《事前・事後学習》

事前学習として、テキストの指定箇所を読んでくること。事後学習として、前週の学んだものを、自分の言葉で説明できるようにしておくこと。また最終の模擬授業にグループで協力して発表できるようにしておくこと。

英語指導法

3 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 前川 聖樹

《授業の概要》

・小学校で実施する「外国語活動」及び「外国語」の基本理念・目標・基本的及び多様な指導方法を身に付け、子どもたちの前で自信を持って英語を話す能力の育成・実力養成問題による英会話力等の向上

《学生の到達目標》

・「外国語活動」及び「外国語」の重要性・意義の理解 ・Team Teaching、授業準備・運営等で必要とされる英語力（特にクラスルーム・イングリッシュ）の習得・幅広い教材を使った指導法の理解・授業実践力、チームワーク、アクティブ・ラーニング等の習得・多様な指導方法（フォニックス等）の習得

《授業計画》

1. オリエンテーション、文科省「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」について
2. クラスルーム・イングリッシュ（その1）、英語力養成①
3. クラスルーム・イングリッシュ（その2）
4. クラスルーム・イングリッシュ（その3）、英語力養成②
5. 基本英会話（その1）
6. 基本英会話（その2）、英語力養成③
7. 中間試験テスト、文科省「研修ガイドブック」説明（その1）
8. 「研修ガイドブック」説明（その2）、英語力養成④
9. 文科省「研修ガイドブック」説明（その3）
10. 文科省「研修ガイドブック」説明（その4）、小テスト、英語力養成⑤
11. 模擬授業視聴及び合評
12. 「フォニックス」（その1）、英語力養成⑥
13. 「フォニックス」（その2）、英語検定
14. 年間指導計画、単元計画、学習指導案、評価方法について
15. まとめと振り返り

《成績評価の方法・基準》

レポート（課題提出含む）50%小テスト25%授業への取り組み25%

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

・事前に指定された学習内容を熟読すること・学習内容をノート等に記録すること

介護等体験

3 年次（半期）
1 単位（実習）

担当 ★高田 昭夫、 清田 岳臣

《授業の概要》

「介護等体験」を行う意義を理解し心構えを養う。さらに体験終了後には各自が自分の体験を振り返り、意味づけ、将来教員として体験をいかにか活かすかを考えることを目標とする。

《学生の到達目標》

「介護等体験」の事前・事後指導を行う。映像教材や施設の職員の方の講義、体験終了者の体験報告などにより、現場のイメージをつかみつつ体験に臨むことができるようにする。終了後は体験を振り返り、体験を教育実習や将来の教育活動に活かせるよう意味づける。

《授業計画》

1. オリエンテーション
2. 介護等体験の意義
3. 介護等体験で何を学ぶかー教師としての資質向上に向けて
4. 特別支援学校と特別支援教育について（1）ー障がいに対する理解
5. 特別支援学校と特別支援教育について（2）ー特別支援学校の実態
6. 高齢者福祉と社会福祉施設について（1）ー高齢者に関わるということ
7. 高齢者福祉と社会福祉施設について（2）ー高齢者福祉の現状
8. 介護等体験と取り組む留意点と心構え（1）ー社会福祉施設
9. 介護等体験と取り組む留意点と心構え（2）ー特別支援学校
10. 介護等体験の実態（1）ー社会福祉施設職員の方を招いて
11. 介護等体験の実態（2）ー特別支援学校教員の方を招いて
12. 介護等体験で学んだことー体験の振り返り（1）ー社会福祉施設
13. 介護等体験で学んだことー体験の振り返り（2）ー特別支援学校
14. 介護等体験で学んだことー体験を教育実習にどう活かすか
15. まとめ

《成績評価の方法・基準》

介護等体験報告レポート 45%、授業内レポート 55%

《授業で使用する教科書》

・現代教師養成研究会「教師をめざす人の介護等体験ハンドブック」大修館書店・全国特別支援学校校長会「豊かでありながらの介護等体験を得るために[インクルーシブ教育システム版]」編著 ジアース教育新社

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

学外施設での指導をはじめ時間外・学外の学修が含まれている。必ずオリエンテーションにて詳細を確認すること。準備事項を含む予習復習については、毎回指示する。基本的には体験先の情報を収集し事前の理解を深めること、および体験終了後の振り返りなどである。

卒業論文Ⅰ

3 年次（通年）
2 単位（演習）

担当 赤井 利行、 要 正子、 高橋 篤志、
★高田 昭夫、 井岡 瑞日、 ★敷 一裕、
★藤田 朋己、 渡辺 俊太郎、 佐伯 知子、
★松岡 宏明、 手良村 昭子、 ★田窪 豊、
高根 栄美、 金重 利典

《授業の概要》

演習参加者の多様な関心の中から自分にとって最も関心のあるものを卒業論文のテーマとして設定し、それを探求するにふさわしい方法論を身に付けることをめざす。また、3 年次に参加する保育・教育実習等の貴重な体験を、作成した学習指導案の検討や保育・教育実習等で学んだことの発表を通して、共有化するとともに、保育・教育者としての責任を自覚するように指導する。

《学生の到達目標》

・数ある関心の中から自分にとって最も意味のある関心に絞り込み、卒業論文のテーマを決めることができる。
・自分の卒業論文のテーマを探究するのにふさわしい方法論を見つけることができる。
・保育や教育者の在り方を真剣に考え、その責任の重さややりがいを実感することができる。

《授業計画》

1. この演習の進め方ーオリエンテーション（全体会）
2. 卒業論文を書くということ（全体会）
3. 発表の仕方、討議の仕方について概説（全体会）
4. 演習参加者の関心を出し合い、討議（各ゼミ）
5. 関心の最も高いものから順に討議のテーマを選ぶ
6. 演習参加者の発表と討議（1）
7. 演習参加者の発表と討議（2）
8. 演習参加者の発表と討議（3）
9. 演習参加者の発表と討議（4）
10. 演習参加者の発表と討議（5）
11. 演習参加者の発表と討議（6）
12. 演習参加者の発表と討議（7）
13. 演習参加者の発表と討議（8）
14. 春学期の演習のまとめ（全体会）
15. 総括
16. 卒業論文を書くということー再説（全体会）
17. 卒業論文のテーマの発表と討議（1）
18. 卒業論文のテーマの発表と討議（2）
19. 卒業論文のテーマの発表と討議（3）
20. 卒業論文のテーマの発表と討議（4）
21. 卒業論文のテーマの発表と討議（5）
22. 卒業論文のテーマの発表と討議（6）
23. 卒業論文のテーマの発表と討議（7）
24. 卒業論文のテーマの発表と討議（8）
25. 卒業論文のテーマの発表と討議（9）
26. 卒業論文のテーマの発表と討議（10）
27. 秋学期の演習のまとめ（全体会）
28. 卒業論文中間発表の準備（1）
29. 卒業論文中間発表の準備（2）
30. 総括・発表会

《成績評価の方法・基準》

授業内発表の内容 40%、授業への取り組み 40%、構想提出・発表 20% 『授業で使用する教科書・参考書』について記載してください

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

卒業論文を書くための事前・事後学習は、自己および毎回のゼミ生の発表内容の質疑応答を踏まえつつ、自己の卒業論文との内容を比較しながら、深めていくことにある。そのためには、常に、文献検索や新聞やインターネット検索を通じて、自己のテーマを深めていくことが大切である。

教育実習（幼）

3 年次（通年）
5 単位（実習）

担当 ★東城 大輔， 平野 俊一郎， 三輪 よし子

《授業の概要》

幼児教育者を目指す心構えを養い、幼稚園における学外指導を行う。また実習前の準備や、実習後の反省に関する振り返りを行う。特に実習においては、幼稚園の現場を経験し、園児や教職員と直に接し、子どもを指導するための心構えや様々な仕事の内容を体験し理解する。今まで大学で学んできた理論や技術に加え、実際の教育現場における体験を通して、自己の子ども観や教育観を深めていく。この授業は、アクティブラーニング（実習、フィールドワーク）を含めて実施する。実習は、幼稚園において原則 20 日間行う。

《学生の到達目標》

幼稚園の教育実習についての心構えや姿勢、準備など基本的なことを理解する。また、教育実習における目的や内容、方法などを、幼稚園教育の特質を実際的に理解することができるようになることや、現場での実習を振り返り、自己の保育・教育観の形成に役立たせる力を身につける。また事後学習における振り返りに際しては ICT を活用した資料作成に臨み、発表を通してプレゼンテーション技能等の向上を目指す。

《授業計画》

1. オリエンテーション
2. 実習指導についての概要の理解と実習生の態度
3. 実習の目的（内容の理解や実習への自覚と責任について）
4. 実習の方法（子どもの姿の予想や事前準備等について）
5. 幼稚園の理解（幼稚園教育要領の基本的理解）
6. 幼稚園の理解（子どもの発達と保育内容について）
7. 実習目標の明確化と実習計画の作成
8. 模擬保育の実施（1）
9. 模擬保育の実施（2）
10. アクティブラーニング（フィールドワーク）にて視察・調査し、成果報告書を作成する
11. アクティブラーニング（フィールドワーク）にて視察・調査し、成果報告書を作成する
12. アクティブラーニング（フィールドワーク）にて視察・調査し、成果報告書を作成する
13. アクティブラーニング（フィールドワーク）にて視察・調査し、成果報告書を作成する
14. 実習園に対する理解（実習園の一日の流れ等について）
15. 実習への心構え（課題を深めることや目標の共有等について） 1
16. 実習先へのお礼状作成方法
17. 実習の振り返り
18. 幼稚園実習報告会（1）および個人面談
19. 幼稚園実習報告会（2）および個人面談
20. 幼稚園実習報告会（3）および個人面談
21. 幼稚園実習報告会（4）および個人面談
22. 幼稚園実習報告会（5）および個人面談
23. 幼稚園実習報告会（6）および個人面談
24. アクティブラーニング（フィールドワーク）にて視察・調査し、成果報告書を作成する
25. アクティブラーニング（フィールドワーク）にて視察・調査し、成果報告書を作成する
26. アクティブラーニング（フィールドワーク）にて視察・調査し、成果報告書を作成する
27. アクティブラーニング（フィールドワーク）にて視察・調査し、成果報告書を作成する
28. 幼稚園実習における自己評価
29. 幼稚園実習についてのまとめ
30. 総括

《成績評価の方法・基準》

実習先からの評価や実習日誌（60%）、指導案やお礼状等の提出物（40%）

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・文部科学省「幼稚園教育要領解説」フレーベル館・内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」フレーベル館

《事前・事後学習》

事前学習：実習園について調べておくなど、実習における課題や目標などを明確にしておく。
事後学習：授業での学習の振り返りや、他学生と反省・課題などの情報交換を行い、自身の学びを深める。

教育実習（小）

3 年次（通年）
5 単位（実習）

担当 ★俵谷 好一， 浅野 孝平， 山下 豊， 藤田 善正

《授業の概要》

小学校の教育者を目指すための授業である。この授業は、アクティブラーニング（実習、フィールドワーク）を含め実施する。まず、教育実習に向けて各自が実習課題を設定して、子ども観や授業への考え方を深める準備をする。続いて、小学校における 20 日間、160 時間の教育実習に臨み、子どもの学習や生活、また、指導者の指導方法の実態を観察しながら担当指導者の下、教育のあり方、各教科の指導方法について学ぶ。最後に評価表をもとに実習生活を振り返り、教師としての姿を見つめる機会とする。

《学生の到達目標》

小学校教育実習で「先生」として子どもにかかわり、指導者の学級経営、教科等の指導の実際を学びながら、小学校教育の現状や、子どもの実態、指導の方法等を把握する。さらに、自らの教師としての資質を磨き、指導力を高めるためにはどうすればよいかを考えることができることを目標とする。

《授業計画》

1. 小学校教育実習のオリエンテーション
2. 小学校実習対象児童理解Ⅰ（低学年）
3. 小学校実習対象児童理解Ⅱ（中学年）
4. 小学校実習対象児童理解Ⅲ（高学年）
5. 学習指導要領についてⅠ
6. 学習指導要領についてⅡ
7. 実習課題の明確化と実習計画の作成
8. 学習指導の内容と方法Ⅰ
9. 学習指導の内容と方法Ⅱ
10. 実習にむけての演習Ⅰ（指導案作成・模擬授業発表等）
11. 実習にむけての演習Ⅱ
12. 実習にむけての演習Ⅲ
13. 実習にむけての演習Ⅳ
14. 実習にむけての演習Ⅴ
15. 事前指導の総括
16. 小学校実習総括Ⅰ（フィールドワークの視察・調査の課題設定）
17. 小学校実習総括Ⅱ
18. 小学校フィールドワークⅠ（視察・調査に基づく成果報告書の作成）
19. 小学校フィールドワークⅡ
20. 小学校フィールドワークⅢ
21. 小学校フィールドワークⅣ
22. 小学校教育の現状と課題Ⅰ（ICT の活用・外国語・プログラミング学習等）
23. 小学校教育の現状と課題Ⅱ
24. 小学校教育の現状と課題Ⅲ
25. 学習指導の教科等の内容と方法Ⅰ（実習評価開示）
26. 学習指導の教科等の内容と方法Ⅱ
27. 小学校教育と教師の在り方Ⅰ（グループワーク）
28. 小学校教育と教師の在り方Ⅱ
29. 小学校教育と教師の在り方Ⅲ
30. 全体総括

《成績評価の方法・基準》

実習先の評価・日誌等（40%）授業での取り組みや記録・提出物等（60%）

《授業で使用する教科書》

・「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）」東洋館出版社

《参考書》

・「小学校教育実習ハンドブック（改訂版）」大阪総合保育大学

《事前・事後学習》

事前学習：実習校での本実習を有意義なものにするために、実習の意義や心構えを学ぶ。事後学習：実習を振り返り、教職の魅力を感じとる。さらに「教職実践演習」の講義へとつないでいく。

知的障害者の心理・生理・病理

3 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 ★高田 昭夫

《授業の概要》

基本的な医学的知識と知的障害の疾患の代表的なものについて、合併する肢体不自由、病弱領域も一部含めて講述する。また、知的障害者の心理学的な側面に触れ、その障害のある幼児児童をどのように理解するべきかの基本を述べる。

《学生の到達目標》

大脳の解剖・生理の基礎的知識を学ぶ。知的障害の原因となる代表的な疾患を、合併する肢体不自由、病弱領域も一部含めて理解する。知的障害者の心理について理解を深める。

《授業計画》

1. 人体の遺伝学と発生学
2. 大脳の解剖・生理（1）表面
3. 大脳の解剖・生理（2）中心部
4. 知的障害をきたす疾患（遺伝性疾患）
5. 知的障害をきたす疾患（染色体異常）
6. 知的障害をきたす疾患（胎芽病、胎児病、周産期疾患）
7. 知的障害をきたす疾患（難治てんかん）
8. 知的障害をきたす疾患（精神遅滞を伴う自閉症）
9. 知的障害者の知能の評価と特徴
10. 知的障害者の概念・思考の特徴
11. 知的障害者の学習能力の特徴
12. 知的障害者の性格・行動の特徴
13. 知的障害者の職業
14. 知的障害者の家族の心理
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

レポートや提出物（60%）、課題・小テスト（40%）として評価を行う。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前に、各回のテーマと関連した情報に関心を持ち、調べる。事後は授業内容と関連する書籍などを読み、学びを深める。

肢体不自由者の心理・生理・病理

3 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 羽多野 わか

《授業の概要》

肢体不自由者の病態理解に必要な医学的基礎知識だけでなく、合併する知的障害や発達障害、最近増加している医療的ケア児についても講義する。肢体不自由者の心理を概説し、当事者や家族の支援の在り方をアクティブ・ラーニングを通して考える。また、脆弱ゆえに死を意識して生きていくことがどういふことか、死から生をみつめることを通して学ぶ。人生をより良く生きるためのアドバンスケアプランニング（ACP）についても紹介する。

《学生の到達目標》

病態理解に必要な医学的基礎知識、合併する知的障害や発達障害、医療的ケア児について理解を深める。参考図書や講義、ディスカッションから当事者や家族の思い・考えを知る。死から生をみつめることで、良く生きるとはどういうことかを自分なりに考えたとともに、どれか正しいという正解を求めるのではなく多様な考えがあることを知る。

《授業計画》

1. 肢体不自由者をきたす神経疾患（脳性麻痺）
2. 肢体不自由者に多い合併症（てんかん）
3. 肢体不自由者、重症心身障がい児者の生活の実態
4. 肢体不自由者の心理（当事者としての歩み）
5. 肢体不自由者と家族の心理的支援
6. 肢体不自由者へのリハビリについて
7. 正常発達の見方、正常からの逸脱について①
8. 正常発達の見方、正常からの逸脱について②
9. 児童発達支援について①（モンテッソーリ教育の哲学・理論）
10. 児童発達支援について②（モンテッソーリ教育の実践と障がい児への応用）
11. 児童発達支援について③（ホスピタルプレイスペシャリストの活動）
12. 医療的ケア児について
13. アドバンスケアプランニング①（ACP）
14. アドバンスケアプランニング②
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

レポートや提出物（60%）、グループワークやディスカッションを含む授業への取り組み姿勢（40%）として評価を行う。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・東野圭吾「人魚の眠る家」幻冬文庫・渡辺一史「こんな夜更けにバナナかよ 筋ジス・鹿野晴明とボランティアたち」文春文庫

《事前・事後学習》

参考図書などから当事者や家族の思いを知り学習に臨むのが好ましい。

病弱者の心理・生理・病理

3 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 村上 佳津美

《授業の概要》

病弱者と言われる子どもが患っている病気の代表的なものについて、幼保育・学校場で必要な医学的知識について勉強する。同時に医療者との連携の仕方、園や学校でどのように見ていくのか、彼らの心理状態、親の園・学校への要望などにどのように応えていくのかを学ぶ。

《学生の到達目標》

基本的な医学的知識を習得する。合併して出現する二次的障害、病児の心理、級友の反応などを適切に受け止める能力を育てる。

《授業計画》

1. 感染症
2. 先天性疾患（1）
3. 先天性疾患（2）
4. 重症の慢性疾患
5. 軽度～中等度の慢性疾患
6. 致死性疾患
7. 病児の教室での言動
8. 発達障害
9. 発達障害の親への対応
10. 病児の自尊感情
11. 病児の将来を考える
12. 病児の家族（同胞も含め）との関わり
13. 発達障害児を扱った映画鑑賞（レポート提出）
14. 身体的疾患を扱った映画鑑賞（レポート提出）
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

レポートや提出物（60%）授業への取り組み（40%）で評価する

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

高校までの授業や本学での一般授業で習った身体や病気の知識を復習しておく。授業で習った内容を思い出して、周囲や実習をする園・学校でできるだけ活用する。

知的障害教育論Ⅰ

3 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 ★高田 昭夫

《授業の概要》

知的障害教育への素養を育む契機となるように、知的障害教育の歴史・制度、現状や特色と今日的な課題、教育課程、個別的教育支援計画について講述する。

《学生の到達目標》

知的障害教育の歴史と現状と課題を知る。知的障害教育における教育課程と個別的教育支援計画の実際を理解する。

《授業計画》

1. 知的障害教育の歴史
2. 知的障害教育の現状と課題（1）現状
3. 知的障害教育の現状と課題（2）課題
4. 知的障害教育の現状と課題（3）まとめ
5. 知的障害教育の教育課程（1）背景
6. 知的障害教育の教育課程（2）実際と展開①学習指導要領と教育課程
7. 知的障害教育の教育課程（3）実際と展開②自立活動
8. 知的障害教育の教育課程（4）課題
9. 知的障害教育の教育課程（5）まとめ
10. 知的障害教育における個別的教育支援計画（1）歴史的背景
11. 知的障害教育における個別的教育支援計画（2）実際と課題①個別的教育支援計画と教育
12. 知的障害教育における個別的教育支援計画（3）実際と課題②実態把握の方法
13. 知的障害教育における個別的教育支援計画（4）実際と課題③関係機関等との連携
14. 知的障害教育における個別的教育支援計画（5）個別的教育支援計画の作成演習
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

課題への取り組み・討議への参加状況 40%、レポート提出 60%によって総合的に判断する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

アクティブラーニングを多く取り入れた講義形態による学び合いで実施するため、より学びを深めるために事前準備、授業時の他者との交流、授業後の振り返り、自己評価が重要である。

肢体不自由教育論Ⅰ

3 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 ★高田 昭夫

《授業の概要》

肢体不自由教育への素養を育む契機となるように、肢体不自由教育の歴史、現状と課題、教育課程について概説する。その上で、障害の状態を身体・知的側面などから多角的に把握し、適切な指導と必要な支援を行うことを具体的な指導例と個別の指導計画の作成を取り上げて講述する。

《学生の到達目標》

肢体不自由教育の歴史と現状について総合的に学び、教育課程と指導の実践について基本的事項を理解する。肢体不自由児の障害の状態と対応について理解し、説明することができる。

《授業計画》

1. 学校教育における肢体不自由児の実態
2. 肢体不自由教育の歴史と現状
3. 肢体不自由教育の実践—特別支援学校における教育の実践—
4. 肢体不自由教育の教育課程
5. 自立活動の指導
6. 個別の教育支援計画と個別の指導計画
7. 肢体不自由児の指導法（1）身体の動きの指導
8. 肢体不自由児の指導法（2）コミュニケーションの指導
9. 肢体不自由児の指導法（3）認知特性に対応した指導
10. 肢体不自由児の指導法（4）各教科の指導
11. 肢体不自由児のキャリア教育と移行支援
12. 個別の指導計画の作成（1）実態の把握と課題の整理
13. 個別の指導計画の作成（2）目標と指導内容の設定
14. 個別の指導計画の活用—学習指導案の作成とその評価—
15. 総括—授業の振り返りと肢体不自由児教育における重要事項の再確認

《成績評価の方法・基準》

課題への取り組み・討議への参加状況 40%、レポート提出 60%によって総合的に判断する。

《授業で使用する教科書》

・安藤隆男 藤田継道「よくわかる肢体不自由教育」ミネルヴァ書房

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

アクティブラーニングを多めに取り入れた講義形態による学び合いで実施する。より学びを深めるために事前準備、授業時の他者との交流、授業後の振り返り、自己評価が重要である。

病弱教育論

3 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 丹羽 登，平賀 健太郎

《授業の概要》

病弱教育への素養を育む契機となるように、病弱教育の歴史、現状と課題、教育課程、個別の教育支援計画および指導の実践について講述する。

《学生の到達目標》

病弱教育の歴史と現状と課題を知る。病弱教育の教育課程について理解を深める。個別の教育支援計画と指導計画の実践を理解する。

《授業計画》

1. 病弱教育の歴史
2. 病弱教育の現状と課題（1）現状
3. 病弱教育の現状と課題（2）課題
4. 病弱教育の教育課程（1）学習指導要領と教育課程
5. 病弱教育の教育課程（2）自立活動
6. 病弱教育の教育課程（3）教育実践の具体例
7. 復学を視野に入れた教育支援
8. 病弱教育の教育課程（4）課題とまとめ
9. 病弱教育における個別の教育支援計画（1）実態把握の方法
10. 病弱教育における個別の教育支援計画（2）関係機関等との連携
11. 病弱教育における個別の教育支援計画（3）個別の教育支援計画の作成・演習
12. 病弱教育における個別の指導計画の説明と作成・演習
13. 病弱児の指導の在り方と指導事例
14. 職業教育と進路指導
15. 情報機器等を活用した指導

《成績評価の方法・基準》

レポートや提出物（60%）、授業への取り組み（40%）として評価を行う。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・全国特別支援学校病弱教育校長会編著「病気の子どものための教育必携」ジアース教育新社

《事前・事後学習》

各回の内容について講義前には概要を調べ、講義終了後は復習を行い、また関連書籍等を読み学びを深めること。

視覚障害者の心理・生理・病理

3 年次（半期）
1 単位（講義）
担当 村上 佳津美

《授業の概要》

視覚に関する医学的知識を学ぶ。視覚器の解剖・生理・機能など基本的知識を得た後、彼らの世界をどのように理解するのか考える。

《学生の到達目標》

基本的な医学的知識を習得する。合併して出現する二次的障害、病児の心理を理解すると同時に、級友の補助などの指導を自ら考えるようにする。

《授業計画》

1. 視覚の意味・多様な役割
2. 視覚器の解剖・生理
3. 視覚機能の評価
4. 視覚障害を引き起こす原因
5. 視覚障害になる病気
6. 感覚としての視覚の意味
7. 視覚障害の程度による対応の違い
8. ヘレン・ケラーに学ぶ視覚障害に関わる問題（映画『奇跡の人』を使用）

《成績評価の方法・基準》

レポートや提出物（60%）授業への取り組み（40%）で評価する

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

自ら「盲」状態を経験してみる。視覚だけでなく他の感覚の重要性を自覚して生活していく。

聴覚障害者の心理・生理・病理

3 年次（半期）
1 単位（講義）
担当 安達 康貴

《授業の概要》

聴覚器の解剖・生理、聴力検査法、聴力障害の原因疾患について講述する。また、聴覚障害者の心理について概説する。

《学生の到達目標》

聴覚障害についての医学的な基本事項について理解する。聴覚障害者の心理について理解を深める。

《授業計画》

1. 聴覚器の解剖・生理
2. 聴力検査と診断法
3. 聴覚障害の原因疾患
4. 聴覚障害児の言語・認知発達
5. 聴覚障害児の学力と社会性の発達
6. 聴覚障害者の心理的問題
7. 聴覚障害者の自我発達と障害受容
8. 聴覚障害者の発達課題（家庭、学校、地域社会）

《成績評価の方法・基準》

レポートや提出物（60%）、授業への取り組み（40%）として評価を行う。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前学習として、聴覚情報の保障や学習環境の整備について、自らが支援者として必要だと考えられる事柄を整理する。病理、生理、心理の観点から、聴覚障害について学習した後の事後学習では、支援者が環境整備について抱きやすい誤解について整理し、全体の講義を通して学習する前と後でどのように自らの認識が変化するか確かめ、聴覚障害者の適切な理解のためにどのような障害理解が必要となるのか理解を深める。

視覚障害教育論

3 年次（半期）
1 単位（講義）
担当 金森 裕治

《授業の概要》

実態把握に基づく視覚障害児の三大不自由（歩行・日常生活動作・文字処理）に対する指導内容や指導方法について論じる。そして、視覚支援学校に在籍する児童生徒の実態（障害の重度重複化・障害の多様化・少人数化等）と視覚障害教育の現状と課題にふれ、今後の視覚障害教育の在り方について検討する。

《学生の到達目標》

1. 視覚障害児の三大不自由に対する指導内容や指導方法（ICT の利活用・マルチメディア DAISY 等）について自立活動や他の教科・領域等との連携の必要性を学ぶ。 2. 視覚障害教育の歴史から視覚障害者の職業の現状について理解する。 3. 視覚障害教育の現状と課題等に関する基礎的な知識・理解を得る。

《授業計画》

1. 視覚障害の定義及び原因
2. 視覚障害教育の歴史
3. 視覚障害教育の教育課程の変遷
4. 視覚障害児の実態把握と指導法（視覚管理と障害受容）
5. 視覚障害児に対する文字の読み書き指導法（点字・マルチメディア DAISY 等）
6. 視覚障害理解教育と実践事例
7. 視覚支援学校のセンターが機能と個別の指導計画・個別の支援計画等
8. 視覚障害教育の現状と課題（専門性の維持・継承等）、期末レポート提出

《成績評価の方法・基準》

コミュニケーションカードの内容（50%）とレポート（50%）に基づいて評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前に点字の基礎基本を理解しておくこと。毎回の「コミュニケーションカード」の記載内容について事後学習を行う。

聴覚障害教育論

3 年次（半期）
1 単位（講義）
担当 杉田 律子

《授業の概要》

聴覚障害教育の歴史、教育課程と内容、方法の概要を学び、聴覚障害教育の現状と課題について学ぶ。また、聴覚障害児を取り巻く教育と社会の今日的問題について学ぶ。

《学生の到達目標》

聴覚障害教育の歴史、教育課程と内容、方法の概要を理解し、聴覚障害教育の現状を知り、課題について理解を深める。また、聴覚障害児を取り巻く教育と社会の今日的問題について問題意識を持ち、解決に向けた考察を深めることを目標とする。

《授業計画》

1. 聴覚障害の概要と子どもの発達への影響
2. 聴覚障害教育の歴史
3. 聴覚障害教育の教育課程
4. 聴覚障害教育の実践①障害の理解
5. 聴覚障害教育の実践②言語指導
6. 聴覚障害教育の実践③学習支援
7. 聴覚障害教育の実践④自立活動
8. 聴覚障害児の心理的援助と個別の指導計画

《成績評価の方法・基準》

毎回の授業内で実施する単元ごとの課題（40%）2 回のレポート（60%）で評価を行う。基礎的な知識の理解し、解決能力をはかる。

《授業で使用する教科書》

・守屋國光「特別支援教育総論」風間書房

《参考書》

・玉村公二彦ら「キーワードブック特別支援教育」クリエイツかもがわ

《事前・事後学習》

集中講義となるため、事前にテキストの聴覚障害に関する章をよく読んでおくこと、また振り返りのレポートに真摯に取り組むこと。

児童保育学科 4 年次

社会学

4 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 佐川 宏迪

《授業の概要》

私たちは、教育現象について考えたり議論しようとするとき、どのような教育実践が「望ましいのか」あるいは「望ましくないか」という視点に立ってしまいがちである。だが、教育現象について考え、議論するには、そもそも何が起きているのかを分析的に把握することがまず求められる。こうした作業には社会学が有効である。そこで本講義では、こうした姿勢を身につけることを目指し、私たちが経験してきた身近な教育現象を社会学の視点から解説していく（なお、授業計画および講義形式は受講者数や進捗状況等をかんがみて調整・変更することがある。またゲストを招聘することがある。）。

《学生の到達目標》

まずは社会学的な発想・視点とはどのようなものであるのかを理解する。そのうえで、さらに各自の身の回りの教育現象を社会学的な視点から論じることができるようになることを目指す。

《授業計画》

1. 授業計画および内容、評価方法の説明、次回以降に向けての準備等
2. 教育現象を社会学的な視点からとらえるとはどのようなことか理解する
3. 「能力がある」とはどういうことか、常識的理解から距離を置いて考えてみよう
4. 就職できるのは能力があるからか学歴があるからか、学校の「機能」について考えよう
5. 「コミュニケーション力」や「コネ」などをどのようにとらえればよいか考える
6. 学校での「成功」と文化が関係しているとはどういうことか、文化の重要性を考える
7. 「反学校文化」はなぜかとして形成されるのかを考える
8. 「ヤンチャな生徒」との関係性について考える
9. 教師の多忙化問題を考える
10. いじめ問題をとらえるための視点の多様性について学ぶ
11. 学校の「馴染み寺」である保健室について考える
12. 「発達障害」のように児童・生徒の問題を医療の対象ととらえることについて考える
13. 教育や子どもの「問題」を語ることがよらむ危うさについて考える
14. 不登校や高校中退を経験した生徒の背後にどのような困難があるのかを考える
15. レポート提出と講義のまとめ

《成績評価の方法・基準》

毎回の振り返り用紙の内容・授業参画度 20% 期末レポート 80%

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・酒井朗・中村高康・多賀太「よくわかる教育社会学」ミネルヴァ書房・長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・町村敬志「社会学（New Liberal Arts Selection）」有斐閣

《事前・事後学習》

参考書などを用いて次回学習するテーマに関連する箇所を目を通し、自分なりにどのように理解したか、また自身の経験に照らして何を考えたか、述べられる程度に準備しておく。また聴講後は、そのテーマについてどのような発見があったか、また教育現場でどのように生かそうか考えてみる。

生活環境論

4 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 ★藪 一裕

《授業の概要》

私たちの周囲を取り巻く地域的な生活環境の現状と問題点、および地球環境を改善するための方法と、私たちができることについて学び、考える。特に、教育学の立場から、環境教育の入門的講義を行い、幼稚園や保育所、小学校教育における指導や授業実践に活かすことができるような授業方法について学ぶ。

《学生の到達目標》

生活環境と地球環境の現状について、一定の基礎知識を得て、その改善策である環境教育について歴史や概念を学ぶ。そして、実際に幼稚園教諭や保育者、小学校教員になった場合に、自身で環境教育の授業を組み立てることができる知識と技術、態度を身につける。

《授業計画》

1. オリエンテーション、身近な生活環境について考える
2. 地球環境問題の現状と課題
3. 生活環境問題の解決方法について考える
4. 地球環境の生活環境問題の解決方法について考える
5. 生活環境を改善するための環境教育の取り組み
6. 環境教育の歴史と理念
7. 公害教育と生活環境論
8. 自然保健教育と生活環境論
9. 幼児期の環境教育のあり方について
10. 小中学校生活科・家庭科における環境教育の展開方法
11. 幼児期の環境教育の一環として、森のようちえんの紹介
12. ワークショップ形式による生活環境の改善方法の学び
13. パネルディスカッション形式による生活環境の改善方法の学び
14. サスティナブル（持続可能）な社会を目指す教育のあり方を考える
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

レポート 50%、授業への取り組み（授業内レポート、リアクションペーパー、グループディスカッション、グループによるプレゼンテーション） 50%。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・授業で配付する。

《事前・事後学習》

大気汚染、水質汚染、ゴミ問題、悪臭、振動、騒音などの生活環境問題について、事前学習を指示する。新聞、雑誌、文献、Web 検索などにより、身近な生活環境問題を発見し、解決方法について考える。

総合保育論

4 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 高根 栄美

《授業の概要》

各履修者が、学びの総括のひとつとして、総合保育の視点から整理し、子ども・児童のあり方、その支援のあり方について広い視野からとらえ直すことを目的とする。子ども・児童を取り巻く諸問題と保育教育の諸課題にせまる多様な学問的アプローチを提示解説し、保育所、幼稚園、こども園と小学校の接続の問題と実状を踏まえ、保育実践を創造することに取り組む。また、子どもの生活や健康に関わる諸問題を取りあげ、保育実践の最新研究と課題を学んだうえで「総合保育の視点」とはどのようなものか、各履修者が考える内容を共有する。

《学生の到達目標》

1. 現代の保育教育問題についての認識を深める。2. 保育者・教員など子ども・児童にかかわる専門職の仕事の意義と今日的課題を述べることができる。3. 1. 2. に関して、コメントシート記入に際し自分の課題として考え述べることができる。

《授業計画》

1. 子どもを取り巻く諸問題にせまる学問的アプローチ
2. 子ども・子育て支援制度とさまざまな地域子育て支援
3. 子どもと児童の施設や保育とは
4. 幼保と小学校の接続の問題と実際
5. 保育実践を創造する：全体的な保育の計画、教育課程と指導計画
6. 保育実践を創造する：子育ての支援者の一員として
7. 父母の働き方や生活と保育の問題
8. 日本の教育課題これからの保育・教育を通して育てたいもの
9. 子どもの生活と健康の諸問題
10. 子ども・児童の生活を保障すること
11. 子どもと保育の最新研究と課題①保育者のキャリア形成
12. 子どもと保育の最新研究と課題②乳児の保育 わらいと内容
13. 子どもと保育の最新研究と課題③乳児の保育 援助のタイプ
14. 子ども・児童を支援する①総合保育の視点とは
15. 子ども・児童を支援する②総合保育の視点（レポート作成と共有）

《成績評価の方法・基準》

講義・授業内容についてのコメントシート記述（70%）、およびレポート提出と内容（30%）で評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・文部科学省「幼児理解に基づいた評価 平成31年3月」チャイルド本社・厚生労働省「子どもを中心に保育の実践を考える～保育所保育指針に基づく保育の質向上に向けた実践事例集～」厚生労働省 HP 内5保育所保育指針関係に掲載・社会福祉法人日本保育協会 監修／大方美香 編著「失敗から学ぶ 保護者とのコミュニケーション（保育わかれBOOKS）」中央法規

《事前・事後学習》

事前学習は、教科書や毎回の参考資料を読み、保育実践上の課題が何かを理解し準備する。事後学習は、授業内容を整理したうえで、各自の実践者としての課題を論述メモとしてまとめる。

家庭支援論

4 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 佐伯 知子

《授業の概要》

現代社会における保育者の役割は多様化し、家庭支援をめぐっても高度な専門性が求められている。この授業では、多様な事例について討議をしながら、現代社会の家庭を取り巻く状況を理解し、さまざまなニーズに応じた支援のあり方について考える。

《学生の到達目標》

・家庭を取り巻く歴史的・社会的状況について理解する。・子育て家庭への支援体制について理解する。・討議を通じて、自分自身の考えを他者に伝える力、多様な価値観を受け入れる姿勢を身につける。

《授業計画》

1. オリエンテーション
2. 家庭支援とは何か
3. 家庭を取り巻く歴史的状況
4. 家庭を取り巻く社会的状況①
5. 家庭を取り巻く社会的状況②
6. 家庭を取り巻く制度的状況
7. 子育て家庭への支援体制①
8. 子育て家庭への支援体制②
9. 保育所入所児童の家庭への支援①
10. 保育所入所児童の家庭への支援②
11. 地域子育て家庭への支援①
12. 地域子育て家庭への支援②
13. 諸外国の事例①アジア
14. 諸外国の事例②欧米
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

授業に取り組む姿勢（50%）、レポート等の提出物（50%）。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

・日ごろから新聞を読むなどして時事問題に関心に向け、自分の考えを明確にする努力をすること。

保育内容総論Ⅰ

4 年次（半期）
1 単位（演習）
担当 武田 淳

《授業の概要》

子どもの生活は遊びであり、遊びながら総合的に心身が発達していく。「保育内容」とは、保育所や幼稚園において保育の目標を達成するために展開されるすべての内容を意味するものであり、その内容は「健康・人間関係・環境・言葉・表現」の5つの領域で示されている。各領域ごとの内容がこの科目を通して総合的に関連づけられるよう示唆するとともに、子ども理解、保育方法、内容の歴史の変遷等を学びながら、現代の保育を理解し、現場が抱える課題について考察することを目指していく。

《学生の到達目標》

各領域を総合的に理解し、保育の全体構造の理解に基づいて、実践に即した子どもの理解や保育方法について総合的に捉える視点を養い、また理解する。①幼児教育の基本を踏まえ、幼児教育、子ども、その指導に対する考え方を理解する。②保育の歴史的な流れを踏まえ、現在の保育内容を理解する。③子どもを取り巻く社会環境、家庭環境を理解し、幼児教育の在り方を考察できるようになる。

《授業計画》

1. オリエンテーション
2. 保育内容を総合的にとらえる（幼児教育の基本）
3. 保育内容を総合的にとらえる（保育思想1）
4. 保育内容を総合的にとらえる（保育思想2）
5. 幼児の発達を理解する
6. 幼児の発達（環境構成と指導）
7. 保育の変遷を理解する（戦前1）
8. 保育の変遷を理解する（戦前2）
9. 保育の変遷を理解する（戦後1）
10. 保育の変遷を理解する（戦後2）
11. 現代保育の課題を考える（社会環境）
12. 現代保育の課題を考える（保護者理解）
13. 現代保育の課題を考える（保育の多様性）
14. 保育環境への実践と考察
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

学期末レポート（60%）、小課題と授業への取り組み（40%）

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・民秋言・狐塚和江・佐藤直之編著「新保育ライブラリ保育内容総論」北大路書房

《事前・事後学習》

授業の都度資料を配布するのでそれを含め復習を行うこと。

保育内容総論Ⅱ

4 年次（半期）
1 単位（演習）
担当 武田 淳

《授業の概要》

保育内容（総論Ⅰ）で学んだ内容を踏まえて、健康、人間関係、環境、言葉、表現といった領域が子どもの生活や遊びにどのように関連していくのか総合的にとらえながらも、その上で、それぞれのテーマに即した演習、グループワークを行い、子どもへの指導や援助について討議、考察していく（アクティブラーニング）。また、個人研究発表を行うことで、自主学習に基づいて学習したことを、より考察し研究を深めていく。

《学生の到達目標》

保育内容を総合的に関連させながら、子どもの生活や遊びを、また保育実践する上での保育者の指導や援助についてを、演習、発表、討議を通して理解することを目指す。そして子どもに携わる者として「実践しながら考察する」力をより高めていくことを目指す。

《授業計画》

1. オリエンテーション
2. 身近は素材を使って遊びを考える（1）
3. 身近は素材を使って遊びを考える（2）
4. 「健康」からとらえる保育内容
5. 「人間関係」からとらえる保育内容
6. 「環境」からとらえる保育内容
7. 「言葉」からとらえる保育内容（1）
8. 「言葉」からとらえる保育内容（2）
9. 「表現」からとらえる保育内容（1）
10. 「表現」からとらえる保育内容（2）
11. 年中行事・園内行事からとらえる保育内容
12. 個人発表
13. 個人発表
14. 個人発表
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

個人発表と学期末レポート（50%）、小課題と授業への取り組み（50%）

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・民秋言・狐塚和江・佐藤直之編著「新保育ライブラリ保育内容総論」北大路書房

《事前・事後学習》

授業の都度資料を配布する。授業内容を復習すること。「実践しながら考察する」ことを念頭におき、より主体的な授業参加を求める。

在宅保育

4 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 佐伯 知子

《授業の概要》

家庭訪問保育は、乳幼児の生活の基盤である家庭で保育を行うという点で、保育所をはじめとする施設型の集団保育とは異なっている。この授業では、家庭訪問保育についての基本的な考え方や、職務を遂行する上で必要となる具体的事柄について、グループワークを交えつつ学んでいく。家庭訪問保育者として必要な知識や技術を習得するだけでなく、保育ニーズが多様化する現代において家庭訪問保育に求められることは何なのか、自分なりに考えを深めていってほしい。

《学生の到達目標》

①家庭訪問保育の役割や法的責任について知る。②家庭訪問保育者として必要な知識や技能を身につける。

《授業計画》

1. オリエンテーション
2. 家庭訪問保育とは何か
3. 家庭訪問保育の実際
4. 家庭的保育の基礎（1）乳幼児の発達と心理
5. 家庭的保育の基礎（2）食事と栄養
6. 家庭的保育の基礎（3）小児保健
7. 小活
8. 安全の確保とリスクマネジメント（1）事故予防
9. 安全の確保とリスクマネジメント（2）応急手当
10. 安全の確保とリスクマネジメント（3）職業倫理
11. 子ども虐待
12. さまざまな家庭訪問保育（1）産後ケア
13. さまざまな家庭訪問保育（2）障害児保育
14. さまざまな家庭訪問保育（3）その他
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

授業に取り組む姿勢（50%）、グループワークの成果および提出物（50%）。

《授業で使用する教科書》

・公共社団法人 全国保育サービス協会「家庭訪問保育の理論と実際」中央法規

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

・事前学習：教科書の指定された章を熟読すること。・事後学習：実践に役立てられるよう、くり返し復習すること。

道徳教育の理論と実践

4 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 藤田 善正

《授業の概要》

学校だけでなく、家庭や地域を含めた教育全体において、道徳教育がなぜ必要であるのかというところから掘り起こし、人間がよりよく生きようとする事実こそが道徳教育であることを明らかにする。その上で、（1）日本における道徳教育の歴史や最新の動向を概観する。（2）小学生の児童に有効な「道徳科」の指導方法を発達の視点を踏まえて理解させる。（3）グループワークを通して学習指導案を作成し、アクティブラーニングを伴う模擬授業を通して、道徳授業の実際を知る。

《学生の到達目標》

（1）人間の成長にとって、道徳教育が必要な理由を把握させ、小学生の児童に有効な指導方法を発達の視点を踏まえて理解させる。（2）道徳教育と道徳科の関連を理解させ、モデル授業・資料分析などを通して、学習指導案を書けるようにする。（3）学習指導案をもとにして、模擬授業を行い、成果と課題を知る。

《授業計画》

1. 今こそ必要 道徳教育 日本の子どもと教職員の現状から
2. 日本における道徳教育の歴史
3. 道徳教育の最新の動向
4. 道徳性の発達をふまえた道徳教育
5. 道徳科の導入・展開・終末
6. 教材分析に基づいた発問研究
7. 発問作成演習（グループワーク）
8. 道徳の学習指導案・教具の作成（グループワーク）（1）
9. 道徳の学習指導案・教具の作成（グループワーク）（2）
10. 道徳の学習指導案・教具の作成（グループワーク）（3）
11. 模擬授業と考察（アクティブラーニングを伴う）（1）
12. 模擬授業と考察（アクティブラーニングを伴う）（2）
13. 模擬授業と考察（アクティブラーニングを伴う）（3）
14. 模擬授業と考察（アクティブラーニングを伴う）（4）
15. 総括（まとめ）

《成績評価の方法・基準》

まとめのレポート 50% 学習指導案・模擬授業・授業中の発表等を総合したもの 50%を合わせて評価する。

《授業で使用する教科書》

・藤田 善正「道徳教育の理論と実践（自作教材）」

《参考書》

・藤田 善正「考えることが楽しくなる道徳の授業」日本教育研究センター

《事前・事後学習》

「道徳教育の理論と実践」（自作教材）を授業の最初に配布するので、事前・事後学習として読むことで、講義内容をより深く学ぶことが可能になる。また、講義の中で上記以外にも参考文献等を紹介する。

保育指導法Ⅰ

4 年次（半期）
1 単位（演習）
担当 ★東城 大輔

《授業の概要》

乳幼児期が生涯につづたる人格形成の基礎を培う極めて重要であるということを十分に理解し、その時期に保育・教育に携わる者として必要な保育の概念を整理する。保育・幼児教育に関わる学びと実習を積み重ねた学年であることを踏まえ、これまでの自身の学びを、「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」と照らし合わせるなど、実践現場でどのように取り入れていくかを積極的に考える。さらに、これまで経験した実習での学びを活かし、グループワークやディスカッションなどを行い、どんな保育・教育を行いたいのか、自分なりの保育観を見出すことを目指す。

《学生の到達目標》

保育・幼児教育における基本概念を再確認するとともに、これまでの自分自身の学びを踏まえて、目指す保育者像・教師像を構築する。またその考え方ことなどを面接の場面等でアピールできる力を身につける。グループワークやディスカッションなど、学生間相互の学び合いを通して、理想とする保育の展開や、子どもの理解、得意な保育テーマなどを見つけることで、自己の将来像を明確にし、そしてそれを意識できる実践者としての自覚が持てるようになる。

《授業計画》

1. 授業の概要／保育・教育とは
2. 保育所における保育実践について
3. 幼稚園における幼児教育について
4. 小学校教育とのつながりについて
5. 遊びの重要性と教育的意義
6. 子ども理解の方法と立場について
7. それぞれの保育観・教育観についての情報交流
8. 保育における環境構成の重要性
9. 保育の指針について（生活の視点から）
10. 保育の指針について（遊びの視点から）
11. 保育の指針について（関係の視点から）
12. 事例検討を通して指導法を学ぶ（1）
13. 事例検討を通して指導法を学ぶ（2）
14. 理想とする保育観・教育観について
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

授業内の実践およびポートフォリオ（60%）、レポート等提出物（40%）

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・文部科学省「幼稚園教育要領解説」フレーベル館・厚生労働省「保育所保育指針解説」フレーベル館・内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」フレーベル館

《事前・事後学習》

事前学習：今までのインターンシップ実習やその他実習体験などでの学びについて整理し、保育・教育についての自分の考えをまとめておくこと。事後学習：授業内での学習成果をまとめ、自分にとって理想となる保育観のとは何か、という問いに迫れるようにすること。

保育指導法Ⅱ

4 年次（半期）
1 単位（演習）
担当 小西 由紀子

《授業の概要》

「ねらい」「内容」「方法」は保育を計画、実践、振り返り・自己評価するうえでの柱である。当授業では、その中の「方法」について、子ども理解に立った子どもの視点とねらいを意識した保育者の視点から考える。さらに4年間の保育・教育の学びの総まとめとして、保育指導法Ⅰの授業で構築した自らの保育観・教育観に基づき、グループワーク等により他者と意見交換することにより視野を広げたり、実技を通して知識と実践をつなぐなどの学生間相互が学び合えるアクティブ・ラーニングの形式を随時とりしめる。

《学生の到達目標》

①育てたい子どもの姿を見通した保育の計画が立てられる素地を持つ。②ねらい、内容に応じた保育をデザインするために、子どもの姿をとらえるポイントを知る。③自らの子ども観、保育観に合った保育をイメージし、実践できる力を養う。

《授業計画》

1. 授業の概要／保育における「指導」「方法」について
2. 教育及び保育の基本について
3. 「遊び」を通した指導について
4. 「環境」による教育について
5. 子どもの活動の広がりについて
6. 子どもの活動の深まりについて
7. 子どもの見えない姿をとらえよう
8. 子ども理解について
9. 教育及び保育において育みたい資質・能力について
10. 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿について①
11. 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿について②
12. 保育者の役割について
13. 保育者の意図性と子どもの主体性について
14. 子どもとのかかわるうえで大切なことについて
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

毎回の授業での振り返り（60%）、ワークシート等提出物（40%）

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・文部科学省「幼稚園教育要領」フレーベル館・厚生労働省「保育所保育指針」フレーベル館・内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」フレーベル館

《事前・事後学習》

【事前】目指したい保育・教育とそれに近づくための自らの課題について考えておくこと。【事後】指針や要領に書かれていることと育てたい子どもの姿を意識した実践が4月からできるように自分なりのこの授業での学びや気づきをまとめておくこと。

教職実践演習（幼・小）

4 年次（半期）
2 単位（演習）
担当 ★東城 大輔， 山下 豊

《授業の概要》

教員として必要な教科・教職に関する知識技能を習得するために、①使命感や社会性等の意義と見識に関する事項、②幼児・児童理解や学級経営等に関する事項、③教科・保育内容等の指導力に関する事項の取り組みを中心に、現場の視点を取り入れ、実践的な演習等を中心に展開する。この授業は、アクティブラーニング（実習、フィールドワーク）を含めて実施する。

《学生の到達目標》

教職課程の個々の科目の履修により習得した専門的な知識・技能を基に、教員としての使命感や責任感、教育的愛情がいかにより重要であるか認識し、教科指導、生徒指導等の職務を実践できる資質能力を高めるように努め、教員として必要な知識技能を習得する。

《授業計画》

1. 履修カルテを用いた今までの学修の振り返り
2. 教職の意義や教員の役割・職務内容等について
3. 「目指す教師像」について
4. 社会人としての教師、社会性や人間関係能力について
5. 幼児・児童理解と学級経営について
6. アクティブラーニング（フィールドワーク）にて視察・調査し、成果報告書を作成する
7. アクティブラーニング（フィールドワーク）にて視察・調査し、成果報告書を作成する
8. アクティブラーニング（フィールドワーク）にて視察・調査し、成果報告書を作成する
9. アクティブラーニング（フィールドワーク）にて視察・調査し、成果報告書を作成する
10. 教職員の職務（コンプライアンス）について
11. 学校現場を意識した授業作り（模擬授業）
12. 幼稚園現場を意識した保育展開（模擬保育）
13. 学級通信・クラスだよりの作成の手順
14. 学級通信・クラスだよりの作成
15. 総括（まとめ）

《成績評価の方法・基準》

成果報告書を含む課題などの提出物（50%） 模擬授業・模擬保育における実技やレポート評価（50%）

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・文部科学省「幼稚園教育要領解説」フレーベル館・厚生労働省「保育所保育指針解説」フレーベル館・内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」フレーベル館・文部科学省「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）」東洋館出版

《事前・事後学習》

事前学習：今まで自分自身が履修した教職課程の振り返りを行い、資料や教科書などを通読すること。事後学習：習得した知識・技能を実践の場で発揮できるように自分自身で整理しまとめ実践に活かす意識をもつこと。

知的障害教育論Ⅱ

4 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 ★高田 昭夫

《授業の概要》

知的障害教育の実践をふまえ、その実際と展開を講述する。そこにある背景や課題を提起し、知的障害教育の独自性を理解させ、実りある展開を図るための知識及び技術を提示する。

《学生の到達目標》

知的障害教育の実際を知る。知的障害教育における独自性について理解を深める。今後の知的障害児への教育について考える事ができるようになる。

《授業計画》

1. 知的障害教育における個別の指導計画の説明と作成演習
2. 知的障害児の指導法と指導事例（1）教科指導
3. 知的障害児の指導法と指導事例（2）健康の保持
4. 知的障害児の指導法と指導事例（3）心理的な安定
5. 知的障害児の指導法と指導事例（4）人間関係の形成
6. 知的障害児の指導法と指導事例（5）環境の把握
7. 知的障害児の指導法と指導事例（6）身体の動き
8. 知的障害児の指導法と指導事例（7）コミュニケーション
9. 知的障害児の指導法と指導事例（8）領域・教科を合わせた指導
10. 知的障害児の指導法と指導事例（9）職業教育と進路指導
11. 知的障害児の指導法と指導事例（10）情報機器の活用
12. 知的障害児の指導法と指導事例（11）家庭との連携
13. 知的障害児の指導法と指導事例（12）地域との連携
14. 知的障害児の指導法と指導事例（13）関係機関等との連携
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

レポートや提出物（60%）、課題・小テスト（40%）として評価を行う。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

各授業は前時までの講義内容が理解できていることを前提に行うので復習をする事を望む。

肢体不自由教育論Ⅱ

4 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 森 良子

《授業の概要》

肢体不自由教育の実践をふまえ、その実際と展開を講述する。そこにある背景や課題を提起し、肢体不自由教育の独自性を理解させ、実りある展開を図るための知識及び技術を提示する。

《学生の到達目標》

肢体不自由教育の実際を知る。肢体不自由教育における独自性について理解を深める。

《授業計画》

1. 肢体不自由教育の現状及び肢体不自由児の実態の把握
2. 肢体不自由児の指導法と指導事例（1）日常生活動作
3. 肢体不自由児の指導法と指導事例（2）補装具、自助具
4. 肢体不自由児の指導法と指導事例（3）運動・動作
5. 肢体不自由児の指導法と指導事例（4）姿勢
6. 肢体不自由児の指導法と指導事例（5）医療的ケアと健康管理
7. 肢体不自由児の指導法と指導事例（6）食事・摂食指導
8. 肢体不自由児の指導法と指導事例（7）教科・自立活動
9. 肢体不自由児の指導法と指導事例（8）コミュニケーション・情報機器の活用
10. 肢体不自由教育における個別の指導計画の説明と作成演習
11. 肢体不自由児の指導法と指導事例（1）家庭との連携・関係機関等との連携
12. 肢体不自由教育における訪問教育（1）歴史的背景
13. 肢体不自由教育における訪問教育（2）現状
14. 肢体不自由教育における訪問教育（3）課題
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

レポートや提出物（60%）、授業への取り組み（40%）として評価を行う。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

3 年次で受講した「肢体不自由教育論Ⅰ」の内容について、本授業受講までに再度確認しておくこと。授業の内容をふり返り、自分なりに教材等を考え工夫してみること。

重複障害者等の心理・生理・病理

4 年次（半期）
1 単位（講義）
担当 ★高田 昭夫

《授業の概要》

重複障害児、情緒障害児、言語障害児、発達障害児の病態理解のために必要な基本的知識について講述する。また、重複障害児、情緒障害児、言語障害児、発達障害児の心理について概説する。

《学生の到達目標》

重複障害児、情緒障害児、言語障害児、発達障害児の病態理解のために必要な基本的知識について学ぶ。重複障害児、情緒障害児、言語障害児、発達障害児の心理について理解を深める。

《授業計画》

1. 重複障害児の生理・病理
2. 情緒障害児の生理・病理
3. 言語障害児の生理・病理
4. 発達障害児の生理・病理
5. 重複障害の定義と種類
6. 重複障害児の心理
7. 情緒障害の定義と種類
8. 情緒障害児の心理
9. 言語障害、発達障害と神経心理学
10. 言語障害の定義と種類
11. 言語障害児の心理
12. LD の定義とLD 児の心理
13. ADHD の定義と ADHD 児の心理
14. 高機能自閉症等の定義とその特徴
15. 発達障害児の心理的評価とまとめ

《成績評価の方法・基準》

課題への取り組み・討議への参加状況 40%、レポート提出 60%によって総合的に判断する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

アクティブラーニングを多く取り入れた講義形態による学び合いで実施するため、より学びを深めるために事前準備、授業時の他者との交流、授業後の振り返り、自己評価が重要である。

重複障害等教育論

4 年次（半期）
1 単位（講義）
担当 須田 正信

《授業の概要》

特別支援学校の教育においては、二つ以上の障害を併せ有する児童生徒の比率が多くなっている。この授業においては重複障害のある児童生徒の理解を深めると共に、学校教育における指導・支援の在り方について学ぶ。重複障害児者の教育課程や授業の工夫・ICTの活用など、学習指導案の作成や個別の指導計画について検討する。毎回の授業テーマに基づいてDVD等の映像視聴を行い、授業の振り返りシートの記載を求める。

《学生の到達目標》

1. 障害児者の置かれた歴史的経緯から重複障害児者の教育の意義を理解すること。2. 重複障害児者の学校教育における教育課程と指導・支援の工夫について理解すること。3. 自立活動における「6 区分 27 項目」から指導内容や授業の展開を工夫して、実際の模擬授業に生かせることができること。4. 重複障害者が置かれている教育・福祉・医療等の課題を整理し、個別の教育支援計画から個別の指導計画の必要性を理解し、活用に向けた演習ができること。

《授業計画》

1. 特別支援教育の推進と重複障害教育における課題 「障害者の権利条約等」
2. 重複障害教育と障害の受容及び保護者の心情を考える 「レット症候群の子どもと母親」
3. 重複障害教育とその歴史 「重複障害者に対する学校教育の在り方」
4. 重複障害児者の実態把握の方法と教育課程の工夫 「自立活動の内容・区分」
5. 重複障害児者の教育指導について 「様々な障害を併せ有する教育指導の在り方」
6. 重複障害者のコミュニケーション支援方法「情報機器やICTの活用」
7. 重度・重複障害児者の特別支援学校における医療的ケア等における医療との連携について
8. 重度・重複障害児者への摂食指導と食育について 「実技指導」
9. 重度・重複障害児者の訪問教育の実際と健康管理について
10. 知的障害と肢体不自由を併せ有する子どもの授業の実践事例 「あさの会の演習」
11. 知的障害と自閉症を併せ有する個別の指導計画の実践事例 「ロールプレイ」
12. 肢体不自由と学習障害（LD）を併せ有する子どもの授業の実践事例
13. 視覚障害・聴覚障害を併せ有する子どもの子どもの授業の工夫
14. 知的障害と視覚障害のある子どもの授業の実践事例
15. 重複障害児者と社会参加を考える

《成績評価の方法・基準》

①毎回の「授業振り返りシート」と授業参加50%、②課題レポート20%、③課題試験30%

《授業で使用する教科書》

・須田正信編「基礎からはじめるインクルーシブ教育の実践」明治図書（2011）・文部科学省「平成30年3月特別支援学校学習指導要領「自立活動編」」文部科学省

《参考書》

・全国心身障害福祉財団編「重複障害教育実践ハンドブック」全国心身障害福祉財団（2009）・下山直人監修「知的障害特別支援学校の自立活動の指導」ジヤース教育新書（2018）・須田正信編「特別支援教育テキスト「重複障害教育」」自費出版

《事前・事後学習》

事前学習：テキスト「重複障害教育」から事前に予習すること。事後学習：毎回の「振り返りシート」の記述内容から事後を振り返ること。

教育実習（特支）

4 年次（通年）
3 単位（実習）
担当 ★高田 昭夫

《授業の概要》

支援が必要な児童生徒の理解（実態把握）の方法と、具体的支援の方法を実践的に学ぶ。教育実習に向けて各自が実習課題を設定し、子ども観や題材感、授業への考え方を深める準備をする。

《学生の到達目標》

講義を通して学んできた特別支援教育の理念を、教育実践につなぐことを目的とする。自らの教師としての資質を磨き指導力を高めるにはどうすれば良いかを考えることができるようになる。

《授業計画》

1. 特別支援学校教育実習のオリエンテーション
2. 特別支援教育の現状と課題
3. 特別支援学校の経営・障害のある子どもの理解
4. 教育的ニーズに対応した指導 (1)
5. 教育的ニーズに対応した指導 (2)
6. 個別の指導計画・個別の教育支援計画について
7. 学習指導案の作成 (1)
8. 学習指導案の作成 (2)
9. 障害のある子どもの観察と記録
10. 観察のポイントと記録の方法 (1)
11. 観察のポイントと記録の方法 (2)
12. 観察のポイントと記録の方法 (3)
13. 教育実習体験報告書作成 (1)
14. 教育実習体験報告書作成 (2)
15. 教育実習の総括
16. 学生の個別指導 (1)
17. 学生の個別指導 (2)
18. 学生の個別指導 (3)
19. 学生の個別指導 (4)
20. 学生の個別指導 (5)
21. 学生の個別指導 (6)
22. 学生の個別指導 (7)
23. 学生の個別指導 (8)
24. 学生の個別指導 (9)
25. 学生の個別指導 (10)
26. 学生の個別指導 (11)
27. 学生の個別指導 (12)
28. 学生の個別指導 (13)
29. 特別支援学校教育実習のまとめ (1)
30. 特別支援学校教育実習のまとめ (2)

《成績評価の方法・基準》

勤務態度、指導計画、指導技術、児童生徒に対する態度、集団活動の把握と指導、学級経営の理解と参加、実習記録の整理、の7項目で評価する。

《授業で使用する教科書》

・文部科学省「特別支援学校学習指導要領、学習指導要領解説」文部科学省

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

実習校での実習をより有意義なものにするために、実習の意義や心構えを学ぶ。事後は実習を振り返り、支援教育の魅力を感じ取る。今後の実践に活かしていく。

卒業論文Ⅱ

4 年次（通年）

4 単位（演習）

担当 赤井 利行, 要 正子, 高橋 篤志,
★高田 昭夫, 井岡 瑞日, ★藪 一裕,
★藤田 朋己, 渡辺 俊太郎, 佐伯 知子,
★松岡 宏明, 手良村 昭子, ★田窪 豊,
高根 栄美, 金重 利典

《授業の概要》

学生自身にとって最も関心のあるテーマを卒業論文のテーマとして設定し、それを探究するにふさわしい方法論を使って卒業論文の完成をめざす。これまでの学修や経験を通して獲得した知識、技能の集大成として、担当教員の指導の下、研究成果を所定の時期までに提出できるよう、指導する。

《学生の到達目標》

数ある関心の中から自分にとって最も意味ある関心に絞り込み、自分の卒業論文のテーマにふさわしい方法論を使って、卒業論文をまとめることができる。卒業論文の執筆を通して保育者及び教育者のあり方を真剣に考え、その責任の重さややりがいを実感し、自らの進路を切り拓くことができる。

《授業計画》

1. 卒業論文Ⅱの進め方ーオリエンテーション
2. 卒業論文の書き方について概説
3. 発表の仕方、討論の仕方について概説
4. 演習参加者の関心を出し合い、討論
5. 演習参加者の卒業論文の構想発表 (1)
6. 演習参加者の卒業論文の構想発表 (2)
7. 演習参加者の卒業論文の構想発表 (3)
8. 演習参加者の卒業論文の構想発表 (4)
9. 演習参加者の卒業論文の構想発表 (5)
10. 演習参加者の卒業論文の構想発表 (6)
11. 演習参加者の卒業論文の構想発表 (7)
12. 演習参加者の卒業論文の構想発表 (8)
13. 演習参加者の卒業論文の構想発表 (9)
14. 演習参加者の卒業論文の構想発表 (10)
15. 総括
16. 卒業論文の書き方についての具体的な解説
17. 演習参加者の卒業論文の草稿の発表 (1)
18. 演習参加者の卒業論文の草稿の発表 (2)
19. 演習参加者の卒業論文の草稿の発表 (3)
20. 演習参加者の卒業論文の草稿の発表 (4)
21. 演習参加者の卒業論文の草稿の発表 (5)
22. 演習参加者の卒業論文の草稿の発表 (6)
23. 演習参加者の卒業論文の草稿の発表 (7)
24. 演習参加者の卒業論文の草稿の発表 (8)
25. 演習参加者の卒業論文の草稿の発表 (9)
26. 演習参加者の卒業論文の草稿の発表 (10)
27. 演習参加者の卒業論文の草稿の発表 (11)
28. 卒業論文の提出の心得
29. 卒業論文発表会
30. 総括

《成績評価の方法・基準》

卒業論文の内容50%、卒業論文発表会の内容30%、構想・草稿発表20%

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

計画的に粘り強く卒業論文を執筆し、推敲に推敲を重ねること。

教育実習（幼）

4 年次（通年）

5 単位（実習）

担当 ★東城 大輔, 三輪 よし子

《授業の概要》

幼児教育者を目指す心構えを養い、幼稚園における学外指導を行う。また実習前の準備や、実習後の反省に関する振り返りを行う。特に実習においては、幼稚園の現場を経験し、園児や教職員と直接し、子どもを指導するための心構えや様々な仕事の内容を体験し理解する。今までで学んだ理論や技術に加え、実際の教育現場における体験を通して、自己の子ども観や教育観を深めていく。この授業は、アクティブラーニング（実習、フィールドワーク）を含めて実施する。この授業は、アクティブラーニング（実習、フィールドワーク）を含めて実施する。実習は、幼稚園において原則 20 日間行う。

《学生の到達目標》

幼稚園の教育実習についての心構えや姿勢、準備など基本的なことを理解する。また、教育実習における目的や内容、方法などを、幼稚園教育の特質を實際的に理解することができるようになることや、現場での実習を振り返り、自己の保育・教育観の形成に役立たせる力を身につける。

《授業計画》

1. オリエンテーション
2. 実習指導についての概要の理解と実習生の態度
3. 実習の目的（内容の理解や実習への自覚と責任について）
4. 実習の方法（子どもの姿の予想や事前準備等について）
5. 幼稚園の理解（幼稚園教育要領の基本的理解）
6. 幼稚園の理解（子どもの発達のと保育内容について）
7. 実習目標の明確化と実習計画の作成
8. 模擬保育の実施（1）
9. 模擬保育の実施（2）
10. アクティブラーニング（フィールドワーク）にて視察・調査し、成果報告書を作成する
11. アクティブラーニング（フィールドワーク）にて視察・調査し、成果報告書を作成する
12. アクティブラーニング（フィールドワーク）にて視察・調査し、成果報告書を作成する
13. アクティブラーニング（フィールドワーク）にて視察・調査し、成果報告書を作成する
14. 実習園に対する理解（実習園の一日の流れ等について）
15. 実習への心構えおよびお礼状作成について
16. 集中講義
17. 集中講義
18. 集中講義
19. 集中講義
20. 集中講義
21. 集中講義
22. 集中講義
23. 集中講義
24. 集中講義
25. 集中講義
26. 集中講義
27. 集中講義
28. 集中講義
29. 集中講義
30. 集中講義

《成績評価の方法・基準》

実習先からの評価や実習日誌（60%）、指導案やお礼状等の提出物（40%）

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・文部科学省「幼稚園教育要領解説」フレーベル館・内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼児連携型認定こども園教育・保育要領解説」フレーベル館

《事前・事後学習》

事前学習：実習園について調べておくなど、実習における課題や目標などを明確にしておく。
事後学習：授業での学習の振り返りや、他学生と反省・課題などの情報交換を行い、自身の学びを深める。

教育実習（小）

4 年次（通年）

5 単位（実習）

担当 ★俵谷 好一， 浅野 孝平， 山下 豊， 藤田 善正

《授業の概要》

小学校の教育者をを目指すための授業である。この授業は、アクティブラーニング(実習、フィールドワーク)を含め実施する。まず、教育実習に向けて各自が実習課題を設定して、子ども観や授業への考え方を深める準備をする。続いて、小学校において 20 日間、160 時間の実習に臨み、子どもの学習や生活、また、指導者の指導方法の実態を観察しながら担当指導者の下、教育のあり方、各教科の指導方法について学ぶ。最後に評価表をもとに実習生活を振り返り、教師としての姿を見つめる機会とする。

《学生の到達目標》

小学校実習で「先生」として子どもにかかわり、指導者の学級経営、教科等の指導の実際を学びながら、小学校教育の現状や、子どもの実態、指導の方法等を把握する。さらに、自らの教師としての資質を磨き、指導力を高めるためにはどうすればいいかを考えることができることを目標とする。

《授業計画》

1. 小学校教育実習のオリエンテーション
2. 小学校実習対象児童理解Ⅰ（低学年）
3. 小学校実習対象児童理解Ⅱ（中学年）
4. 小学校実習対象児童理解Ⅲ（高学年）
5. 学習指導要領についてⅠ
6. 学習指導要領についてⅡ
7. 小学校教育の現状と課題Ⅰ（ICT の活用・ディベーパー実習課題の明確化と実習計画の作成）
8. 小学校教育の現状と課題Ⅱ
9. 学習指導の内容と方法Ⅰ
10. 学習指導の内容と方法Ⅱ
11. 実習に向けてのフィールドワークⅠ（観察に基づく指導案作成等）
12. 実習に向けてのフィールドワークⅡ（観察に基づく指導案作成等）
13. 実習に向けてのフィールドワークⅢ（観察に基づく指導案作成等）
14. 実習に向けてのフィールドワークⅣ（観察に基づく指導案作成等）
15. 小学校教育と教師のあり方（ワークショップ）
16. 集中講義
17. 集中講義
18. 集中講義
19. 集中講義
20. 集中講義
21. 集中講義
22. 集中講義
23. 集中講義
24. 集中講義
25. 集中講義
26. 集中講義
27. 集中講義
28. 集中講義
29. 集中講義
30. 集中講義

《成績評価の方法・基準》

実習先の評価・日誌等（40%）授業での取り組みや記録・提出物等（60%）

《授業で使用する教科書》

・「小学校学習指導要領(平成 29 年告示)」東洋館出版社

《参考書》

・「小学校教育実習ハンドブック(改訂版)」大阪総合保育大学

《事前・事後学習》

事前学習：実習校での本実習を有意義なものにするために、実習の意義や心構えを学ぶ。事後学習：実習を振り返り、教職の魅力を感じとる。さらに「教職実践演習」の講義へとつないでいく。

乳児保育学科 1 年次

教育学概論

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 井岡 瑞日

《授業の概要》

現代教育を理解するためには、教育の意味について絶えず根底から問い直そうとする思考力や教育の思想及び歴史についての豊かな教養が必要である。本講義では、教育を支える基本的理念や思想、教育という営みの歴史的展開などについて幅広く検討していく。具体的には、西洋近代における代表的な教育思想・実践の歩み、西洋・東洋における学校教育や家庭教育の歴史とその背景にある子ども観の変遷について学ぶ。このことを通して、現代の教育問題を考えるための深い洞察力を培うことを目指す。

《学生の到達目標》

教育の基本的概念は何か、また、教育の理念にはどのようなものがあり、教育の歴史や思想において、それらがどのように現れてきたかについて学ぶとともに、これまでの教育及び学校の営みがどのように捉えられ、変遷してきたのかを理解する。①教育の基本的概念について理解する。②教育の思想や歴史についての基礎的な知識を身につける。③教育の今日的課題について学問的視野から考察する力を養う。

《授業計画》

1. 授業の概要と進め方について
2. 教育の基本的概念①—教育の意義と目的
3. 教育の基本的概念②—乳幼児期の教育の特性
4. 子どもと教育の思想・歴史①—「子ども」とは何か、子ども観の変遷
5. 子どもと教育の思想・歴史②—幼児教育思想の系譜
6. 子どもと教育の思想・歴史③—子ども家庭福祉の関連
7. 学校教育の思想・歴史①—「学校」とは何か
8. 学校教育の思想・歴史②—公教育の成立と展開
9. 学校教育の実践①—教育実践の基礎理論（内容・方法・計画と評価）
10. 学校教育の実践②—教育実践の多様な取り組み
11. 子育てと家庭教育の歴史—近代家族の子育て
12. 子育てと家庭教育の歴史—母性愛規範の形成
13. 現代教育の課題を考える①—ジェンダーと教育
14. 現代教育の課題を考える②—いじめ問題
15. 現代教育の課題を考える③—子どもの貧困と教育格差

《成績評価の方法・基準》

課題及びグループディスカッションの内容（50%） レポート（50%）

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・文部科学省「小学校学習指導要領解説」・文部科学省「幼稚園教育要領解説」・内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」・厚生労働省「保育所保育指針解説」

《事前・事後学習》

事前学習：日頃から新聞やテレビで報道される教育に関するニュースに関心を持っておくこと
事後学習：毎授業の内容をよく復習し、知識の定着に努めること。授業内で適宜読書案内を行うので、レポート課題の取り組みの中で積極的に読み、教育に対する理解を深めること。

情報処理演習Ⅰ

1 年次（半期）
1 単位（演習）
担当 谷口 康祐

《授業の概要》

現在では、パーソナルコンピュータ（PC）やスマートフォンといった情報機器は私たちの生活になくてはならないものである。様々な授業や仕事においてもこれらの情報機器を活用することが求められるようになっている。情報機器はあくまでも作業を効率的に進めていくための道具である。本授業ではこれらの使い方を説明し、(1)大学における学習や仕事で必要となるインターネットやメールの適切な使い方（情報リテラシー）を理解すること、(2)OfficeソフトのWordとPowerPointを自分自身で扱えるようになることを目指す。また、PCを用いて書類やチラシなどを制作すること、グループワークを行い、その成果をプレゼンテーションとして発表することを求める。

《学生の到達目標》

・情報機器を基本的な使い方理解し、目的に沿って適切に用いられるようになる。・インターネットやメール、SNSの使い方理解し、それらを適切に活用できるようになる。・WordやPowerPoint、画像処理ソフトの特徴を理解し、それらを効率的に用いて、文章の作成や印刷ができるようになる。

《授業計画》

1. オリエンテーション：この授業の目的と進め方について説明する
2. PCの使い方：本学におけるPC環境の説明とその使い方を説明する
3. インターネット・メール・SNSの使い方
4. Officeソフトの基本の仕組みと基本操作
5. 書類の作成1：Wordを使って書類を作成する
6. 書類の作成2：Wordによって作成した文章を印刷する
7. 画像の作成：パワーポイント・画像処理ソフトを用いて画像を作成する
8. お便りの作成：自分で作成した画像を用いてWordでお便りを作成する
9. チラシの作成1：PowerPointを用いてチラシを作成する
10. チラシの作成2：PowerPointで作成したチラシの印刷する
11. イラストサイトの活用
12. プレゼンテーション演習1：プレゼンテーションのグループ分けを行う
13. プレゼンテーション演習2：グループごとにプレゼンテーションのテーマを決定する
14. プレゼンテーション演習3：プレゼンテーションに必要な資料を準備する
15. プレゼンテーション発表：グループごとにプレゼンテーションを行い、お互いに評価する

《成績評価の方法・基準》

授業の各回で指示する小課題の成果や演習への取り組み（40%）と課題の成果物（60%）によって評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

授業内で説明した操作を自分自身でできるように復習すること。授業内でも課題の作業時間をとるが、必要に応じて授業時間外でも作業を進めること。

情報処理演習Ⅱ

1 年次（半期）
1 単位（演習）
担当 谷口 康祐， 小宮 加容子， 中津 功一郎

《授業の概要》

情報機器を用いることの利点の 1 つに膨大な情報を素早く正確に整理できることがあげられる。特に近年では、数値だけでなく、画像や映像といった複雑な情報も情報機器によって容易に扱うことができるようになってきた。本授業では、(1)Excel を用いて情報を適切に整理できるようにすることと、(2)画像・動画の編集作業ができるようになることを目指す。なお、この授業では、「情報処理演習Ⅰ」と同様に PC を用いた制作物の作成やグループワークを行い、その成果をプレゼンテーションすることも課題とする。

《学生の到達目標》

・Excel の使い方を理解し、自分自身で数値を処理できるようになる。
・処理した数値を用いて書類の作成やプレゼンテーションができるようになる。
・画像処理ソフトや動画編集ソフトを用いて画像と映像の加工・編集ができるようになる。

《授業計画》

1. オリエンテーション：この授業の目的と進め方について説明する
2. 表計算ソフトの使い方：Excel の基本的な使い方を説明する
3. 関数の使い方：Excel の関数の使い方を説明する
4. 表の作り方：Excel での表の作成の仕方について説明する
5. カレンダーの作成：Excel を使ってカレンダーを作成する
6. カレンダーの印刷：Excel で作ったカレンダーを印刷する
7. 名簿の作成：Excel で名簿の作成法を説明する
8. 画像・動画の編集ソフトの使い方 1：画像・動画の編集ソフトの使い方を説明する
9. 画像・動画の編集ソフトの使い方 2：画像・動画の編集ソフトを用いて動画を作成する
10. 総合演習 1：総合制作のグループ分けを行う
11. 総合演習 2：グループごとに総合制作物のテーマを決める
12. 総合演習 3：総合制作物の作業計画・分担を決める
13. 総合演習 4：総合制作物の作業を行う
14. 総合演習 5：総合制作物を仕上げる
15. 総合制作物発表会：グループごとに制作したものを発表し、お互いの作品を評価する

《成績評価の方法・基準》

授業の各回で指示する小課題の成果や演習への取り組み（40%）と課題の成果物（60%）によって評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

「情報処理演習Ⅰ」の内容を適宜復習しておくこと。授業内で説明した操作を自分自身でできるように復習すること。授業内でも課題の作業時間をとるが、必要に応じて授業時間外でも作業を進めること。

日本国憲法

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 石川 愛世

《授業の概要》

本講義は、国民の基本的人権と国家の統治機能の二体系で構成される日本国憲法の基本的知識を習得することを目的とする。憲法の意味、成立、基本原理から順を追って解説を行う。講義の際にはできるだけ具体的な事例、判例に言及しつつ理解を深める。

《学生の到達目標》

憲法の基本的知識を学び、基本的人権の内容及び国家の統治機能を理解する。日常生活と憲法との関わりを意識できるようにする。

《授業計画》

1. ガイダンス（授業の進行方法、日本の法と憲法の関係解説する）
2. 憲法の意味・成立・歴史について学ぶ
3. 憲法の基本原理について学ぶ
4. 包括的基本権・平等権について学ぶ
5. 精神的自由権①-内心の自由について学ぶ
6. 精神的自由権②-表現の自由について学ぶ
7. 経済的自由権について学ぶ
8. 人身の自由について学ぶ
9. 国政請求権・参政権について学ぶ
10. 社会権について学ぶ
11. 国会・内閣について学ぶ
12. 裁判所について学ぶ
13. 財政・地方自治について学ぶ
14. 改正・最高法規について学ぶ
15. 総括（まとめ）

《成績評価の方法・基準》

授業への取り組みや提出物（小テスト・課題等）（40%）、学期末のテスト（60%）を総合して評価する。

《授業で使用する教科書》

・中村睦男 編著「はじめての憲法学（第3版）」三省堂・その他必要に応じて、授業で適宜資料等を配布・指示する。

《参考書》

・必要に応じて、授業で適宜資料等を配布・指示する。

《事前・事後学習》

常日頃から、日常生活における出来事やどのように憲法と関わるか問題意識をもち、ニュース・新聞等を見ることが望ましい。事前学習として、次回講義のテキスト該当範囲を読むことを求める。授業の進行具合等により、授業計画に変更の可能性があるので、該当範囲は各回終了毎に指示する。

英語

1 年次（通年）
2 単位（演習）
担当 杉本 孝美

《授業の概要》

インターネットの普及や様々な分野のグローバル化がすすむ現代社会においては、世界共通語としての「英語」の運用能力がますます要求されている。この授業では、日常生活を題材にしたテキストを使用し、コミュニケーションに必要な文法力を養成し、語彙力を強化する。

《学生の到達目標》

聞く、読む、話す、書く、といった4技能を鍛えるための様々な演習を行い、総合的な英語力向上を目指す。

《授業計画》

1. オリエンテーション
2. 英語の基本構造
3. 一般動詞（1）現在形の肯定文・否定文・疑問文
4. WH 疑問文の作り方
5. 一般動詞（2）過去形の肯定文・否定文・疑問文
6. be 動詞（1）現在形の肯定文・否定文・疑問文
7. 復習①（2～6回の内容を中心に）
8. 形容詞（感情や状態を表す）
9. be 動詞（2）WH 疑問文、命令文
10. 人称代名詞
11. 場所を示す表現
12. 時を示す表現
13. 未来形
14. 復習②（8～13回の内容を中心に）
15. 前期のまとめ
16. 進行形
17. 方向・動作を示す前置詞
18. 助動詞
19. 依頼・申し出・許可の表現
20. 疑問詞を使った疑問文
21. 数字の表現
22. 基本動詞
23. 病気に関する表現
24. 基本動詞と前置詞（慣用表現）
25. 形容詞と前置詞（慣用表現）
26. 伝えたい内容を整理する
27. 文をつなぐ
28. 入国審査で問われる質問および返答
29. 復習③（16から28回の内容を中心に）
30. 総括

《成績評価の方法・基準》

授業への取り組みを重視し、発表や課題提出も勘案して、総合的に評価する。学期試験（50%）、小テスト（40%）、授業への取り組み（10%）

《授業で使用する教科書》

・森田和子・北村洋子・高橋順子「発信型 シンプル・イングリッシュ」三修社

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

指定された宿題はもちろんのこと、次の授業範囲で使用されている未知の単語や熟語の意味を調べておくなど、復習および予習を必ず行うこと。

体育（講義）

1 年次（半期）
1 単位（講義）
担当 足立 博子、高橋 篤志

《授業の概要》

人間が健康な生活を送るためには、適正な栄養摂取と身体活動および休息のバランスが重要である。生活全般のオートメーション化や ICT 化が進んだ現代社会においては、利便性が向上する一方で身体活動量は低下し、生活習慣病その他の健康障害が社会問題化している。本授業では、長期的に低下傾向にあるこどもの体力改善や超高齢社会の到来による健康寿命延伸などの社会的健康課題に着目しながら、現代人の生活と身体活動のあり方および運動の具体的実践方法について考察を行う。

《学生の到達目標》

人間の発育発達・加齢と身体機能および体力・運動能力との関係について理解し、各ライフステージにおける身体活動と健康について考察を行う。授業で得た知識に基づき、社会全体としての動向および自身の生活行動を健康の観点から客観的に捉え、より健康な生活の獲得に向けて積極的に取り組む姿勢と実行力を身につける。

《授業計画》

1. オリエンテーション
2. 健康および現代社会における健康課題について
3. 体力の分類と構成要素について
4. 食生活と健康について
5. 休養と健康について
6. 身体活動と健康について
7. トレーニングの原理と原則について
8. 運動プログラミングについて
9. 発育発達と身体機能および体力について
10. 加齢と身体機能および体力について
11. 身体組成および脂肪と運動について
12. 生活習慣病と運動について
13. 応急処置について
14. 一次救命処置について
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

授業内での確認テスト(60%) レポート(40%)

《授業で使用する教科書》

・大阪体育大学体カトレーニング教室編「体カトレーニングの理論と実際」大修館書店

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

健康や身体活動および運動に関する社会的トピックスや自身の健康管理について、普段から関心や問題意識を持って受講すること。

体育（実技）

1 年次（半期）
1 単位（実技）
担当 足立 博子、高橋 篤志

《授業の概要》

モータリゼーションや日常生活のオートメーション化および ICT 化、並びに食生活の欧米化などに象徴される現代社会は、運動不足による体力低下および生活習慣病や精神的ストレスの増加など多くの健康課題を有している。本授業では、多種多様な運動種目の実践を通して爽快感や達成感を体感するとともに、それらの運動が基礎体力の向上や健康増進に寄与することを体得し、具体的な運動方法と自発的に運動に取り組む姿勢を身につける。

《学生の到達目標》

体育講義で学んだ運動と健康との関係性および体力の構成要素を念頭に置き、より快適で充実した日常生活を営むことのできる基礎体力の獲得および疲労やストレスの軽減、心身のコンディショニングをコントロールできる能力と生涯スポーツの基盤を構築する。

《授業計画》

1. オリエンテーション
2. からだほぐし運動
3. スタティクストレッチ
4. ダイナミックストレッチ
5. ボディウエイトトレーニング
6. ペットボトルトレーニング
7. レクリエーションゲーム
8. コア・スタビライゼーショントレーニング
9. エアロビックダンスエクササイズ
10. ボクササイズ
11. ボールゲーム
12. TABATA Protocol
13. コーディネーショントレーニング
14. サーキットトレーニング
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

各運動種目の方法理解と技術習得状況 (60%) レポート (40%)

《授業で使用する教科書》

・大阪体育大学体カトレーニング教室編「体カトレーニングの理論と実際」大修館書店

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

普段から自身の健康管理に留意し、規則正しい生活リズム、バランスの取れた食生活、質の良い睡眠を心がけ、積極的に運動できるコンディショニングで授業に臨むこと。

社会福祉

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 ★藪 一裕

《授業の概要》

現代社会における社会福祉の意義と歴史の変遷、及び社会福祉における子ども家庭支援の視点について理解する。また、社会福祉の制度や実施体系について学ぶとともに、社会福祉における相談援助や利用者の保護にかかわる仕組み、社会福祉の動向と課題について理解する。

《学生の到達目標》

①現代社会における社会福祉の意義と歴史の変遷、及び社会福祉における子ども家庭支援の視点について理解する。②社会福祉の制度や実施体系について理解する。③社会福祉における相談援助について理解する。④社会福祉における利用者の保護にかかわる仕組みについて理解する。⑤社会福祉の動向と課題について理解する。

《授業計画》

1. ガイダンス、社会福祉の理念と概要
2. 社会福祉の歴史の変遷
3. 子ども家庭支援と社会福祉
4. 社会福祉の制度と法体系、社会福祉行政と実施機関
5. 社会福祉、社会福祉施設の専門職
6. 社会保障及び関連制度の概要
7. 社会福祉における相談援助（1）相談援助の理論、意義と実践
8. 社会福祉における相談援助（2）相談援助の対象と過程
9. 社会福祉における相談援助（3）相談援助の方法と技術
10. 社会福祉における相談援助（4）相談援助の実践
11. 社会福祉における利用者の保護にかかわる仕組み—情報提供、第三者評価、権利擁護など
12. 社会福祉の動向と課題（1）少子高齢化社会における子育て支援
13. 社会福祉の動向と課題（2）共生社会の実現と障がい者施策
14. 社会福祉の動向と課題（3）在宅福祉・地域福祉の推進、諸外国の動向
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

レポート試験 50%、授業内課題（小テストの実施、リアクションペーパーなど）30%、授業への取り組み（受講態度、積極的な授業への参加、予習・復習、発表など）20%として評価を行う。レポートは、授業内容の理解度や、受講生自身が問題意識をもち考えを示すものを評価する。

《授業で使用する教科書》

・新川泰弘・宮野安治「子どもと社会の未来を拓く 社会福祉」青踏社

《参考書》

・「保育所保育指針」・他、授業で配付する

《事前・事後学習》

①毎回の授業で示すテーマについて、新聞記事、参考文献や Web 検索などを参照して理解を深めること。②次回授業への予習として、テキストの該当箇所を読み、自分自身の経験や知識を深めること。

子ども家庭福祉

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 春高 裕美

《授業の概要》

現代社会に生きる子どもが育つ家庭は多様化・複雑化している。授業は講義方式をベースとしつつ、適宜ペアワークやグループワークを取り入れる。まず講義によって問題や課題の背景を理解し、支援を行うために必要な知識を身につける。そのうえでワーク等を通して、支援者としての価値観を形成しながら実際の役割をイメージすることをめざす。

《学生の到達目標》

1. 現代社会における子ども家庭福祉の意義と歴史の変遷について理解する。2. 子どもの人権擁護について理解する。3. 子ども家庭福祉の制度や実施体系等について理解する。4. 子ども家庭福祉の現状と課題について理解する。5. 子ども家庭福祉の動向と展望について理解する。

《授業計画》

1. ガイダンス、子ども家庭福祉の理念と概念
2. 子ども家庭福祉の歴史の変遷
3. 現代社会と子ども家庭福祉と諸外国の動向
4. 子どもの人権擁護（1）子どもの人権擁護の歴史の変遷と、児童の権利に関する条約
5. 子どもの人権擁護（2）子どもの人権擁護と現代社会における課題
6. 子ども家庭福祉の制度と法、実施体系
7. 次世代育成支援と子ども家庭福祉の推進
8. 児童福祉施設と、子ども家庭福祉の専門職
9. 少子化と地域子育て支援、母子保健と子どもの健全育成
10. 多様な保育ニーズへの対応
11. 子ども虐待・DVとその防止、社会的養護
12. 障害のある子どもへの対応
13. 少年非行等への対応
14. 貧困家庭、外国籍の子どもとその家庭への対応
15. 地域における連携・協働とネットワーク

《成績評価の方法・基準》

授業内に行う3回の小テスト(60%)、授業内の取り組み(課題やレポート、ディスカッションへの参加等)(40%)によって総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

・「幼稚園教育要領」・「保育所保育指針」・「幼保連携型こども園教育・保育要領」

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

毎回の授業に提示されるテーマについて、次回の授業までにまとめること。

保育原理

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 阿部 和子

《授業の概要》

この授業では、保育に関わり基礎的な知識や理論を学ぶとともに、「望ましい保育のあり方」を考えたり、自らの保育実践を省察するための枠組みや手掛かりを習得したりする。具体的には、まず、保育を知るために、保育の意味や保育を取り巻く歴史的・社会的背景を理解する。ついで、「保育の基本」として、発達理論や保育の内容・方法・形態・評価の在り方等について学習する。その上で、子育て支援や保幼小連携、課題を抱えた家庭への支援の在り方などについて理解を深める。

《学生の到達目標》

①保育についての基礎的知識・理論を習得する。②保育に関する知識や理論を、自らの保育経験に引きつけて捉え直す視点や態度を形成する。

《授業計画》

1. 保育とは 子どもや保育を取り巻く現状と課題
2. 子どもの発達と子ども理解
3. 保育の思想
4. 保育の歴史
5. 保育の場 保育制度と子育て支援計画
6. 保育目標と内容① 教育要領、教育・保育要領
7. 保育目標と内容② 保育指針
8. 保育の方法① 環境による保育
9. 保育方法② 乳児期から幼児期へ
10. 保育の計画と評価
11. 子育て支援と連携、家庭・幼保小学校との連携
12. 子どもの安全と虐待、障がいへの対応
13. 諸外国の保育
14. まとめ 乳幼児教育・保育の重要性和独自性
15. まとめ 保育者の役割と専門性

《成績評価の方法・基準》

ミニレポート等の提出課題 60%、授業内で行うミニ筆記試験 40%によって総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

・最新保育士養成講座総括編集委員会編 執筆代表阿部和子・北野幸子「最新 保育士養成講座 第一巻 保育原理」全国社会福祉協議会

《参考書》

・「保育所保育指針解説 幼稚園教育要領解説、幼保連携型認定こども園教育・保育要領」

《事前・事後学習》

○シラバスに沿って、事前に教科書の該当箇所目を通しておくこと。授業終了後は、理解できなかったところを教科書で確認し、不明な点は教員に質問するように心がけること。○新聞等で、子どもや家庭、保育に関連する記事目を通して、授業と関連させて子どもの最善の利益を考える習慣をもつこと。

保育者論

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 大橋 喜美子， 石丸 るみ， 神長 美津子

《授業の概要》

【授業の目的・ねらい】保育者の役割・職務内容と倫理について理解するとともに、保育士の制度的な位置づけを学び、その専門性について考察し理解する。また、保育者の連携・協働・資質向上とキャリア形成についても理解する。【授業全体の内容の理解】この授業では「保育者とは何か」について多様な側面から理解を深める。また、保育者の専門性について理解すると共に社会における役割、具体的な仕事の内容、社会における倫理、制度などについて学習する。さらに地域社会や専門機関等との連携・協働・保育者の資質向上とキャリア形成などの視点から総合的に理解を深める。

《学生の到達目標》

現在の保育所や幼稚園、認定こども園の実情、変遷などを概観しながら、保育者としての役割を理解できるように解説する。日本の保育と合わせて海外の保育にも触れながら、広い視野で保育を志向しながら保育者としての役割について学ぶ。さらに、乳幼児期は、生涯にわたる人格形成の基礎の時期であるため、保育者は真摯に子どもを見る目をもって向き合う必要がある。本授業では、保育・教育課程の役割を学び、保育者としての在り方について考え、実践する保育者の基本としての力を培うことを目標とする。

《授業計画》

- オリエンテーション（授業の概要について説明・保育とは何かについて話し合う。）
- 幼稚園・保育所・認定こども園に至る日本の保育制度とその特徴について学ぶ。
- 幼稚園・保育所・認定こども園の教育・保育の内容と役割について議論しながら考える。
- 幼稚園・保育所・認定こども園の1日（デイリープログラムを通して比較考察する）
- 映像と共に学ぶ0歳児～1歳児の子ども理解と「養護及び教育の一体的展開」を考察。
- 映像と共に学ぶ2歳児～3歳児の子ども理解と「養護及び教育の一体的展開」を考察。
- 映像と共に学ぶ4歳児～5歳児の子ども理解と「養護及び教育の一体的展開」を考察。
- 歴史に学ぶ先駆者の実践から保育観とは何かを学び、保育実践との関連を考える。
- 保育観と子どもの育ちを関連させ保育実践の在り方について、話し合っ発表をする。
- 保育における子育て支援（協働のありかた、各機関との連携）について学ぶ。
- 障がいを持つ子どもの発達支援と保護者との関り、他諸機関との連携について学ぶ。
- 病児保育・夜間保育の実態と保育のありかたと諸機関の連携について学ぶ。
- 保育者の専門性とは何かについてアクティブ・ラーニングを通して学ぶ。
- 生涯発達の視点で保育者の専門性及びキャリア形成について考える。
- 授業の振り返り、総括。

《成績評価の方法・基準》

レポート課題（60%）、毎回の授業時における小レポート（20%）、授業内での発表（20%）

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・「幼稚園」「教育要領」「保育所保育指針」「認定こども園教育・保育要領 最新版」・その他、適宜資料配布。

《事前・事後学習》

保育者論では、乳幼児の発達をベースとしながら、広範な意味での保育者の専門性役割について学んでいく。そのため、学生が主体的に学びを深めていくことが大切である。アクティブ・ラーニングの授業を織り交ぜながら、事前の調べ学習や、事後の振り返りを大切にして進めていくので、宿題や授業内での発表など積極的な参加を望んでいる。

保育の心理学

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 金重 利典

《授業の概要》

保育実践に関わる発達理論等の心理学的知識を、「発達を捉える視点」「子どもの発達過程」「子どもの学びと保育」の3つの分野から学ぶ。理論的な視点を学ぶだけでなく、グループワークを通して対話的な学びで理解を深めていく。そのことを通して、子どもの発達や学びを理解し、保育士としての心理学的な専門的な視点を持つ。

《学生の到達目標》

1. 保育実践に関わる発達理論等の心理学的知識を踏まえ、発達を捉える視点について理解する。2. 子どもの発達に関わる心理学の基礎を習得し、養護及び教育の一体性や発達に即した援助の基本となる子どもへの理解を深める。3. 乳幼児期の子どもの学びの過程や特性について基礎的な知識を習得し、保育における人との相互的関わりや体験、環境の意義を理解する。

《授業計画》

- ガイダンス
- 発達を捉える視点（1）子どもの発達を理解することの意義
- 発達を捉える視点（2）子どもの発達と環境
- 発達を捉える視点（3）発達理論と子ども観・保育観
- 子どもの発達過程（1）身体的機能と運動機能の発達
- 子どもの発達過程（2）認知の発達
- 子どもの発達過程（3）言語の発達
- 子どもの発達過程（4）社会性の発達
- 子どもの発達過程（5）感情の発達
- 子どもの発達過程（6）道徳の発達
- 子どもの学びと保育（1）乳幼児期の学びに関わる理論
- 子どもの学びと保育（2）乳幼児期の学びの過程と特性
- 子どもの学びと保育（3）乳幼児期の学びを支える保育
- 子どもの学びと保育（4）保護者の心理的支援
- 総括

《成績評価の方法・基準》

課題及び小テスト50%積極的な授業参加50%

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

（1）授業で扱った重要な用語を振り返り、理解しているかどうか確認をする（2）各回に関わるエピソードを現場でのインターンシップを通して収集する

幼児と健康

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 清田 岳臣、 神長 美津子、 大橋 喜美子

《授業の概要》

本講義では、健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活を作り出す力を養う領域「健康」の指導の基盤となる知識、技能について理解することを目的とする。主に生理学的、バイオメカニクスの、神経科学的な観点から以下の4点について解説する：（１）乳幼児期の健康課題、（２）乳幼児期の心身の発達、（３）環境からの影響（生活習慣と安全管理等）、（４）運動発達の理解。また、これらの点と子どもの健康指導法との関連性について解説する。

《学生の到達目標》

健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活を作り出す力を養う領域「健康」の指導の基盤となる知識、技能を身につける。具体的には、以下の4点について理解し、指導方法との関連性について理解する：（１）乳幼児期の健康課題、（２）乳幼児期の心身の発達、（３）環境からの影響（生活習慣と安全管理等）、（４）運動発達の理解。

《授業計画》

1. ヒトの能力の相互作用（年齢・環境・課題）
2. 乳幼児期の健康課題
3. 乳幼児期の発育発達①（筋骨格系の発達）
4. 乳幼児期の発育発達②（反射系の発達）
5. 乳幼児期の発育発達③（随意運動の発達）
6. 乳幼児期の発育発達④（呼吸循環器系の発達）
7. 乳幼児期の発育発達⑤（精神機能の発達）
8. 乳幼児期における環境①（生活習慣）
9. 乳幼児期における環境②（遊び環境）
10. 乳幼児期における環境③（安全管理）
11. 運動発達①（粗大運動）
12. 運動発達②（微細運動）
13. 遊びと運動発達
14. 子どもの発達理論
15. 運動遊び指導の要点

《成績評価の方法・基準》

レポートによる評価（40%）、定期試験（60%）とする。

《授業で使用する教科書》

・「幼稚園教育要領」・「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」・「保育所保育指針」

《参考書》

・高石昌弘「からだの発達」大修館書店

《事前・事後学習》

事前学習として、前回の授業で指定された、授業内容のキーワードについて小テストを行います。事後学習として、授業内容を問うレポートを課します。

幼児と環境

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 大橋 喜美子

《授業の概要》

本授業では、領域「環境」の指導の前提に関する「幼児を取り巻く環境」「幼児と環境とのかかわり」についての専門的事項についての感性・知識・理解・技能について学ぶ。具体的には環境領域指導法Ⅰ・Ⅱにおいては、領域「環境」の指導のための指導方法・保育の展開等について学ぶが、この「幼児と環境」においては、その指導や保育の展開を支える「そもそも環境とは何か」「環境に関わる中で子どもはどのように発達していくのか」等についての理解を深めるとともに、飼育・栽培の知識・技能等についても学ぶ。

《学生の到達目標》

1. 幼児を取り巻く環境と、幼児の発達にとっての意義を理解する 2. 幼児の思考・科学的概念の発達を理解する 3. 幼児期の標識・文字等、情報・施設とのかかわりの発達を理解する

《授業計画》

1. 環境とは何か？—広い意味での“環境”を考える
2. 幼児の生活と身の回りの“環境”—子どもの生活圏としての環境を考える
3. 園生活と“環境”—園の中の環境（保育環境）を考える
4. 子どもにとっての自然環境とはどのようなものがあるか？
5. 子どもにとっての社会や文化に関する環境（情報・施設・地域文化等）とはどのようなものがあるか？
6. 子どもの発達と環境—主体的・能動的に環境に働きかけるとは？
7. 子どもの興味・関心・好奇心・探究心の発達
8. 子どもの認知・理解、問題解決的・創造的思考力の発達
9. 子どもと生き物・動植物のかかわり①（成長・命の尊さについての感性を育てる）
10. 子どもと生き物・動植物のかかわり②（飼育栽培の基本的事項）
11. 子どもともののかかわり（物の性質の理解、誤り・錯誤・工夫の視点）
12. 子どもと数量・図形、標識、文字とのかかわり
13. 子どもと様々な自然・自然現象とのかかわり
14. 現在社会とESDの視点から幼児期の環境を考える
15. 授業内容を振り返り、他の領域と関連づけながら保育の構想を考える

《成績評価の方法・基準》

① 毎回の授業の最後に提出する小レポート 40% ② 中間課題 30% ③ 振り返りのまとめ 30%

《授業で使用する教科書》

・文部科学省「幼稚園教育要領解説」フレーベル館・厚生労働省「保育所保育指針解説」フレーベル館

《参考書》

・内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」フレーベル館

《事前・事後学習》

事前学習としては、毎回、授業前にテキストを読み、学習内容を把握する。事後学習としては、学んだことから視野を広げたり、深めたりするために振り返り内容について指示をする。

幼児と表現

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 手良村 昭子， 丁子 かおる

《授業の概要》

幼児の未分化で素朴な表現を理解するとともに、様々な表現媒体に関する基礎的な知識・技能及び幼児の表現を引き出すための考え方と保育に展開する発想・構想力を身につける。

《学生の到達目標》

・幼児の未分化で素朴な表現の姿やその発達、特徴を理解する。・音楽、造形、身体、劇などの様々な表現媒体に関する基礎的な知識・技能を身につけ、幼児の表現を引き出すための考え方と保育に展開する発想・構想力を身につける。・幼児の表現を支えるための自己の感性を豊かにする。

《授業計画》

1. 領域「表現」の位置づけと幼児の未分化で素朴な表現の受容
2. 「形、色、材料を介した造形表現活動①（発見）」「子供の造形への発達の側面からのア
3. 「形、色、材料を介した造形表現活動②（発想）」「子供の造形への特徴的側面からのア
4. 「形、色、材料を介した造形表現活動③（構想）」「子供の造形への美的側面からのア
5. 「形、色、材料を介した造形表現活動④（表現・鑑賞）」「子供の造形への心理的な側面
6. 「形、色、材料からの劇的・身体表現活動①（発想・構想）」「子供の世界観と表現①（大
7. 「形、色、材料からの劇的・身体表現活動②（表現・鑑賞）」「子供の世界観と表現②（
8. 「表現と『造形、音楽、身体、劇』」表現と『健康、人間関係、環境、言葉』
9. 「環境との対話①」乳児を取り巻く環境と表現活動
10. 「環境との対話②」幼児を取り巻く環境と表現活動
11. 「自然環境との対話」乳児の自然物を通じた表現遊び
12. 「音遊び・音楽遊び」身近な楽器に親しみ音遊びを楽しむ
13. 「音遊び・音楽遊び」身近な楽器を使いグループで音楽表現を楽しむ
14. 「児童文化との対話」絵本や紙芝居、人形劇などを通じた表現活動を考える
15. 「表現領域指導における ICT の活用」「表現指導の実践」

《成績評価の方法・基準》

評価・評定については、下記 2 項目を基に総合的に行う。○表現・鑑賞活動（50%）○レポート（50%）

《授業で使用する教科書》

・石上浩美「保育と表現」嵯峨野書院

《参考書》

・「幼稚園教育要領解説」フレーベル館・「保育所保育指針解説」フレーベル館

《事前・事後学習》

事前学習課題の調べ学習および教科書を読んでおくこと事後学習課題レポートのまとめなど

環境領域指導法 I

1 年次（半期）
1 単位（演習）
担当 瀧川 光治， 大橋 喜美子

《授業の概要》

子どもは生まれてから自分自身を取り巻く環境の中で、経験を重ねながら心身を発達させていく。その環境について、具体的な内容や、環境とどのように関わっているのかということを知り、その学びを通して保育の中でどのような環境を整えていけばよいのかについて、指導案の作成や模擬保育を通して実践的に考える。

《学生の到達目標》

幼稚園教育において育みたい資質・能力を理解し、幼稚園教育要領に示された「環境」領域のねらい及び内容について背景となる専門領域と関連させて理解を深めるとともに、幼児の発達に即して、主体的・対話的で深い学びが実現する過程を踏まえて具体的な指導場面を想定して保育を構想する方法を身に付ける。

《授業計画》

1. イントロダクション
2. 幼児教育における環境について
3. 幼稚園教育要領の根拠となる憲法・法律
4. 幼稚園教育要領 領域展開について（目標・ねらい・内容・内容の取り扱い）
5. 子どもの学びとしての「遊び」、自発的な活動としての遊び
6. 子どもを取り巻く遊び環境の変化（情報機器とその活用を含む）
7. 遊びにおけるリスクとハザードについて
8. 群れ遊びの大切さ
9. 子どもの学びとしての「生活」
10. 食の環境
11. 指導案の構成と作成方法について
12. 指導案の発表と相互評価
13. 季節の移り変わりとは保育（模擬保育とふりかえり①）
14. 日本や地域の伝統文化を取り入れた保育（模擬保育とふりかえり②）
15. 植物・動物と関わる保育（模擬保育とふりかえり③）

《成績評価の方法・基準》

定期試験（60%）、授業の中で適宜提出する小レポート（40%）

《授業で使用する教科書》

・文部科学省「幼稚園教育要領解説」フレーベル館・厚生労働省「保育所保育指針解説」フレーベル館

《参考書》

・内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」フレーベル館

《事前・事後学習》

事前学習としては、毎回、授業前にテキストを読み、学習内容を把握する。事後学習としては、学んだことから視野を広げたり、深めたりするために振り返り内容について指示をする。

環境領域指導法Ⅱ

1 年次（半期）
1 単位（演習）
担当 瀧川 光治、大橋 喜美子

《授業の概要》

前期に学んだ「環境領域指導法Ⅰ」を踏まえて、さらに領域「環境」の理解を実践的に深めていく。領域「環境」は「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」ための領域であり、好奇心・探究心の育成が重要である。そのため、子どもの発達に応じて、そのためのねらい・内容の理解を深めるとともに、指導・援助、教材研究の方法を実践的に学ぶ。

《学生の到達目標》

1. 領域「環境」のねらい・内容、10の姿、資質・能力のつながりを理解する 2. 幼児の発達や学びの過程を理解し、資質・能力および10の姿を育むための保育内容や指導・援助を理解する 3. 幼児の発達や学びの過程を理解し、具体的な指導場面を想定した教材研究や環境構成を構想する方法を身につける。

《授業計画》

1. 領域「環境」のねらい・内容・内容の取扱いと資質・能力の育成
2. 子どもの発達の視点を踏まえた領域「環境」と10の姿のつながり
3. 思考力の芽生えを育む保育と教材研究（1）―実践事例から
4. 思考力の芽生えを育む保育と教材研究（2）―保育者の援助やかかわり
5. 思考力の芽生えを育む保育と教材研究（3）―静観機器・教材の工夫と活用
6. 思考力の芽生えを育む保育と教材研究（4）―指導計画の立案と模擬保育
7. 保育環境の様々な工夫（1）―領域「環境」のねらい・内容との関連
8. 自然とのかかわり・生命尊重を育む保育と教材研究（1）―実践事例から
9. 自然とのかかわり・生命尊重を育む保育と教材研究（2）―保育者の援助やかかわり
10. 自然とのかかわり・生命尊重を育む保育と教材研究（3）―静観機器・教材の工夫と活用
11. 自然とのかかわり・生命尊重を育む保育と教材研究（4）―指導計画の立案と模擬保育
12. 数量・図形、標識や文字などへの関心・感覚の育む保育環境（1）―実践事例から
13. 数量・図形、標識や文字などへの関心・感覚の育む保育環境（2）―教材の工夫
14. 保育環境の様々な工夫（2）―幼児期と小学校教育の連続性
15. 授業内容を振り返り、他の領域と関連づけながら保育の構想を考える

《成績評価の方法・基準》

① 毎回の授業の最後に提出する小レポート 40% ② 中間課題 30% ③ 振り返りのまとめ 30%

《授業で使用する教科書》

・文部科学省「幼稚園教育要領解説」フレーベル館・厚生労働省「保育所保育指針解説」フレーベル館

《参考書》

・内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」フレーベル館

《事前・事後学習》

事前学習としては、毎回、授業前にテキストを読み、学習内容を把握する。事後学習としては、学んだことから視野を広げたり、深めたりするために振り返り内容について指示をする。

社会的養護Ⅰ

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 柏木 邑太

《授業の概要》

現代社会に生きる子どもが育つ家庭は多様化・複雑化している。授業は講義方式をベースとしつつ、適宜ペアワークやグループワークを取り入れる。まず講義によって問題や課題の背景を理解し、支援を行うために必要な知識を身につける。そのうえでワーク等を通して、支援者としての価値観を形成しながら実際の役割をイメージすることをめざす。

《学生の到達目標》

1. 現代社会における子ども家庭福祉の意義と歴史の変遷について理解する。2. 子どもの人権擁護について理解する。3. 子ども家庭福祉の制度や実施体系等について理解する。4. 子ども家庭福祉の現状と課題について理解する。5. 子ども家庭福祉の動向と展望について理解する。

《授業計画》

1. ガイダンス、子ども家庭福祉の理念と概念
2. 子ども家庭福祉の歴史の変遷
3. 現代社会と子ども家庭福祉と諸外国の動向
4. 子どもの人権擁護（1）子どもの人権擁護の歴史の変遷と、児童の権利に関する条約
5. 子どもの人権擁護（2）子どもの人権擁護と現代社会における課題
6. 子ども家庭福祉の制度と法、実施体系
7. 次世代育成支援と子ども家庭福祉の推進
8. 児童福祉施設と、子ども家庭福祉の専門職
9. 少子化と地域子育て支援、母子保健と子どもの健全育成
10. 多様な保育ニーズへの対応
11. 子ども虐待・DVとその防止、社会的養護
12. 障害のある子どもへの対応
13. 少年非行等への対応
14. 貧困家庭、外国籍の子どもとその家庭への対応
15. 地域における連携・協働とネットワーク

《成績評価の方法・基準》

レポート試験50%、授業内課題30%、授業への取り組み20%として評価を行う。レポートは、授業内容をふまえて受講生自身が問題意識をもち考えを示すものを評価する。

《授業で使用する教科書》

・「幼稚園教育要領」・「保育所保育指針」・「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

次回授業への予習として、テキストの該当箇所を読み、自分自身の経験や知識を深める。

保育実践学習Ⅰ

1 年次（半期）

1 単位（演習）

担当 高根 栄美, 今津 香, 金重 利典, 谷口 康祐,
平野 俊一郎, 浅野 孝平, 春高 裕美,
阿部 和子, 大江 由香, 鈴木 恵,
野口 知英代, 野上 千春, 花咲 宣子,
八重津 史子

《授業の概要》

保育所や幼稚園、こども園、児童養護施設等の現場におけるインターンシップ実習体験を基盤とする。実習を通して現場における様々な課題を理解し、保育の職務内容についての基礎的な理解を図る。また、子どもと関わる保育・教育者をしっかり観察し、自身の将来と照らし合わせるとともに、保育・教育現場の諸課題について体感し、考える機会とする。さらに、実習日誌を書くことにより、自らの学びを省察し、その体験をより確かなものにする力を養う。

《学生の到達目標》

インターンシップ実習における体験を通して、保育士やこども園・幼稚園・小学校教諭の職務への理解を深める。また子どもと関わる職としての保育・教育者をしっかり観察し、自身の将来と照らし合わせる。また、保育・教育現場の諸課題について体感し、考える機会とする。

《授業計画》

1. インターンシップ実習に関する心得について
2. インターンシップ実習に関する諸手続き
3. 保育所・幼稚園・こども園についての基礎的知識
4. 小学校についての基礎的知識
5. 子ども理解について
6. 発達障害の子どもへの対応について
7. 実習日誌の書き方について
8. 現場における対応事例について
9. インターンシップ現場においての実践、観察、記録（1）1日の生活の流れの視点
10. インターンシップ現場においての実践、観察、記録（2）子ども理解の視点
11. フィールドワークにて視察・調査および成果報告書の作成：保育者の援助の視点
12. フィールドワークにて視察・調査および成果報告書の作成：保育者の言葉かけの視点
13. フィールドワークにて視察・調査および成果報告書の作成：保育環境の視点
14. フィールドワークにて視察・調査および成果報告書の作成：自分の援助と言葉かけの視点
15. 自己の課題の明確化および目標設定

《成績評価の方法・基準》

「インターンシップ実習」参加態度および事前・事後授業への参加態度（60%）「インターンシップ実習」日誌の提出および内容（40%）

《授業で使用する教科書》

・厚生労働省「保育所保育指針解説 平成 30 年 3 月」フレーベル館・内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説 平成 30 年 3 月」フレーベル館・日本医療保育学会「医療保育セミナー」建帛社

《参考書》

・文部科学省「幼稚園教育要領解説 平成 30 年 3 月」フレーベル館

《事前・事後学習》

毎回のインターンシップ実習は、実習の目的、目標、観察の視点などを明確にして参加する。そのため、事後学習は、毎回のインターンシップ実習後に日誌や記録等の整理を通しての振り返りを行う。事前学習は、振り返りを通して課題意識を明確に持ち、次のインターンシップ実習に臨めるように準備をすること。インターンシップ現場で扱われていた教材等の研究を行い、保育実技を実践できるようにしておく。

保育実践学習Ⅱ

1 年次（半期）

1 単位（演習）

担当 高根 栄美, 今津 香, 金重 利典, 谷口 康祐,
平野 俊一郎, 浅野 孝平, 春高 裕美,
阿部 和子, 大江 由香, 鈴木 恵,
野口 知英代, 野上 千春, 花咲 宣子,
八重津 史子

《授業の概要》

保育所や幼稚園、こども園、児童養護施設等の現場におけるインターンシップ実習体験を基盤とする。実習を通して、保育実践学習Ⅰで学んだことを振り返りながら、より実践者としての関わり方やあり方を体験するとともに、保育の職務内容についてさらに理解を深める。具体的には、健康・人間関係・環境・言葉・表現の各領域に関わる観点や、領域間のねらいや内容のつながり等に着目して振り返りを行うことを通して、学びの深化を目指す。また、自己課題を明確化し、保育実践に必要な基礎的な資質・能力の定着を図る。

《学生の到達目標》

インターンシップ実習における体験を通して、保育士やこども園・幼稚園・小学校教諭の職務への理解を深める。また子どもと関わる職としての保育・教育者をしっかり観察し、自身の将来と照らし合わせる。また、保育・教育現場の諸課題について体感し、考える機会とする。

《授業計画》

1. 保育実践学習Ⅰの振り返りと自己分析
2. インターンシップ実習に向けての目標設定
3. インターンシップ現場においての実践、観察、記録（1）1日の生活の流れの視点
4. インターンシップ現場においての実践、観察、記録（2）自分自身の動き方の視点
5. インターンシップ現場においての実践、観察、記録（3）保育者の援助・かかわり
6. インターンシップ現場においての実践、観察、記録（4）保育者の言葉かけの視点
7. インターンシップ現場においての実践、観察、記録（5）自分の援助・言葉かけの視点
8. インターンシップ現場においての実践、観察、記録（6）保育環境と養育者の視点
9. インターンシップ現場においての実践、観察、記録（7）保育環境と教育的な意図の視点
10. インターンシップ現場においての実践、観察、記録（8）園庭の保育環境の視点
11. フィールドワークでの視察・調査および成果報告書の作成：子どもの生活に関する事例
12. フィールドワークにて視察・調査および成果報告書の作成：子どもの遊びに関する事例
13. フィールドワークにて視察・調査および成果報告書の作成：子どもの発達の違いの事例
14. フィールドワークにて視察・調査および成果報告書の作成：保育の援助と言葉かけの事例
15. インターンシップ実習の振り返りと自己の課題の明確化

《成績評価の方法・基準》

「インターンシップ実習」参加態度および事前・事後授業への参加態度（60%）「インターンシップ実習」日誌の提出および内容（40%）

《授業で使用する教科書》

・厚生労働省「保育所保育指針解説 平成 30 年 3 月」フレーベル館・内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説 平成 30 年 3 月」フレーベル館

《参考書》

・文部科学省「幼稚園教育要領解説 平成 30 年 3 月」フレーベル館

《事前・事後学習》

毎回のインターンシップ実習は、実習の目的、目標、観察の視点などを明確にして参加する。事後学習は、毎回のインターンシップ実習後に日誌や記録等の整理を通しての振り返りを行う。観察内容に適した記録作成をする。事前学習は、振り返りを通して課題意識を明確に持ち、次のインターンシップ実習に臨めるように準備をすること。継続的にインターンシップ現場で扱われていた教材等の研究を行い、保育実技の実践力をつける。

教職論

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 阿部 和子

《授業の概要》

インターンシップ現地における教育者の姿や教育関連のニュースなどにふれる中で、現代社会における教職の意義、教員の役割や職務内容等について理解することを目的とする。

《学生の到達目標》

教職の意義、教員の役割・資質能力、職務内容等について理解し、教職への意欲を高め、更に適性を判断し、進路選択に資する教職のあり方を理解する。

《授業計画》

1. 教職の意義（1）公教育の原理
2. 教職の意義（2）教職の職業的特徴
3. 教員の役割（1）教育の動向
4. 教員の役割（2）今日の教員に求められる役割
5. 教職の意義と役割に関するインターンシップ現地における視察・調査
6. 教職の意義と役割に関する、視察・調査成果報告書の作成
7. 教員の役割（3）教員の資質能力
8. 教員の職務内容（1）幼児・児童への指導
9. 教員の職務内容（2）指導以外の校務
10. 教員の職務内容（3）教員研修
11. 教員の職務内容に関するインターンシップ現地における視察・調査
12. 教員の職務内容に関する、視察・調査成果報告書の作成
13. 教員の職務内容（4）服務上・身分上の義務
14. テーム学校への対応
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

報告書 50%、レポート等 50%

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・「小学校学習指導要領」・「幼稚園教育要領解説」・「小学校学習指導要領解説」（ともに最新版）

《事前・事後学習》

新聞等の教育関連のニュースに気を配り、どのように考えるかなど自分の考えを意識化しておくこと

国語

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 ★田窪 豊

《授業の概要》

国語科における確かで豊かな言語能力の育成は、幼児教育、小学校教育などの全教育活動の基礎であり、最も重要視される教員の資質・能力である。こうした問題意識のもと、国語科の教材分析や保育実践・授業実践に必要な「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」に関する言語運用力及び言語感覚を身に付け、また、教材分析や保育実践・授業実践に必要な「言葉の特徴や使い方」「情報の扱い方」「我が国の言語文化」に関する背景的な知識や技能を、保育場面を意識しながら身に付けることが重要である。「言葉の特徴や使い方」とは文法、語彙、表記、音読等で、「情報の扱い方」とは情報と情報の関係、情報の整理等で、「我が国の言語文化」とは、伝統的な言語文化、読書、書写等である。

《学生の到達目標》

・「言葉」の領域のねらいや内容に必要な「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」に関する言語運用力及び言語感覚を身に付けている。
・「言葉」の領域のねらいや内容に必要な、言葉の働き、文法、語彙、表記、音読等に関する知識及び技能を身に付けている。
・「言葉」の領域のねらいや内容に必要な、情報と情報の関係、情報の整理などに関する知識及び技能を身に付けている。
・「言葉」の領域のねらいや内容に必要な、伝統的な言語文化、読書、書写等に関する知識及び技能を身に付けている。

《授業計画》

1. 小学校の「全国学力・学習状況調査」からみる言葉の伝え合い
2. 小学校の国語科につながる幼児期の言葉による伝え合い
3. 教材分析や保育実践に必要な音読に関する知識
4. 教材分析や保育実践に必要な音読に関する技能
5. 教材分析や保育実践に必要な書写に関する知識
6. 教材分析や保育実践に必要な書写に関する技能
7. 教材分析や保育実践に必要な「書くこと」に関する知識
8. 教材分析や保育実践に必要な「書くこと」に関する技能
9. 教材分析や保育実践に必要な「読むこと」に関する知識
10. 教材分析や保育実践に必要な「読むこと」に関する技能
11. 教材分析や保育実践に必要な「話す・聞く」に関する知識
12. 教材分析や保育実践に必要な「話す・聞く」に関する技能
13. 教材分析や保育実践に必要な読書に関する知識や技能
14. 教材分析や保育実践に必要な言語文化に関する知識
15. 教材分析や保育実践に必要な言語文化に関する技能

《成績評価の方法・基準》

筆記試験（50%）、レポート、発表、授業への取り組みなど（50%）

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

日常的に様々な文種（新聞記事等も含む）に触れ、読み取ったり聴き取ったりしたことをもとに人と交流する。事後は読書の幅を広げたり、学んだことを自らの表現活動に活かしたりするように心がける。

算数

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 赤井 利行

《授業の概要》

保・幼・小の連携を意識して小学校における算数科の授業に必要な（数と計算、図形、測定、変化と関係、データの活用）の実践的な数理運用力を、授業場面を意識しながら身に付ける。また、幼稚園、小学校、中学校の関連性を踏まえながら、小学校における算数科の授業に必要な背景的な知識を身に付けている。

《学生の到達目標》

数とその表現や計算の意味と方法、図形の性質や図形の計量、量に着目して物事の特徴を的確に表現する、伴って変わる二つの数量の関係、目的に応じて統計的な問題解決するなどの力を身に付ける。また、小学校における算数科の学習内容に関わる数学に関する基本的な知識を身に付けている。

《授業計画》

1. オリエンテーション
2. 数と計算に関する基本的な数理運用力の基礎
3. 数と計算に関する基本的な数理運用力低学年
4. 数と計算に関する基本的な数理運用力中学年
5. 数と計算に関する基本的な数理運用力高学年
6. 図形に関する基本的な数理運用力下学年
7. 図形に関する基本的な数理運用力上学年
8. 変化と対応に関する基本的な数理運用力下学年
9. 変化と対応に関する基本的な数理運用力上学年
10. データの活用に関する基本的な数理運用力下学年
11. データの活用に関する基本的な数理運用力上学年
12. 現実の世界の数学的探究
13. 数学の世界の数学的探究
14. 問題発見・解決・発展の過程としての数学
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

最終課題（60%）、2 回の研究レポート（40%）

《授業で使用する教科書》

・文科省「学習指導要領解説算数編」（最新版）

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前学習は、授業で学習する場面に対応する教科書を読んでおき、授業に向かう。事後学習は、取り上げられたテーマについて、教科書に示されている課題を図書館で調べる。

音楽（器楽）

1 年次（通年）
2 単位（演習）
担当 深田 直子, 峯 恭子, 大槻 和世, 川村 尚子,
炭谷 恭子, 竹田 景子, 本村 陽子,
山口 雅敏, 山本 恭仁子

《授業の概要》

各自の能力に応じて、個人指導を行う。幼稚園・保育園現場において生活や諸行事に対応でき、また社会において音楽と豊かに関わることができるようなピアノ演奏技術の習得を目指す。

《学生の到達目標》

基礎技術を身につけることを重点に置き、音楽を形づくっている要素及びそれらに関わる音符、休符、記号や用語を理解し、演奏する曲に合った豊かな音楽的表現ができることをねらいとする。

《授業計画》

1. 全体及び個人別オリエンテーション
2. 楽譜の読み方及び個人レッスン①
3. 楽譜の読み方及び個人レッスン②
4. 楽譜の読み方及び個人レッスン③
5. 楽譜の読み方及び個人レッスン④
6. 楽譜の読み方及び個人レッスン⑤
7. 練習曲・リズム曲の個人レッスン①
8. 練習曲・リズム曲の個人レッスン②
9. 練習曲・リズム曲の個人レッスン③
10. 練習曲・リズム曲の個人レッスン④
11. 読奏曲の指導①
12. 読奏曲の指導②
13. 読奏曲の指導③
14. 読奏曲の指導④
15. 総括（前期終了適度試験）
16. 弾き歌い曲・練習曲の個人レッスン①
17. 弾き歌い曲・練習曲の個人レッスン②
18. 弾き歌い曲（発表）
19. リズム曲・弾き歌い曲・練習曲の個人レッスン①
20. リズム曲・弾き歌い曲・練習曲の個人レッスン②
21. リズム曲・弾き歌い曲・練習曲の個人レッスン③
22. リズム曲・弾き歌い曲・練習曲の個人レッスン④
23. リズム曲・弾き歌い曲・練習曲の個人レッスン⑤
24. リズム曲・弾き歌い曲・練習曲の個人レッスン⑥
25. リズム曲・弾き歌い曲・練習曲の個人レッスン⑦
26. 読奏曲の指導①
27. 読奏曲の指導②
28. 読奏曲の指導③
29. 読奏曲の指導④
30. 総括（後期終了適度試験）

《成績評価の方法・基準》

定期試験（80%）授業への取り組み（20%）

《授業で使用する教科書》

・小林 美実「こどものうた100」チャイルド本社・茂田 すすむ「保育のためのマーチ・スキップ・ギャロップ・ワルツ・リズム曲集」全音楽譜出版社・バイエル・ブルグミュラー・ソナチネ他 能力に応じて選択

《参考書》

・授業中に適宜資料を配布する

《事前・事後学習》

毎週、授業までの十分な練習が必要である。

基礎造形

1 年次（半期）
1 単位（演習）
担当 丁子 かおる， ★松岡 宏明

《授業の概要》

領域「表現」及び視点「身近なものに関わり感性が育つ」において、乳・幼児期の造形表現の指導及び環境構成など、保育をデザインするために必要な造形の基礎的な資質・能力を育成し、子どもにとっての造形表現の喜びと役割を理解する。

《学生の到達目標》

乳・幼児期の造形活動に関わる演習を通して、乳・幼児期の造形表現に必要な基礎的知識・技能を身に付ける。・乳・幼児期の造形活動に関わる演習を通して、乳・幼児期の造形表現に必要な基礎的思考力・判断力・表現力等を身に付ける。・乳・幼児期の造形活動に関わる演習を通して、表現の喜びを味わい、人間形成の基礎となる造形表現の役割を理解する。

《授業計画》

1. オリエンテーション（乳・幼児期の造形の理解）
2. 感触遊びにおける造形的な見方・考え方の理解と造形的な知識・技能の習得
3. かく遊び（パスおよびペン）における造形的な見方・考え方の理解と知識・技能の習得
4. かく遊び（溶き絵の具）における造形的な見方・考え方の理解と知識・技能の習得
5. かく遊び（技法遊びから）における造形的な見方・考え方の理解と知識・技能の習得
6. 造形遊び（素材から）における造形的な見方・考え方の理解と知識・技能の習得
7. 鑑賞における造形的な見方・考え方の理解と知識・技能の習得
8. つくる遊び（立体の基本）における造形的な見方・考え方の理解と知識・技能の習得
9. つくる遊び（構成遊び）における造形的な見方・考え方の理解と知識・技能の習得
10. つくる遊び（構成遊び）における造形的な見方・考え方の理解と知識・技能の習得
11. 造形遊び（かくとつくる）における造形的な見方・考え方の理解と知識・技能の習得
12. テーマを決めて制作及び発表（ICT の活用などによるグループワーク）
13. テーマを決めて制作及び発表（グループワーク）
14. テーマを決めて制作及び発表（グループワーク）
15. 学習の振り返り（子どもの造形展の鑑賞と評価）

《成績評価の方法・基準》

授業記録（10%）課題提出（60%）、課題発表の内容（30%）などから総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

・文部科学省「幼稚園教育要領（平成29年3月告示）」フレーベル館・厚生労働省「保育所保育指針（平成29年3月告示）」フレーベル館・内閣府「幼保連携型認定こども園教育・保育要領（平成29年3月告示）」フレーベル館・花鑑寛・岡田けい吾「新造形表現 理論・実践編」三晃書房

《参考書》

・その他、授業中に適宜、資料を配布する。

《事前・事後学習》

指示された教科書の読解をすること。授業内容を各自で振り返り、必要に応じて各自及びグループで話しあっておくことなど。

健康教育

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 岸本 みさ子

《授業の概要》

生活習慣病の罹患（りかん）率は、身体組成と密接な関係にある。アンバランスな栄養摂取と運動不足が重なることで肥満傾向を加速化させ、このことが生活習慣病としての要因を作り出すことになる。授業では、健康の科学的基礎についての知識を深め、生活習慣病の予防対策としての観点から身体運動の重要性について説いていく。

《学生の到達目標》

生活習慣病の悪化とメタボリックシンドロームとの関係、加齢に伴う骨粗鬆症予防の運動療法に関する基礎的知識などの理論を学習し、その他様々な症例における問題点を考え、解決する力を身につけることを目的とする。

《授業計画》

1. オリエンテーション、授業の進め方
2. 健康の意義について
3. 現代生活と健康
4. 健康の基礎としての体力
5. 運動不足の害
6. 運動の効果
7. 運動処方の意義と実際
8. 運動処方とその流れ
9. 運動処方の内容
10. 運動処方の原則
11. メディカルチェック（実践）
12. 体力診断（実践）
13. 運動処方・プログラムの立て方（発表）
14. 生涯教育の課題（発表）
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

レポートや提出物（60%）、授業への取り組み（40%）として評価を行う。

《授業で使用する教科書》

・「小学校学習指導要領解説」・「幼稚園教育要領解説」・「保育所保育指針解説」・「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」

《参考書》

・宮下充正 他「体力を考えるーその定義・測定と応用ー」杏林書院・竹宮隆 他「運動適応の科学ートレーニングの科学的アプローチー」杏林書院

《事前・事後学習》

現代、スポーツは健康科学に関して様々な情報が氾濫している。本授業では学生一人ひとりがそれらの氾濫する情報を自分自身で評価検討し、その中から信頼できる情報を入手選択して、自分自身の知識の一つとして現場に応用出来るようにする。

総合基礎演習Ⅰ

1 年次（通年）

2 単位（演習）

担当 高根 栄美, 金重 利典, 谷口 康祐,
小宮 加容子, 平野 俊一郎, 浅野 孝平,
春高 裕美, 阿部 和子

《授業の概要》

初年次教育という位置づけで、スタディスキルやアカデミックスキルの獲得を意識した展開を行う。また、保育士養成および教員養成として 1700 時間プログラムを実施している本学の学びの体制の全体像を把握することや、コミュニケーション能力を培う協働的な学びや思考方法を、遊びの実践を通して学ぶことを中心として行う。

《学生の到達目標》

大学で学ぶということについての基礎的な学習から、基本的な学習姿勢や態度を培い、保育士や幼稚園教諭の職務について必要となる知識や技能を包括的に獲得する。また、遊びの実践を通して、社会人基礎力や協働性などを身につける。

《授業計画》

1. 大学での「学び」について
2. 大学生活、倫理観について
3. 実習の意義（保育士・教員養成校として）
4. 文献検索の方法や図書館の活用・利用方法（1）
5. 文献検索の方法や図書館の活用・利用方法（2）
6. 文献検索の方法や図書館の活用・利用方法（3）
7. 小論文およびレポート作成の方法（1）
8. 小論文およびレポート作成の方法（2）
9. 小論文およびレポート作成の方法（3）
10. 文献・資料の読売（1）保育や教育専門の雑誌記事
11. 文献・資料の読売（2）文献リストの作成と要約
12. 文献・資料の読売（3）教材資料の保管と整理
13. 情報処理や通信における基礎技術
14. 音楽鑑賞を通じた感情や情緒の育み
15. 防犯教育に関する基礎知識
16. 遊びの提供と保育実践の計画（1）
17. 遊びの提供と保育実践の計画（2）
18. 遊びの提供と保育実践の計画（3）
19. 遊びの提供と保育実践の観察（1）
20. 遊びの提供と保育実践の観察（2）
21. 遊びの提供と保育実践の観察（3）
22. 遊びの提供と保育実践の振り返り（1）
23. 遊びの提供と保育実践の振り返り（2）
24. 遊びの提供と保育実践の振り返り（3）
25. 遊びの提供と保育実践の評価（1）
26. 遊びの提供と保育実践の評価（2）
27. 遊びの提供と保育実践の評価（3）
28. 文献読売・ブックリポートの作成
29. 文献読売・ブックリポート作成と成果報告
30. 総括：初年次の学びについて目標の達成確認と自己評価

《成績評価の方法・基準》

遊びの実践にかかわる取り組み（40%）、遊びの実践にかかわるレポート（20%）、文献検索の方法に関するレポート他、授業内で指定する提出物（40%）

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・学習技術研究会 編著「知へのステップ 第 5 版 大学生からのスタディ・スキルズ」くろしお出版・秋田喜代美 監修／東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター 編著「保育学用語辞典」中央法規・渡辺弥生・平山祐一郎・藤枝静晃 編著「保育系学生のための日本語表現トレーニング」三省堂

《事前・事後学習》

事前学習：授業時に指定される資料等を事前に読んで理解する。参考文献・資料、授業中に適宜紹介する予定。事後学習：授業内容の要点を自分なりにノートにまとめるなどして、きちんと理解することが望まれる。その他、指定の課題には、グループワークや個人での資料収集、レポート作成など時間を要するものがあるので、主体的・計画的に取り組むとよい。個別の課題の詳細は授業内で説明します。

乳児保育研究法Ⅰ

1 年次（半期）

1 単位（演習）

担当 金重 利典, 谷口 康祐, 小宮 加容子

《授業の概要》

乳児研究法のアプローチから、保育現場に必要な研究法を学ぶ。このため、インターンシップの機会などを利用して、乳児の研究手法について学ぶ。乳児研究法として、ドキュメンテーション、エピソード記録、フォトカンファレンス、質的環境評価スケールなど多岐にわたる方法があるが、それぞれの特徴や手法について基本を学ぶことを目標とする。それを通して、乳児保育の実践や乳児の姿を観察し、記録したことをどのように考察し、理解するかの手がかりとして学ぶことを目標とする。乳児の観察手法として、どのような方法があるのか、何に視点を置いて観察すればよいのかなど研究方法について乳児保育の側面から学ぶ。

《学生の到達目標》

1. 保育における研究の意義を理解する 2. さまざまな研究法に触れ、乳児を理解するための方法を知る 3. 実際の観察を通して、手法を習得し、その後の実践に活かす力を身に着ける

《授業計画》

1. ガイダンス：保育における研究の意義
2. 保育における研究法（観察・面接）
3. 乳児保育における観察の必要性
4. 観察法と保育の観察による研究
5. 観察の目を養う事例検討
6. ドキュメンテーションやフォトカンファレンス
7. 事例検討の演習 1：ドキュメンテーションの作成
8. 事例検討の演習 2：フォトカンファレンスの実施
9. 様々な観察の記録方法
10. 行動目録法・評定尺度法・行動描写法
11. 観察演習 1（観察の練習とテーマ）
12. 観察演習 2（観察の記録）
13. 観察演習 3（観察の分析とまとめ）
14. 観察演習 4（観察結果の発表）
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

授業中の課題や授業での発表（50%）＋レポート課題（50%）で評価する

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

授業中に学習した観察の方法を振り返り、それを取り入れて、インターンシップ先で 3 歳以下の子どもを観察する

赤ちゃんの生活と保育

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 阿部 和子，★大方 美香

《授業の概要》

乳児の生活が子どもの成長の土台となることを学び、保育所保育指針第2章保育の内容では、1歳未満児を乳児保育（前期乳児とする）、1歳以上3歳未満（後期乳児とする）に区分していることを踏まえつつ、家庭養育における乳児の生活と保育所等集団保育における乳児の生活の連続性と相違について考え、学ぶ。

《学生の到達目標》

○家庭や保育施設で生活する乳児の実際について理解する。○家庭生活から保育施設へ継続のあり方について乳児の立場で検討する。○乳児の生活について総合的に理解し子育て支援の手立てについて考察できる。

《授業計画》

1. オリエンテーション：乳児を主体にする視点、乳児の生活する場
2. 胎児から新生児へ：産まれる～新しい世界と五感
3. 家庭の保育：赤ちゃんのいる家と部屋～心地よい
4. 家族との関係づくり：身近な人との関わり、親やきょうだい～最初の大好き
5. 赤ちゃんの生活：ねる、目覚める～五感と生活リズム
6. 赤ちゃんの生活：飲む、食べる、排泄～満たされる
7. 赤ちゃんの生活：遊ぶ～五感を通して遊ぶ、楽しいな
8. 育ちを祝う行事や伝統〔グループワークでの調査〕
9. 子育てを支える産業や企業の取り組み〔グループワークでの調査〕
10. 家庭養育を支える保育施設：子育て支援の場
11. 家庭から保育施設へ：入園した生活の変化、親と保育者の関わりとの相違
12. 保育所保育での生活：1日の生活～先生との関わり
13. 保育所保育での生活：ひとり一人の育ちへの願いとねらい
14. 保育所保育での生活：大人や他児との関わりを通して遊ぶ～いっしょが楽しい
15. 振り返りとまとめ：乳児の24時間の生活を保障する視点～生活の連続性

《成績評価の方法・基準》

授業中の課題や授業での発表(60%)、及びレポート課題(40%)で評価する。

《授業で使用する教科書》

・阿部和子・大方美香 編著「乳児保育の理論と実践」光生館

《参考書》

・「保育所保育指針解説平成30年」フレーベル館

《事前・事後学習》

授業中に指定する

赤ちゃんの生活とデザイン

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 丁子 かおる，谷口 康祐，小宮 加容子

《授業の概要》

乳幼児期（0,1,2歳）の生活と遊びについて、特に「身近なものに関わり感性が育つ」視点を軸として、3つの視点及び5領域とのつながりを捉え、乳児保育における身近な物と関わって育つ環境と保育について、乳幼児の発達過程にあわせた環境構成と指導と援助について理解し、また、演習を通して乳児保育をデザインする基礎的な資質・能力を習得する。

《学生の到達目標》

乳幼児（0,1,2歳）の生活と遊びについて、発達過程にあわせた環境構成と指導と援助について理解し、乳幼児の保育をデザインする基礎的な資質・能力を習得する。

《授業計画》

1. オリエンテーション（乳幼児期の生活と遊びについての理解）
2. 乳幼児の生活と遊びの環境についての理解
3. 乳幼児の遊びと乳幼児の発達過程の理解
4. 保育環境の調査と考察（グループワークでの情報分析等）
5. 保育環境の調査と考察（グループワーク）
6. 保育環境の発表（グループワーク）
7. 0歳児の遊びをデザインする素材と環境の理解と制作準備
8. 1歳児の遊びをデザインする素材と環境の理解と制作準備
9. 2歳児の遊びをデザインする素材と環境の理解と制作準備
10. 乳幼児の遊びをデザインする素材と環境の準備（グループワーク）
11. 乳幼児の遊びをデザインする素材と環境の準備（グループワーク）
12. 附属保育園における乳幼児における実践と評価
13. 保育の改善に向けての検討と準備
14. 附属保育園における乳幼児における実践
15. 学習の振り返り（成果報告プレゼンテーション）

《成績評価の方法・基準》

授業記録(30%) 課題発表(30%)、課題デザイン(40%)などから総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

・厚生労働省「保育所保育指針（平成29年3月告示）」フレーベル館・内閣府「幼保連携型認定こども園 教育・保育要領（平成29年3月告示）」フレーベル館・村田夕紀「0・1・2歳児遊んで育つ 手づくり玩具」ひかりのくに

《参考書》

・その他、授業中に適宜、資料を配布する。

《事前・事後学習》

指示された教科書の読解をすること。必要に応じて、授業内容を各自で振り返り、各自及びグループで話しあったり制作したりしておくことなど。

大学院 博士前期課程 1 年次

教育学特論

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 井岡 瑞日

《授業の概要》

教育学は哲学や歴史学、心理学、社会学など他領域が複雑に入り組んだ学問であるために、その全体像をとらえることは難しい。教育学は全体としてどのような知であると考えたらよいのだろうか。そして、教育学を学んだり研究したりすることは、現実の教育をよりよく理解するためにどのような貢献をなすのだろうか。本講義では、教育とは何か、教育学とは何か、教育学を学ぶことにはどのような意義があるのかといった点について、テキストの通読や受講生同士の議論を通して理解を深めていく。

《学生の到達目標》

教育学の成り立ちや教育学を学ぶことの意義について、これまで教育をめぐる積み重ねられてきた思想や実践を手がかりとして理解する。また、一連の学習を通して今日の教育課題解決への視野を広げる。

《授業計画》

1. 授業の概要と進め方について
2. 今日における教育課題
3. 教育学を考えるために（読書案内）
4. 教育学とは①（教育の定義）
5. 教育学とは②（教育学の成立）
6. なぜ教育学を学ぶのか①（実験的教育学）
7. なぜ教育学を学ぶのか②（教育科学）
8. 教育学が社会の役に立つのか①（教育の不確実性）
9. 教育学が社会の役に立つのか②（教育可能性に向けたテクノロジー）
10. 教育学の未来①（ポストモダン論）
11. 教育学の未来②（教育目的の迷走）
12. 教育学の未来③（教育目的再構築論）
13. 受講生からの課題提供①
14. 受講生からの課題提供②
15. 全体の総括

《成績評価の方法・基準》

授業への参画 50%、レポート課題 50%で総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

・広田照幸「ヒューマニティーズ 教育学」岩波書店

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前に指定したテキストの該当箇所を熟読し、疑問点等を明確にしてから授業に臨むこと。授業内で適宜読書案内を行うので、積極的に読むことが望ましい。

保育学特論

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 阿部 和子

《授業の概要》

人として生きていくための最初の土台を作り上げる乳幼児期の重要性に関しては、様々なエビデンスを持って語れるようになってきている。本科目では、人として生きていく上での土台とは何か。それはどのようにして作り上げられるのかという2点を検討する。方法は子どもの事実（観察されたエピソード）を大切にし、その事実を子どもの視点で読み取りながら、そこに育ってくるものの理論化を試みる。

《学生の到達目標》

○子どもの事実（観察記録）から、育ちを理解するという子ども理解の方法を学ぶ。○子どもの内面に視点を置いて記録のあり方を学ぶ。○子どもの発達や保育に対する知識や理論を深く学ぶ。

《授業計画》

1. 人はどのような力を持って生れてくるか
2. 最初の情動共有 「ひと」は快いということの体験
3. アタッチメント 特定の人群の獲得とその体験
4. 自立への欲求と甘え
5. 子どもどうしの関係：最初の人との気持ちの通じ合い
6. 子どもどうしの関係 他の子へ向かう
7. 子どもどうしの関係 楽しさの渦
8. 子どもどうしの関係 楽しさの共有
9. 子どもどうしの関係 気持ちのズレ
10. 子どもどうしが一緒にいることの意味と大人のかかわり
11. 自他の区別 所有するということ
12. 自他の区別 自己の空間
13. 自他の区別 3歳児クラスの様子
14. 自己をどのようにとらえるか
15. まとめ 自己がゆたかにつくられるみちずじ

《成績評価の方法・基準》

担当したパートのレジメの作成と提出、発表 60%、他者の発表に対するコメント（コメント用紙に記述し提出） 40%をもとに総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

・阿部和子「子どもの心の育ち—0歳から3歳：自己がゆたかにつくられるまで」萌文書林

《参考書》

・阿部和子「続子どもの心の育ち—3歳から5歳：自己のひろがり」と深まり」萌文書林

《事前・事後学習》

本科目の内容と自らの論文テーマと関連づけて考えるようにする。乳幼児期の発達や保育についての文献を広く深く読む努力をする。

幼児教育学特論

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 玉置 哲淳

《授業の概要》

幼児教育の質の改善が求められ久しいが、子どもと向き合っている保育現場から発信されているとはいきぬ面がある。特に、国の基準である保育所保育指針及び幼稚園教育要領とどう近づくかは議論されても保育現場から要領や指針を豊かにし具体化する発信は極めて少なく、極端な場合には指導計画の編成は行政用に作られているケースもあり指導案不要論もある。本講義では保育の基礎概念、教育と発達の関係、指導と援助の関係、ひいては、経験主義と系統主義の関係を対立的に議論。すなわち、どちらがよいかではなく融合の方向を提示して長期指導計画を例にして検討する。

《学生の到達目標》

1) 長期指導計画の編成の展望を持つ。2) 現代の幼児教育の主要な言説を知り、評価する専門的な力を持つ。3) 以上を通して自分の保育実践のありかたを振り返る専門性を持つ。

《授業計画》

1. 現代の幼児教育の課題—保育の捉え方を明確に—
2. 幼児教育学が避けて通れない課題（保育か教育か、指導か援助か、子ども中心か系統生か）
3. 幼稚園教育要領をどう読むか
4. 保育所保育指針をどう読むか
5. 要領・指針のか立脚している経験主義・子ども中心主義の考え方 1—J. Dewey
6. 要領・指針のか立脚している系統主義の保育の考え方 2—ヴィゴツキー・コスチューク論文
7. 討論
8. 指導計画編成論を通して保育学を確立する。
9. 年間指導計画の事例検討 1
10. 年間指導計画の事例検討 2
11. 討論 年間指導計画の編成をどう進めるか
12. 期別指導計画の事例検討 1
13. 期別指導計画の事例検討 2
14. 討論 期別指導計画の編成をどう進めるか
15. 幼児教育の方向性について

《成績評価の方法・基準》

日常点 50%とレポート 50%で評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

3 回の討論が重要なのでテーマについて自分の考察を考えていただきたい。

発達心理学特論

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 小椋 たみ子

《授業の概要》

特に乳幼児期の子どもの発達について言語発達を中心に概説する。本講義では言語発達過程の概観、言語獲得の基盤となる音声知覚の発達、認知発達、社会性の発達、運動発達や書きことばの発達、言語と思考の関係などについて概説する。人格発達の基盤となる言語能力のゆたかな発達を育むには養育者や保育者がどのように子どもにかかわり、どのような環境設定が重要かについての基礎知識を提供する。また、保育所保育指針解説書に記載された事項についての検討も併せて行う。

《学生の到達目標》

人間が生まれながらにもつ生得的能力と環境との相互作用により人間は発達していくこと、また、環境からの働きかけがゆたかに重要であるかについて言語の発達を通して学ぶ。子どものゆたかな発達を育むための保育、幼児教育の基礎となる知識を習得する。

《授業計画》

1. 言語発達の基礎：言語の役割、言語獲得における生得性と環境の役割について概説する
2. 言語発達の生物学的・神経学的基盤について概説する
3. 言語獲得を可能にする乳児の優れた能力について概説する
4. 音声知覚、音韻の発達について概説する
5. 言語獲得の社会的基盤：社会的認知能力とコミュニケーション能力の発達を概説する
6. 言語獲得の認知的基盤：物理的世界の認知能力、運動能力について概説する
7. 言語発達の概観：語彙の獲得について概説する
8. 言語発達の概観：文法発達について概説する
9. 言語発達の概観：語用の発達について概説する
10. 言語発達の個人差とその要因について概説する
11. 言語発達の社会文化的要因：養育者の言語入力と言語発達について概説する
12. 書き言葉の発達、言語と思考の関係について概説する
13. 言語発達の教育的側面：保育の質が言語発達へ及ぼす影響について概説する
14. 言語発達評価の方法と支援の視点について概説する
15. 言葉にかかわる現代社会の課題について概説する

《成績評価の方法・基準》

各授業への参画 20%、各講義後に提出する授業に関するレポート 20%、全講義後に提出するレポート 60%で評価する。

《授業で使用する教科書》

・小椋たみ子・小山正・水野久美「乳幼児期のことばの発達とその遅れ：保育・発達を学ぶ人のための基礎知識」ミネルヴァ書房・小椋たみ子・遠藤利彦・乙部貴幸「言葉・非認知的な心・学ぶ力」中央法規

《参考書》

・岩立志津夫・小椋たみ子「よくわかる言語発達改訂新版」ミネルヴァ書房・秦野悦子・高橋登「言語発達とその支援」ミネルヴァ書房

《事前・事後学習》

テキストを熟読し、引用文献にあたる。子どもの言語発達とその基盤の能力について観察する。

小児医学特論Ⅰ

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 鈴木 裕子

《授業の概要》

少子化が進行する現在日本の人口動態や国民衛生の動向には、常に関心を持つ。子どもの身体的・生理的特性を各年齢区分に応じて理解し、その上で子どもが病気になった時に示す様々な症状・徴候を速やかに把握、的確に評価する。子どもが罹患しやすい代表的な疾患を学習して、保育能力の向上に努める。身体的な面からだけでなく、子どもの心のケアにも対応できるように努める。予防接種を中心とした予防医学の現状を把握し、その積極的な推進方法、相談技法が培えるよう学修する。

《学生の到達目標》

日常よく見る子どもの様々な症状の的確な把握と評価、適切な初期対応、医療機関との連携など、子どもの健康を第一線で担うという自覚と高度な保育能力の涵養に努力する。また子ども理解を含め、現在社会で問題になっている様々な保健・医療問題の理解できるように基礎知識の充実に努めることを目的とする。

《授業計画》

1. 人口動態、小児期の区分、身体の特徴
2. 子どもの成長
3. 子どもの発達
4. 子どもの口腔衛生
5. 事故防止
6. 喫煙の害、受動喫煙
7. 子どもの病気の主要症状1
8. 子どもの病気の主要症状2
9. 子どもの病気（呼吸器疾患1）
10. 子どもの病気（呼吸器疾患2）
11. 子どもの病気（消化器疾患）
12. 子どもの病気（学校感染症）
13. 子どもの病気（アレルギー）
14. 予防接種
15. 教科のまとめ

《成績評価の方法・基準》

課題レポート 30%、授業への取り組み 70%

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

子どもに関するさまざまな話題に敏感でいること、子どもが健やかに成長できるように必要な知識を学修する。

子ども心身医療特論Ⅰ

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 村上 佳津美

《授業の概要》

幼保育・学校の間では自然に子どもの発育・発達をみているが、改めて心身医学の視点から「身体」「精神」を等分に見ると共に、改めて両者の関係をしっかりとみる目を養うようにする。日常生活からみえてくる子どもの姿の中で、学問的に学ぶ身体と精神の発達に捉われない「生きた知識」を学問的に捉える目を養ってもらう。

《学生の到達目標》

基本的な心身医学・心身症の知識を習得する。身近な心身症以外にも、子どもの病気を心身症として捉える目を育てる。

《授業計画》

1. 身体と心の関係
2. 触覚の重要なお政
3. 触覚の発達を阻害する社会
4. 乳幼児期の心身症
5. 学童の心身症
6. 思春期の心身症
7. 虐待
8. いじめ
9. 思春期の反社会的行動を乳幼児期に防止する
10. 発達障害を心身医学的に考える（1）
11. 発達障害を心身医学的に考える（2）
12. 親の問題を適切に捉え、どのようにに対応するのか
13. 心身医学の考えと日常生活に生かす生き方
14. 子どもの神経症と精神病
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

レポートや提出物（60%） 関心度（20%） 発表（20%）で評価する

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

大学や職場でのあらゆる経験を整理しておく。子どもが病気を持つ、持たないに関わらず、心身医学の視点から子どもの問題をみるように心がける。知らないことは些細なことでも担当者へ尋ね、知識を深めていく積極性をもって欲しい。

保育研究調査法Ⅰ

1 年次（半期）
1 単位（演習）

担当 瀧川 光治, 金重 利典, 谷口 康祐

《授業の概要》

保育・教育研究には、質問紙等を通して得られた数量化したデータを統計的に分析する量的研究と、観察・面接を通して得られた記述データを分析する質的研究がある。この科目では、量的研究を行うために必要な理論と統計手法を学び、実際に関連性（相関係数、 ϕ 係数、カイ二乗検定）・群の比較（ t 検定、分散分析）の分析についての実習を SPSS を用いて行う。

《学生の到達目標》

1. 量的研究に触れ、量的研究の論文を書き方を理解する 2. 統計的分析の種類を理解し、実際の統計ソフトを用いた分析方法を身に付ける 3. 自身の研究計画を立案し、それに即したデータ収集法・分析方法を選択するためのスキルを身に付ける

《授業計画》

1. ガイダンス
2. 研究の種類と方法
3. 論文の構成と研究計画（量的研究）
4. 統計的仮説検定
5. 質問紙の作成と調査の実習
6. エクセル・SPSS を用いた分析方法の基礎
7. パラメトリック検定の前提
8. 関連性を分析する①：パラメトリック検定（ピアソンの積率相関係数）
9. 関連性を分析する②：ノンパラメトリック検定（ χ^2 二乗検定、 ϕ 係数）
10. 関連性を分析する③：
11. 群の比較①：対応のない・対応のある、被験者間・被験者内
12. 群の比較②： t 検定
13. 群の比較③：1 要因分散分析
14. 群の比較④：多重比較
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

授業内の発表（30%）＋授業内課題（70%）

《授業で使用する教科書》

・南風原 朝和、下山 晴彦、市川 伸一「心理学研究法入門—調査・実験から実践まで」東京大学出版・小塩 真司「SPSS と Amos による心理・調査データ解析 第3版」東京図書

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

各回の授業において振り返りのための資料と、次回に向けての事前資料等を配布するので、授業前後でそれらの資料を読んでおく。

保育研究調査法Ⅱ

1 年次（半期）
1 単位（演習）

担当 末次 有加, 金重 利典, 谷口 康祐

《授業の概要》

保育・教育研究には、質問紙等を通して得られた数量化したデータを統計的に分析する量的研究と、観察・面接を通して得られた記述データを分析する質的研究がある。この科目では、質的研究の手法を学び、実際に観察・面接を行うことで、データ収集の方法やその分析方法についての理解を深める。

《学生の到達目標》

1. 質的研究に触れ、質的研究の論文を書き方を理解する 2. 観察法・面接法に必要な知識を理解し、質的データの収集法・分析法を習得する 3. 自身の研究計画を立案し、それに即したデータ収集法・分析方法を選択するためのスキルを身に付ける

《授業計画》

1. ガイダンス
2. 研究の種類と方法
3. 論文の構成と研究計画（質的研究）
4. 文献調査①：面接法による質的研究
5. 文献調査②：観察法による質的研究
6. 文献調査③：質的データと量的データを併用した研究
7. 面接法①：手法の理解と計画
8. 面接法②：データ収集
9. 面接法③：データ分析
10. 面接法④：発表
11. 観察法①：手法の理解と計画
12. 観察法②：データ収集
13. 観察法③：データ分析
14. 観察法④：発表
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

平常点（30%）＋授業内課題（70%）

《授業で使用する教科書》

・伊藤 哲司、田中 共子、能智 正博「動きながら識る、関わりながら考える—心理学における質的研究の実践」ナカニシヤ出版

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

各回の授業において振り返りのための資料と、次回に向けての事前資料等を配布するので、授業前後でそれらの資料を読んでおく。

国語科教育特論

1 年次→2 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 棚橋 尚子

《授業の概要》

今日の国語科に求められることばの力とは何か。本授業ではこのことを念頭に、学習指導要領の内容を踏まえた小学校・中学校の各領域の授業のあり方について論じる。また、入門期の学習に焦点を当て、特に文字習得の問題を取り上げる。さらに、その実践構築に資する教材研究および指導法についてモデル的に講じる。その上で、受講生の課題追究やディスカッションを展開する。

《学生の到達目標》

国語科教育の今日的課題を理解し、それに応じる発展的な教材研究の知識と技能を身につけ、そのことに基づく授業開発力を身につける。

《授業計画》

1. オリエンテーション
2. 今日に求められることばの力とは
3. 国語科教材研究の基本的視点
4. 小学校低学年文学教材の研究
5. 小学校高学年文学教材の研究
6. 中学校文学教材の研究
7. 音声言語教材の研究
8. 作文指導の研究
9. 日本語の文字・表記について (1)
10. 日本語の文字・表記について (2)
11. 漢字指導と学力との関係を考える
12. 古典の指導をどう考えるか (小学校)
13. 古典の指導をどう考えるか (中学校)
14. 入門期の指導
15. 学びを支える教具の開発

《成績評価の方法・基準》

日々の提出物 40%、課題の発表 20%、最終レポート 40%

《授業で使用する教科書》

・『小学校学習指導要領解説国語編』（平成 29 年）

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

『小学校学習指導要領解説国語編』については事前によく読んでおいてください。

社会科教育特論

1 年次→2 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 稲葉 廣

《授業の概要》

大阪は大都市として多様な文化・芸術が発展、集積された地である。また、かつては「天下の台所」として我が国経済の中心地でもあった。しかしながら、戦後、大阪経済が衰退するとともに、「たこやき」や「お笑い」の町といった平板でステレオタイプな大阪像が拡散し、子どもたちの間でも郷土大阪についての正確で系統的な知識や理解が十分ではない状況がみられる。本講では地域学習の対象としての大阪府の地理、歴史や文化、経済、産業等について概観するとともに、大阪の将来像についても理解を深める。さらにフィールドワークや模擬授業などのアクティブラーニングを実施し、社会科学習の実践的なスキルを養う。

《学生の到達目標》

○ 大阪について多角的に考察することを通じて、社会科教育の目的・目標を理解する。○ 大阪の歴史や文化、現況についてのプレゼンテーション能力を培う。○ 地域学習についての実践的な授業力を養う。

《授業計画》

1. オリエンテーション
2. 大阪の地理
3. 大阪の歴史 (1)
4. 大阪の歴史 (2)
5. 大阪の文化 (1)
6. 大阪の文化 (2)
7. 大阪の文化 (3)
8. 大阪の産業と経済 (1)
9. 大阪の産業と経済 (2)
10. 現代の大阪
11. フィールドワーク (1)
12. フィールドワーク (2)
13. 大阪の将来
14. 教材の作成について
15. 総括 (模擬授業)

《成績評価の方法・基準》

・授業中の質問回数や内容 20%・中間レポート 30%・最終レポート 30% ・模擬授業 20%

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・文部科学省「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 社会編」、橋爪紳也「大阪の教科書 増補改訂版」創元社

《事前・事後学習》

・事前学習は前回授業時に指示する・事後学習は授業内容を復習するとともに、授業時の指示（レポート作成等）に取り組む

音楽科教育特論

1 年次→2 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 森 理菜

《授業の概要》

小学校の音楽課程の重要項目を、要点をしぼり指導する。その中でも音楽の基礎となるクラシック音楽に力を入れ、クラシック音楽をいかに分かりやすく、そして興味深く小学生達に指導できるかを、実践等を取り入れながら考え、取得していく。音楽は、4 人の楽聖の作品を中心に扱う。マニュアル通り楽曲を指導できるようにするだけではなく、彼らの生い立ちから若き日の恋愛を通して作曲家それぞれの音楽観を学び、インプットとアウトプットを繰り返しながら、より深みのある指導が出来る様になることを目指す。作曲家達が活躍した、「音楽の都」ウィーンでの写真やCD、DVD も使い、生の音楽にもあらゆる角度から触れていく。

《学生の到達目標》

クラシック音楽を身近に捉える力と基礎知識を身につけ、実際の小学校の音楽課程での教育に活かす力をつける。音楽教育の幅を、より広げる。

《授業計画》

1. ベートーヴェンについて（1）「交響曲」への理解と分かりやすい指導法
2. ベートーヴェンについて（2）ピアノソナタと女性達
3. ベートーヴェンについて（3）合唱指導及び、彼が影響を与えた画家、作曲家について
4. ブラームスについて（1）有名曲から知られる曲の指導法
5. ブラームスについて（2）有名作曲家とのつながり
6. ブラームスについて（3）神秘的三角関係と、小学生へのアプローチ法
7. シューベルトについて（1）歌曲への理解と指導法
8. シューベルトについて（2）室内楽曲への理解と指導法
9. シューベルトについて（3）歴史的映画から彼の人生観を学ぶ
10. モーツァルトについて（1）神童が、6～12 歳に作曲した曲
11. モーツァルトについて（2）フルート、クラリネット等、楽器への理解と指導法
12. モーツァルトについて（3）オペラ、レクイエムへの理解と指導法
13. 小学生向けの鑑賞教材の説明と勧め（1）
14. 小学生向けの鑑賞教材の説明と勧め（2）
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

授業への取り組み（60%）、レポート（40%）により総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

授業中に提示する。

教育方法学特殊講義Ⅰ

1 年次→2 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 佐伯 知子

《授業の概要》

この授業では、生涯学習社会における学習および学習者について理解を深め、その特長に応じた学習支援に関する知識・技能の習得を図ることを目的とする。とりわけ、教員あるいは学生主導の学習プログラムを実践する中で、学習支援の特質や留意点、さまざまな学習支援方法の課題や可能性について体験的に理解することに重きをおく。専門職者（特に、保育者・教育者）の学びとは何かということも積極的に議論していきたい。（なお、この授業は「教育方法学特殊講義Ⅱ」（隔年開講）と合わせて受講することを推奨する。）

《学生の到達目標》

①生涯学習社会における学習者の姿および学習支援のあり方について理解を深める。②具体的な学習支援方法の課題や可能性について、実際に学習プログラムに参加したり自ら計画・実施したりする中で理解を深める。

《授業計画》

1. オリエンテーション
2. アイスブレイク
3. 生涯学習社会における学習者と学習支援①
4. 生涯学習社会における学習者と学習支援②
5. 教員による学習プログラムの実践・解説①
6. 教員による学習プログラムの実践・解説②
7. 教員による学習プログラムの実践・解説③
8. 教員による学習プログラムの実践・解説④
9. 学習プログラムの計画・実施手順の説明
10. 学生による学習プログラムの計画・実施①
11. 学生による学習プログラムの計画・実施②
12. 学生による学習プログラムの計画・実施③
13. 学生による学習プログラムの計画・実施④
14. 実践のふりかえり
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

授業に組み込む姿勢（50%）、レポートや発表などの課題（50%）によって評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

・自分自身のこれまでの学び、職場における学びについてふりかえり、その特徴や課題、今後の展望等を考えてみる。

こども学特殊講義

1 年次→2 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 宮里 暁美

《授業の概要》

子ども・子育て、保育・幼児教育や小学校教育にかかわる事象について多様な視点から検討を深める。具体的には、愛着の形成、基本的信頼感の形成、自己肯定感といった情緒の安定に関わる養護の側面、子どもの育ちを支える児童文化をめぐる状況、さらには子ども・子育てをめぐる課題についての諸要素についての知見から探究していく。

《学生の到達目標》

こどもおよびそこにかかわる事象について理解する。たとえば愛着の形成や基本的信頼感の形成などについての知識を獲得する。ここでは、こどもおよび養育者による種々の行動的特徴とともに形成過程の方策やそのつまずきについて理解する。加えて親子関係や価値意識・倫理観形成の機序などについても各種文献をととして探究する。

《授業計画》

1. 当該授業についてのガイダンス
2. 子ども・子育てにかかわる研究についての基礎的理解
3. 小学校学習指導要領、幼稚園教育要領等の改訂の背景
4. 「情緒の安定」の意味① 愛着形成、基本的信頼感の形成
5. 「情緒の安定」の意味② 自信・自己肯定感の形成
6. 「情緒の安定」の意味③ 不適切な養育
7. 「子育て観」の変遷①
8. 「子育て観」の変遷②
9. 「子育て観」の変遷③
10. 子どもの文化をめぐる状況①
11. 子どもの文化をめぐる状況②
12. 子どもの文化をめぐる状況③
13. これからの保育・教育を考える①
14. これからの保育・教育を考える②
15. まとめ

《成績評価の方法・基準》

・レポート[作品含む](30点)・平常点等(70点) 配点内訳：日常の授業での取り組みを総合して評価する。いずれの課題も60%に到達することが望ましい。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前学習としては、毎回、授業前に資料等を熟読し、学習内容を把握しておく。事後学習としては、学んだことから視野を広げたり、深めたりするために振り返り内容について指示をする。

教育内容研究

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 ★大方 美香

《授業の概要》

明治9年に我が国に幼稚園教育が導入されてからすでに140年以上が経過した。その展開経過を振り返ると明治30年代には託児所（保育所）が成立し、第二次世界大戦後は子どもの急増に伴い保育所と幼稚園の二元制度として拡充されてきたが、近年は少子化の影響が強く、幼保一元化の波が押し寄せている。この授業では、こうした我が国の保育制度の展開過程の中で、保育実践がどのように模索され確立してきたかを概観してみる。新しい幼稚園教育要領及び保育所保育指針、教育・保育要領についてをふまえ、今後の乳幼児教育委について考える。

《学生の到達目標》

1. 保育所や幼稚園などにおける保育実践について具体的に理解する。2. それぞれの時代の保育実践の背景にある子ども観、発達観、教育観などについて理解する。3. 関心のある保育実践のテーマの歴史を振り返り、そこに含まれている保育内容や方法が、どのような経過により取り入れられてきたかを、資料の読み取り方を学んでいく。

《授業計画》

1. 幼稚園教育の導入とその背景
2. 保育方法の変遷とその背景
3. 様々な種類の託児所の成立とその背景
4. 保育内容の変遷とその背景
5. 幼児に適した保育環境や保育実践
6. 子どもの生活文化とその背景
7. 養護と教育の一体化
8. 幼稚園教育要領とその背景
9. 保育所保育指針とその背景
10. 視覚覚醒機器の活用とその影響
11. 長時間保育のはじまりとその背景
12. 乳児教育から幼児教育へその連携とその背景
13. 保育内容の多様化とその背景
14. こども園への模索と現状
15. まとめと考察

《成績評価の方法・基準》

本授業では資料を基にして保育内容がどう形成されてきたかについて、自分の保育体験と絡めながら積極的に話し合いに参加し、多様な視点から検討する姿勢を求めている。そのための評価は、授業における参加姿勢を50%、そして提出していただく報告書での検討内容を50%として、総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

各自、提出資料をまとめておくこと。

教育実践研究Ⅰ

1 年次（半期）
1 単位（演習）
担当 ★松岡 宏明

《授業の概要》

幼児造形教育、小学校図画工作科教育に関する先行研究・実践に触れ、その目標や内容、展開、評価の実際とあり方を検討することを通して、受講者が自らの研究の進展につながる新たな視点を発見する。授業形態として、常にディスカッション形式を取り入れるとともに、個人やペアでのプレゼンテーションの機会を度々設ける。

《学生の到達目標》

幼児造形教育、小学校図画工作科教育に関する先行研究・実践を分析し、その意義や現状・課題を把握する。また、受講生がそれらを自らの研究課題に照射し、援用できる視点を発見し、具体的に生かしていく視座を得る。

《授業計画》

1. 幼児教育と造形教育
2. 領域「表現」と造形
3. 初等教育と図画工作
4. 学習指導要領と図画工作
5. 幼児造形教育の現状と課題
6. 小学校図画工作科の現状と課題
7. 幼児造形の範囲と図画工作科の内容
8. 「造形遊び」の指導についての先行研究・実践の分析
9. 「造形表現（絵や立体、工作）」の指導についての先行研究・実践の分析
10. 「鑑賞」の指導についての先行研究・実践の分析
11. 受講生が収集した先行研究についての発表
12. 受講生が収集した先行研究についての議論
13. 受講生が収集した先行研究についての議論を踏まえた自己課題の発見
14. 受講生が収集した先行研究についての議論を踏まえた自己課題の交流
15. 美術（造形、図画工作）教育の視点の生かし方、まとめ

《成績評価の方法・基準》

討論・演習 40%、レポート 60%を基本としながら、総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

・松岡宏明「子供の世界 子供の造形」三元社（授業内で購入可）

《参考書》

・大橋功、松岡宏明他編著「美術教育概論（新訂版）」日本文教出版・神林匡道他監修、松岡宏明他編著「美術教育ハンドブック」三元社

《事前・事後学習》

各回における参考資料（前の回で紹介）を熟読しておくこと。また授業内で紹介する文献を自ら収集し、目を通すこと。さらに、指定回以降に、レポートの構想づくり、執筆に入ること。レポートは返却された後、修正を施し、保存の上、その後の研究に生かすこと。

教育実践研究Ⅱ

1 年次（半期）
1 単位（演習）
担当 神長 美津子

《授業の概要》

子どもの教育・保育は、いかなる学習環境のもとでどのような指導をなすべきかという根本的な課題に対して、そのことについて理論的基盤に依りながらも実地に適応しうる、実践的な内容や方法を呈示する能力の習得を目指さねばならない。このため、本授業においては、文献資料の読解及び教育実践のビデオを通して、データの収集・解析・考察を行うことにより、教育実践のあり方について考える演習を主とする。本授業では、幼児期から児童期にかけての発達過程に焦点を当て、その教育実践を考える。

《学生の到達目標》

よりよい教育・保育の実践を目指し、教育・保育実践にかかわる文献資料、学会誌等により、研究の動向を把握する。特に、幼児期から児童期への発達過程を捉えた教育実践のビデオから、その教育実践の解説、討論に基づき、この時期の教育実践の課題を整理する。これらに基づき提言的な教育・保育実践を想定しつつ、具体的に授業・保育を構想しながら指導案を作成し、実践的な教育力を身に付ける。

《授業計画》

1. 授業の趣旨・目標と演習の進行について説明
2. 学会誌等から、研究動向を把握
3. 学会誌等から、研究動向を把握
4. 学会誌等から、研究動向を整理
5. 教育実践ビデオの解析・討議（環境と活動）
6. 教育実践ビデオの解析・討議（教師の関わりと活動）
7. 教育実践ビデオの解析・討議（子ども同士の関係）
8. 教育実践ビデオの解析・考察
9. 教育実践ビデオの解析・発表
10. 幼児期から児童期の教育実践の課題の整理
11. 模擬授業・保育案の作成
12. 模擬授業・保育案の発表
13. 模擬授業・保育案の批評的協議
14. 幼児期から児童期の教育実践のモデル案作成
15. 総括と講評

《成績評価の方法・基準》

課題レポート（30%）、研究報告（30%）、研究成果のレポート（40%）

《授業で使用する教科書》

・「幼児期から児童期の教育」ひかりのくに

《参考書》

・「保育の基本と環境の構成」ひかりのくに・「幼児教育の世界」文学社・「教育課程総論」北大路書房

《事前・事後学習》

事前学習としては、毎回、授業前に資料等を熟読し、学習内容を把握しておく。事後学習としては、学んだことから視野を広げたり、深めたりするために振り返り内容について指示をする。

子どもと表現研究

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 ★松岡 宏明

《授業の概要》

本授業では、特に幼児の造形表現について、先行研究を分析しながら考察を深めるとともに、幼児の造形活動や作品を鑑賞・分析することを通してその世界観を理解する。また、未分化な幼児の表現を引き出す方法について議論を深める。授業形態として、常にディスカッション形式を取り入れるとともに、ペアでのプレゼンテーションの機会を度々設ける。

《学生の到達目標》

幼児の造形の研究には、発達の、特徴的、美的・造形的、心理的の四つの側面からアプローチできることを理解するとともに、それぞれについての先行研究を批判的に検討する。また、幼児の造形活動や作品を鑑賞・分析することを通して、その世界観が「未分化性」に集約されることを認識する。そして、未分化な幼児の表現を引き出す方法について自分なりの幼児造形表現指導観を構築する。

《授業計画》

1. 子供の表現とその世界観①（子供と大人の違い）
2. 子供の表現とその世界観②（子供と造形活動の親和性）
3. 子供の造形への発達のアプローチ①（なぐり描き期～図式期）
4. 子供の造形への発達のアプローチ②（前写実期～芸術的復活期）
5. 子供の造形への特徴的アプローチ①（顔足人、アニミズム、基底線等）
6. 子供の造形への特徴的アプローチ②（積み上げ法近法、集中構図、展開図描法等）
7. 子供の造形への美的・造形的アプローチ①（子供と芸術家の作品の比較鑑賞）
8. 子供の造形への美的・造形的アプローチ②（芸術的発達のU字カーブ）
9. 子供の造形への心理的アプローチ①（形と構図）
10. 子供の造形への心理的アプローチ②（色）
11. 領域「表現」と「造形」
12. 園における造形活動の範囲及び未分化な子供の造形表現の引き出し方
13. 発達と特徴に応じた造形表現指導の展開
14. 発達と特徴に応じた題材設定の方法
15. 造形表現を豊かに育む環境

《成績評価の方法・基準》

討論・演習 40%、レポート 60%を基本としながら、総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

・松岡宏明「子供の世界 子供の造形」三元社（授業内で購入可）

《参考書》

・大橋功、松岡宏明他編著「美術教育概論（新訂版）」日本文教出版

《事前・事後学習》

各回における教科書の該当ページを熟読しておくこと。また授業内で紹介する文献を収集し、目を通すこと。さらに、指定回以降にレポートの構想づくり、執筆に入ること。レポートは返却された後、修正を施し、保存の上、その後の研究に生かすこと。

生涯教育学研究

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 佐伯 知子

《授業の概要》

授業の前半は、生涯教育・学習の歴史や基本原理について、欧米諸国・第三世界での議論を概観する。その際、3つの類型（他者決定型学習、自己主導型学習、自己決定・相互変革型学習）に沿って、各々の可能性や限界性を検討する。後半は、受講者それぞれの研究関心について、生涯教育学的観点から議論を深めていく。

《学生の到達目標》

①生涯教育・学習論の成り立ちや特質について理解し、学校教育や社会教育との違いを明確にする。②受講者それぞれの研究関心と生涯教育・学習との接点について検討し、知見を広げていく。

《授業計画》

1. アイスブレイク—まずはお互いを知りましょう—
2. プレインストーミング—今までの教育・学習のイメージは？—
3. 生涯教育・学習論の成り立ち①
4. 生涯教育・学習論の成り立ち②
5. 生涯教育・学習論の成り立ち③
6. 生涯教育・学習の諸原理—3つの類型：他者決定型、自己主導型、自己決定・相互変革型
7. 他者決定型学習
8. 自己主導型学習—マルカム・ノールズを中心に—
9. 自己決定・相互変革型学習①—エッター・レ・ジェルビを中心に—
10. 自己決定・相互変革型学習②—パワロ・フレイレを中心に—
11. 受講者による質疑提供①
12. 受講者による質疑提供②
13. 受講者による質疑提供③
14. 受講者による質疑提供④
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

授業に取り組む姿勢（50%）、発表（50%）によって評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

・日ごろから新聞を読むなどして時事問題に関心を向け、自分の考えを明確にしよう努めること。

教育心理学特論

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 渡辺 俊太郎

《授業の概要》

教育場面における子どもの学びに関わる概念として、知能、認知能力がある。WISC などの知能検査は、教育心理学や認知心理学の研究知見を取り入れつつ改訂が進められてきた。この科目では、WISC-IV の検査内容やそれによって測定される認知能力、臨床事例における指標の表れ方について学ぶことを通して、人間の学習過程に関する心理学的知見や理論について理解を深める。それによって、個々の子どもの特性に応じた教育の方法、内容、環境、支援について検討するための視座を提供する。

《学生の到達目標》

WISC-IV の指標や検査の内容について学び、それらによって測定される認知能力について理解する。臨床事例における代表的な指標/パターンについて学ぶことを通して、子どもやその学習過程を認知能力の観点から理解する力を身につけ、より効果的な教育や支援につなげる視座を獲得する。

《授業計画》

1. 知能、認知能力の定義や理論を学ぶ
2. 知能検査および WISC-IV の概要を理解する
3. 言語理解指標を理解する① 類似、単語
4. 言語理解指標を理解する② 理解、知識
5. 言語理解指標を理解する③ 語の推理
6. 知覚推理指標を理解する① 積木図案、絵の概念
7. 知覚推理指標を理解する② 行列推理、絵の完成
8. ワーキングメモリー指標を理解する① 数唱、語音整理
9. ワーキングメモリー指標を理解する② 算数
10. 処理速度指標を理解する① 符号、記号探し
11. 処理速度指標を理解する② 絵の未消
12. 結果の解釈を学ぶ① 各指標や有意差の検討
13. 結果の解釈を学ぶ② 総合所見の作成
14. 検査結果を生かす① カリキュラムや環境設定
15. 検査結果を生かす② 個別支援の工夫

《成績評価の方法・基準》

課題発表・討論への参加などの授業への取り組み 50%、およびレポートから授業内容の理解度や考察内容について 50%、総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

・必要に応じて資料を配布する。

《参考書》

・A. プリフィテラ・D. H. サクロフスキー・L. G. ワイス『WISC-IV の臨床的利用と解釈』日本文化科学社
・D. P. フラナガン・A. S. カウフマン『エッセンシャルズ WISC-IV による心理アセスメント』日本文化科学社
・上野一彦・松田修・小林玄・木下智子『日本版 WISC-IV による発達障害のアセスメント―代表的な指標・パターンの解釈と事例紹介―』日本文化科学社

《事前・事後学習》

事前学習として、配布資料や参考文献を読み、予習を行う。事後学習として、認知能力の観点から保育・教育現場における子どもの姿や支援のあり方について考察する。

教育心理学特殊講義

1 年次→2 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 遠藤 利彦

《授業の概要》

近年、子どもの教育に関して非認知能力、社会情動的スキルを育むことの重要性が指摘されるようになった。その一方で、これらの力の育成に関する研究や得られた知見の体系化については発展途上のようなものである。そこで、この科目では、非認知能力、社会情動的スキルに関する最新の文献や論文を講読することを通して、理解を深める。それによって、非認知能力、社会情動的スキルを育成するための、心理学の理論や知見を生かした現場での実践について考察する力を身につける。

《学生の到達目標》

非認知能力、社会情動的スキルに関する最新の文献や論文を講読することを通して、その内容や影響、育成に関する研究知見について理解を深める。非認知能力、社会情動的スキルの育成を目指した教育の方法、内容、環境、支援について、心理学の理論や知見を生かした検討を行うための視座を得る。

《授業計画》

1. 認知能力、社会情動的スキルの定義を理解する
2. 『社会情動的スキルを育む「保育内容 人間関係」』を講読し、討論する①
3. 『社会情動的スキルを育む「保育内容 人間関係」』を講読し、討論する②
4. 『社会情動的スキルを育む「保育内容 人間関係」』を講読し、討論する③
5. 『社会情動的スキルを育む「保育内容 人間関係」』を講読し、討論する④
6. 「私たちは子どもに何ができるのか」を講読し、討論する①
7. 「私たちは子どもに何ができるのか」を講読し、討論する②
8. 「私たちは子どもに何ができるのか」を講読し、討論する③
9. 「私たちは子どもに何ができるのか」を講読し、討論する④
10. 「私たちは子どもに何ができるのか」を講読し、討論する⑤
11. 非認知能力、社会情動的スキルに関する論文を講読し、討論する①
12. 非認知能力、社会情動的スキルに関する論文を講読し、討論する②
13. 非認知能力、社会情動的スキルに関する論文を講読し、討論する③
14. 非認知能力、社会情動的スキルに関する論文を講読し、討論する④
15. 総括：今後求められる研究や実践の課題について討論する

《成績評価の方法・基準》

課題発表・討論への参加などの授業への取り組み 50%、およびレポートから授業内容の理解度や考察内容について 50%、総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前学習としては、毎回、授業前に資料等を熟読し、学習内容を把握しておく。事後学習としては、学んだことから視野を広げたり、深めたりするために振り返り内容について指示をする。

臨床発達心理学

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 小椋 たみ子

《授業の概要》

発達・適応上の諸問題を理解・支援するためには、臨床心理学、発達心理学、特別支援教育などの広い視点から生起している問題について理解し、支援方法を考えることが重要である。本講義では、乳幼児期、児童期の障害をはじめとする臨床的問題をとりあげ、その理解の方法と支援の方法を考える。観察、検査実習や文献の講読や受講生がかわつた事例についての発表（アクティブラーニング）を講義後半で行い、理解を深める。

《学生の到達目標》

1) 発達・適応上の諸問題とその発生機序について理解する、2) アセスメントの方法としての観察法、検査法、面接法について学ぶ、3) 発達・適応上の問題をもつ事例に対する支援の方法を学ぶ

《授業計画》

1. 臨床発達心理学、人を理解するための専門性について概説する。
2. 発達支援を必要としている人々（発達・適応上の問題とその理解）について概説する。
3. 乳幼児期の発達の課題と日本の健診制度について概説する。
4. 発達支援が必要な子どもの療育、教育、保育の歴史と制度について概説する。
5. 発達の障害：知的障害とその支援について概説する。
6. 発達障害とその支援（自閉症、注意欠陥多動性障害、学習障害）について概説する。
7. その他の障害とその支援について概説する。
8. 対象理解のための査定・検査・評価の方法について概説する。
9. 対象理解のための査定・検査・評価の方法について実習する。
10. 子どもの発達支援技法、家族支援について概説する。
11. 子どもの臨床発達の支援について文献を通して学ぶ。
12. 保育現場、臨床現場での子どもの査定と支援について受講生の事例発表を通して学ぶ。
13. 保育現場、臨床現場での子どもの査定と支援について受講生の事例発表を通して学ぶ。
14. 保育現場、臨床現場での子どもの査定と支援について受講生の事例発表を通して学ぶ。
15. 幼稚園、保育園などでの支援体制づくりと関連機関との連携について概説する。

《成績評価の方法・基準》

各授業への参画 20%、各講義後に提出する授業に関するレポート 20%、発表 30%、全講義後に提出するレポート 30%で評価する。

《授業で使用する教科書》

・尾崎康子・小林真・水内豊和・阿部美穂子「よくわかる障害児保育(第2版)」ミネルヴァ書房・日本臨床発達心理士会 「臨床発達心理学実践研究」

《参考書》

・尾崎康子・三宅篤子「乳幼児期における発達障害の理解と支援①知っておきたい発達障害のアセスメント」ミネルヴァ書房・尾崎康子・三宅篤子「乳幼児期における発達障害の理解と支援②知っておきたい発達障害の療育（乳幼児期における発達障害の理解と支援）ミネルヴァ書房・日本臨床発達心理士認定運営機構(監)「講座・臨床発達心理学①～⑤」ミネルヴァ書房

《事前・事後学習》

発達支援の必要な子どもへの参与観察の記録、査定を行い、支援計画を作成し、実施する。

小児医学特論Ⅱ

1 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 儀間 裕貴、渡部 基信

《授業の概要》

本教科の基本は、日頃遭遇する子どもの病気の講義であるが、院生には各種幼保施設で保育に直接従事しているスタッフ、保育責任者、施設経営者が多く、日々現場で様々な問題に直面している。本講義では、その問題点を順次紹介してもらい、全員で討議するとともに、講義担当者が適宜補足し、解説講義を行う。また諸機関連学会に参加、発表する院生もいるので、講義時間に伝達講習をしてもらい、保育分野で問題になっている事例について共通認識を深めるよう全員参加型の講義を計画している。

《学生の到達目標》

小児医学特論Ⅰの学習事項を基盤として、日頃遭遇することが多い子どもの疾患を理解し、症状、治療方針に関して学習する。学会発表の伝達講習により専門分野の話題と進歩を学習する。各施設の問題点およびその解決方法を学修し、自園での保育、運営に役立てる。

《授業計画》

1. 子どもの水分代謝、脱水症の治療
2. 保育現場の問題の提起および討論
3. 子どものケガ、初療療法
4. 関連学会での発表報告と討論
5. 子どものアレルギー疾患
6. 保育現場の問題の提起および討論
7. 病児を支える人たち
8. 関連学会での発表報告と討論
9. 子どもの病気（神経疾患）
10. 保育現場の問題の提起および討論
11. 子どものケガ防止
12. 関連学会での発表報告と討論
13. 子どもの精神疾患
14. 保育現場の問題の提起および討論
15. 教科のまとめ

《成績評価の方法・基準》

課題レポート 30%、授業への取り組み 70%

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前学習としては、毎回、授業前に資料等を熟読し、学習内容を把握しておく。事後学習としては、学んだことから視野を広げたり、深めたりするために振り返り内容について指示をする。

研究指導

1 年次→2 年次（通年）

0 単位（演習）

担当 瀧川 光治, 井岡 瑞日, 渡辺 俊太郎,
佐伯 知子, ★松岡 宏明, 赤井 利行,
高根 栄美, 玉置 哲淳, ★大方 美香,
小椋 たみ子, 平野 俊一郎, 浅野 孝平,
清田 岳臣, 末次 有加

《授業の概要》

各教員の専門性を生かし、修士論文の作成について個別ないしゼミ形式で丁寧な指導する。院生各自が自らの問題意識と適切な研究方法論に基づいて修士論文の構想を確立できるように指導・助言する。後期終了時には、修士論文中間発表会を開催し、全教員からの指導を受ける。

《学生の到達目標》

院生各自の多様な問題関心の中から自分にとって最も関心のあるテーマを選び、修士論文の構想を確立する。テーマに即した適切な研究方法論を習得する。

《授業計画》

1. 院生各自の問題関心と研究計画の把握
2. 院生各自の関心のあるテーマについての研究状況の紹介
3. 先行研究の検索・収集・整理
4. 修士論文の書き方について具体的な指導
5. 各自の関心のあるテーマでの発表と討論(1)
6. 各自の関心のあるテーマでの発表と討論(2)
7. 各自の関心のあるテーマでの発表と討論(3)
8. 各自の関心のあるテーマでの発表と討論(4)
9. 各自の関心のあるテーマでの発表と討論(5)
10. 各自の修士論文の構想発表(1)
11. 各自の修士論文の構想発表(2)
12. 各自の修士論文の構想発表(3)
13. 各自の修士論文の構想発表(4)
14. 各自の修士論文の構想発表(5)
15. 中間総括
16. 各自の修士論文の構想発表(6)
17. 各自の修士論文の構想発表(7)
18. 各自の修士論文の構想発表(8)
19. 各自の修士論文の構想発表(9)
20. 各自の修士論文構想の再検討(1)
21. 各自の修士論文構想の再検討(2)
22. 各自の修士論文構想の再検討(3)
23. 各自の修士論文構想の再検討(4)
24. 各自の修士論文構想の再検討(5)
25. 各自の修士論文構想の再検討(6)
26. 各自の修士論文構想の再検討(7)
27. 各自の修士論文構想の再検討(8)
28. 各自の修士論文構想の再検討(9)
29. 修士論文中間発表会
30. 総括

《成績評価の方法・基準》

研究課題への取り組み状況 50%修士論文構想発表 20%修士論文中間発表会 30%
を踏まえ、総合的に判断する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

修士論文の構想を確立するために、日頃から先行研究の収集・把握や研究理論や方法論の習得に励むこと。その過程で生じた疑問点等については、教員に相談できるようその都度明確にしておくこと。また、教員から受けた指導・助言の内容をよく吟味し、その後の研究に反映できるよう努めること。詳細については各教員の指示に従うこと。

大学院 博士前期課程 2 年次

国語科教育特論

1 年次→2 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 棚橋 尚子

《授業の概要》

今日の国語科に求められることばの力とは何か―。本授業ではこのことを念頭に、学習指導要領の内容を踏まえた小学校・中学校の各領域の授業のあり方について論じる。また、入門期の学習に焦点を当て、特に文字習得の問題を取り上げる。さらに、その実践構築に資する教材研究および指導法についてモデル的に講じる。その上で、受講生の課題追究やディスカッションを展開する。

《学生の到達目標》

国語科教育の今日的課題を理解し、それに応じる発展的な教材研究の知識と技能を身につけ、そのことに基づく授業開発力を身につける。

《授業計画》

1. オリエンテーション
2. 今日に求められることばの力とは
3. 国語科教材研究の基本的視点
4. 小学校低学年文学教材の研究
5. 小学校高学年文学教材の研究
6. 中学校文学教材の研究
7. 音声言語教材の研究
8. 作文指導の研究
9. 日本語の文字・表記について(1)
10. 日本語の文字・表記について(2)
11. 漢字指導と学力との関係を考える
12. 古典の指導をどう考えるか(小学校)
13. 古典の指導をどう考えるか(中学校)
14. 入門期の指導
15. 学びを支える教具の開発

《成績評価の方法・基準》

日々の提出物 40%、課題の発表 20%、最終レポート 40%

《授業で使用する教科書》

・「小学校学習指導要領解説国語編（平成 29 年）」

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

『小学校学習指導要領解説国語編』については事前によく読んでおいてください。

社会科教育特論

1 年次→2 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 稲葉 廣

《授業の概要》

大阪は大都市として多様な文化・芸術が発展、集積された地である。また、かつては「天下の台所」として我が国経済の中心地でもあった。しかしながら、戦後、大阪経済が衰退するとともに、「たこやき」や「お笑い」の町といった平板でステレオタイプな大阪像が拡散し、子どもたちの間でも郷土大阪についての正確で系統的な知識や理解が十分ではない状況がみられる。本講では地域学習の対象としての大阪府の地理、歴史や文化、経済、産業等について概観するとともに、大阪の将来像についても理解を深める。さらにフィールドワークや模擬授業などのアクティブラーニングを実施し、社会科学習の実践的なスキルを養う。

《学生の到達目標》

○ 大阪について多角的に考察することを通じて、社会科教育の目的・目標を理解する。○ 大阪の歴史や文化、現況についてのプレゼンテーション能力を培う。○ 地域学習についての実践的な授業力を養う。

《授業計画》

1. オリエンテーション
2. 大阪の地理
3. 大阪の歴史(1)
4. 大阪の歴史(2)
5. 大阪の文化(1)
6. 大阪の文化(2)
7. 大阪の文化(3)
8. 大阪の産業と経済(1)
9. 大阪の産業と経済(2)
10. 現代の大阪
11. フィールドワーク(1)
12. フィールドワーク(2)
13. 大阪の将来
14. 教材の作成について
15. 総括(模擬授業)

《成績評価の方法・基準》

・授業中の質問回数や内容 20%・中間レポート 30%・最終レポート 30% ・模擬授業 20%

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・文部科学省「小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 社会編」・橋爪紳也「大阪の教科書 増補改訂版」創元社

《事前・事後学習》

・事前学習は前回授業時に指示する・事後学習は授業内容を復習するとともに、授業時の指示(レポート作成等)に取り組む

音楽科教育特論

1 年次→2 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 森 理菜

《授業の概要》

小学校の音楽課程の重要項目を、要点をしぼり指導する。その中でも音楽の基礎となるクラシック音楽に力を入れ、クラシック音楽をいかに分かりやすく、そして興味深く小学生達に指導できるかを、実践等を取り入れながら考え、取得していく。音楽は、4 人の楽聖の作品を中心に扱う。マニュアル通り楽曲を指導できるようにするだけでなく、彼らの生い立ちから若き日の恋愛を通して作曲家それぞれの音楽観を学び、インプットとアウトプットを繰り返しながら、より深みのある指導が出来る様になることを目指す。作曲家達が活躍した、「音楽の都」ウィーンでの写真やCD、DVD も使い、生の音楽にもあらゆる角度から触れていく。

《学生の到達目標》

クラシック音楽を身近に捉える力と基礎知識を身につけ、実際の小学校の音楽課程での教育に活かす力をつける。音楽教育の幅を、より広げる。

《授業計画》

1. ベートーヴェンについて（1）「交響曲」への理解と分かりやすい指導法
2. ベートーヴェンについて（2）ピアノソナタと女性達
3. ベートーヴェンについて（3）合唱指導及び、彼が影響を与えた画家、作曲家について
4. ブラームスについて（1）有名曲から知られる曲の指導法
5. ブラームスについて（2）有名作曲家とのつながり
6. ブラームスについて（3）神秘的三角関係と、小学生へのアプローチ法
7. シューベルトについて（1）歌曲への理解と指導法
8. シューベルトについて（2）室内楽曲への理解と指導法
9. シューベルトについて（3）歴史的映画から彼の人生観を学ぶ
10. モーツァルトについて（1）神童が、6～12 歳に作曲した曲
11. モーツァルトについて（2）フルート、クラリネット等、楽器への理解と指導法
12. モーツァルトについて（3）オペラ、レクイエムへの理解と指導法
13. 小学生向けの鑑賞教材の説明と勧め（1）
14. 小学生向けの鑑賞教材の説明と勧め（2）
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

授業への取り組み（60%）、レポート（40%）により総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

授業中に提示する。

教育方法特論

2 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 玉置 哲淳

《授業の概要》

保育指導法の研究は保育指導の根幹をなすものであり、本授業においては指導法の実践を軸に指導法の改善のための手法と考え方を検討し、保育現場での公開保育の分析の手続きや理念を検討する。特に、子どもの中心主義・系統主義の保育プロセスの双方のやり方を検討し、保育現場での保育の質を見える化する実践力を持つ。

《学生の到達目標》

1）保育の質を高めるため保育のプロセスをどう作り出すかに関心を持つ 2）保育の多様な理念（遊び・ワーク・設定保育）ごとに指導プロセスと方法が異なることを理解す 3）公開保育など保育指導のプロセスを分析・提案する力を身につける。

《授業計画》

1. 今日の保育における質の問題の中核としての指導法研究
2. 幼稚園教育要領指導法
3. 保育所保育指針の指導法
4. 指導法の歩み—保育要領—
5. 指導法の歩み—6 4 年幼稚園要領
6. 討論 保育現場での指導法の課題
7. 指導のプロセスの枠組みをどう考えるか（活動内容から）
8. 指導のプロセスの枠組みをどう考えるか（関係性から）
9. 指導案づくりと指導法 1
10. 指導案づくりと指導法 2
11. 保育見学—記録を取る 1—
12. 保育見学—記録を取る 2—
13. 保育指導法の評価 1
14. 保育指導法の評価 2
15. 指導法研究を現場でどう生かすか（討論）

《成績評価の方法・基準》

授業の参加・平常点を 60%、レポート 40%

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

可能であれば、指導法についての自分の課題を整理されていることが望ましい。

教育方法学特殊講義Ⅰ

1 年次→2 年次（半期）

2 単位（講義）

担当 佐伯 知子

《授業の概要》

この授業では、生涯学習社会における学習および学習者について理解を深め、その特性に応じた学習支援に関する知識・技能の習得を図ることを目的とする。とりわけ、教員あるいは学生主導の学習プログラムを実践する中で、学習支援の特質や留意点、さまざまな学習支援方法の課題や可能性について体系的に理解することに重きをおく。専門職者（特に、保育者・教育者）の学びとは何かということも積極的に議論していきたい。（なお、この授業は「教育方法学特殊講義Ⅱ」（隔年開講）と合わせて受講することを推奨する。）

《学生の到達目標》

①生涯学習社会における学習者の姿および学習支援のあり方について理解を深める。②具体的な学習支援方法の課題や可能性について、実際に学習プログラムに参加したり自ら計画・実施したりする中で理解を深める。

《授業計画》

1. オリエンテーション
2. アイスブレイク
3. 生涯学習社会における学習者と学習支援①
4. 生涯学習社会における学習者と学習支援②
5. 教員による学習プログラムの実践・解説①
6. 教員による学習プログラムの実践・解説②
7. 教員による学習プログラムの実践・解説③
8. 教員による学習プログラムの実践・解説④
9. 学習プログラムの計画・実施手順の説明
10. 学生による学習プログラムの計画・実施①
11. 学生による学習プログラムの計画・実施②
12. 学生による学習プログラムの計画・実施③
13. 学生による学習プログラムの計画・実施④
14. 実践のふりかえり
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

授業に取り組む姿勢（50%）、レポートや発表などの課題（50%）によって評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

・自分自身のこれまでの学び、職場における学びについてふりかえり、その特徴や課題、今後の展望等を考えてみる。

こども学特殊講義

1 年次→2 年次（半期）

2 単位（講義）

担当 宮里 暁美

《授業の概要》

子ども・子育て、保育・幼児教育や学校教育にかかわる事象について多様な視点から検討を深める。具体的には、愛着の形成、基本的信頼感の形成、自己肯定感といった情緒の安定に関わる養護の側面、子どもの育ちを支える児童文化をめぐる状況、さらには子ども・子育てをめぐる課題についての諸要素についての知見から探究していく。

《学生の到達目標》

子どもおよびそこにかかわる事象について理解する。たとえば愛着の形成や基本的信頼感の形成などについての知識を獲得する。ここでは、子どもおよび養育者による種々の行動的特徴とともに形成過程の方策やそのつまずきについて理解する。加えて親子関係や価値意識・倫理観形成の機序などについても各種文献をとらえて探究する。

《授業計画》

1. 当該授業についてのガイダンス
2. 子ども・子育てにかかわる研究についての基礎的理解
3. 小学校学習指導要領、幼稚園教育要領等の改訂の背景
4. 「情緒の安定」の意味① 愛着形成、基本的信頼感の形成
5. 「情緒の安定」の意味② 自信・自己肯定感の形成
6. 「情緒の安定」の意味③ 不適切な養育
7. 「子育て観」の変遷①
8. 「子育て観」の変遷②
9. 「子育て観」の変遷③
10. 子どもの文化をめぐる状況①
11. 子どもの文化をめぐる状況②
12. 子どもの文化をめぐる状況③
13. これからの保育・教育を考える①
14. これからの保育・教育を考える②
15. まとめ

《成績評価の方法・基準》

・レポート[作品含む] (30 点) ・ 平常点等 (70 点) 配点内訳：日常の授業での取り組みを総合して評価する。いずれの課題も 60%に到達することが望ましい。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前学習としては、毎回、授業前に資料等を熟読し、学習内容を把握しておく。事後学習としては、学んだことから視野を広げたり、深めたりするために振り返り内容について指示をする。

幼児教育思想史研究

2 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 井岡 瑞日

《授業の概要》

「児童の権利に関する条約（子どもの権利条約）」が国連で採択されてから 2019 年で 30 年が経った。しかし、子どもの権利保障をめぐっては今日にあっても様々な課題が山積している。そうした現状をよりよく理解するための手立てとして、本講義では「子どもの権利」をキーワードに近代西洋及び日本の幼児教育思想史をたどる。保育・幼児教育や子どもの権利保障の歴史について、現在とのつながりをふまえながら検討することを通して、私たちが今日の保育や教育の問題に対峙する上で学ぶべき点は何か、共に考えを深めたい。

《学生の到達目標》

子どもの権利をめぐる近代西洋及び日本の教育思想史について、その大まかな流れや代表的な思想について理解する。また、一連の学習から得た知見を自らの研究や実践に活かす視点を身につける。

《授業計画》

1. 授業の概要と進め方について
2. 子どもの権利条約に至る概況
3. 子どもの権利をめぐる幼児教育思想史①（西洋近代幼児教育思想の源流）
4. 子どもの権利をめぐる幼児教育思想史②（西洋近代幼児教育思想の系譜）
5. 子どもの権利をめぐる幼児教育思想史③（保育施設の誕生と発展）
6. 近代教育とポストモダン
7. 20 世紀の思想家と子どもの権利①（ケイ）
8. 20 世紀の思想家と子どもの権利②（コルチャック）
9. 20 世紀の思想家と子どもの権利③（コルチャック 2）
10. 映画鑑賞と受講生同士の意見交換
11. 子ども観の質的転換と子どもの権利保障政策
12. 日本における子ども観の質的転換についての事例検討①（幼児とメディア）
13. 日本における子ども観の質的転換についての事例検討②（受講生からの質疑応答）
14. 日本における子ども観の質的転換についての事例検討③（受講生からの質疑応答）
15. 全体の総括—歴史から何を学ぶのか

《成績評価の方法・基準》

授業への参画 50%、レポート課題 50%で総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前に配布したテキストを熟読し、疑問点等を明確にした上で授業に臨むこと。授業内で適宜読書案内を行うので、興味を持ったものは積極的に読むこと。

保育内容研究

2 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 森口 佑介、瀧川 光治

《授業の概要》

保育内容に関連した基礎・基本となる事項、今求められている保育内容や方法の動向、海外保育の動向などについて理解を研究的な視点から深める。また、修士論文作成・学会発表を想定して、関連文献・基本文献の押さえ方を保育内容の研究に即して学ぶ。

《学生の到達目標》

（1）幼稚園教育要領・保育所保育指針・認定こども園教育・保育要領の「保育の内容・方法」について、研究的視点で理解を深める。（2）保育内容に関する動向や海外保育の動向を調査し、まとめる。（3）研究発表スタイルで調査結果のプレゼンテーションを行う技能を獲得する。

《授業計画》

1. トピック A 要領・指針の基本的事項について①—資質・能力とは？
2. トピック A 要領・指針の基本的事項について②—10の姿とは？
3. トピック B いま求められている保育とは①—改訂の背景
4. トピック B いま求められている保育とは②—小学校との連携・接続の視点
5. トピック C 保育現場の実践課題①—遊びの捉え方
6. トピック C 保育現場の実践課題②—保育者の援助、環境構成
7. トピック D 海外保育の動向
8. トピック A についての調査報告①—プレゼン
9. トピック A についての調査報告②—研修スタイルのグループワーク
10. トピック B についての調査報告①—プレゼン
11. トピック B についての調査報告②—研修スタイルのグループワーク
12. トピック C・D についての調査報告①—プレゼン
13. トピック C・D についての調査報告②—研修スタイルのグループワーク
14. 人材育成のための園内研修のあり方
15. まとめ

《成績評価の方法・基準》

「調査報告資料作成」80%および「調査報告の発表」20%を総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・那須信樹他「手がかるに園内研修メイキング みんなでつくる保育の力」わかば社・安達謙他「子どもに至る：保育者主導保育からのピフォー&アフターと同僚性」ひとなる書房・秋田喜代美他訳「保育プロセスの質」評価スケール」明石書店

《事前・事後学習》

事前学習・事後学習として、参考書を活用して学びを広げていく。授業内で、適宜、その旨の指示を行う。

保育実践研究Ⅰ

2 年次（半期）
1 単位（演習）
担当 ★大方 美香

《授業の概要》

乳幼児の保育は、どのように遊びや活動を選択し、どのような環境で、どのように指導するか
が大切である。乳幼児の保育は、保育者の指導や保育の計画によって保育のあり方が問われる
ことを学ぶ、フィールド研究を活用し、理論と実践が結びつくための研究として、保育実践の
理解力を培う。子ども理解が可能となる討議を行う。先行研究等文献資料の読解及び、フィー
ルド研究により、データの収集、観察を行うことによって、保育実践における各自の問題意識
及び解決能力を身につける。

《学生の到達目標》

高度な保育・教育を目指し、Ⅰでは、学園の幼稚園又は、協力保育園等において、フィールド
研究を活用することにより、保育実践における子ども理解を行い、観察力とはなにかを討議
し、問題解決意識や自発的解決能力を身につけることを目的とする。また保育実践に関する研
究方法を習得することを目的とする。

《授業計画》

1. 保育実践研究Ⅰとは（フィールド研究と研究）
2. 保育を見る視点①（カリキュラムと保育の構造）
3. 保育を見る視点②（子どもの遊びや活動から観察する視点）
4. 保育実践を自分で研究す（フィールド研究①テーマの確認と視点の確認）
5. 保育実践の研究手法①（テーマ設定について討議－問題意識）
6. 保育実践を自分で研究する（フィールド研究②子どもの観察・調査研究）
7. 保育実践の研究手法②（各自のテーマ設定を発表）
8. 保育実践を自分で研究する（フィールド研究③子どもの遊びから・調査研究）
9. 保育実践を自分で研究する（フィールド研究④子どもの生活から・調査研究）
10. 保育実践を自分で研究する（フィールド研究⑤子どもの関係性から・調査研究）
11. 保育実践の研究手法（研究方法について討議－文献、観察研究）
12. 保育実践の研究手法（研究方法について討議－文献、観察研究）
13. 保育実践の研究手法①（研究のまとめ方について討議）
14. 保育実践の研究手法②（研究のまとめ方について発表）
15. 研究報告

《成績評価の方法・基準》

実践研究経過とレポート（30%）、最終プレゼンテーション（50%）及び、授業参画姿勢（20%）
を総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・文部科学省「幼稚園教育要領」解説書（フレーベル館）・厚生労働省「保育所保育指針」解
説書（フレーベル館）・秋田喜代美「保育者のライフステージと危機－ステージモデルから読
み解く専門性、発達、83」・中央教育審議会「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の
幼児教育の在り方について」・林信二郎・岡崎友典「幼児の教育と保育－指導することと見守
ること」放送大学教育振興会・星三和子・高橋洋代「0歳児の遊びに関わる日仏の保育者の
行動に関する一考察－保育現場から見た日仏の子どもの発達②」日仏教育学年報6・星三和
子・高橋洋代「乳児保育のなかに見られる日仏の保育観、発達観、法令及び行政文書の分析
を通して－」日仏教育学年報7・Shantz,D.W., &Hobart,C. j. 「Social conflict and
development:Peers and siblings. In T. J. Bernet & G.W.Ladd(Eds.)」Peer relationships
in child development (p71-94) New York :A Wiley-Interscience Publication. ・Vander
ven,K 「Pathways to professional effectiveness for early childhood educators. In
B.Spoodek,O. n. Saracho & D.Peters(Eds.)」Professionalism and the early childhood
practitioner.Teachers College Press. ・乳児保育プロジェクト（代表大方美香）「乳児保育
計画論－2つのタイプの事例を比較して－」ふくろう出版

《事前・事後学習》

事前学習：保育実践研究における先行研究を調べた動向を探る。事後学習：保育実践研究の課
題を整理し、各自の論文作成や研究に生かす。

保育実践研究Ⅱ

2 年次（半期）
1 単位（演習）
担当 高根 栄美

《授業の概要》

この授業では、受講者それぞれのフィールドにおける観察や調査を生かしながら、保育実践の
理解や子ども理解が可能となる討議や演習を行う。特に子どもの遊びや保育活動などの実践
に注目し、どのように環境を設定するのか、どのように保育者が関わるか、どのように子ども
を理解するのかなど、具体的な事例から保育指導や保育計画について研究する。また、保育実
践を向上するための研修内容についても検討する。

《学生の到達目標》

受講者が各々のフィールドで、子どもの視点に立った保育実践が組み立てられるような視点
を習得する。また学園の幼稚園や協力保育園において、フィールド研究を活用することによ
り、保育実践における子ども理解を行い、観察力とはなにかを討議し、問題解決意識や自発的
解決能力を身につけることを目的とする。

《授業計画》

1. 授業ガイダンス、保育実践研究とは
2. 子ども理解の方法論
3. エピソード記述
4. 子ども理解の方法としてのエスノグラフィ
5. 子ども理解の方法としてのドキュメンテーション、ポートフォリオ
6. 子どもの経験から振り返る保育プロセス
7. 写真評価法
8. ワールドカフェ：グループワークと討議の手法
9. テーマごとの保育実践研究（フィールド研究・子どもと先生）
10. テーマごとの保育実践研究（フィールド研究・子どもと言葉）
11. テーマごとの保育実践研究（フィールド研究・子どもと表現）
12. 保育所・認定こども園等における人権擁護のためのセルフチェックリスト
13. 保育を高める実践研究とカリキュラムマネジメント
14. 保育の計画と評価 乳児保育の方法と観察
15. 発表プレゼンテーションと討議

《成績評価の方法・基準》

実践研究経過と報告レポート 30%、最終発表プレゼンテーション 50%、および授業参画状況
20%による総合評価とする。

《授業で使用する教科書》

・文部科学省「幼稚園教育要領解説 平成 30 年 3 月」フレーベル館・内閣府・文部科学省・
厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説 平成 30 年 3 月」フレーベル館・
厚生労働省「保育所保育指針解説 平成 30 年 3 月」フレーベル館

《参考書》

・一般社団法人 日本保育学会 倫理綱領ガイドブック編集委員会/編「改訂 保育学研究倫理
ガイドブック 子どもの幸せを願う すべての保育者と研究者のために」フレーベル館・中坪史
典編「保育を語り合う「協働型」園内研修のすすめ－組織の活性化と専門性の向上に向けて－」
中央法規出版・文部科学省「幼児理解に基づいた評価 平成 31 年 3 月」チャイルド本社

《事前・事後学習》

事前学習：各自のテーマに基づく実践研究の資料収集とレポート作成。事後学習：授業時の各
履修者によるレポートやプレゼンテーションの考察メモを整理し、実践上の課題を論述でき
るようにする。その他、フィールドワークを予定している。個別の課題の詳細は授業内で示す
が、履修者の興味・関心によって調整する。保育実践研究を扱うものは資料が大変多く、その
他文献を含め授業内で直近紹介する。

教育心理学特殊講義

1 年次→2 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 遠藤 利彦

《授業の概要》

近年、子どもの教育に関して非認知能力、社会情動的スキルを育むことの重要性が指摘されるようになった。その一方で、これらの力の育成に関する研究や得られた知見の体系化については発展途上のようなのである。そこで、この科目では、非認知能力、社会情動的スキルに関する最新の文献や論文を講読することを通して、理解を深める。それによって、非認知能力、社会情動的スキルを育成するための、心理学の理論や知見を生かした現場での実践について考察する力を身につける。

《学生の到達目標》

非認知能力、社会情動的スキルに関する最新の文献や論文を講読することを通して、その内容や影響、育成に関する研究知見について理解を深める。非認知能力、社会情動的スキルの育成を目指した教育の方法、内容、環境、支援について、心理学の理論や知見を生かした検討を行うための視座を得る。

《授業計画》

1. 認知能力、社会情動的スキルの定義を理解する
2. 『社会情動的スキルを育む「保育内容 人間関係」』を講読し、討論する①
3. 『社会情動的スキルを育む「保育内容 人間関係」』を講読し、討論する②
4. 『社会情動的スキルを育む「保育内容 人間関係」』を講読し、討論する③
5. 『社会情動的スキルを育む「保育内容 人間関係」』を講読し、討論する④
6. 「私たちは子どもに何かができるのか」を講読し、討論する①
7. 「私たちは子どもに何かができるのか」を講読し、討論する②
8. 「私たちは子どもに何かができるのか」を講読し、討論する③
9. 「私たちは子どもに何かができるのか」を講読し、討論する④
10. 「私たちは子どもに何かができるのか」を講読し、討論する⑤
11. 非認知能力、社会情動的スキルに関する論文を講読し、討論する①
12. 非認知能力、社会情動的スキルに関する論文を講読し、討論する②
13. 非認知能力、社会情動的スキルに関する論文を講読し、討論する③
14. 非認知能力、社会情動的スキルに関する論文を講読し、討論する④
15. 総括：今後求められる研究や実践の課題について討論する

《成績評価の方法・基準》

課題発表・討論への参加などの授業への取り組み 50%、およびレポートから授業内容の理解度や考察内容について 50%、総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前学習としては、毎回、授業前に資料等を熟読し、学習内容を把握しておく。事後学習としては、学んだことから視野を広げたり、深めたりするために振り返り内容について指示をする。

幼児心理学特論

2 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 遠藤 利彦

《授業の概要》

乳幼児期という早期の発達、人格の基盤の形成が進むという点で、きわめて重要である。乳幼児期の心理的な発達における主要なテーマを重点的に取り上げ、保育・教育の実践に欠かすことのできない知見に論ずる。授業では取り上げる問題を予め提示し、参考文献も精選して用意し、これらの資料をめぐって、講義に適宜討議を加える形式を取る。

《学生の到達目標》

乳幼児期の発達では、個人の内外の諸要因が相互的な作用を介し、新しい行動のシステムが心理社会的に創出されてくる。乳幼児期の成達は、早期であっても、その本質は主体的に変化が生じし進行する過程であり、他の時期の発達と明確に異なる基本的な推移・特質が存在することなどにつき、専門的な知見を学ぶことを目的とする。

《授業計画》

1. 幼児心理学の必要性について（領域としての課題）
2. 基本的言解関係の形成
3. 愛着理論—ボウルビイの愛着理論を中心に
4. 乳幼児期の知覚と認知の発達 I
5. 乳幼児期の知覚と認知の発達 II
6. 記憶の発達・創造性の発達
7. 乳幼児独自の物の見方（ピアジェ理論を中心に）
8. 言語の獲得と発達
9. 乳幼児期の情動と自我・自己の発達
10. 社会性の発達（あそびの発達）
11. 家庭環境・家族システム
12. 発達をつまづき
13. 発達障害とその支援 I
14. 発達障害とその支援 II
15. まとめ

《成績評価の方法・基準》

授業への出席や討議への参加状況 20%とレポート提出 80%を通して総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前学習としては、毎回、授業前に資料等を熟読し、学習内容を把握しておく。事後学習としては、学んだことから視野を広げたり、深めたりするために振り返り内容について指示をする。

子どもと健康特殊講義

2 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 清田 岳臣

《授業の概要》

子どもの健全な心身の発達について支援できる専門職者を目指すために、乳幼児から高齢者に至るまでの人間行動の発達・加齢に関する仕組みを、主に生理学的、バイオメカニクスの観点から観察し、理解することを目的とする。ヒトの加齢発達に伴う、形態、体力、感覚・知覚・認知機能等の変化について解説するとともに、それらに関する測定・評価法についても、最近の研究成果を織り交ぜながら紹介する。また、それらの発達の变化に影響を及ぼす環境・文化的要因、遊びについても言及する。専門書の通読を通じて、子どもの発達に関する最新の知見にふれ、専門職者としての見識を深める。

《学生の到達目標》

子どもの心身の発達に背景にある、進化、発育、成熟や発達に関する内容を明確に理解し、発育・発達における遊びやスポーツの意義を深く理解する。教員と学生との双方向性のある討論を行ったりすることにより、現場で実践できる力を培う。

《授業計画》

1. 子どもの年齢発達、遊び、および環境
2. 形態の発育
3. 筋の発達
4. 呼吸循環器系の発達
5. 神経系の発達 1（構造）
6. 神経系の発達 2（知覚と情報処理）
7. 神経系の発達 3（運動制御系）
8. 行動の発達 1（乳児期）
9. 行動の発達 2（幼児期）
10. 行動の発達 3（児童期・思春期）
11. 子どもの発達に関する最新知見①（文献の概要理解）
12. 子どもの発達に関する最新知見②（文献通読）
13. 子どもの発達に関する最新知見③（課題設定）
14. 子どもの発達に関する最新知見④（グループワーク）
15. 子どもの発達に関する最新知見⑤（発表）

《成績評価の方法・基準》

授業への取り組み状況（20%）、レポートによる評価（40%）、発表（40%）とする。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・高石昌弘「からだの発達」大修館書店・Gabbard OP「Lifelong motor development」Benjamin Cumming・藤原勝夫「運動機能解剖学」北国新聞社

《事前・事後学習》

事前学習として、前回の授業で指定された、授業内容のキーワードについて小レポートの提出を求めます。事後学習として、授業内のディスカッションに基づくレポートを課します。

子ども心身医療特論Ⅱ

2 年次（半期）
2 単位（講義）
担当 石崎 優子、樋口 隆弘

《授業の概要》

子どもが健全な身体と心をもって成育するのを支援できる専門職者を目指すために、子どもの身体と心理社会的発達段階を理解し、各年齢群別の課題と成長・発達の特徴を学習する。小児科学、児童精神科学、心身医学、発達心理学、社会心理学等の国内外の研究を学び、広い視野から見た全般的な知識を獲得する。さらに臨床事例の検討を通じて、獲得した知識を現場で役立てることが可能なように保護者への具体的な指導法を企画立案し、知識を実践する能力を高める。内容は一旦下記とするが、初回の講義で大学院生と教員との相談により、大学院生の希望する内容に重点を置く。下記の項目は教員が対応可能な内容と考えて頂き、大学院生が学びたいことを積極的に申し出て頂きたい。

《学生の到達目標》

幼施設における子どもの安全に関する基本的事項として、発達特性を理解した支援、心身の健康を増進する積極的な活動を企画立案し、実行し評価できるよう保護者に指導を行えることを目的として自学自習に努める。特に現場での対応に苦慮されることが多い発達障害児への取り組みについて、臨床で用いる検査を実際使用したり、教員と学生との双方向性のある討論を行ったりすることにより、現場で実践できる力を培う。種々の場合に、園児を心身医学的視点でみる目を養う。また地域の各種機関と連携するスキルを身に着ける。

《授業計画》

1. 子どもと環境概論①（子どもの成長への環境要因の関与）
2. 子どもと環境概論②（子どもと環境に関する国内外の研究）
3. 子どもと環境概論③（子どもの健やかな育ちへの介入）
4. 子どもを取り巻く危険とその予防①（乳幼児期の危険要因）
5. 子どもを取り巻く危険とその予防②（学童以降の危険要因）
6. 養育環境と子ども①（社会経済的問題と子どもの成長発達）
7. 養育環境と子ども②（養育不全と子どもの発達）
8. 子どもの身体的・心理社会的発達①（乳幼児期の子ども）
9. 子どもの身体的・心理社会的発達②（学童・思春期の子ども）
10. 子どもの自立とセルフコントロール①（乳幼児期の関わり）
11. 子どもの自立とセルフコントロール②（思春期の関わり）
12. 特殊な要因を持つ子どもと家族①（慢性疾患の子ども）
13. 特殊な要因を持つ子どもと家族②（児童虐待と子ども）
14. 特殊な要因を持つ子どもと家族③（複雑な家族関係）
15. 特殊な要因を持つ子どもと家族④（子どもの包括的健康）

《成績評価の方法・基準》

レポート試験 30%、授業参画 70% で総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

大学院生が各自の立場で深めたいことを学んでください。

臨床心理学研究Ⅰ

2 年次（半期）
1 単位（演習）
担当 渡辺 俊太郎

《授業の概要》

臨床心理学は、心理臨床を実践する際の基盤となる心理学である。その知見には、現代の子ども・保護者が抱える問題に対する支援に活用できる内容も多い。この科目では、認知行動療法の基本となる「感情・認知・行動」の枠組みについて学ぶことを通して、子ども・保護者が抱える問題の心理学的理解、子どもの健全な心の発達を促す大人の関わり、保育・教育現場で必要とされる心理教育的援助サービスについて理解を深める。さらに、その内容に関する討議を通して、保育・教育現場で求められる子どもや保護者に対する支援について、その内容や方法、実践につながる研究のあり方を検討する。

《学生の到達目標》

認知行動療法の基本となる「感情・認知・行動」の枠組みを理解する。現代の子どもや保護者が抱える問題、健全な子どもの心の育ちを促す関わり、保育・教育現場で必要とされる心理教育的援助サービスに関する理論・研究について学び考察することを通して、リーダーとしての広い視野を持ち、より効果的な子ども・保護者支援を実践する力を身につける。

《授業計画》

1. オリエンテーション
2. 感情の役割・発達に関する理論を学ぶ
3. 現代の子ども・保護者が抱える問題を、感情面から理解する
4. 感情に関する援助の理論・システムについて学ぶ
5. 子どもの感情を育てるための親子支援について考える
6. 行動変容とその意味に関する理論を学ぶ
7. 現代の子ども・保護者が抱える問題を行動面から理解する
8. 行動に関する援助の理論・システムについて学ぶ
9. 適応につながる行動面からの支援について考える
10. 認知（スキーマ、ビリーフ）に関する理論を学ぶ
11. 現代の子ども・保護者が抱える問題を認知面から理解する
12. 認知に関する援助の理論・システムについて学ぶ
13. 事例研究を通して、認知行動療法の実践を理解する
14. 感情・認知・行動の枠組みを支援に生かすアイデアについて討議する
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

課題発表・討論への参加などの授業への取り組み 50%、およびレポートから授業内容の理解度や考察内容について 50%、総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

・必要に応じて資料を配布する。

《参考書》

・坂野雄二「認知行動療法」日本評論社・下山晴彦・神村栄一「認知行動療法」放送大学教育振興会

《事前・事後学習》

事前学習として、配布資料や関連文献を読み、予習を行う。事後学習として、「感情・認知・行動」の枠組みから保育・教育現場における子ども・保護者の姿や支援のあり方について考察する。

臨床心理学研究Ⅱ

2 年次（半期）
1 単位（演習）
担当 渡辺 俊太郎

《授業の概要》

保育・教育・子育て支援の現場では、心理臨床における援助のアプローチが有用となる場面がある。この科目では、援助理論や実際の援助方法について学びつつ、ロールプレイや参加型の講義、実践演習などの実践に直結した授業内容を通して、臨床心理学の視座に基づいた、保育・教育現場における望ましい援助のあり方について考察する。具体的には、心理臨床における集団援助の技法のひとつである構成的グループ・エンカウンターについて学ぶことを通して、保育・教育現場で求められる子どもや保護者に対する支援について新たな視座を提供し、その内容や方法、実践につながる研究のあり方を検討する。

《学生の到達目標》

構成的グループ・エンカウンターの理論や実際の援助方法について理解を深めるとともに、効果的な集団援助を行うためのスキルを習得し、保育・教育・子育て支援の実践力を身につける。また、保育・教育や子育て支援の実践を分析・検討するための新たな視座を身につけ、保育・教育現場において指導・助言を行うリーダーとしての資質を向上させる。

《授業計画》

1. オリエンテーション
2. 構成的グループ・エンカウンターの実験（コミュニケーション力の向上）
3. 構成的グループ・エンカウンターの意味を理解する
4. 構成することの意義について学ぶ
5. 的確なインストラクションについて学ぶ
6. エクササイズの実施や構成について理解する
7. 効果的なシェアリングについて学ぶ
8. 実施後のケアについて理解する
9. 構成的グループ・エンカウンターの実験（人間関係をふりかえる）
10. 構成的グループ・エンカウンターの実施案について学ぶ
11. 構成的グループ・エンカウンターの実施準備のポイントを理解する
12. 構成的グループ・エンカウンターの実施案を作成する
13. 構成的グループ・エンカウンターの実演を行う
14. 実施した構成的グループ・エンカウンターについてふりかえりを行う
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

実践発表・討論への参加などの授業への取り組み 50%、およびレポートから授業内容の理解度や考察内容について 50%、総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

・必要に応じて資料を配布する。

《参考書》

・国分康孝・国分久子「構成的グループエンカウンター事典」図書文化社・岡田弘「エンカウンターで学級が変わる 小学校編」図書文化社・片野智治・加勇田修士・国分久子・岡田弘・吉田隆江「エンカウンターで学級が変わる 高等学校編」図書文化社

《事前・事後学習》

事前学習として、配布資料や関連文献を読み、予習を行う。事後学習として、構成的グループ・エンカウンターを学ぶことから保育・教育現場における子ども・保護者の支援のあり方について考察する。

研究指導

1 年次→2 年次（通年）

0 単位（演習）

担当 瀧川 光治, 井岡 瑞日, 渡辺 俊太郎,
佐伯 知子, ★松岡 宏明, 赤井 利行,
高根 栄美, 玉置 哲淳, ★大方 美香,
小椋 たみ子, 平野 俊一郎, 浅野 孝平,
清田 岳臣, 末次 有加

《授業の概要》

各教員の専門性を生かし、修士論文の作成について個別ないしゼミ形式で丁寧に指導する。担当教員の指導の下に、各自の設定するテーマに基づいて修士論文をふさわしい形式でまとめ、所定の期日までに提出できるようにする。前期の終了時には、修士論文中間発表会を開催し、全教員からの助言・指導を受ける。後期には、修士論文の完成へと導くよう、指導する。

《学生の到達目標》

修士論文を完成し、提出すること。修士論文の口頭質問を受け、修士の学位が認定されるようにすること。

《授業計画》

1. 研究指導の進め方—オリエンテーション
2. 修士論文の構想発表(1)
3. 修士論文の構想発表(2)
4. 修士論文の構想発表(3)
5. 修士論文の構想発表(4)
6. 修士論文のテーマの最終確認と草稿の提出
7. 修士論文の草稿の検討(1)
8. 修士論文の草稿の検討(2)
9. 修士論文の草稿の検討(3)
10. 修士論文の草稿の検討(4)
11. 修士論文の草稿の検討(5)
12. 修士論文の草稿の検討(6)
13. 修士論文の草稿の再提出
14. 修士論文第2回中間発表会
15. 中間総括
16. 修士論文の草稿の再検討(1)
17. 修士論文の草稿の再検討(2)
18. 修士論文の草稿の再検討(3)
19. 修士論文の草稿の再検討(4)
20. 修士論文の草稿の再検討(5)
21. 修士論文の草稿の再検討(6)
22. 修士論文提出の許可判定
23. 修士論文の草稿の最終検討(1)
24. 修士論文の草稿の最終検討(2)
25. 修士論文の草稿の最終検討(3)
26. 修士論文の草稿の最終検討(4)
27. 修士論文の草稿の最終検討(5)
28. 修士論文の草稿の最終検討(6)
29. 修士論文の提出
30. 総括—口頭質問

《成績評価の方法・基準》

修士論文の評価50%口頭質問の評価50%を勘案して総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

修士論文の提出に向けて、各教員の指導・助言を受けながら構想の精査と論文の執筆に取り組むこと。その過程で生じた疑問点等については、教員に相談できるようその都度明確にしておくこと。また、教員から受けた指導・助言の内容をよく吟味し、その後の研究に反映できるよう努めること。詳細については各教員の指示に従うこと。

大学院 博士後期課程 1 年次

教育学特講

1 年次（後期）
2 単位（講義）
担当 ★大方 美香， 常盤 豊

《授業の概要》

近代教育の父と言われるルソーを取り上げ、彼の教育学の中心概念である「消極教育」と「積極教育」について詳しく講じる。授業では、今日の世界の保育・教育改革の動向にも触れ、ルソーの教育思想が今日の保育・教育改革に傾聴に値する数多くの示唆を与えていることに気付かせる。

《学生の到達目標》

ルソーにおける人間観と教育観との関連及び彼の教育と子どもに対する深い洞察と包括的、全体的把握について学び、実践的視野を涵養すること。

《授業計画》

1. この講義の進め方—オリエンテーション
2. ルソーの生涯について『エミール』の成立との関連で概説(1)。
3. ルソーの生涯について『エミール』の成立との関連で概説(2)。
4. ルソーの「消極教育」とは何か
5. 子どもの自然の発達段階に即応した教育(1)—ルソーの発達段階説を中心に
6. 子どもの自然の発達段階に即応した教育(2)—「なにこともなされない」教育
7. 感覚の訓練を介しての理性の準備教育(1)—乳児期の教育
8. 感覚の訓練を介しての理性の準備教育(2)—幼児期の教育
9. 感覚の訓練を介しての理性の準備教育(3)—少年期の教育
10. 事物・事象による教育—即物性の原理
11. ルソーにおける「積極教育」とは何か
12. 性の教育
13. 感情・情念の教育(1)—自己愛を中心に
14. 感情・情念の教育(2)—憐憫(の情)を中心に
15. 感情・情念の教育(3)—良心と理性の教育との協働

《成績評価の方法・基準》

レポート試験 80%、授業参画 20%で総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

紀要論文の当該部分を読むとともに、参考文献の興味のある箇所を精読する。

幼児教育学特講

1 年次（後期）
2 単位（講義）
担当 玉置 哲淳

《授業の概要》

本授業では、幼児教育における教育課程編成にかかわる理論的展望を踏まえて保育現場における教育課程の診断及び教育課程の編成方法の視点を獲得することを目的とする。このため、前半で、カリキュラム編成における4つの立場、経験主義的カリキュラム、認知論的カリキュラム、精神分析的カリキュラム、活動理論的カリキュラムの理論と事例を取り出しその特徴を学び、現行の要領の立場を整理する。後半では、4つの立場からのカリキュラム編成論を具体的な事例を含めて検討し、もって、高度な保育実践者・実践的研究者としての資質を形成する。

《学生の到達目標》

1. 文献検索・調査法を多様に使い、適切な課題と幼児教育学の研究手法論を獲得する。2. 幼児教育の研究にふさわしい現場と切り結ぶ態度を修得する。3. 課題と方法論との関係を理解し、研究者としての力量を養成する。

《授業計画》

1. 教育課程研究の課題—4つの立場の歴史と課題—
2. 経験主義的カリキュラムの視点と課題
3. 日米の実践事例（報告と討論）
4. 認知論的カリキュラムの視点と課題
5. 日米の実践事例（報告と討論）
6. 精神分析的カリキュラムの視点と課題
7. 日米の実践事例（報告と討論）
8. 活動理論的カリキュラムの視点と課題
9. 日米の実践事例（報告と討論）
10. 4つのカリキュラムについての評価（討論）
11. 統合的カリキュラム編成の考え方
12. 統合的カリキュラム編成からの長期指導計画の方向
13. 私のカリキュラム編成からの短期指導計画の方向
14. カリキュラム編成と保育実践1（まとめ）
15. カリキュラム編成と保育実践2（まとめ）

《成績評価の方法・基準》

レポート試験 80%、授業参画 20 %で総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

幼稚園教育要領・保育所保育指針を読み、自分の実践がどうであったかを随時発表する用意をすること。

保育学特講

1 年次（前期）
2 単位（講義）
担当 ★大方 美香， 阿部 和子

《授業の概要》

乳幼児期は人との交流を通して、生涯にわたる人格形成の基礎となる人との関係をつくる大切な時期である。具体的な保育の計画の編成を学び、現代社会の課題を含めて保育の構造を学ぶ。ここでは乳幼児期の保育における生活と遊びという体験の多様性、関連性をめざした保育の実践理論を学び、高度な保育・教育力のある人材とは何かを考える。また、子育ての支援（幼稚園・こども園・保育所・子育て支援・在宅保育・小規模保育所）や保育者の役割について、理論と実践の両面から論じる。

《学生の到達目標》

保育学を研究するとは何か、乳幼児保育及び子育てに関わる視点から、子どもや保育、子育てについての課題意識を持てるようにする。乳幼児保育における調査・研究の先行研究の紹介を通して、方法論的基礎を培う。

《授業計画》

1. 乳幼児保育を研究するとは（保育の構造）
2. 乳幼児保育を研究するとは（保育と子育て支援）
3. 乳幼児期の保育（生活の研究）
4. 乳幼児期の保育（遊びの研究）
5. 保育の計画（乳幼児期の研究）
6. 保育の計画（幼児期の研究）
7. 保育の計画及び見直し（子どもの生活から考える）
8. 保育の計画及び見直し（子どもの遊びから考える）
9. 子育ての支援（幼稚園・こども園・保育所における内容と課題）
10. 子育ての支援（子育て支援センターにおける内容と課題）
11. 多様な子育てと保育（在宅保育の内容と課題）
12. 多様な子育てと保育（小規模保育所の内容と課題）
13. 保育者に求められること（専門性からの研究）
14. 保育者に求められること（人としての研究）
15. 総括（研究内容をプレゼンテーションする）

《成績評価の方法・基準》

レポート試験 80%、授業参画発表 20%で総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・乳児保育プロジェクト（代表大方美香）「乳児保育計画論～2 つのタイプの事例を比較して～」ふくろう出版、2014・秋田喜代美・能智正博・藤江康彦「はじめての質的研究法—教育・学習編」・秋田喜代美「保育の心もち」ひかりのくに、2005・河邊貴子「遊びを中心とした保育」萌文書林、2005・東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎、河邊貴子、赤石元子「今日から明日へつながる保育—体験の多様性・関連性をめざした保育の実践と理論」萌文書林、2009・無藤 隆「幼児教育の原則—保育内容を徹底的に考える」ミネルヴァ書房、2009・「乳幼児教育学研究」日本乳幼児教育学会・「幼児教育・保育についての基本調査報告書（幼稚園編・保育所編）」株式会社ベネッセコーポレーション次世代育成研究所

《事前・事後学習》

事前学習：保育学とは何か、先行研究を調べておく。各自の論文テーマや内容と本講義の関係を事前に確認する。事後学習：保育の諸問題について関心を持ち、自分なりに整理し、まとめる（直接的でなくともよい）。

小児医学特講

1 年次（後期）
2 単位（講義）
担当 儀間 裕貴， 渡部 基信

《授業の概要》

本授業は学生参加型で実施する。現代の子どもの様々な生活習慣、とりわけ食、睡眠、その他の日常生活についての問題点を取り上げたい。まず、実地に遭遇すると考えられるテーマを、最初に対授業担当者から講義し、その後は全員で討論し、問題点を深化させる。ついで各学生が調査・研究し、その成果を逐次立場を代えて教師役となり、プレゼンテーションする。その発表に基づき議論を展開し、相互に評価する手法を採用する。

《学生の到達目標》

小児医学についての基本的な認識をもたせるとともに、現代の子どもの生活習慣上の諸問題を把握し、かつその対策を考える力を身につけさせる。

《授業計画》

1. 子どもの食行動に関する問題点の提起
2. 子どもの食習慣に関する討議（栄養の観点から）
3. 子どもの食習慣に関する討議（マナーの観点から）
4. 家族の食習慣に関する討議
5. 子ども・家族の食に関する全般的討議
6. 子どもの睡眠に関する問題点の提起
7. 子どもの睡眠行動の問題点の抽出
8. 家族の睡眠に関する討議
9. 子どもの睡眠と他の生活習慣との関連
10. 子どもの日常生活に関する問題点の提起
11. 子どもの事故の現状把握
12. 子どもの事故への対応策
13. 子どもの事故防止教育の実践方法
14. まとめの討議
15. 総括（試験を含む）

《成績評価の方法・基準》

レポート試験 30%、授業参画 70%で総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前学習としては、毎回、授業前に資料等を熟読し、学習内容を把握しておく。事後学習としては、学んだことから視野を広げたり、深めたりするために振り返り内容について指示をする。

子ども心身医療特講

1 年次（前期）
2 単位（講義）
担当 村上 佳津美

《授業の概要》

幼保育・学校の場では自然に子どもの発育・発達をみているが、改めて心身医学の視点から「身体」「精神」を等分に見ると共に、改めて両者の関係をしっかりとみる目を養うようにする。日常生活からみえてくる子どもの姿の中で、学問的に学ぶ身体と精神の発達に捉われない「生きた知識」を学問的に捉える目を養ってもらう。

《学生の到達目標》

基本的な心身医学・心身症の知識を習得する。身近な心身症以外にも、子どもの病気を心身症として捉える目を育てる。

《授業計画》

1. 心と体の関係
2. 感覚の重要性
3. 触覚の発達
4. 乳幼児期の心身症
5. 学童の心身症
6. 思春期の心身症
7. 虐待
8. いじめ
9. 思春期の反社会的行動の予防
10. 子どもの神経症と精神病
11. 発達障害を心身医学的に考える（1）
12. 発達障害を心身医学的に考える（2）
13. 親の問題を適切に捉え、対応する
14. 心身医学を自分の日常生活に活かす
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

レポートや提出物（60%）関心度（20%）発表（20%）で評価する

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

大学や職場でのあらゆる経験を整理しておく。子どもが病気を抱く、持たないに関わらず、心身医学の視点から子どもの問題をみるように心がける。知らないことは些細なことでも担当者へ尋ね、知識を深めていく積極性をもって欲しい。

発達心理学特講

1 年次（前期）
2 単位（講義）
担当 小椋 たみ子

《授業の概要》

言語・コミュニケーションの発達、つまづき、支援を中心とした発達心理学、発達科学、発達障害論の最新の研究成果を学ぶ。また、国内外の雑誌論文を講読し（アクティブラーニング）、先行研究論文から結論をだすまでの方法論を学び、各受講生の博士論文の理論的基盤と方法論を確立する。

《学生の到達目標》

1. 発達心理学、発達科学の先行研究と方法論を理解する。2. 発達心理学、発達科学の知見から学んだことを実践に生かす。3. 各自の博士論文の理論的基盤と方法論を確立する。4. 論文の作成の仕方を選び、各自の論文を執筆する。

《授業計画》

1. オリエンテーション
2. 発達心理学、発達科学の方法論と研究成果を学ぶ
3. 発達心理学、発達科学の方法論と研究成果を学ぶ
4. 発達心理学、発達科学の方法論と研究成果を学ぶ
5. 発達心理学、発達科学の方法論と研究成果を学ぶ
6. 発達心理学、発達科学の方法論と研究成果を学ぶ
7. 各自の研究の理論的基盤と方法論を先行研究から学ぶ
8. 各自の研究の理論的基盤と方法論を先行研究から学ぶ
9. 各自の研究の理論的基盤と方法論を先行研究から学ぶ
10. 各自の研究の理論的基盤と方法論を先行研究から学ぶ
11. 各自の研究の理論的基盤と方法論を先行研究から学ぶ
12. 各自の研究の理論的基盤と方法論を先行研究から学ぶ
13. 各自の研究の理論的基盤と方法論を先行研究から学ぶ
14. 論文の作成の仕方を選び
15. まとめ

《成績評価の方法・基準》

授業内での担当部分レポート提出・発表 60%、授業参画 40%

《授業で使用する教科書》

・小椋たみ子・小山正・水野久美「乳幼児期のことばの発達とその遅れ：保育・発達を学ぶ人のための基礎知識」ミネルヴァ書房

《参考書》

・「発達心理学研究、教育心理学研究、保育学研究、乳幼児教育学研究、特殊教育研究、Child Development, Developmental Psychology, Developmental Science, Developmental Review」などの国内外の雑誌論文・アメリカ心理学会「APA 論文作成マニュアル」医学書院

《事前・事後学習》

講義などで紹介された文献を読む。原典にあたる。担当する文献を読み、レジメを作成して、事前にメール添付で受講生に送付する。

教育学演習

1 年次（前期）→ 2 年次（前期）→ 3 年次（後期）
3 単位（演習）
担当 ★大方 美香

《授業の概要》

2 年次では、受講生の研究課題に応じて国内外の最新の研究動向や成果、関連領域の文献について詳しいレビューを行い、それに基づき演習参加者全員で様々な角度から検討・討論する。それを通じて、演習参加者が各自の研究水準をより一層高め、かつ関連領域についての幅広い理解をもてるようにする。

《学生の到達目標》

国内外の最新の主要な先行研究の収集・分析・検討を通して、受講者独自の立場・見解を形成するとともに、研究手法を確立すること。

《授業計画》

1. この課題演習の進め方—オリエンテーション
2. 日本の主要な先行研究について発表（院生1）と討論
3. 日本の主要な先行研究について発表（院生2）と討論
4. 日本の主要な先行研究について発表（院生3）と討論
5. 日本の主要な先行研究について再発表（院生1）と討論
6. 日本の主要な先行研究について再発表（院生2）と討論
7. 日本の主要な先行研究について再発表（院生3）と討論
8. 外国の主要な先行研究について発表（院生1）と討論
9. 外国の主要な先行研究について発表（院生2）と討論
10. 外国の主要な先行研究について発表（院生3）と討論
11. 自己の研究課題に即した論文の発表（院生1）と討論
12. 自己の研究課題に即した論文の発表（院生2）と討論
13. 自己の研究課題に即した論文の発表（院生3）と討論
14. 各自の博士学位申請論文の進捗状況について発表（院生1～3）
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

発表の評価 80%と授業参画度 20%で総合判断する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

主要な先行研究を精読し、レビューするとともに、演習終了後必ず振り返りを行い、次につなげる。

幼児教育学演習

1 年次（前期）→ 2 年次（前期）→ 3 年次（後期）
3 単位（演習）
担当 玉置 哲淳

《授業の概要》

1 年次では、カリキュラム編成の重要なステップとして「子ども理解」を取り上げる。保育の現場では多様な子ども理解があるとされているが説得力のある子ども理解の目的・内容・方法を実践事例から学ぶ。特に、子ども理解の手続きを自分なりに掘り整理する機会とする。又、子ども理解の課題の解決を図るために、どのような方法論が必要かを検討する。少なくとも複数の方法論を検討して研究課題の性格から見た研究方法論の妥当性を追及する。

《学生の到達目標》

1. カリキュラム編成・カリキュラムマネジメントにおける子ども理解の多様な方法を知る。
2. カリキュラムマネジメントにおける子ども理解の意味を実践的に理解する。

《授業計画》

1. 幼稚園教育要領・保育所保育指針における子ども理解の位置づけ
2. 要領・指針の子ども理解の課題
3. 子ども理解がカリキュラム編成につなげる方向性—5つの項目の検討の必要性—
4. カリキュラム編成の5つの項目との関連性—ねらい・目標と子ども理解—
5. カリキュラム編成の5つの項目との関連性—保育内容と子ども理解—
6. カリキュラム編成の5つの項目との関連性—保育者の関わりと子ども理解—
7. カリキュラム編成の5つの項目との関連性—保育者の関わりと子ども理解—その研究の事例
8. 討論（子ども理解の多様性）
9. 幼児教育の研究課題の事例を選択し、解決する
10. 長期研修計画での子ども理解1
11. 長期研修計画での子ども理解2
12. 短期研修計画での子ども理解1
13. 短期研修計画での子ども理解2
14. 討論研修計画における子ども理解の位置づけ
15. 保育現場における子ども理解の方法

《成績評価の方法・基準》

レポート試験 80%、授業参画 20% で総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

・レジュメ配布

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

検討課題を授業の進行に合わせて出すのでプレゼンテーションに手がかりとし準備すること。

保育実践研究演習

1 年次（後期）→ 2 年次（後期）→ 3 年次（前期）
3 単位（演習）
担当 ★大方 美香

《授業の概要》

保育実践に関するフィールド研究及び発表に関して3年間にわたり、演習を行う。1年次は第一段階として、理論と実践が結びつくように研究の意義を理解し、保育実践の理解力を培い、課題意識が明確となる討議を行う。先行研究について討議検討し、文献資料の読解及びフィールド研究により、データの収集、観察を行いながら自己の研究主題を確定するように導く。さらに、研究テーマが定まり、研究に着手すれば中間発表を行い、研究方針に修正を加える。

《学生の到達目標》

1. 研究の展開手法、成果のまとめ方および原稿（口頭、投稿）作成方法を習得する。2. 自分の研究成果を広く社会に還元できるよう努力する。

《授業計画》

1. 保育実践演習の進め方とオリエンテーション（フィールド研究と研究）
2. 保育実践演習の意義と目的に関する討議（カリキュラムと保育の構造）
3. 研究主題の決め方に関する意見交換（子どもの遊びや活動から観察する視点）
4. 先行研究の探索方法（フィールド研究位置テーマの確認と視点の確認）
5. 代表的な先行研究の紹介と討議（テーマ設定について討議—問題意識）
6. 代表的な先行研究の手法と論旨の展開方法（フィールド研究に子どもの観察・調査研究）
7. その他の先行研究に関する検討（各自のテーマ設定を発表）
8. 各自の研究手法の紹介と討議（フィールド研究産子どもの遊びから・調査研究）
9. 各自の研究の展開方法の検討（フィールド研究し子どもの生活から・調査研究）
10. 各自の研究の展開方法の検討（フィールド研究子どもの関係から・調査研究）
11. 関連学会の出席、先行研究者との意見交換（研究方法について討議—文献、観察研究）
12. 学会発表課題に関する討議（各自の研究手法について発表）
13. 各自の主題の再検討（研究の進め方について討議）
14. 研究の中間発表に関する討議、検討（研究の進め方について発表）
15. 研究の中間発表のまとめ

《成績評価の方法・基準》

レポート試験 80%、授業参画発表 20%で総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・文部科学省「幼稚園教育要領」解説書（フレーベル館）・厚生労働省「保育所保育指針」解説書（フレーベル館）・秋田喜代美「保育者のライフステージと危機—ステージモデルから読み解く専門性、発達、83」・中央教育審議会「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」・林信二郎・岡崎友典「幼児の教育と保育—指導することと見守ること—」放送大学教育振興会・星三和子・高橋洋代「0歳児の遊びに関わる日仏の保育者の行動に関する一考察—保育現場から見た日仏の子どもの発達（2）」日仏教育学年報6・星三和子・高橋洋代「乳児保育のなかに見られる日仏の保育観、発達観—法令及び行政文書の分析を通して—」日仏教育学年報7・Shantz, D. W., & Hobart, C. j. 「Social conflict and development: Peers and siblings. In T. J. Bernet & G. W. Ladd (Eds.)」Peer relationships in child development (pp. 71-94) New York: A Wiley-Interscience Publication.・Vander ven, K. 「Pathways to professional effectiveness for early childhood educators. In B. Spodek, O. n . Saracho & D. Peters (Eds.)」Professionalism and the early childhood practitioner. Teachers College Press. ・厚生労働省「次世代育成支援施策の在り方に関する研究会 社会連帯による次世代育成支援に向けて」

《事前・事後学習》

事前学習：各自の論文テーマと研究方法について先行研究を調べておく事後学習：各自の研究手法に基づいて、学内外等で発表する。

保育内容研究演習

1 年次（前期）→ 2 年次（前期）→ 3 年次（前期）
3 単位（演習）
担当 瀧川 光治

《授業の概要》

1年次では、保育内容を研究するにあたっての研究方法を学ぶとともに、保育内容の研究動向を学びながら、学会口頭発表に向けての原稿の作成方法を習得する。具体的には、先行研究のリサーチ、文献調査研究・観察研究・インタビュー調査・質問紙調査の研究手法と結果の整理方法について実践的に学ぶことを通して、自立的に研究を行っていくように方向づける。とくに、受講生の研究課題に応じて、国内外の最新の研究動向や成果、関連領域の文献について、詳しいレビューを行う。参加者全員で討議し、各自の研究水準をより高めるように配慮する。

《学生の到達目標》

1. 博士（教育学）の学位に値する論文が備えていなければならない諸条件を理解する。2. 研究の展開手法、成果のまとめ方および原稿（口頭、投稿）作成方法を習得する。3. 自分の研究成果を広く社会に還元できるよう努力する。

《授業計画》

1. 保育内容についての研究動向
2. 保育内容についての研究方法を学ぶ①—学会誌・研究紀要の論文の構造について
3. 保育内容についての研究方法を学ぶ②—問題意識の醸成と先行研究のリサーチ方法について
4. 先行研究のリサーチの実際とその整理
5. 先行研究のリサーチの発表と討議①（院生1）
6. 先行研究のリサーチの発表と討議②（院生2）
7. 先行研究のリサーチの発表と討議③（院生3）
8. 保育内容についての研究方法を学ぶ④—文献研究の研究手法と結果の整理方法
9. 保育内容についての研究方法を学ぶ⑤—観察研究の研究手法と結果の整理方法
10. 保育内容についての研究方法を学ぶ⑥—質問紙調査による研究手法と結果の整理方法
11. 保育内容についての研究方法を学ぶ⑦—面接調査による研究手法と結果の整理方法
12. 保育内容に関する研究計画書の発表と討議①（院生1）
13. 保育内容に関する研究計画書の発表と討議②（院生2）
14. 保育内容に関する研究計画書の発表と討議③（院生3）
15. 学会発表、紀要論文に向けて

《成績評価の方法・基準》

レポート課題 50%、発表と討議 50%で総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・那須喜樹他「手が届く園内研修メイキング みんなでつくる保育の力」わかば社・安達譲他「子どもに至る：保育者主導保育からのピフォー&アフターと同僚性」ひとなる書房

《事前・事後学習》

事前学習・事後学習として、自分の研究テーマに関する関連文献を読み、レビュー論文を書くための学びを広げていく。授業内で、適宜、その旨の指示を行う。

子ども心身医療演習

1 年次（後期）→ 2 年次（後期）→ 3 年次（前期）
3 単位（演習）
担当 村上 佳津美

《授業の概要》

子どもの心身医療の現場に出席し演習を行うことで、生きた学習を習得してもらう。主に子ども心身医療研究所での新患のカンファレンスに出席することで、医療の場に持ち込まれる問題をを通して、幼児育現場と学校で会う子どもの問題を考えていくようにする。日常生活からみえてくる困った子どもをどのように心身医療の視点で診ているのかから幼児育の現場で活用する思考を育てる。

《学生の到達目標》

医療モデルと教育モデルの違いを通して、子どもを多角的に捉えていく能力を育てる基本的な心身医学の知識を習得する。身近な心身症以外にも、子どもの一般的な病気を心身医学的に捉える目を育てる。

《授業計画》

1. 心身医学の基本
2. 問題を抱える親子へのアプローチ
3. 新患カンファレンスへ出席（1）
4. 新患カンファレンスへ出席（2）
5. 新患カンファレンスへ出席（3）
6. 3 回のカンファレンスで得られた症例（概ね 25 例）のその後の学習
7. 新患カンファレンスに出席（4）
8. 新患カンファレンスに出席（5）
9. 新患カンファレンスに出席（6）
10. 後半の 3 回の出席で得られた症例（概ね 25 例）のその後の学習
11. 約 50 例の中から 3 例を選び、詳細なレポート作成
12. レポート指導
13. レポート指導
14. 総括（1）
15. 総括（2）

《成績評価の方法・基準》

レポートや提出物で評価

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

大学や職場でのあらゆる経験を整理しておく。子どもが病気を持つ、持たないに関わらず、心身医学の視点からみるように心がける。氣に付いたことで習わなかったことは担当者へ尋ねる積極性をもって欲しい。

発達心理学演習 I（発達支援）

1 年次（後期）→ 2 年次（前期）→ 3 年次（後期）
3 単位（演習）
担当 小椋 たみ子

《授業の概要》

3 年次では、博士学位請求論文を執筆する。各自の研究の理論的背景を明確にし、1 年次、2 年次でまとめた論文の筋立てをして、数章から構成される博士論文を執筆し、完成させ、提出する。未公開の章は学会の査読付き論文に投稿する。

《学生の到達目標》

1. 博士学位請求論文を執筆し、提出する。2. 所属する学会の学会誌、外国雑誌に論文を投稿する。3. 今後の自分の研究の展望を明確にする。

《授業計画》

1. 博士論文の章の構成を考える。
2. 第一章の理論的背景の文献レビューを行い、問題を明確にする。
3. 第一章の理論的背景の文献レビューを行い、問題を明確にする。
4. 博士学位請求論文を執筆し、進捗状況を報告し、検討・討議を行う。
5. 博士学位請求論文を執筆し、進捗状況を報告し、検討・討議を行う。
6. 博士学位請求論文を執筆し、進捗状況を報告し、検討・討議を行う。
7. 博士学位請求論文を執筆し、進捗状況を報告し、検討・討議を行う。
8. 博士学位請求論文を執筆し、進捗状況を報告し、検討・討議を行う。
9. 博士学位請求論文を執筆し、進捗状況を報告し、検討・討議を行う。
10. 博士学位請求論文を執筆し、進捗状況を報告し、検討・討議を行う。
11. 博士学位請求論文を執筆し、進捗状況を報告し、検討・討議を行う。
12. コメントに基づき博士学位請求論文の修正を行う。
13. 博士学位請求論文を完成させ、提出する。
14. 未公開の章を学会の査読付き論文に投稿する。
15. 未公開の章を学会の査読付き論文に投稿する。

《成績評価の方法・基準》

博士論文の完成度で評価を行う。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・アメリカ心理学会「APA 論文作成マニュアル」医学書院

《事前・事後学習》

先行研究から学び、各自の問題意識を明確にし、論理的な文章で執筆してください。

発達心理学演習Ⅱ（発達臨床）

1 年次（前期）→ 2 年次（後期）→ 3 年次（前期）
3 単位（演習）
担当 森口 佑介

《授業の概要》

1 年次では、発達心理学における発達臨床についての理論的、実証的な意義の的確な認識を図り、当該及び関連専門領域の研究結果、諸課題へ研究者としてのアプローチを試み、実証的研究に向けての基礎構築のための指導を行う。本演習においては、研究方法（実証的研究の方法、要因計画、資料分析など）についても検討論議を合わせて行う。総括において、発達期における心理臨床に関する文献検索・研究成果の報告、研究課題をめぐり今後の演習を展望する。

《学生の到達目標》

1. 発達臨床及び関連分野に関する先行文献、研究論文を可能な限り探索する。2. 1. の探索作業を広汎に行い、従来の研究成果、課題を明らかにするとともに研究方法論を修得する。

《授業計画》

1. オリエンテーション（演習の目標、内容について）
2. 情動的発達臨床の論文検索と研究成果の報告・討議 1
3. 情動的発達臨床の論文検索と研究成果の報告・討議 2
4. 情動的発達の心理臨床に関する研究課題について論究
5. 知覚発達臨床の論文検索と研究成果の報告・討議 1
6. 知覚発達臨床の論文検索と研究成果の報告・討議 2
7. 知覚発達の心理臨床に関する研究課題について論究
8. 社会的発達臨床の論文検索と研究成果の報告・討議 1
9. 社会的発達臨床の論文検索と研究成果の報告・討議 2
10. 社会的発達の心理臨床に関する研究課題について論究
11. 家庭環境臨床の論文検索と研究成果の報告・討議
12. 家庭環境の心理臨床に関する研究課題について論究
13. 教育・地域環境臨床の論文検索と研究成果の報告・討議
14. 教育・地域環境の心理臨床に関する研究課題と論究
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

レポート試験 80%、授業参画 20% で総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前学習としては、毎回、授業前に資料等を熟読し、学習内容を把握しておく。事後学習としては、学んだことから視野を広げたり、深めたりするために振り返り内容について指示をする。

臨床心理学演習

1 年次（後期）→ 2 年次（後期）→ 3 年次（後期）
3 単位（演習）
担当 渡辺 俊太郎

《授業の概要》

臨床心理学の理論に基づく援助の方法、さらに研究や研究成果の公開を行うために必要な知識および技能の修得を目指し、3 年間の演習を行う。1 年次では、フィールド研究を通して臨床心理面接（個人対象・集団対象）、臨床心理アセスメント、臨床心理地域援助の演習を行い、援助の実践について学ぶ。また、その内容に関する先行研究の精読を行って研究方法や論文作成方法を理解するとともに、臨床心理学およびその関連分野における最新の研究知見を学ぶ。さらに、文献を精読した後の議論を通して自身の研究主題に関する問題意識の明確化を行い、博士学位請求論文の構想に活用する。

《学生の到達目標》

臨床心理学における援助方法、研究方法および論文作成方法を修得する。また、臨床心理学および関連分野における最新の研究知見を理解する。

《授業計画》

1. オリエンテーション（演習の目的と進め方）
2. 臨床心理面接（個人対象）に関する先行研究検索とその成果について報告・討議を行う
3. 個人を対象とした臨床心理面接の事例報告および検討を行う①（フィールド研究）
4. 臨床心理アセスメント（発達・性格検査）に関する先行研究について報告・討議を行う
5. 臨床心理アセスメント（面接）に関する先行研究について報告・討議を行う
6. 発達検査、性格検査による臨床心理アセスメントの演習を行う（フィールド研究）
7. 面接による臨床心理アセスメントの演習を行う（フィールド研究）
8. 臨床心理アセスメントの事例報告および検討を行う（フィールド研究）
9. 個人を対象とした臨床心理面接の事例報告および検討を行う②（フィールド研究）
10. 臨床心理面接（集団対象）に関する先行研究検索とその成果について報告・討議を行う
11. 集団を対象とした臨床心理面接の演習を行う（フィールド研究）
12. 臨床心理地域援助に関する先行研究検索とその成果について報告・討議を行う
13. 臨床心理地域援助の事例報告および検討を行う（フィールド研究）
14. 個人を対象とした臨床心理面接の事例報告および検討を行う③（フィールド研究）
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

レポート試験 80%、討論・演習 20% を基本としながら、総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

・必要に応じて資料を配布する。

《参考書》

・中沢潤他「心理学マニュアル 1〜4」北大路書房・海保博他「シリーズ・心理学の技法」福村出版・氏原寛他「臨床心理学①〜③」培風館・土居健郎「新訂 方法としての面接」医学書院・M. ハーセン・V. B. ヴァン・ハッセル「臨床面接のすすめ方」日本評論社・I. B. Weiner「Principles of Psychotherapy」Wiley・日本心理学会「心理学研究」・日本健康心理学会「健康心理学研究」・日本心理臨床学会「心理臨床学研究」・日本カウンセリング学会「カウンセリング研究」・「関連分野の和洋学会誌、文献」

《事前・事後学習》

臨床心理学およびその関連分野の文献を精読するとともに、臨床心理面接、臨床心理アセスメント、臨床心理地域援助の実践を通して得た知見をもとに、博士学位請求論文の構想について検討する。

研究指導

1 年次→2 年次→3 年次（通年）

0 単位（演習）

担当 瀧川 光治, 渡辺 俊太郎, 玉置 哲淳,
★大方 美香, 小椋 たみ子

《授業の概要》

修士論文の提出に向けて、各教員の指導・助言を受けながら構想の精査と論文の執筆に取り組むこと。その過程で生じた疑問点等については、教員に相談できるようその都度明確にしておくこと。また、教員から受けた指導・助言の内容をよく吟味し、その後の研究に反映できるよう努めること。詳細については各教員の指示に従うこと。

《学生の到達目標》

院生各自が自らの問題関心と適切な研究方法論に基づき、標準修業年限内で、博士学位請求論文を執筆・提出できるようにする。

《授業計画》

1. 研究指導の進め方・院生各自の問題関心と研究計画の把握
2. 院生各自の関心のあるテーマについての研究状況の紹介
3. 先行研究の検索・収集・整理
4. 博士学位請求論文のテーマの決め方
5. 各自の博士学位請求論文の構想発表（院生1）
6. 各自の博士学位請求論文の構想発表（院生2）
7. 各自の博士学位請求論文の構想発表（院生3）
8. 各自の博士学位請求論文の構想の再発表（院生1）
9. 各自の博士学位請求論文の構想の再発表（院生2）
10. 各自の博士学位請求論文の構想の再発表（院生3）
11. 各種学会口頭発表予定者の発表（院生1）と討論
12. 各種学会口頭発表予定者の発表（院生2）と討論
13. 各種学会口頭発表予定者の発表（院生3）と討論
14. 各種学会口頭発表予定者の再発表（院生1）と討論
15. 各種学会口頭発表予定者の再発表（院生2）と討論
16. 各種学会口頭発表予定者の再発表（院生3）と討論
17. 各種学会紀要執筆予定者の発表（院生1）と討論
18. 各種学会紀要執筆予定者の発表（院生2）と討論
19. 各種学会紀要執筆予定者の発表（院生3）と討論
20. 各種学会紀要執筆予定者の再発表（院生1）と討論
21. 各種学会紀要執筆予定者の再発表（院生2）と討論
22. 各種学会紀要執筆予定者の再発表（院生3）と討論
23. 各自の博士学位請求論文の構想発表（院生1）
24. 各自の博士学位請求論文の構想発表（院生2）
25. 各自の博士学位請求論文の構想発表（院生3）
26. セミ内中間研究発表会への準備（院生1）
27. セミ内中間研究発表会への準備（院生2）
28. セミ内中間研究発表会への準備（院生3）
29. セミ内中間研究発表会
30. 総括

《成績評価の方法・基準》

研究課題への取り組み状況 80% セミ内中間発表会 20%を踏まえ、総合的に判断する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

先行研究の検索・収集・整理や、各種学会の口頭発表・紀要執筆を進め、博士学位請求論文の構想について検討する。

大学院 博士後期課程 2 年次

教育学演習

1 年次（前期）→2 年次（前期）→3 年次（後期）
3 単位（演習）
担当 山崎 高哉

《授業の概要》

2 年次では、受講者の研究課題に応じて国内外の最新の研究動向や成果、関連領域の文献について詳しいレビューを行い、それに基づき演習参加者全員で様々な角度から検討・討論する。それを通じて、演習参加者が各自の研究水準をより一層高め、かつ関連領域について広汎な理解をもてるように配慮する。

《学生の到達目標》

国内外の最新の主要な先行研究の分析・検討を通じて、受講者独自の立場・見解を形成するとともに、研究手法を確立すること。

《授業計画》

1. この課題演習の進め方オリエンテーション
2. 日本の主要な先行研究について発表（院生1）と討論
3. 日本の主要な先行研究について発表（院生2）と討論
4. 日本の主要な先行研究について発表（院生3）と討論
5. 日本の主要な先行研究について再発表（院生1）と討論
6. 日本の主要な先行研究について再発表（院生2）と討論
7. 日本の主要な先行研究について再発表（院生3）と討論
8. 外国の主要な先行研究について発表（院生1）と討論
9. 外国の主要な先行研究について発表（院生2）と討論
10. 外国の主要な先行研究について発表（院生3）と討論
11. 自己の研究課題に即した論文の発表（院生1）と討論
12. 自己の研究課題に即した論文の発表（院生2）と討論
13. 自己の研究課題に即した論文の発表（院生3）と討論
14. 博士学位申請論文の進捗状況について発表（院生1～3）
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

発表の評価 80%と授業参画度 20%で総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

主要な先行研究を精読し、レビューするとともに、演習終了後必ず振り返りを行い、次につなげる。

幼児教育学演習

1 年次（前期）→2 年次（前期）→3 年次（後期）
3 単位（演習）
担当 玉置 哲淳

《授業の概要》

2 年次では、1 年次で押さえた4 つのパラダイムを踏まえて、わが国における多様な研究成果を評価し、自分のパラダイムを自己形成する力を養成する。すなわち、わが国の幼児教育の理論的成果を整理するために、参考文献を論究・比較し、これまでの幼児教育学の立場性を理解させるとともに、自分のパラダイムがその理論と保育実践の両面からどこに位置づくのかを意識できる力を獲得させる。

《学生の到達目標》

1. 今日の幼児教育学における理論的枠組み・成果について臨時的・実証的視点を持って適切に評価する能力を涵養する。2. 自分のパラダイムを自分の狭い関心からではなく、幼児教育学全体のパラダイムに位置づけることができる力を育てる。『授業計画』について授業回ごとに記載してください。

《授業計画》

1. 幼児教育学における4 つのパラダイムと保育実践（講義）
2. 幼稚園教育要領の編成と幼児教育学のパラダイム（講義）
3. 幼児教育実践と幼児教育学1—倉橋惣三を中心に—（報告と討議）
4. 幼児教育実践と幼児教育学2—山下俊郎を中心に—（報告と討議）
5. 幼児教育実践と幼児教育学—宮内孝を中心に—（報告と討議）
6. 幼児教育実践と幼児教育理論の関係についてのプレゼンテーション（まとめ1）
7. 幼児教育実践と幼児教育理論の関係についてのプレゼンテーション（まとめ2）
8. 現代の幼児教育学の知見の検討1
9. 現代の幼児教育学の知見の検討2
10. 現代の幼児教育学の知見の検討3（報告と討議）
11. 現代の幼児教育学の知見の検討4（報告と討議）
12. 幼児教育カリキュラムをめぐる現代におけるいろいろな立場の対立と融合（プレゼンテーション）
13. 保育内容領域を巡る現代におけるいろいろな立場の対立と融合（プレゼンテーション）
14. 保育方法をめぐる現代におけるいろいろな立場の対立と融合（プレゼンテーション）
15. 幼児教育学全体をめぐる現代におけるいろいろな立場の対立と融合（プレゼンテーション）

《成績評価の方法・基準》

レポート試験 80%、授業参画 20%で総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

・「倉橋惣三全集 4 巻」フレーベル館・山下俊郎編「保育所保育指針解説」ひかりのくに 1965・宮内孝「幼稚園教育の実践」フレーベル館 1955

《参考書》

・小田豊／編 榎沢良彦／編「新しい時代の幼児教育」有斐閣 2002・小田豊／編著 神長美津子／編著「教育課程総論」北大路書房 2009・小田豊「子どもの心をつかむ保育者 子どもの願いが生かされる幼児教育を求めて 2001」ひかりのくに 2001・高杉自子 他監「保育方法論」光生館 1998・山本和美 編著「保育方法・形態論」樹林房 1998・久富陽子／著 梅田優子／著「保育方法の実践」萌文書林 2008・森上史朗／編 渡辺英則／編 大豆生田啓友／編「保育方法・指導法の研究 2001」・神長美津子／編著 塩美佐枝／編著「保育方法」光生館 2009・浅見均／編著 田中正浩／編著「保育方法の探究 学事出版 2005」・柴崎正行／編著 田代和美／〔ほか〕共著「保育方法の探究第2版」建帛社 1999

《事前・事後学習》

検討課題を授業の進行に合わせて出すのでプレゼンテーションの手がかりとし準備すること

保育実践研究演習

1 年次（後期）→2 年次（後期）→3 年次（前期）
3 単位（演習）
担当 ★大方 美香

《授業の概要》

2 年次では、1 年次の演習や他の演習科目との間で再考した結果により、研究主題・手法に再検討の必要があれば、研究の軌道修正を行う。研究主題・手法が決定すれば各自の研究を全力で推進し、同時に口頭発表の準備を整えることを演習によって行う。関連文献収集と専門書の講読、フィールド研究の実施、データの収集と観察のまとめ方について展開方法を学習する。また、口頭発表に向けてのプレゼンテーションの仕方について演習を行う。

《学生の到達目標》

1. 研究の展開手法、成果のまとめ方および原稿（口頭、投稿）作成方法を習得する。2. 自分の研究成果を広く社会に還元できるよう努力する。

《授業計画》

1. 研究主題の修正、手法の再検討及び軌道修正（フィールド研究と研究）
2. 先行研究論文の収集と検討（子どもの遊びや活動から観察する視点）
3. 研究の実践に関する検討（フィールド研究①テーマの確認と視点の確認）
4. 研究の実践に関する検討（フィールド研究②子どもの観察・調査研究）
5. 研究の実践に関する検討（フィールド研究③子どもの遊びから・調査研究）
6. 研究結果のまとめの検討（テーマ設定について討議・問題意識）
7. 研究内容の考察、結論の導き方の検討（各自のテーマ設定を発表）
8. 研究に基づく考察の展開方法、意見交換（各自のテーマ設定を発表）
9. 各種関連学会の調査、発表学会の検討
10. 学会発表予定者との討議
11. 学内懇話会での発表練習（研究方法について討議・文献、観察研究）
12. 学内懇話会での発表、討議、意見交換（各自の研究手法について発表）
13. 発表原稿の再検討（研究のまとめ方について討議）
14. 発表原稿の再検討（研究のまとめ方について討議）
15. 口頭発表の再検討

《成績評価の方法・基準》

レポート試験 80%、授業参画発表 20% で総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・文部科学省「幼稚園教育要領」解説書（フレーベル館）・厚生労働省「保育所保育指針」解説書（フレーベル館）・秋田喜代美「保育者のライフステージと危機—ステージモデルから読み解く専門性、発達、83」・中央教育審議会「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」・林信二郎・岡崎友典「幼児の教育と保育—指導することと見守ること—」放送大学教育振興会・星三和子・高橋洋代「0 歳児の遊びに関わる日仏の保育者の行動に関する一考察—保育現場から見た日仏の子どもの発達 (2)」日仏教育学年報 6・星三和子・高橋洋代「児保育のなかに見られる日仏の保育観、発達観—法令及び行政文書の分析を通して—」日仏教育学年報 7・Shantz, D. W., & Hobart, C. J. 「Social conflict and development: Peers and siblings. In T. J. Bernet & G. W. Ladd (Eds.)」Peer relationships in child development (pp. 71-94) New York: A Wiley-Interscience Publication.・Vander ven, K. 「Pathways to professional effectiveness for early childhood educators. In B. Spodek, O. n . Saracho & D. Peters (Eds.)」Professionalism and the early childhood practitioner. Teachers College Press.・厚生労働省「次世代育成支援施策の在り方に関する研究会 社会連帯による次世代育成支援に向けて」

《事前・事後学習》

事前：各自の論文における研究方法について先行研究に基づき具体化する。事後：各自の研究を学内・学外等で発表する。

保育内容研究演習

1 年次（前期）→2 年次（前期）→3 年次（前期）
3 単位（演習）
担当 瀧川 光治

《授業の概要》

2 年次では、保育内容の研究を 10 のテーマに分類し、そのテーマについての日本と諸外国の研究動向を学びながら、学会口頭発表・学会誌論文投稿に向けての準備をする。具体的には、あるテーマ（たとえば「ごっこ遊び」）について、日本と諸外国の研究動向・先行研究について、知見を整理し、同じテーマでも様々な切り口や研究方法があり、そこでの現状と課題の把握を行う。とくに、受講生の研究課題に応じて、国内外の最新の研究動向や成果、関連領域の文献について、詳しいレビューを行う。参加者全員で討議し、各自の研究水準をより高めるように配慮する。

《学生の到達目標》

1. 博士（教育学）の学位に値する論文が備えていなければならない諸条件を理解する。2. 研究の展開手法、成果のまとめ方および原稿（口頭、投稿）作成方法を習得する。3. 自分の研究成果を広く社会に還元できるよう努力する。

《授業計画》

1. この課題演習の進め方—オリエンテーション
2. 保育内容に関する研究について日本の研究動向についての発表と討議（院生 1）
3. 保育内容に関する研究について日本の研究動向についての発表と討議（院生 2）
4. 保育内容に関する研究について日本の研究動向についての発表と討議（院生 3）
5. 保育内容に関する研究について日本の研究動向についての再発表と討議（院生 1）
6. 保育内容に関する研究について日本の研究動向についての再発表と討議（院生 2）
7. 保育内容に関する研究について日本の研究動向についての再発表と討議（院生 3）
8. 保育内容に関する研究について海外の研究動向についての発表と討議（院生 1）
9. 保育内容に関する研究について海外の研究動向についての発表と討議（院生 2）
10. 保育内容に関する研究について海外の研究動向についての発表と討議（院生 3）
11. 先行研究のまとめ方、レビュー論文の書き方①—文献検索
12. 先行研究のまとめ方、レビュー論文の書き方②—資料整理
13. 先行研究のまとめ方、レビュー論文の書き方③—まとめ方
14. 学会発表、紀要論文に向けて
15. まとめ

《成績評価の方法・基準》

レポート課題 50%、発表と討議 50%で総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・那須昌樹他「手があるに園内研修メイキング みんなでつくる保育の力」わかば社・安達譲他「子どもに至る：保育者主導保育からのビフォー&アフターと同源性」ひとなる書房

《事前・事後学習》

事前学習・事後学習として、自分の研究テーマに関する関連文献を読み、レビュー論文を書くための学びを広げていく。授業内で、適宜、その旨の指示を行う。

子ども心身医療演習

1 年次（後期）→2 年次（後期）→3 年次（前期）
3 単位（演習）
担当 村上 佳津美

《授業の概要》

小児科医と心理士による新患のインテーク面接に陪席し、具体的に現場からの学習を行う。子どもの心身医療の最前線を直接体感することで、更に生きた学習を習得してもらう。具体的な症例は、様々な問題を提供してくれるので、そこから小児科医と心理士がどのように関わり、問題解決に向かうのかを学ぶ。

《学生の到達目標》

ここでは心身医療の知識だけでなく離婚裁判、養育権の問題など、社会的問題にまで広がるので、あらゆる問題から学ぶ姿勢をもつようになる。

《授業計画》

1. 社会問題として子どもを考える
2. 問題のある親子への基本的対応
3. 新患の陪席を行う
4. 新患の陪席を行う
5. 新患の陪席を行う
6. 3回の陪席で見た症例（概ね3～5例）のその後を学習
7. 新患の陪席を行う
8. 新患の陪席を行う
9. 新患の陪席を行う
10. 新患の陪席を行う
11. 後半の3回の陪席で得られた症例（概ね3～5例）のその後を学習
12. 約5例から2例を選びレポートを作成する
13. レポート指導
14. レポート指導
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

レポートや提出物で評価

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

大学や職場でのあらゆる経験、自分がかつて受診した医療現場との違いを改めて整理する。困った子どもに出会った時、陪席で得た知識や対応を、保育師・教師の立場でいかに関わるかを常に考え、心身医学の視点からみるように心がける。

発達心理学演習Ⅰ（発達支援）

1 年次（後期）→2 年次（前期）→3 年次（後期）
3 単位（演習）
担当 小椋 たみ子

《授業の概要》

2 年次では、発達心理学演習Ⅰ（発達支援）を継続・発展させ、1 年次で行った研究Ⅰの論文を執筆し、さらに研究Ⅱへと発展させる。研究Ⅱも研究Ⅰと同様、理論的背景、仮説、方法の決定、データ収集、分析を行い、論文を執筆し、紀要、学会の査読付き雑誌へ投稿する。

《学生の到達目標》

1. 1 年次の研究Ⅰを論文にまとめ投稿する。研究Ⅰでの課題を明らかにする。2. 研究Ⅰを発展させ、文献レビューを行い、研究Ⅱの仮説を設定し、方法を決定しデータ収集を行う。3. 研究Ⅱのデータ分析を行い、結果をまとめ、論文にする。4. 研究Ⅱの論文を学会誌、紀要に投稿する。

《授業計画》

1. 研究Ⅰの論文を執筆する。
2. 研究Ⅰの論文を執筆する。
3. 研究Ⅰの論文を執筆し、紀要あるいは学会誌へ投稿する。
4. 研究Ⅰを踏まえ、先行研究を基に、理論的背景を明確にし研究Ⅱの仮説をたてる。
5. 研究Ⅱの理論的背景を明確にし、仮説の設定と研究方法の討議を行う。
6. 研究Ⅱの理論的背景を明確にし、仮説の設定と研究方法の討議を行う。
7. 研究Ⅱの研究方法の決定を行う。倫理審査委員会への申請を行う。
8. 研究Ⅱのデータ収集を行い、進捗状況を報告し、討議を行う。
9. 研究Ⅱのデータ収集を行い、進捗状況を報告し、討議を行う。
10. 研究Ⅱのデータ分析を行い、進捗状況を報告し、討議を行う。
11. 研究Ⅱのデータ分析を行い、進捗状況を報告し、討議を行う。
12. 研究Ⅱのデータ分析を行い、進捗状況を報告し、討議を行う。
13. 研究Ⅱを論文にまとめる。
14. 研究Ⅱを論文にまとめる。
15. 研究Ⅱの論文を紀要あるいは学会雑誌へ投稿する。

《成績評価の方法・基準》

レポート試験 70%、授業参画 30%で総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・「発達心理学研究、教育心理学研究、保育学研究、乳幼児教育学研究、特殊教育研究、Child Development、Developmental Psychology、Developmental Science、Developmental Review」などの国内外の雑誌論文・日本児童研究所「児童心理学の進歩」金子書房・アメリカ心理学会「APA 論文作成マニュアル」医学書院

《事前・事後学習》

先行研究から学び、各自の問題意識を明確にし、論理的な文章で論文を執筆してください。

発達心理学演習Ⅱ（発達臨床）

1 年次（前期）→2 年次（後期）→3 年次（前期）
3 単位（演習）
担当 森口 佑介

《授業の概要》

2 年次では、発達心理学演習Ⅱ（発達臨床）を継続・発展させ、博士学位請求論文のテーマの焦点化を図るため、討議を深めるとともに、テーマに妥当な実証的研究の具体的な方法についても探索・検討を重ねる。

《学生の到達目標》

1. 学位論文のテーマを確定し、そのテーマを実証的に展開するために妥当な研究方法（研究対象、研究材料、研究手続、資料の処理など）を決定する。2. 研究成果を学会、学会誌、紀要等で発表し、研究業績を蓄積する。

《授業計画》

1. 先行研究について検討（関連論文検索・検討も併行）
2. 先行研究について討議（関連論文検索・検討も併行）
3. 先行研究について論究（関連論文検索・検討も併行）
4. 先行研究について決定（関連論文検索・検討も併行）
5. 先行研究テーマによる研究計画の探索と検討
6. 先行研究テーマによる研究計画についての討議
7. 先行研究テーマによる研究計画の論究と決定
8. 予備研究の実施と結果の分析・検討（方法の妥当性）
9. 予備研究の実施と結果の分析・検討（分析手法の妥当性）
10. 予備研究による調整研究計画立案と検討及び決定
11. 本研究実施と経過報告・検討（関連論文検索・検討も併行）
12. 本研究実施と経過報告・討議（関連論文検索・検討も併行）
13. 関連研究の研究計画立案と検討・討議及び決定
14. 関連研究実施と結果の報告及び検討・討議
15. 関連研究の論文化と検討・討議・論究及び演習全般の総括

《成績評価の方法・基準》

レポート試験 80%、授業参画 20%で総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

事前学習としては、毎回、授業前に資料等を熟読し、学習内容を把握しておく。事後学習としては、学んだことから視野を広げたり、深めたりするために振り返り内容について指示をする。

臨床心理学演習

1 年次（後期）→2 年次（後期）→3 年次（後期）
3 単位（演習）
担当 渡辺 俊太郎

《授業の概要》

臨床心理学の理論に基づく援助の方法、さらに研究や研究成果の公開を行うために必要な知識および技能の修得を目指し、3 年間の演習を行う。2 年次では、臨床心理学に関する文献研究、調査研究、実験研究、事例研究論文の精読を行い、研究方法や論文作成方法の理解を深めるとともに、臨床心理学およびその関連分野における最新の研究知見を学ぶ。さらに、文献を精読した後の議論を通して自身の研究計画に関する検討を行い、博士学位請求論文の作成を進める。

《学生の到達目標》

臨床心理学における援助方法、研究方法および論文作成方法を修得する。また、臨床心理学および関連分野における最新の研究知見を理解する。

《授業計画》

1. オリエンテーション（演習の目的と進め方）
2. 文献研究の論文検索とその成果の報告・討議を行う
3. 調査研究（質問紙研究）の論文検索とその成果の報告・討議を行う
4. 調査研究（面接・観察研究）の論文検索とその成果の報告・討議を行う
5. 心理指標を用いた実験研究の論文検索とその成果の報告・討議を行う
6. 生理指標を用いた実験研究の論文検索とその成果の報告・討議を行う
7. 事例研究の論文検索とその成果の報告・討議を行う
8. 学位論文の研究主題について再検討を行う
9. 研究主題と研究方法の関連について討議を行う
10. 投稿論文の作成に関する研修を行う
11. 研究主題に関連した先行研究の論文検索とその成果の報告・討議を行う①
12. 研究主題に関連した先行研究の論文検索とその成果の報告・討議を行う②
13. 研究主題に関連した先行研究の論文検索とその成果の報告・討議を行う③
14. 学位論文の研究構成について討議を行う
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

レポート試験 80%、討論・演習 20%を基本としながら、総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

・必要に応じて資料を配布する。

《参考書》

・中沢潤他「心理学マニュアル1〜4」北大路書房・海保博之他「シリーズ・心理学の技法」福村出版・氏原寛他「臨床心理学①〜③」培風館・河合隼雄（河合俊雄編）「心理療法コレクションⅡ カウンセリングの実践」岩波現代文庫・河合隼雄（河合俊雄編）「心理療法コレクションⅣ 心理療法序説」岩波現代文庫・American Psychological Association [Publication Manual of the American Psychological Association American Psychological Association]・日本心理学会「執筆・投稿の手引き」・日本心理学会「心理学研究」・日本健康心理学会「健康心理学研究」・日本心理臨床学会「心理臨床学研究」・日本カウンセリング学会「カウンセリング研究」・「関連分野の和洋学会誌、文献」

《事前・事後学習》

臨床心理学およびその関連分野の文献を講読し、そこで得られた研究方法や論文作成方法に関する知見をもとに、研究主題に適した博士学位請求論文の研究計画について検討する。

研究指導

1 年次→2 年次→3 年次（通年）

0 単位（演習）

担当 瀧川 光治, 渡辺 俊太郎, 玉置 哲淳,
★大方 美香, 小椋 たみ子

《授業の概要》

博士後期課程における研究指導は、主たる指導教員が1人で、または副指導教員と合同で、院生の個性と問題意識を生かしながら、個人面接を中心にその研究の進行に関する助言を与え、博士学位請求論文の執筆・提出まできめ細かく行う。すなわち、研究課題の設定の仕方、先行研究の収集・分析・解釈・報告の仕方、博士学位請求論文の書き方等を院生の問題関心・研究課題に応じて指導する。また、指導院生が複数いる場合、院生一人ひとりが関心のあるテーマから博士学位請求論文の構想並びに草稿について発表し、それを基に討論を行う。さらに、各種学会・研究会への参加、各種学会紀要への投稿を勧め、研究者としての自立への支援を行う。

《学生の到達目標》

院生各自が自らの問題関心と適切な研究方法論に基づき、標準修業年限内で、博士学位請求論文を執筆・提出できるようにする。

《授業計画》

1. 研究指導の進め方-院生各自の問題関心と研究計画の把握
2. 最新の先行研究のレビュー（院生1）
3. 最新の先行研究のレビュー（院生2）
4. 最新の先行研究のレビュー（院生3）
5. 各自の博士学位請求論文の構想発表（院生1）
6. 各自の博士学位請求論文の構想発表（院生2）
7. 各自の博士学位請求論文の構想発表（院生3）
8. 各自の博士学位請求論文の構想の再発表（院生1）
9. 各自の博士学位請求論文の構想の再発表（院生2）
10. 各自の博士学位請求論文の構想の再発表（院生3）
11. ゼミ内中間研究発表会への準備（院生1）
12. ゼミ内中間研究発表会への準備（院生2）
13. ゼミ内中間研究発表会への準備（院生3）
14. ゼミ内中間研究発表会
15. 総括
16. 各自の博士学位請求論文草稿の検討（院生1）
17. 各自の博士学位請求論文草稿の検討（院生2）
18. 各自の博士学位請求論文草稿の検討（院生3）
19. 各自の博士学位請求論文草稿の再検討（院生1）
20. 各自の博士学位請求論文草稿の再検討（院生2）
21. 各自の博士学位請求論文草稿の再検討（院生3）
22. 各自の博士学位請求論文草稿の最終検討（院生1）
23. 各自の博士学位請求論文草稿の最終検討（院生2）
24. 各自の博士学位請求論文草稿の最終検討（院生3）
25. 博士学位請求論文の執筆計画書の検討（院生1）
26. 博士学位請求論文の執筆計画書の検討（院生2）
27. 博士学位請求論文の執筆計画書の検討（院生3）
28. 博士学位請求論文の執筆計画発表会
29. 博士学位請求論文の執筆計画書の提出
30. 総括-博士学位請求論文提出許可の判定

《成績評価の方法・基準》

博士学位請求論文および口頭聴取問の成果をもって評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

博士学位請求論文の草稿作成を進め、博士学位請求論文中間発表会や公開審査会の準備を行う。

大学院 博士後期課程 3 年次

教育学演習

1 年次（前期）→ 2 年次（前期）→ **3 年次（後期）**
3 単位（演習）
担当 山崎 高哉

《授業の概要》

3 年次では、受講者の研究課題に応じて国内外の最新の研究動向や成果、関連領域の文献についてより詳しいレビューを行い、それに基づき演習参加者全員で様々な角度から検討・討論する。それを通じて、演習参加者が各自の研究水準のより一層の高度化を図り、かつ関連領域についてのより広汎な理解をもてるように配慮する。

《学生の到達目標》

国内外の最新の主要な先行研究の分析・検討を通じて、受講者独自の立場・見解を形成するとともに、研究方法を確立すること。博士学位申請論文が備えるべき基本的条件とは何かについて理解すること。

《授業計画》

1. この課題演習の進め方・オリエンテーション
2. 日本の最新の先行研究について発表（院生 1）と討論
3. 日本の最新の先行研究について発表（院生 2）と討論
4. 日本の最新の先行研究について発表（院生 3）と討論
5. 外国の最新の先行研究について発表（院生 1）と討論
6. 外国の最新の先行研究について発表（院生 2）と討論
7. 外国の最新の先行研究について発表（院生 3）と討論
8. 自己の博士学位申請論文について発表（院生 1）と討論
9. 自己の博士学位申請論文について発表（院生 2）と討論
10. 自己の博士学位申請論文について発表（院生 3）と討論
11. 自己の博士学位申請論文について再発表（院生 1）と討論
12. 自己の博士学位申請論文について再発表（院生 2）と討論
13. 自己の博士学位申請論文について再発表（院生 3）と討論
14. 今後の研究課題の発表（院生 1～3）
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

発表の評価 80%と授業参画 20%で総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

自己の博士学位申請論文の執筆と発表後の修正を励行すること。

幼児教育学演習

1 年次（前期）→ 2 年次（前期）→ **3 年次（後期）**
3 単位（演習）
担当 玉置 哲淳

《授業の概要》

3 年次では、2 年次までの研究を踏まえて、本授業では、各自の研究テーマと研究の方法論を持って研究発表に取り組みつつ、幼児教育学のパラダイムを理解し、その基本的な知見を拡大し、保育現場における諸問題の理論的かつ実践的解決能力を持つことを目指す。このため、論文作成についての詳細な検討を行う。前半では、テーマ設定と方法の関係を中心とし、後半では、実証的・臨牀的な幼児教育学の方法論を使って各自の論文作成に焦点を当てる。

《学生の到達目標》

1. 先行研究の検討及び臨牀的・実証的な研究方法を踏まえた研究遂行能力・研究方法論を獲得する。2. 幼児教育学の知見、研究の方法論の多様性を学び、論文作成に必要な力量を育てる。3. 保育現場における諸問題の理論的かつ実践的解決能力を養う。

《授業計画》

1. テーマ先行研究構成案（基本的枠組）報告と検討・討議
2. テーマ先行研究に関連する先行論文の報告と討議・論議
3. テーマ先行研究の検証・パラダイムの報告と討議
4. テーマ先行研究の検証・パラダイムの報告と論議
5. 本研究による資料分析の報告と討議・論議
6. 本研究による結果の内容についての報告と検討・討議
7. 本研究による結果の内容についての報告と論議
8. 本研究による結果の考察・結論についての検討・討議
9. 本研究による結果の考察・結論についての論議
10. 関連研究の研究計画の立案と検討・討議及び決定
11. 関連研究の実施と結果の報告及び討議・論議
12. 学位論文の草稿作成と報告及び検討
13. 学位論文の草稿の報告と討議及び見直し
14. 学位論文の草稿に関する論議と提出論文作成への展開
15. 学位論文の完成と提出及び演習の省察と総括

《成績評価の方法・基準》

レポート試験 80%、授業参画 20% で総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・「日本保育学会論文集」・「乳幼児教育学会大会発表論文集」・「乳幼児教育学会 乳幼児教育研究」・「日本保育学会 保育学研究」・「児童心理学の進歩」・「NAEYC, Young Children, NAEYC」

《事前・事後学習》

検討課題を授業の進行に合わせて出すのでプレゼンテーションに手がかりとし準備すること

保育実践研究演習

1 年次（後期）→2 年次（後期）→3 年次（前期）
3 単位（演習）
担当 ★大方 美香

《授業の概要》

3 年次では、受講生の研究課題に応じて、国内外の最新の研究動向や成果、関連領域の文献について、詳しいレビューを行う。参加者全員で討議し、各自の研究水準をより高めるように配慮する。

《学生の到達目標》

1. 博士（教育学）の学位に値する論文が備えていなければならない諸条件を理解する。2. 研究の展開手法、成果のまとめ方および原稿（口頭、投稿）作成方法を習得する。3. 自分の研究成果を広く社会に還元できるよう努力する。

《授業計画》

1. この課題演習の進め方—オリエンテーション
2. 日本の最新の先行研究について発表（院生 1）と討論
3. 日本の最新の先行研究について発表（院生 2）と討論
4. 日本の最新の先行研究について発表（院生 3）と討論
5. 日本の最新の先行研究について再発表（院生 1）と討論
6. 日本の最新の先行研究について再発表（院生 2）と討論
7. 日本の最新の先行研究について再発表（院生 3）と討論
8. 外国の最新の先行研究について発表（院生 1）と討論
9. 外国の最新の先行研究について発表（院生 2）と討論
10. 外国の最新の先行研究について発表（院生 3）と討論
11. 外国の最新の先行研究について再発表（院生 1）と討論
12. 外国の最新の先行研究について再発表（院生 2）と討論
13. 外国の最新の先行研究について再発表（院生 3）と討論
14. 博士後期課程における研究の進捗状況と今後の課題①
15. 博士後期課程における研究の進捗状況と今後の課題②

《成績評価の方法・基準》

レポート試験 80%、授業参加発表 20%で総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・文部科学省「幼稚園教育要領」解説書（フレーベル館）平成 30 年 ・厚生労働省「保育所保育指針」解説書（フレーベル館）平成 30 年・秋田喜代美「保育者のライフステージと危機—ステージモデルから読み解く専門性、発達、83」2000 pp. 48-52」・中央教育審議会「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」2005」・林信二郎・岡崎友典「幼児の教育と保育—指導することと見守ること—」放送大学教育振興会 2004・星三和子・高橋洋代「10 歳児の遊びに関わる日仏の保育者の行動に関する一考察— 保育現場から見た日仏の子どもの発達(2)」日仏教育学年報 6 pp. 82-96」・星三和子・高橋洋代「乳児保育のなかみに見られる日仏の保育観、発達観—法令及び行政文書の分析を通して—」日仏教育学年報 7 pp. 13-25」・Shantz, D. W., & Hobart, C. J. 「Social conflict and development: Peers and siblings. In T. J. Bernet & G. W. Ladd (Eds.)」Peer relationships in child development (pp. 71-94) New York : A Wiley-Interscience Publication. ・Vander ven, K. 「Pathways to professional effectiveness for early childhood educators. In B. Spodek, O. n. Saracho & D. Peters (Eds.)」Professionalism and the early childhood practitioner. Teachers College Press. ・一般社団法人日本保育学会「保育学研究 56 巻」2018」

《事前・事後学習》

事前学習：先行研究及び各自の研究論文の要旨準備（指導教官と相談の上）を行う。事後学習：発表内容について議論したことを整理し、各自の研究に生かす。

保育内容研究演習

1 年次（前期）→2 年次（前期）→3 年次（前期）
3 単位（演習）
担当 瀧川 光治

《授業の概要》

3 年次では、受講生の研究課題に応じて、国内外の最新の研究動向や成果、関連領域の文献について、詳しいレビューを行う。参加者全員で討議し、各自の研究水準をより高めるように配慮する。

《学生の到達目標》

1. 博士（教育学）の学位に値する論文が備えていなければならない諸条件を理解する。2. 研究の展開手法、成果のまとめ方および原稿（口頭、投稿）作成方法を習得する。3. 自分の研究成果を広く社会に還元できるよう努力する。

《授業計画》

1. この課題演習の進め方—オリエンテーション
2. 日本の最新の先行研究について発表（院生 1）と討論
3. 日本の最新の先行研究について発表（院生 2）と討論
4. 日本の最新の先行研究について発表（院生 3）と討論
5. 日本の最新の先行研究について再発表（院生 1）と討論
6. 日本の最新の先行研究について再発表（院生 2）と討論
7. 日本の最新の先行研究について再発表（院生 3）と討論
8. 外国の最新の先行研究について発表（院生 1）と討論
9. 外国の最新の先行研究について発表（院生 2）と討論
10. 外国の最新の先行研究について発表（院生 3）と討論
11. 外国の最新の先行研究について再発表（院生 1）と討論
12. 外国の最新の先行研究について再発表（院生 2）と討論
13. 外国の最新の先行研究について再発表（院生 3）と討論
14. 博士後期課程における研究の進捗状況と今後の課題
15. まとめ

《成績評価の方法・基準》

レポート課題 50%、発表と討議 50%で総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・那須信樹他「手が届く！園内研修メイキング みんなでつくる保育の力」わかば社・安達譲他「子どもに至る：保育者主導保育からのピフォー&アフターと同僚性」ひとなる書房

《事前・事後学習》

事前学習：事後学習として、自分の研究テーマに関する関連文献を読み、レビュー論文を書くための学びを広げていく。授業内で、適宜、その旨の指示を行う。

子ども心身医療演習

1 年次（後期）→ 2 年次（後期）→ **3 年次（前期）**
3 単位（演習）
担当 村上 佳津美

《授業の概要》

こども心身医療研究所に來ている「不登校児」「発達障害児」の集団治療に参加し、これまで実習してきたカンファレンスと陪席で培った知識を活用し、彼らの生活に寄り添い、同時に彼らと個人的に関わっている担当小児科医や心理士の見解を参考にしながら、集団内での彼らの理解を深めるようにする。

《学生の到達目標》

問題を抱えた子どもへの幅広い知識を得て、総合的に現代を生きる子どもの集団での言動と個人的な問題を相互的に理解するようにする。

《授業計画》

1. 不登校の現状を知る
2. 集団力動を学ぶ
3. 集団治療に参加
4. 同上
5. 同上
6. 同上
7. 同上
8. 同上
9. 同上
10. 同上
11. 同上
12. 同上
13. 対人関係の基本を実体験から考える
14. 論文完成
15. 全体総括

《成績評価の方法・基準》

レポートや提出物で評価

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

幼保育園・学校の実習で学んだことを思い返し実習に臨む。健全な幼保育園・学校集団と、何らかの問題をもった集団の違いをしっかりと見つけ、現代の子どもの抱える問題に積極的に関わる姿勢をもつようにする。

発達心理学演習Ⅰ（発達支援）

1 年次（後期）→ 2 年次（前期）→ **3 年次（後期）**
3 単位（演習）
担当 小椋 たみ子

《授業の概要》

1 年次では、発達心理学における理論的、実証的な意義的・確かな認識を図り、当該及び関連専門領域の研究結果、諸課題へ研究者としてのアプローチを試み、実証的研究に向けての基盤構築のための指導を行う。1 年次では、各自の研究課題に関する国内、国外の文献を発表、検討・討論し、各自の研究の理論的背景となる文献レビューを行い、紀要に投稿する。各自の研究テーマに基づき仮説を検証するための具体的な実証方法について探索・検討を重ね、方法を決定し、実際にデータ収集、データ分析を行い、紀要、学会の雑誌論文へ投稿する論文の原稿を作成する準備を行う。

《学生の到達目標》

1. 研究の背景となる理論、先行研究をまとめ、仮説検証の方法を修得する。2. 文献精読の基本的スキルと理解力を向上させ、自分のテーマの先行研究のレビュー論文を執筆し、投稿する。3. 各自の研究計画を立案し、データ収集を行い、分析をし、結果を考察する。

《授業計画》

1. オリエンテーション
2. 研究テーマ設定の基本的枠組の報告と検討・討議
3. 研究テーマ設定の基本的枠組の報告と検討・討議
4. 研究テーマに関する先行研究の文献報告・討議
5. 研究テーマに関する先行研究の文献報告・討議
6. 研究テーマに関する先行研究の文献報告・討議
7. 研究テーマに関する文献レビューを論文にする。
8. 研究テーマに関する文献レビューを論文にして紀要に投稿する。
9. 研究 I の理論的背景と仮説の設定
10. 研究 I の仮説の設定と仮説検証のための方法の検討
11. 研究 I の仮説検証のための方法の決定
12. 研究 I の仮説検証のための方法の決定
13. 研究 I の実証データ収集
14. 研究 I の実証データ収集
15. 研究 I のデータの分析 開始

《成績評価の方法・基準》

講義内での発表とレポート 70%、授業参画 30% で総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・「発達心理学研究、教育心理学研究、保育学研究、乳幼児教育学研究、特殊教育研究、Child Development, Developmental Psychology, Developmental Science, Developmental Review」などの国内外の雑誌論文・日本児童研究所「児童心理学の進歩」金子書房・日本発達心理学会「発達科学ハンドブックシリーズ」新曜社・白井利明・高橋一郎「よくわかる卒論の書き方（第2版）」ミネルヴァ書房・アメリカ心理学会「APA 論文作成マニュアル」医学書院

《事前・事後学習》

発表者は論文を読み、レジメを作成し、事前に討議資料を作成しメールで受講生に送付してください。

発達心理学演習Ⅱ（発達臨床）

1 年次（前期）→2 年次（後期）→3 年次（前期）
3 単位（演習）
担当 森口 佑介

《授業の概要》

3 年次では、発達心理学演習Ⅱ（発達臨床）に続き、博士学位請求論文のための実証的研究について経過報告を行い、得られた研究資料の分析、結果の整理・内容及び考察について、論文の草稿をもとに討議・論究を重ね、論文完成に向けての指導を行う。あわせて関連研究の報告を求め検討・討議・論究を行う。

《学生の到達目標》

1. 学位申請論文のために実施した実証的研究による論文作成上の諸側面についての研究討議・論究により、学問的業績にふさわしい論文にまとめ、論文を完成する。2. 1. の討議・論究の過程で、研究者・教育者としての資質を向上させる。3. 研究成果を学会、学会誌、紀要で発表し、研究業績を蓄積する。

《授業計画》

1. テーマ先行研究構成案（基本的枠組）報告と検討・討議
2. テーマ先行研究に関連する先行論文の報告と討議・論究
3. テーマ先行研究の検証（パラダイム）の報告と討議
4. テーマ先行研究の検証（パラダイム）の報告と論究
5. 本研究による資料分析の報告と討議・論究
6. 本研究による結果の内容についての報告と検討・討議
7. 本研究による結果の内容についての報告と論究
8. 本研究による結果の考察・結論についての検討・討議
9. 本研究による結果の考察・結論についての論究
10. 関連研究の研究計画の立案と検討・討議及び決定
11. 関連研究の実施と結果の報告及び討議・論究
12. 学位論文の草稿作成と報告及び検討
13. 学位論文の草稿の報告と討議及び調整
14. 学位論文の草稿に関する論究と提出論文作成への展開
15. 学位論文の完成と提出及び演習の省察と総括

《成績評価の方法・基準》

レポート試験 80%、授業参画 20%で総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

・柳井道監修「心理測定尺度集Ⅰ～Ⅵ」サイエンス社 2001～2011・石井哲夫監修「発達障害の臨床的理解と支援」金子書房 2010・心理学中沢潤 他「マニュアルシリーズ1～5」北大路書房 2011・日本発達心理学会編「発達科学ハンドブック」新曜社 2011・発達心理学研究編集委員会編「発達心理学研究」日本発達心理学会・健康心理学編集委員会編「健康心理学研究」日本健康心理学会・教育心理学研究編集委員会編「教育心理学研究」日本教育心理学会・Damon, W. et al「Handbook of Child Psychology」Jhon Wiley&Sons, 2006・Herbert, M. Developmental「Problems of Childhood and Adolescence」Blackwell, 2005・Lewis, Ch. et al「Developmental PsychologyⅠ～Ⅵ」Sage publication, 2004

《事前・事後学習》

事前学習としては、毎回、授業前に資料等を熟読し、学習内容を把握しておく。事後学習としては、学んだことから視野を広げたり、深めたりするために振り返り内容について指示をする。

臨床心理学演習

1 年次（後期）→2 年次（後期）→3 年次（後期）
3 単位（演習）
担当 渡辺 俊太郎

《授業の概要》

臨床心理学の理論に基づく援助の方法、さらに研究や研究成果の公開を行うために必要な知識および技能の修得を目指し、3 年間の演習を行う。3 年次では、博士学位請求論文のための実証的、臨床的研究について経過報告を行い、得られた研究資料の分析、結果の整理・内容及び考察について、論文の草稿をもとに討議・論究を重ね、論文完成に向けての指導を行う。また、研究成果に関する学会、学会誌、紀要での発表について検討を行う。

《学生の到達目標》

臨床心理学における援助方法、研究方法および論文作成方法を修得する。また、臨床心理学および関連分野における最新の研究知見を理解する。

《授業計画》

1. オリエンテーション（演習の目的と進め方）
2. 研究主題に関連した先行研究の概観とその結果についての討議を行う
3. 各研究の学会、学会誌、紀要での発表計画に関する検討を行う
4. 展望論文作成の報告とその内容に関する討議を行う
5. 研究主題に関連した研究の計画立案および検討を行う
6. 研究主題に関連した研究の実施準備と方法論の論究を行う
7. 研究主題に関連した研究の実施報告と結果の検討を行う
8. 研究主題に関連した研究の考察・結論についての検討を行う
9. 学会での発表内容に関する討議を行う
10. 学位論文の草稿作成と報告および検討を行う
11. 学位論文の草稿の報告と討議および調整を行う
12. 学位論文の草稿に関する論究を行う
13. 学位論文の完成と今後の研究の展開に関する討議を行う
14. 投稿論文の作成と報告および検討を行う
15. 総括

《成績評価の方法・基準》

レポート試験 80%、討論・演習 20%を基本としながら、総合的に評価する。

《授業で使用する教科書》

・必要に応じて資料を配布する。

《参考書》

・中沢潤他「心理学マニュアル1～4」北大路書房・海保博他「シリーズ・心理学の技法」福村出版・氏原寛他「臨床心理学①～③」培風館・河合隼雄（河合俊雄編）「心理療法コレクションⅡ カウンセリングの実践」岩波現代文庫・河合隼雄（河合俊雄編）「心理療法コレクションⅣ 心理療法序説」岩波現代文庫・American Psychological Association「Publication Manual of the American Psychological Association American Psychological Association」・日本心理学会「執筆・投稿の手びき」・日本心理学会「心理学研究」・日本健康心理学会「健康心理学研究」・日本心理臨床学会「心理臨床学研究」・日本カウンセリング学会「カウンセリング研究」・「関連分野の和洋学会誌、文献」

《事前・事後学習》

臨床心理学およびその関連分野の文献の精読や臨床心理面接、臨床心理アセスメント、臨床心理地域援助の実践を通して得た知見をもとに、研究内容や研究結果に関する検討を重ね、博士学位請求論文の執筆に活かす。

研究指導

1 年次→2 年次→3 年次（通年）

0 単位（演習）

担当 瀧川 光治、渡辺 俊太郎、玉置 哲淳、
★大方 美香、小椋 たみ子

《授業の概要》

博士後期課程における研究指導は、主たる指導教員が1人で、または共同指導教員と合同で、院生の個性と問題意識を生かしながら、個人面接を中心に研究の進行に関する助言を与え、博士学位請求論文の執筆・提出まできめ細かく行う。すなわち、研究課題の設定の仕方、先行研究の収集・分析・解釈・報告の仕方、博士学位請求論文の書き方等を院生の問題関心・研究課題に応じて指導する。また、指導院生が複数いる場合、院生一人ひとりが関心のあるテーマから博士学位請求論文の構想並びに草稿について発表し、それを基に討論を行う。さらに、各種学会・研究会への参加、各種学会紀要への投稿を勧め、研究者としての自立への支援を行う。

《学生の到達目標》

院生各自が自らの問題関心と適切な研究方法論に基づき、標準修業年限内で、博士学位請求論文を執筆・提出できるようにする。

《授業計画》

1. 研究指導の進め方 院生各自の問題関心と研究計画の把握
2. 院生各自の関心のあるテーマについての研究状況の紹介
3. 最新の先行研究の集中的レビュー
4. 博士学位請求論文の書き方
5. 各自の博士学位請求論文の構想発表（院生1）
6. 各自の博士学位請求論文の構想発表（院生2）
7. 各自の博士学位請求論文の構想発表（院生3）
8. 各自の博士学位請求論文の構想の再発表（院生1）
9. 各自の博士学位請求論文の構想の再発表（院生2）
10. 各自の博士学位請求論文の構想の再発表（院生3）
11. 各自の博士学位請求論文草稿の発表（院生1）
12. 各自の博士学位請求論文草稿の発表（院生2）
13. 各自の博士学位請求論文草稿の発表（院生3）
14. 博士学位請求論文中間発表会
15. 総括 博士学位請求論文提出の許可判定
16. 各自の博士学位請求論文草稿の再検討（院生1）
17. 各自の博士学位請求論文草稿の再検討（院生2）
18. 各自の博士学位請求論文草稿の再検討（院生3）
19. 各自の博士学位請求論文草稿の最終検討Ⅰ（院生1）
20. 各自の博士学位請求論文草稿の最終検討Ⅰ（院生2）
21. 各自の博士学位請求論文草稿の最終検討Ⅰ（院生3）
22. 各自の博士学位請求論文草稿の最終検討Ⅱ（院生1）
23. 各自の博士学位請求論文草稿の最終検討Ⅱ（院生2）
24. 各自の博士学位請求論文草稿の最終検討Ⅱ（院生3）
25. 各自の博士学位請求論文草稿の最終検討Ⅲ（院生1）
26. 各自の博士学位請求論文草稿の最終検討Ⅲ（院生2）
27. 各自の博士学位請求論文草稿の最終検討Ⅲ（院生3）
28. 博士学位請求論文の提出
29. 博士学位請求論文についての反省会
30. 総括 公開審査会

《成績評価の方法・基準》

博士学位請求論文および口頭質問の成果をもって評価する。

《授業で使用する教科書》

指定なし

《参考書》

指定なし

《事前・事後学習》

博士学位請求論文の草稿作成を進め、博士学位請求論文中間発表会や公開審査会の準備を行う。